24th

RYLA

SEMINAR

第24回
RYLAセミナー報告

「対話・理解・寛容」

Rotary Youth Leadership Awards Seminar

2002.3.21～3.24

神戸YMCA余島野外活動センター

目　　次

ＲＹＬＡセミナーとは……1
プログラムのねらいと内容……1
セミナースケジュール……1

1日目

開講式
ガバナーあいさつ
第2680地区ガバナー　赤木　文生……2
第2670地区ガバナー　掛水　俊彦……4

ディーンあいさつ
第2670地区愛媛第2分区ガバナー補佐　篠原　成行……6

オリエンテーション
「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」
――用語の解説をふくめて――
RYLA顧問 パストガバナー　深川　純一……7

オープニングパーティー……11
キャビンタイム……12

2日目

講義「高度技術社会と人間社会」

ザ・フューチャー・インターナショナル有限会社代表取締役　八幡　惠介氏……13

レクリエーションタイム……42

キャンプファイヤー……43

3日目

講義「子どもと自然」

兵庫県立人と自然の博物館館長 京都大学名誉教授　河合　雅雄氏……44

バズセッション

フォーラム

アドバイザー　深川　純一……69

4日目

講義「私たちは、21世紀を担えるのか」

元R.I.理事 頌栄保育学院理事長・院長　今井　鎮雄氏……104

閉講式

あいさつ

第2680地区ガバナー　赤木　文生……127

第2670地区ガバナー　掛水　俊彦……129

第2680地区ガバナー　森　滋郎……131

神戸YMCA余島野外活動センター所長　近江岸建助……132

参加者感想文……133

参加者名簿……158

第24回ＲＹＬＡセミナー運営委員会……162

RYLAセミナーとは

ロータリー青少年指導者育成プログラム(Rotary Youth Leadership Awards･･･RYLA)は、若い人々のためのプログラムであり、国際ロータリーが1971年に公式に採用したプログラムです。

ロータリーが青少年を尊重し、かつ、青少年に関心を抱いていることを一層明らかにし、選考した青少年指導者およびその素質ある人に実地訓練を体験させ、責任ある、効果的な自発性に富む指導方法を身に付けるように激励、援助することを主な目的としています。

プログラムのねらいと内容

RYLAセミナープログラムのねらいは、受講生に五つの特色を味わってもらうことにあります。

①高レベルの講義と討論
②キャビンタイム(親睦の熟成)
③自由と規律
④余島の自然
⑤カウンセラーシステム

恵まれた自然に囲まれたなかで「対話・理解・寛容」のテーマを、講義・キャビンタイム・思索の時間・バズセッション・フォーラムなどを通して徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

セミナースケジュール

3月21日(木)					昼食	グループタイム	開講式 オリエンテーション (15:00)	オープニングパーティー	キャビンタイム ロータリアンの夕べ		
3月22日(金)	朝食 (7:30)	カウンセラーミーティング	八幡恵介氏 (9:30)	昼食	レクリエーション・ ヨット テニス・ソフトボール アーチェリー他			夕食	キャンプファイヤー 親睦の夕べ キャビンタイム ロータリアンの夕べ		
3月23日(土)	朝食 (7:30)	カウンセラーミーティング	河合雅雄氏 (9:30)	昼食	思索の時間	バズセッション		夕食	フォーラム キャビンタイム		
3月24日(日)	朝食 (7:30)	カウンセラーミーティング	今井鎮雄氏 (9:00)	閉講式(11:00) 昼食 離島							
	8	9	10 11	12	1	2	3 4	5 6	7 8	9 10	11 12

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　赤木　文生

みなさん、こんにちは。ロータリークラブには国際ロータリーというのがありまして、それが若い方々から将来リーダーとなるような方々を養成しよう、ということでこのプログラムを始めているわけですが、私も実は初めての参加です。「えらいとこに来たなぁ」という感情をみなさんと一緒に共有しています。

初めての経験なので私もみなさんにえらそうなことを言うだけの知識はございません。ただ、今の日本には政治家をはじめリーダーシップを取る人がいない、どちらかというと日本の社会は出る杭は打たれるというので、リーダーになってみんなを引っ張っていこうと思うと足を引っ張る人がいる。今、日本の社会が世界にどうして互していけるかということをいろいろと言っていますね。私たちは若いあなた方にリーダーシップを発揮して、どんな状況に置かれてもみんなを引っ張っていく、落ち込んでいる人がいたら引っ張っていくということをやっていただきたい。

もうひとつは、私はリーダーの資質として思いやりとか優しさが必要だと思うんですね。ですからリーダーシップを取っておられる方は、自分の友達や後輩で落ち込んでいる方がおられたら引っ張っていく、それが私はリーダーシップを持った人たちのひとつの生き方だと思います。日本の社会ではいじめなどが大変問題になっていますけれども、私は今日リーダーの勉強をされる方に、日本社会で陰湿に行われているいじめや無視をされている人を助けてあげる、困っている人を助けてあげるということ、それからまた、心理的にも肉体的にもハンディキャップがある人たちの後押しをしてあげたいということを勉強して、リーダーとしてやっていただきたい。

よく日本社会ではそういう人たちを助けてあげようとすると自分が浮き上がってしまうから、気の毒だなぁと思っていてもどうしても声をかけられなくて、無視された人を無視してしまうとか、いじめられているのを見ながら知らんふりしているということが多いです。私は戦争中育ってますけれども、私たちはそういう社会にしたくなかった。

私たちの時代は食べ物にも困ったんです。今のみなさんのように、恵まれた環境にある人たちが非常にうらやましい。それと私たちは戦争中いろんな制約を受けました。ですか

らそういう制約がない社会を作りたいと思ったんですね。できるだけみなさんに自由を与えたい。自発的にやりたいということを育てていきたいという、みなさんのお父さん世代の人にそういう教育をしてきたつもりです。しかし物が豊かになってきますと私たちが狙っていたよりはひどい競争社会になってしまって、落ちこぼれた人たちがどうしても付いていけなくなっていろいろ問題が起こるようになりました。私は教育者ではありませんけれどもそういう問題はどうしたら解決するか、やはりお互いが助け合っていかなくてはいけません。思いやりと優しさを持って助け合うためには、リーダーシップを持った人たちがそういう人を助けていくというふうに盛り上げれば、みんなも付いて来るのではないでしょうか。私の思い過ごしかもしれませんが、そういうことが大事じゃないかと思います。見て見ぬふりをするようなことはしないで、言い方は悪いですけれども、落ち込んでいる人やどちらかというとみんなに入れないような人を引っ張っていくという、それを私はリーダーシップのひとつの表れだと思っております。

ですからこの4日間みなさん勉強していただいて、すばらしい講師の方もたくさんおられますからお話を聞き、それを自分たちで持って帰って討議してその輪を広げていただきたい。それによってみなさん自己研鑽をやるということをお考えいただければ非常にいいんじゃないかと思います。

難しいことを言いましたけれども、こういうあまり雑音のない環境下で、深く静かに考えるのもいいのではないかと思います。普段、日常生活に追われていますからこの4日間、自分のこれからの方向を考えるのにこういう環境は非常にいいと思います。座禅を組むのも黙って考えるのもいいけれど、せっかくのこの機会ですから自分の将来の糧になるようなことを1つでも掴んでいただけたら、私たちの計画していたことが報われるといいますか、私たちの気持ちとしてはそういうことを学び取っていただきたいと思います。それからできるだけ体を動かしてエンジョイしてください。

私の希望はまとめますと、リーダーシップを取る勉強をしてほしい、ただそのリーダーシップも優しさと思いやりがあるリーダーシップで、リーダーになれることをしていただきたいということと、えらいところ来たなぁとさっき誰かが言っておっしゃったけれども、思索の時間を使って、えらいところに来たついでに将来のえらいことを考えましょう。みなさん、頑張ってください。

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　掛水　俊彦

みなさん、こんにちは。四国地区のガバナーの掛水と申します。どうぞよろしくお願いいたします。高尚なお話はできませんが、ひとつ聞いてください。

まず、ようこそ、と申し上げたいと思います。ロータリーの青少年養成セミナーにご参加いただきまして本当にありがとうございます。

この会は第24回になるそうです。来年は四半世紀、記念すべき年を迎えます。私どものＲＹＬＡの目的は、若い方々が立派な指導者、善良な市民になるための資質を引き出して伸ばすことですが、ロータリーは若い方々に対する育成に重大な関心を持ち、力を入れているということを改めてご理解いただきたいと思います。例えば新世代委員会にも組織があり、インターアクト、ローターアクト、ＲＹＬＡと、年代に応じた指導で青少年を育成する計画がございます。ロータリーは青少年問題を大きな問題として捉えており、ＲＹＬＡは意義のあるプロジェクトであると考えております。

毎年兵庫県と四国４県で合同セミナーを行っていますが、この地区のＲＹＬＡの評価は非常に高いということも知っていただきたい。ワークブック3ページを開けてください。「日本国内の35地区の中で最もユニークで活動的なＲＹＬＡとして、他地区の関心を引いています」。これは私が書いたごあいさつです。以前、私と同期の東北地区ガバナーから、「関西でＲＹＬＡを非常に優秀にやっているところがあるらしい、教えてほしい」と問い合わせがございました。それはこの地区のことでして、私はそれまでのＲＹＬＡの記録資料をお送りし、大変喜ばれたことがあります。この会は、国内でも非常に評価されたＲＹＬＡセミナーであるということをご理解いただきたいと考えております。

昨年7～11月の四国内71クラブへの公式訪問の中で、私はみなさんにお願いしたことがございます。アナハイムでの勉強会のときロータリーのキング会長から私どもに「新しい社会奉仕をガバナーのときに1つ始めてください」と要請がございました。私はその線に沿った社会奉仕をと考えまして、地区のテーマを「地域とともに生きる」と設定しました。私のところは田舎ですので、ローカル地区の地域性を逆に取り、ローカルのクラブだからこそできる地域密着のプログラムを、とお願いしたわけでございます。具体的には、青少

年の育成の問題、環境保全の問題をプロジェクトとして取り上げてくださいとお願いしました。

なぜ環境保全の問題かといいますと、実はここの近くの豊島（てしま）の産業廃棄物の問題が、全国的なニュースとなりました。そこで、それぞれのロータリークラブに環境を壊さないよう、問題の芽を摘み取ろうということをお願したわけでございます。各クラブで本当に真剣に取り組んでいただきまして、2月に各地区で行われた勉強会では、全地区がこの問題を取り上げていました。

青少年教育は1～2年ではなく、長いスパンでの努力が必要でございます。そういう意味でこの会が24回も続くのは、非常に意義あることではないかと考えております。

もう1点、ＲＹＬＡセミナーの魅力は、すばらしい友との出会いであると考えております。余島に集まる若者たちはみな、真剣に将来の日本を背負っていこうという希望に燃えた、心の立派な人の集まりであると私は信じております。生涯を通じて信頼できる友を得る出会いがここで期待できるんじゃなかろうかと考えております。３泊4日の非常に短い時間ですけれども、志を同じくする者が集まっていますので、よき友を得てお帰りいただきたいと考えております。今日ご参加いただきました約45人という人数は決して多いとは思いませんが、一生懸命やろうという気持ちの者の集まりであれば、これで充分ではなかろうかと考えるわけでございます。

21世紀はみなさんが活躍する時代でございます。先ほど部屋で休んでおりましたら、山川草木、精気に満つるというんでしょうか、余島の環境の良さがよく分かりました。うぐいすが鳴き木の芽が吹いて新緑が見える、それから桜も咲いておりました。非常に環境のいいところでございます。セミナーが24回も続いたのは内容が良かったからだと考えております。環境がすばらしいこと、もうひとつは指導者に恵まれたことだと思います。今井鎮雄元ＲＩ理事、深川純一ＲＹＬＡ顧問、お２人とも兵庫県のご出身のパストガバナーで、日本のロータリー会のリーダー、先達でございます。こういう方に恵まれたからセミナーが続いたと考えております。どうかこの余島で、心と記憶に残るよう何かを得て帰っていただきたい、そしてそれぞれの地域に戻りまして、次代の日本を背負う人間に育っていただきたいと考えております。

最後になりましたが、この小豆島のロータリークラブのみなさん、いろいろお世話かけたと思います。どうもありがとうございました。心からお礼申しあげましてごあいさつといたします。

ディーンあいさつ

第2670地区　愛媛第２分区
ガバナー補佐　篠原　成行

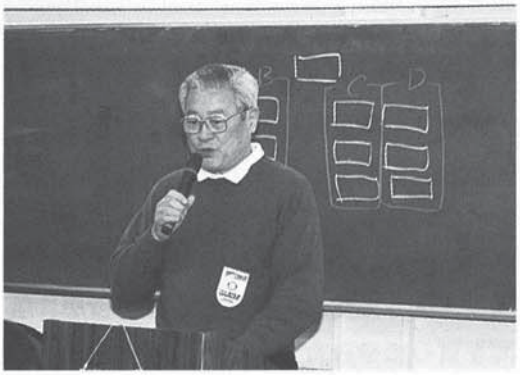
第24回のＲＹＬＡセミナーということで、みなさんをここへお迎えしました。印象はどうですか、余島へおいでて。何かとんでもないところへ来たなあと思う人いません？・・・はい。(笑)

ここの島を開発した今井先生はここを開発するとき、伝馬船に乗っておいでたそうです。するとその姿を見た漁師の方から「また自殺に行きよるんかなぁ」って言われたという、そんな話があるくらいここは辺鄙なところだったようであります。

私、このＲＹＬＡセミナーでディーンを仰せつかっております。ディーンという言葉はみなさん馴染がないかも分かりませんけれども、学部長などとこの辞書には書いております。みなさんの相談役ですので、ＲＹＬＡセミナーで何か分からないこと、困ったことがあったら何でも声をかけていただきたいなと、お力になりたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

「ロータリーがＲＹＬＡに期待するもの」
――用語の解説をふくめて――

国際ロータリー第2680地区
RYLA顧問
パストガバナー　深川　純一



ご紹介いただきました深川でございます。皆さん、ようこそいらっしゃいました。『ＲＹＬＡに期待するもの』というテーマをいただいておりますが、まず、ロータリーの話から入っていきたいと思います。

今から97年前の1905年２月23日、弁護士のポールハリスが３人の友達と話合って、アメリカのシカゴにロータリークラブというクラブを作りました。

当時、シカゴは、不況で非常に厳しい経済情勢でありましたが、お互いに皆で助け合って、皆が隆々と栄えていくような楽しいクラブを作ろうと言って出発しました。どのような会員構成にするかということについては、同業者は自由競争社会においては、お互いに食うか食われるかの関係にあるから、お互いに仲よくなれないだろう、と言うので、クラブの中に同業者を入れないこととし、一つの職種から一人だけ会員をとることにしました。

そして当初は、皆が仲良く、お互いに助け合い、次第に豊かになって行ったのでありますが、やがて、反省が出てきました。

それは、ドナルド・カーターという人に、ロータリークラブに入らないかと勧誘したところ、カーターは、『自分たちは、地域社会に生まれ、地域社会で育てられ、地域社会でお世話になっている。このお世話になっている地域社会に対して何の恩返しもしないで、自分たちだけが助け合って、自分たちだけが隆々と栄えていくようなエゴイズムのクラブには入りたくない』と言ってきっぱりと断りました。

これを聞いて痛く反省したのがポール・ハリスでありました『カーターの言う通りだ。クラブの行き方を変えよう』と言って、それから、世のため人のための事も考えるクラブに変わっていったのであります。

やがて、1908年、ロータリーは、世のため人のためと言うことを、奉仕、サービスと言う言葉で集約しました。そして、世のため人のためのクラブであれば、シカゴの町にだけあるべき筋合いの事ではなく、アメリカの全ての地域社会にあって然るべきである。したがって、アメリカ全土の地域社会にロータリークラブを作ろうと言うことになり、ここにロータリー拡大の運動が始まったわけであります。ロータリー創立

３年目に、クラブナンバー２のサンフランシスコ・ロータリークラブが設立されて以来、次々にロータリークラブ設立され、現在では、全世界に３万を越えるロータリークラブがあり、118万8,000人を越えるロータリアンがいるという巨大な組織になりました。

ところで、ポール・ハリス達の優秀な思想を慕って沢山の人達が集まってきても、それだけは烏合の衆に過ぎません。これらの人たちを合理的に管理する事が出来なければ、運動体というものは発展致しません。そこで、ロータリーは、1910年、各クラブ間を合理的に連絡調整するための連合組織体、即ち、全米ロータリークラブ連合会を作りました。

やがて、1912年、イギリスはじめアメリカ以外の国にもロータリークラブが設立されたので、国際ロータリークラブ連合会と名称を変更し、更に10年後の1922年、それまでの単なる連絡調整機能に更にクラブに対する直接監督機能を加えて、現在の国際ロータリーとなったのであります。

現在では、３万余りのクラブを、50～70クラブ位ずつにグルーピングして「地区」と称し、地区ごとに国際ロータリーの役員であるガバナーをおいてクラブの連絡調整に当たらせているのであります。地区は現在、全世界に530地区あります。

530地区の一つである第2670地区は、四国四県をもって一地区とするものであり、第2680地区は、兵庫県全体を一地区とするものであります。

カバナーは、１年任期の無給の役員であり、四国の2670地区は掛水俊彦ガバナー、兵庫の2680地区は赤木文生ガバナーであります。

また、次年度に就任する次期ガバナーをガバナーエレクトと呼び、兵庫の2680地区は安平和彦ガバナーエレクトであります。そして、ガバナーの任期を終えられた人をパストガバナーと呼ぶのであります。

ところで、ロータリーは一体どのような活動をしているのかと言うと、20世紀初頭は、素朴な活動でありました。例えば、冬の寒空に新聞売り子の少年が新聞が一枚も売れないで困っている。そこを通りかかったロータリアンが、その少年をクラブに連れて行って、『この子が困っているから、助けてやってくれよ』と言うと、皆が、新聞を買ってやったり、ジャンパーなどを着せかけたりして少年を帰してやった。少年は本当に嬉しそうな顔をして、『おじさん達有り難う』と言って帰って行ったという話が残っています。

また、苦学生に奨学金を出したり、身体障害者の養護学校を設立する運動や、災害が起こったときにその救援をしたりしているのであります。

また、このような弱者救済だけではなく、ロータリアンは皆職業人でありますから、職業を通じて世のため人のために奉仕することも、ロータリーとしての重要な実践であります。例えば、職業人として業界を刷新するために、賄賂を贈ってはならないとか、全ての取引を公正にしなければならないとか、職業人として為すべきこと、為すべからざることをお互いに誓い合う所謂倫理の提唱をするとかも、ロータリアンとしての重要な実践活動なのであります。

また、青少年育成の分野での奉仕としては、高校生年代の生徒をもって組織するインターアクトクラブや18歳以上30歳までの男女をもって組織するローターアクトクラブがあります。このＲＹＬＡも、このような青少年育成のプログラムの一つであります。

それから、ロータリーの特殊な活動の一つにロータリー財団があります。これは、ロータリアンの寄付金をもって作られた財団であります。この財団の活動は、非常に多岐にわたっています。例えば、台湾で地震が起ると救援資金を出したり、全世界的なポリオ撲滅運動を実施したり、全世界の若者を対象に、国際感覚を養成するためにロータリー財団奨学生を育成したりしています。

以上が申し述べましたように、ロータリーの活動分野は、非常に広く、このＲＹＬＡもロータリーの開発したプログラムの一つなのであります。

ＲＹＬＡとは、Rotary Youth Leadership Awardsの頭文字をとったもので、日本語では、青少年指導者養成計画と訳されています。青少年のリーダーとして指導する立場にある人達を養成するプログラムがこのＲＹＬＡセミナーであります。

ＲＹＬＡの発祥は、1959年であります。オーストラリア・クィーンズランド州の創設100周年記念式典に、ブリスベンロータリークラブが、イギリス王女と同年代の青年男女を集めて、社会教育プログラムを実施したのが発端でありました。その後、このＲＹＬＡは、泣かず跳ばずの状態でありましたが、1974年に、アメリカ・ワシントン州のタコマで開催されてから、まさに草原の野火のように全世界に広がって行ったのであります。

その４年後の1978年、今井鎮雄先生が企画されたＲＹＬＡが始まったのであります。このＲＹＬＡは、アメリカで始まったオリジナルなＲＹＬＡとは若干趣を異にしています。というのは、オリジナルなＲＹＬＡは、18歳から24歳までの青年男女を対象として訓練しますが、このＲＹＬＡが対象としているのは、20歳以上の青年男女であって上限はありません。過去には、60歳近い人も受講生として参加しています。

その理由とするところは、日本の現状を考えると、青少年の指導者として訓練するには、18歳から24歳という年齢ではあまりに低すぎて、指導者として適当でないと言う点にあります。そこで、今井先生の発想により、オリジナルなＲＹＬＡを日本の実情に合わせてアレンジしたのがこのＲＹＬＡなのであります。

このＲＹＬＡは、受講生の皆さんが技術的なことは既に修得されたとして、更に高い精神的境地へ導く事を狙いとしていますので、非常にハイレベルなものとして企画されています。したがって、セミナーの講義も一流大学の先生によるものであり、大変豪華なプログラムであります。したがって、講義を消化する能力を考えて、受講生の年齢を20歳以上としているわけであります。

講義というものは、話し手と聞き手の共同作業によって成り立っています。したがって、講義中の部屋の出入りはしないよう

にお願いいたします。部屋の出入りによって講義の雰囲気を壊すことは、皆に迷惑であるのみならず、講師の先生に対して失礼極まることであります。また、講義を真面目に聴いている人達に対しても失礼であります。私達は、お互いに信頼の世界に生きているのでありますから、皆さんも自分の良心に従って自律していただきたいと思います。

このＲＹＬＡは、皆さん方の自律を大前提としています。したがって、何をするにも基本的には自由でありますが、皆で何かをしようとするときに、例えば、講義が始まるときは、その時間を絶対に守って下さい。時間は、万人の共有物であります。一人が時間に遅れると、皆が迷惑を被ることになるのであります。

このＲＹＬＡの顕著な特徴は、カウンセラーシステムを採っていることであります。カウンセラーは、このＲＹＬＡの３泊４日、皆さんと寝食を共にし、皆さんの話や悩みを聞く相談相手であります。お互いに心を開いて話し合って下さい。カウンセラーは、ＲＹＬＡが終わった後も、同窓会その他で後々皆さんの面倒を見ていただく人達であります。仲良くお付き合いいただきたいと思います。

また、このＲＹＬＡには、思想の時間というプログラムがあります。私達は、このＲＹＬＡのプログラムでは、通常皆と一緒に過ごしますが、思索の時間の１時間だけは、皆がそれぞれ一人になって、自分自身を見つめ直す時間であります。瞑想に耽るのも結構であります。この玉の如き時間を大切にしていただきたいと思います。

それから、このＲＹＬＡの核にあるプログラムの一つに、バズセッションとフォーラムがあります。バズセッションは四、五人ずつの小グループに分かれて４時間位ディスカッションをするのでありますが、その後、バズセッションに出てきた意見を持ち寄って、全体のフォーラムで３時間のディスカッションをするのであります。このようにして、すべての人達がそれぞれ何らかの意見を述べることができるようにしているのであります。

最後に、この余島には、素晴らしい自然環境があります。これは、今井先生が、今から50年前、この島に来られて、まさに手作りで築き上げられた自然環境であります。したがって、皆でこの自然環境を守らなければならないと思います。

また、この島には、部屋に鍵がありません。それは、皆が絶対的信頼の世界に生きているからであります。この島での生活を皆で大事にしたいものであります。

このＲＹＬＡの３泊４日、一番大事なことは、皆さんがお互いに仲良くなることであります。心を開いて存分に話し合って下さい。そして、この３日間で、皆さんの心に何か火が灯ることがあれば、と願いながら私の話を終えたいと思います。

ご静聴、ありがとうございました。

オープニングパーティー

キャビンタイム

「高度技術社会と人間社会」

ザ・フューチャー・インターナショナル
有限会社　代表取締役
八幡　惠介氏

〈八幡　惠介氏〉
1958年大阪大学でBSEEを、1963年にシラキューズ大学でMSEEを取得。
35年間に渡り半導体業界でリーダー的役割を果たし、その間に日米の大手半導体企業の社長を歴任し、MUSEアナログHDTVデコーダを日本市場向けに開発。現在ザ・フューチャー・インターナショナル有限会社の代表取締役。
米国型のベンチャー支援活動を促進するための人材育成も行っている。

みなさん、おはようございます。昨日懇親会のところでもごあいさつをしましたけれども、八幡惠介といいます。昭和1桁の生まれだもんですから、私の惠の字というのは古い字でございます。このなかにロータリアンの方で60歳以上の方がおられて、この字を使っておられれば多分同じだと思いますけどね。私の仕事については後の自己紹介でお話をいたします。

今日は高度情報技術、短くＩＴと簡略化しますけれども、と人間社会との関わりについてというお話をしたいと思うんです。ＩＴというのは私達人類にとってどういう意味を持っているんだろうか。一方ではＩＴリテラシーという言葉ができて、ＩＴの貧富の差が非常に激しくなってきた。ＩＴを使える人と使えない人というふうに分かれてきたといわれていますけれども、私は、ＩＴはそういう問題を抱えながらも、大変便利なツールとして私たちに貢献をしてくれていると思います。ここにおられる半分の方は多分、若い世代の方でですね、若い世代というのは勉強した時期がつい最近であるという意味ですけれども、ＩＴというものをふんだんに取り入れた教育を受けてこられたと思います。これからもＩＴはますます発展をしますから、それを有効に使って人類の幸せのために使っていただくということが必要だと思うんですね。ハッカーであるとか、あるいはウィルスを作るとかという人間社会の攻撃の側に回るのではなくて、ＩＴを人類の幸福のために使う仕事をしていただければと思うんですね。

今年のロータリーの標語は「人類は私たちの仕事」と言っていますけれども、英語ではMankind is Our Businessという言葉なんですね。日本語では何となく仕事というと、本当のビジネスのうちの仕事の部分だけがちょっと強調されたような感じがしま

すけれども、英語でビジネスといった場合には自分の関心事全てがビジネスなんですね。何か仕事をしてお金をもらうとかボランティアの仕事をするという、そういう仕事だけではなくて、自分が関心を持っている全てのことがビジネスであるという意味で、人類を私たちの関心事にしましょうというのがキングさんの言葉の意味ではないかと思うんですね。人類は仕事というのは何となくちょっとピンと日本人にはきませんけれども、英語でMankind is Our Businessというと非常に私はピンとくるように思います。

ＲＹＬＡをこれからどう進めていくべきか、それが人類は私たちの仕事、Mankind is Our Businessということにどうつながっていくのか、そこにＩＴがどう役に立つのかというお話もできるだけ分かりやすくしたいと思っております。

今日のお話はまず、私の自己紹介をさせていただいて、私が最後に到達をしてこれから死ぬまで続けたいと思っている仕事のご紹介をして、その後ＩＴの話に入っていきたいと思います。

別に章に分けたわけではありませんけれども、ＩＴの社会的意義、人間とＩＴの関わりのあり方、ＩＴをこれからどういう人たちが使っていくのか、私は今ＩＡＩジャパンというところでベンチャーを支援していますけれども、ベンチャーを成功させるためにはどういうことをするのか、私がＲＹＬＡのみなさんに期待していることとそのベンチャーとの関わり、そしてそれを支援する人たち、ということをお話したいと思っています。

半導体事業とのかかわり

まず私の自己紹介からですけれども、私は1953～1957年の間５年間、高校の３年から大学の４年まで、この余島キャンプでリーダーとして奉仕させていただきました。53年はまだ高校３年生で教会学校のキャンプのリーダーとして来たわけですけれども、そこで島のすばらしさにとらわれて、54～57年の大学を卒業するまでの間、毎年だいたい7月の授業が終わるとここへ飛んできて、ほとんどうちに帰らずに大学が始まるまでここで過ごしました。したがって小豆島で約1年間をですね、ぶっ続けに過ごしたのと同じくらいの時間、ここにいたわけであります。その間に今井鎮雄さんとの出会いがありまして、私は余島が私の奉仕の原点であると思っております。

その後大学を卒業いたしまして、私は大学にいる間から半導体に非常に興味を持っていたものですから、当時半導体では一番いい仕事をさせてもらえると学生の間で言われていたＮＥＣという会社で27年間仕事をしました。半導体事業の開発であるとか設計、生産流通、工場建設、マーケティング、そして海外事業というほとんど全ての事業分野に関わることができました。

そして27年間いた後、1985～1994年までの10年間をアメリカの半導体ベンチャー企業であったＬＳＩ ロジックという会社の日本進出を手伝い、事業を興す仕事をいたしました。これを私たちは業を起こす、起業と呼んでおります。そして10年後に私は引退するという決心をしていたものですから、そのＬＳＩ ロジックを退任いたしま

して、私が会社を立ち上げたときに得た、いわゆるスウェットエクイティという株式をＬＳＩ Logicの親会社に全部買い取ってもらって、これを出口にして私の資産を形成したわけであります。これでベンチャー企業の起業から事業を立ち上げて最後に出口を通過し、さらに事業を大きくするというプロセスの一貫を経験したわけです。

その後私は引退したつもりだったんですけれども、どうしても来てほしいということで、アプライドマテリアルズジャパンというところで２年間だけ手伝いをして、ここでもスウェットエクイティをもらったわけであります。この間に半導体事業の全般を経験することができたと思います。

貴重な出会いを重ねて

そして私が非常にすばらしいと思っておりますのは、この約40年間のキャリアの間に仕事の上で大切な３人のメンターに巡り会いました。私は先ほど申し上げたように今井鎮雄先生が私の最大のメンターだと思っていますけれども、この人は仕事ということではなくて人生のメンターだったと思うんですが、仕事の上での３人のメンターに巡り会うことができました。

１人はＮＥＣで亡くなる前は名誉会長をしておられました大内敦夫さんという人で、この人は人との接し方ということを、いろんな面から教えていただいたように思います。

その次はＬＳＩ ロジックの創始者でもあり会長でもあった、ウィルフレッド・コリガンという人ですが、この人は資本主義というものの面白さ、あるいは真髄というのを私に見せてくれた人であります。資本主義というのはお金を持っている人たちの事業がうまくいくということではない、資本というのはお金だけではなくて、知識、経験、人脈、人間の資質そのものが資本だということを教えてくれました。私は日本に法人を作ったときに、お金はほとんど持ってなかったわけですね。ですから資本金を出すことはできませんでした。しかしそれまで27年間に私が培った半導体事業でのいろいろなノウハウ、経験、人脈といったものが全て資本になり得るんだと、それを使えば株式というものが手に入る、と。ですから私の持っているお金以外の資本をですね、株式と交換をしたわけであります。そして事業が成功するとその株式が市場で評価されて取引されるようになり、それを売るとお金が入ってくる、これが資本主義のメカニズムだということを教えてくれました。

そして最後のメンターはアプライマテリアルズの会長、ジェームズ・モーガンという人から、Good News is No News、No News is Bad News、Bad News is Good Newsというニュース３つですね、Good、No、Badというこの３つのニュースが回転するという格言、座右の銘を聞きました。

いい報告を聞いてもそれは何の役にも立ちません。No Newsですね。No News、何にも聞こえてこないというのは悪い知らせです、Bad Newsです。悪い知らせが聞こえてくるというのは、その悪いことを直すことができるからいいことです。Good Newsです。いいことばかり聞いていたらどこが悪いのか分かりません。何にも聞こ

えてこないと悪いことは分かりません。悪いことが分かるようにしてくれる友人や部下を持っていると悪いことを直すことができる。

日本では悪いことを言ってくると、お前それどうやって解決すんねん、と言って、良くなってから知らせろと言う人が非常に多いですね。しかし経営者はそれでは駄目です。良くなってから報告されたのではもしかすると手遅れかもしれない。今の雪印食品の話、いろいろなところで起こっているまずいスキャンダルの話は、私はすべてそこに起因していると思っています。経営者が自分の会社の中でどういうまずいことが起こっているかというのを知らないからああいう結果が起こるんだと私は思うんであります。それでこの最後のジェームズ・モーガンの大変いい格言を、たったの2年間でありましたけれども体得することができたわけであります。

異文化を理解すること

そしてこの間に、私は日米の両文化に非常に深く関わることができて、大変幸せだったと思います。最初私はフルブライトで留学をして1年間フルブライト奨学金をもらい、その後の1年間は自分で奨学金を稼いでアメリカに2年間いました。その間に余島で出会った女性を呼び寄せてアメリカで結婚し、向こうで子どもが生まれました。子どもはアメリカの市民権を持っていて、今でも世界中を飛び回っています。というわけで私は2つの異なった文化に関わることができました。実は私は満州にも長くいて、日本とアメリカの他にも中国の文化も若干は経験をしています。異文化に関わり、自分の幅を広げられたことは大変幸せだったと思います。

それは単なる接し方ではなくて、その文化の中に自分を埋没させる、その中に溶け込んでいくということをしないと本当の理解はできないと思うんです。昨日深川先生がロータリアンの夕べで、アフリカのマサイ族のお話をされました。食べ物から全てのその人たちの生活を実際に自分で経験をして、その中に自分を埋没させないと理解をしたとはいえないと思うんですね。

キャリアを役立たせる仕事

現在は、私はこういう私の人生を通して得たキャリアからの経験を使って、過去ではなく未来を見つめてこれから死ぬまで、社会に何らかの形で貢献ができないかということで会社を作りました。これからもインターナショナルに仕事をしたいと思っていますから、それを私自身の未来であると考えて、ザ・フューチャー・インターナショナルという名前をつけました。

その他に実はアメリカに友達とStart-up101.Comという会社を作ったんですが、スタートアップとは開始する、ということです。アメリカではスタートアップ企業、スタートアップカンパニーといって、会社を作ったばかりの若い会社のころをスタートアップというんですね。大学に行きますと1年生の数学だとMath101、歴史だとHistory101というように、必ず講座に101という番号がついています。すなわち、会社を作りたい人たちが来て、教えてほしいと思う初歩を教えてあげるわけです、つまり

会社を作るノウハウのＡＢＣ、一番最初を教えてあげる会社ですという意味でStart-up101としまして、関わっている分野がＩＴの分野ですからドットコムをつけ加えてStart-up101.Comという名の会社を作りました。これは私の創造物ではなく、私のパートナーである黒澤篤という人のアイデアです。ここは約400万ドルくらいのファンドを投資家から集めて、そのファンドからスタートアップの企業に投資して、30社くらい支援したいと考えています。

この２つの会社を私はここ５年ほどやってきたんですけれども、その間に大勢の人の知恵を借り、汗を流してもらうことによって共同で新しい会社を育てることができないだろうかと考えまして、時間があって食べるに困っていないという条件を満たす人たちにエンジェルになりませんかという呼びかけをし、インターナショナル　エンジェルインベスターズという団体を作りました。これはまだ法人格を持っていません。単なる仲良しクラブのようなものですけれども、ロータリーも一番最初できたときは多分そうだったと思うんですね。私は別にロータリーの真似をしたわけではないんですけれども、志を同じくする者が集まって勉強しながら社会貢献を考えていこうということで、ＩＡＩジャパンという団体を作りました。ちょっと発音もしにくいし分かりにくいので、国際エンジェル連盟というふうに呼んでいます。これは同じ名前の団体がアメリカにありまして、そこと私たちはアフリエーションしていますけれども、こういうことを今私はしているわけであります。

ロータリーとの関わりは昨日申し上げたように非常にまだ短くてですね、今年でちょうど丸５年になるんですけれども、2001,2002年度の東京中央ロータリークラブの理事を現在しております。担当は国際奉仕委員長です。

ベンチャーを支援する理由

これまで日本は明治維新から戦争２つを経験したその間ずっと、大企業が非常に栄えるということで建国をしてきたわけです。しかし今、それが非常に難しい時期に来ている。つまり先ほど申し上げたような企業倫理の欠如から来るまずさも含めて、大企業が大きくなりすぎたために非常に大きな問題が起こっていて、大企業だけでこの国をこれから動かしていくことは多分できないだろうと、そういう時代はもう戦後の復興を遂げた段階で終わったんではないかと思います。これからはベンチャーの起業を促進して、その成長を加速することが日本としての技術の発展と経済の活性化をもたらす、それがひいては社会貢献となる、と私は先ほど言いました国際エンジェル連盟、ＩＡＩのビジョンを設定いたしました。これは２つの仕事、ザ・フューチャー・インターナショナル、Start-up101.Comともに共通したビジョンで経営をしているつもりです。

ミッションとしては、アメリカ型のベンチャー社会を日本にも根づかせたい。これはロータリーも多分同じだったと思うんですね。米山梅吉翁がロータリーを知ってこれはすばらしい運動である、日本にも持って行きたいということで日本にロータリー

クラブができたわけでありますけれども、同じようなことではないかと思います。決してアメリカの真似をするというんではなくてですね、新しいこと、あるいはリスクを冒してそれにチャレンジをする人を育てよう、あるいはその人たちを優遇しようということは、失敗をしてもそれに寛容である社会を作るということなんですね。リスクを冒して新しいことをやるわけですから、必ず失敗する人が出ます。

私の経験ではベンチャーを志して成功する人、成功というのはどういうことを成功というかですけれども、私の場合の成功は、投下した資本が100倍以上になって戻ってくる、ということを成功ということにしますと、だいたい成功する率は1,000分の1から1,000分の5です。多くても1,000分の5です。つまり1,000の会社を作ったら995は失敗をするということですね。

失敗というのは倒産だけではありません。大きく成長しないでそこそこの成長しかできなかったものはこれは失敗というふうにいいますから、失敗率が高くなるわけなんですけれども、決して成功者だけがいい人たちではありません。失敗した人もその失敗からなぜ失敗したかということを学んでそれを直してもう一度再チャレンジをするということによって成功すればこれは、1回で成功する人よりも私はよりいい成功だというふうに考えています。

なぜならば、1回で成功した人はもしかするとまぐれかもしれない、もしかするともっと大きなリスクをとればもっと大きな成功をしたかもしれない、という意味で私は成功者というものは決して誉められたものではない。失敗をした人が2回も3回もチャレンジをして成功すればこれは非常に立派だと思うんですね。成功した人も立派ですけれども、失敗をしたうえで成功した人は非常に立派であるというふうに思っています。そういう社会を作る、日本にそれを作るためにはベンチャーを支援する人を支援する人たちが必要だろうと。

しかし支援する人たちにも何か実りが戻ってこなければやりがいがありませんから、エンジェル活動にも実りがあるようにということを私どもは目指しています。エンジェルというのは先ほど言った本当の意味での資本主義ですね、お金だけが資本ではない、自分の持っている全てのインタンジブルな（無形の）ものを含めたアセット（資産）が資本になり得るという意味ですから、汗を流して働けばそれは資本を投下したと同じことなんですね。それに対するリターンがあるという、そういうことを実りといいますが、実りあるエンジェル投資を促進する、という活動をする国際エンジェルリーグを作って、そこからのアウトプットで社会に貢献をしようというわけであります。

そしてそこではどういうことをするかというと、日本語では企業統治といわれるコーポレートガバナンス、事業をするための資金であるファインナンス、それからその事業の結果出てきたアウトプットをどうやって市場に認めてもらうかというマーケティングに関する教育及び助言をエンジェルと起業家に対して行うということが国際エンジェルリーグのミッションだというふうに位置づけております。

そして世界中でこういうことが今起こっているわけで、まあ、アメリカが一番盛んですけれども、中国でも盛んになってきました。ヨーロッパでも非常に盛んです。それを取り巻く法律、そういうことを規制したりあるいは助成したりする法律があるわけですけれども、その法律は世界中のいろんな国の法律を調べてみると、驚くべき多岐にわたっているんですね。もういろんな法律があります。厳しい国もあるし、ゆるい国もある。今は非常に国際的な市場になってきていますし、瞬時にして情報は世界を駆け巡るわけですから、巡った先がですね、全部法律が違うと、大変企業家にとっては不便であります。

そこで、直接投資に関する法律の、国際的なハーモニーを取っていこうではないかということを世界中にある国際エンジェル連盟の人たちが１年に１回集まって話し合い、それを自分の国に持って帰って政策の立案者に提案をするということをやっています。これをこれから日本でもやっていこうというふうに考えています。私は国の政策にいろいろ提言をするフォーラムの委員をしたりもしていまして、そこでこのことを実際に実践しているわけであります。これは私のミッションだからやっているわけですね。

情報伝達の歴史

さて、本題に入りますけれどもＩＴというのは高度情報技術ということで大変難しいことのように思いますけれども、ずーっと時代をさかのぼるとですね、ＩＴというのはどの時代にも私はあったんではないかと思うんですね。未開人が太鼓で意思疎通をしています。アフリカへ行くと今でも太鼓で戦争を知らせたりあるいは火事を知らせたり、いろいろ情報伝達しています。これはその時代、その社会にとってはやはり高度技術なんですね。他のことではできないことがそれで実現できるわけですから、やはり技術であります。それが単なるリズムと音色だけというふうに私どもは考えてます。日本では太鼓というのはどちらかというとパーカッションの楽器として位置づけられていますけれども、アメリカで私が親しくしている若い夫婦は2人でアフリカから輸入をしたこんな細長い太鼓をですね、２人で打ち合って、それで愛情を確かめ合ってるんですね。太鼓の音というのはそのくらいこう微妙な感情を伝えることができるんだ、とその人たちは教えてくれました。私もちょっとやってみましたけれども、大変難しいですけれどね。そのくらい情報技術というのは人間はその時代時代で非常に進化させているんだと思うんですね。

それからもう少し下っていきますと日本でも戦国時代によく使われました狼煙、あれもやはり、その時代の通信技術なんですね。つまり電話もテレビもあるいは無線も何もないときに2つの遠隔の地でコミュニケーションをしようとするとですね、何か見えるものでないと駄目ですよね。先ほどの太鼓は音です。音は空中ではある距離しか伝播しませんから、比較的近いところの通信手段ですが、物を見るというのは非常に遠いところも見えます。天気が悪かったら駄目ですけれども。天気がよければ数

kmから数10km向こうにある山のてっぺんから登る煙というのは見えますよね。浅間山なんか多分100kmくらい離れても見えてると思いますが、そういうことが遠隔通信技術の始まりだと思うんです。

これら見える、聞こえるものですけれども、日本では古くから腹芸とか、顔色を読むとか、あるいは手の内を読む、といいますね。これもみんな非常に優れた情報伝達の手段だと思うんです。

けれども、人間はだんだんそういう本能的なことは薄れてきます。技術が発達するにつれてそういうことが薄れてきますから、逆にいうと技術でそれを補わなければならなくなって、電信というものができました。これは多分ＩＴの幕開けだと思うんですが、その電信がだんだん発展をしてまいりまして、先ほども携帯電話の話がありましたけれども、今は１人１人がいつでも持っていて、世界中どことでも通信ができるというようなことになってきたんであります。

そして現在はですね、１対１の通信、つまり電話のようなものから多重化通信いうことで、１人の人が同時に複数の人と話をすることができる。あるいは情報を伝えることができる。

例えば、テレビのようなものはですね、１つの局から発信して何10万人、何100万人、あるいは何1,000万人という人たちに同時に同じ情報を伝えることができるメディアです。そして、音とかですね、あるいは映像とかということだけではなくて、いろいろなデータを伝送することができるようになってきています。ＩＴの一番大きな意味を持った部分ではないかと思うんですけれども、みなさんも多分使っておられるメールには、例えばエクセルのファイルをですね、ワークシートを添付することができますね。これなんかはデータとして伝送が行われているわけであります。したがって場所と内容に関係なく瞬時に情報を伝えることができるという世の中に今なりつつあるわけであります。

ＩＴが日本を変える

ちょっと日本の社会にですね、これまでどういうふうに情報伝達が行われたかということを考えていきたいと思うんですけれども、日本では情報の共有というのはどちらかというと特定の集団の中で行われてきた。例えば家族、企業あるいはロータリーのような団体ですね。そして人がその中であまり移動をしない。団体から団体への移動があまりない。日本では終身雇用と今まで言ってきましたけれども、１つの会社に就職をすると定年になるまでそこで過ごすというのが今までの戦後の日本人のパターンであったわけで、そういった閉じられた企業という社会の中では非常に情報がうまく共有されます。

で、今まではそれが非常にうまくいって、日本の企業は世界に冠たる地位を打ち立てることができたわけであります。これはちょうど80年代の日本の状況だったと思うんですけれども、世界中から21世紀は日本の世紀だとかね、あるいは日本はアメリカを追い越したとかいろんなことを私たちが思い、またよそからも言われたわけであります。そしてそれに関する本もたくさん書か

れました。

しかし、それによってですね、他の人たちが日本がなぜそんなに成長したのか、うまくいったのかということを勉強し日本を追い越そうということで、今ちょっと追い越されている感がありますね。ですからそれが特定の集団の中だけで情報を共有していたからだというふうに単純化することはできませんけれども、大変均質な社会を作ることによって温室で育った作物のような、いいものではあったけれども環境が変わると全然適応できないと、こういう体質にもしてしまったように私は思っています。

で、そういう集団の中では個人というものがですね、埋没しないとうまくいかないんですね。集団のことだけを考える、自分が集団と、みんなと違うことを考えてもそれはあまり発言をしないようにしよう、先ほどのNo Newsにだんだん近づいたというのが私は今の大企業の現状ではないかというふうに思うんですけれども、個というものが埋没されてしまったということは私は大変まずかったことではないかと思います。

その原因になったのは沈黙は金、雄弁は銀といったようなですね、あまりいろいろガシャガシャ言うなと、腹芸でいこうと、腹芸ですとあまりけんか起こらないんですね。分かったようなふりをするわけですから、けんかは起こりません。それによって腹の探り合いのようなことが起こって、実は全然違うことをお互い考えていたという結果がだんだんと起こるようになってきたわけであります。

それともうひとつはしゃべることによって自分を表現しようとすると、やめとけと言って出るくいを打つ、そういう文化を作ってしまいました。私なんかどちらかというとアメリカで勉強してきましたから、何でも思ったことを言うことで、ずいぶん打たれたように思います。最後にあんまり打たれたんで嫌になってやめちゃったんですけれども、できればですね、出るくいを打たないような経営ができるといいなと思っています。

それから日本では戦国時代のもうちょっと後くらいからですね、特にまあ江戸時代に仏教とか儒教の誤った解釈が日本で行われて、その結果こういった出るくいは打たれるとかですね、沈黙は金とかいったようなそういう慣わしにつながっていったんではないかと思うんです。

キリスト教というのはそうではなくて個人、自分と神との間の関係をキリスト教といっているわけですから、全てが個人なんですね。キリスト教という集団はありますけれども、それは１人１人が神と対することによって自分の信仰を作っていくというのがキリスト教ですから、個人を非常に大事にする宗教だと思うんです。他の宗教でも多分そうだと思うんですけれども、解釈が間違っていた。そしてキリスト教だけはその解釈に反対をしたわけですね。そのために弾圧されて言論統制につながっていったというのが徳川時代からずっと明治、第２次大戦まで続いていたんではないかと思います。

その間に為政者がやったことは、由らしむべし、知らしむべからずと、つまり民は

お上に頼っていればいいんだと、あまりいろいろ知らなくてもよろしいと、ただ頼ってなさいと、こういうことがずーっと続いたように私は思います。で、今でも私たちはその文化を受け継いでいてですね、お上のやることは間違っていない、会社のやることは間違っていない、と今までずーっとこう思ってきた。

ところがここへ来てみると、会社は都合が悪くなると簡単にリストラをして人をクビにしてしまいます。決して社員のこと、あるいは民のことばかりを考えていたわけではなくて、やはり彼らの都合でそういう経営が行われていたというふうに考えるのが私は正しいんじゃないかと思うんです。こんなことを言うのは大変奥ゆかしくないですね、日本語で言いますと私は奥ゆかしい人間ではありません。で、またこういうところでしゃべるのもですね、これは弁論でありますから、雄弁というのは日本では決して尊ばれなかったわけです。

だけどこれからは違うのではないかと、その違いを非常に際立たせる、あるいはそこに役に立つのがＩＴだというふうに私は思っております。ＩＴは単なる技術の発展の結果ではなくて、私たちが仕事をしていく、あるいは生活をしていくうえでの生産性を向上させるツールであるというふうに思うんです。

生産性向上のツールとして

人間がなぜこういうふうに文明を発達させてきたかというと、生産性を上げることによって文明を発達させてきたわけですよね。

昔は全部手でやっていました。それをだんだんと機械化してきた。そして産業革命が起こって全てのことが機械によって行われるようになり、その機械が今度は自動化されるようになってきた。電子技術によって自動化されることになってきた、というのが第２次産業革命だというふうにいわれていますけれども、この情報技術の発展によって第３次の産業革命が今起こっているんだと思うんですね。

今私たちは電子メールによって意思が伝達できますが、昔は手紙を書いたわけですね。手でね。手で手紙を書きますとそれはそれを宛てた人に送ったら、それでなくなっちゃうわけですね。今はコピーがありますからコピー取れますけれども。かつて手書きの手紙だけの時代というのは１つ作るとそれは１人の人にしか行きませんでした。あるいは本を手書きで書きます。今でも写経している人がいますけれども、書いてもですね、１部しか作れないわけですよね。それが複数できるようになったのはコピーという機械ができたからです。これが郵便とかですね、電信のかわりに電子メールで行きますと、同時に複数の人に同じメールを送ることができるようになってきました。したがって同時に複数の相手に即時に意思を伝達することができるわけです。

これは実は企業にとっては大きな革命で、これまで私たちは組織ではだいたいスパンオブコントロールの範囲というのは７～８人が最適だということで社長の下には７～８人の役員がいて、ひとりひとりの役員の下にまた７～８人の事業部長がいて、その下に７～８人の部長がいてと、こうい

うピラミッド型の組織を使ってきました。

ところが電子メールで同時に瞬時に意思が伝達できるようになると、社長１人、あとは全員社員でもよくなるんですね。もちろん仕事は区分けをしますからいくつかのグループに分け、そのグループには誰か１人リーダーを置かなくてはいけないということで組織が必要になりますけれども、今までのような７～８人ではなくて、20人の部下もコントロールすることができるというふうに、スパンオブコントロールが広がったわけですね。これが組織のフラット化を可能にしたわけであります。

まあ、マイクロソフトのビルゲイツなんかは、社員全員にいつでもメールを発信し続けているんですね。もちろん社員からはそれに対して返事が来ます。ビルゲイツのところに毎日800通メールが来るといいますけれども、もちろんそれ全部は読めませんからそのうちいくつかを読んで彼は返事を書いていると言っていますね。

これは大変重要なことで、一方的に出すだけでは意思の伝達はできません。しかしサンプルでもいくつかのものに対して返事を書くとですね、それをもらった人たちはまたメールを使って俺はゲイツからこんな返事もらったよということが伝わります。そうするとみんなはあー、そうか、ゲイツはわれわれのメール読んでくれているんだなということが分かるわけですよね。

これが企業の中で、どんな組織の中でも非常に大事なことだと思うんですね。自分のボスが自分の考えを理解してくれているかどうかということはやりがいに非常に大きな影響を与えます。ですからこれは生産性を向上させる、その人がやる気を起こすわけですから、生産性が上がるわけですよね。これが生産性向上のツールといわれる理由だと思います。

多岐にわたる機能を生かして

そして今のはイントラネットのお話でしたけれども、インターネットですとこれは世界中にネットがつながっているわけです。みなさんホームページチャットなんかしておられると思うんですけれども、これは複数の、不特定多数の人たちが見ることができるメディアです。ですから、世界中の情報に自分もアクセスできるし、他の人も自分の情報にアクセスしてくれているということで、インターネットオークションのようなことが可能になってきているわけですね。そして、いろんなサイトを見ると今パソコンではどこで一番安いものが手に入るかなんていうことも書いてあって、非常に安い買い物ができると。これも生産性の向上につながっているわけです。コストダウンですからね。

あるいは自分でホームページを作る、ウェブサイトを作ってそこに自分の考えていることをアップロードすると自己表現になりますよね。で、それを人が見てくれる。見てくれているかどうかを確認するためにはカウンターをつければいい。カウンターが全然増えなければ自分のサイトは面白くないんだな、ということがフィードバックしてくるわけですよね。これが毎日何10個もカウンターが進んでいくと、あー、みんな見てくれているんだな、ということが分かります。こういうことができるのは私は

インターネットのすばらしさではないかと思うんですが、このメディアを通して自己主張するということも可能になってきました。

そしてまた、事務所の中で仕事をしている人たちにとっては文書を作り、それを保存しておくと何回も繰り返してその材料を使うことができる。それからデータベースを共有することができる。ボスとセクレタリー、あるいは同僚が同じデータベースを共有することによって生産性を向上させることが可能になってきたわけであります。

しかしこういった中でウィルスですとかハッカー、ハッキングといったことが起こってきていますから、これを防ぐこともひとりひとりの責任になってくるわけですね。ウィルスに汚染されると自分のコンピュータが不具合を起こすと同時に、自分のコンピュータから発信する情報がウィルスに汚染されていますから、他の人に対してもウィルスを防止する責任があるわけですね。ですからＩＴのリタラシーというのはそういうことを理解するということは必要なんです。ただこれから申し上げるようにＩＴそのものを理解することは全く必要ではありません。

コミュニケーションを円滑に

今ちょっと世界中に同時に発信することができると言いましたけれども、これをグローバルということで表現しますと、このＩＴを使ったコミュニケーションというのは非常にグローバルなわけですね。したがって、こういう仕組みがある中では鎖国ということは不可能です。インターネットに接続をしないという国を作れば別ですけれども、それはもうソ連でも中国でさえも不可能になってきています。したがって、もう国民に目隠しをすることはできない、世界中に耳と目が開かれているということが前提になっているわけであります。

そこのところだけ開いておいてですね、情報だけは取るけれども物は移動させないというのが江戸時代の末期の日本の鎖国の政策でした。本が入ってくるとか、いろんな人が情報を持って来るというのはこれは防げない。しかし物のやりとりは駄目だということで、貿易は全て密貿易だというふうにして退治をしようとしたわけですけれども、それは時代の流れに抗することができなかったわけであります。

したがってインターネットが情報伝達ということを通して国境を取り払ってしまったと思うんですね。ですから今私たちは日本で日本人として生活をしていますけれども実は毎日やっていることは、世界との情報交換をしているわけですよね。テレビを見たら世界中のニュースが入ってきます。インターネットを見ると、まあ日本語だけですとちょっと限られますけれども、英語のできる人は英語のサイトを見ることができますから、世界中の発信されたものを見ることができるようになっているわけです。異民族や異文化というものに接する、インターネットを通してバーチャルに接することが可能になってきたわけですね。

イスラムとユダヤとかですね、いろんなところで民族間の紛争が起こっています。アメリカ大陸でも起こっているわけですけれども、これらの民族間の対立というのは

理解の不足から来ていると私は思うんですけれども、理解を進めるためには対話しかないわけですよね。その対話は今までは実際に会うとかですね、電話をするとかしないとできませんでした。けれども今はインターネットを通して対話をすることが可能ですから、これが私は民族間の紛争を解決する手段としてもこれから使われるようになる、あるいは使われるべきではないかというふうに考えています。

ただ、今のところまだ通信できる手段というのは言葉によっているわけですね。書いたものでもしゃべったものでも全て言葉ですから、映像で送るということを除けばやはり言葉ができないといけない。したがって言語というのは当面の障壁にはなっていると思うんであります。しかし言語は勉強することによって他の言語を理解し、あるいは使うことができるようになりますから、これは勉強次第でできるわけですよね。

自分を理解してもらう努力

私はロータリーに入ってから感じるんですけれども、ロータリーには国境がない。メークアップをするときにはどこの国へ行っても温かく受け入れてくれる。ロータリアンというだけで、どこのロータリークラブに行っても歓迎してもらえるわけですよね。

昨年私は世界大会でＲＹＬＡに初めて接したんですけれども、アメリカのサンアントニオというところでありました。このなかであれに参加した人はありますか。ロータリアンでも。はい、いらっしゃいますよね。あのときにもちろんＲＹＬＡのコンファレンスがありましたからそこにいらした方もあると思いますけれども、私はロータリーの世界大会の中でＲＹＬＡの活動の紹介を受け、また、そのコンファレンスに参加した若い人たちの集団を大会で見ていかにもある部分、その人たちのいるところだけすごいエネルギーレベルが高いんですね。

他のところはみんなロータリアンというのはロートリアンだと私は思っておりますが、年寄りが多いんですけれども、その部分だけはですね、ものすごく動きも激しいし、開会式で非常にこう活発な音楽が流れるとその人たちが立ち上がって踊っているわけですね。それにつられて他のロータリアンも一緒に踊っているということがありました。

そういうことでロータリーは非常に今変わろうとしているんですけれども、そこで私が感じたのは、ＲＹＬＡに来ている人たちは、いろんな国から参加しているわけですね。そういう人たちが集まったばかりのときには言葉が通じなかったのに、３日間の会議が終わってみると通じたと、日本から行った人でこういう証言がありました。英語がほとんどできない状態で行ったんだけれども、みんなが理解をしようと努力をしてくれて、自分も理解してもらおうという努力をするようになった。これがコミュニケーションの始まりだと思うんですね。言葉ができなければ理解できないと思って出て行かなければ、やっぱり理解してもらえないですね。私はそこでロータリーのすばらしさというものを改めて目にした思いがいたしました。

私は世界大会というのは異文化体験の絶好のチャンスだということで、私のクラブでもできるだけ多くの方が世界大会に参加されるようにお勧めをしているわけであります。

情報の活用はその人次第

したがってＩＴを有効に使って異文化の理解を容易にすることができるようになってきた。これは書きますとしゃべるよりはずっと楽です。日本にもたくさんいますよね。私はしゃべれないけども書くのはできる、あるいは読むのはできる、いうことになるとメールというのはすばらしい力を発揮するわけです。しかもしゃべるときにはある一定の時間である考えを言わないと、相手になかなか伝わらないという特性があるんですね。あんまりうーんと考えていると相手は興味を失ってしまうかあるいはその前に言ったことを忘れちゃって、次との間がつながらなくなるとか、言葉によるコミュニケーションではそういう限界があると思うんですけれども、書きますとね、読む人はすらすらっと読みますから非常にうまく伝わるんですよね。書く人がどんなに時間をかけて書いてもいいんです。ただオンラインでやりとりをするようになるとそうもいかなくなりますけれども。書いたものというのはそういう効果を持っているように思います。

もう少しグローバル化のお話をしますが、ＩＴというのはそういう意味でグローバル化をもういやおうなく加速させる、鎖国をしようと思ってもできなくなったということはですね、グローバル化がもう止まることができないものであるということだと思うんです。なぜかというとですね、これは全物通信技術というのは電波を使っていますから、それがだんだん光に近づいてきましたけれども、ほとんど光の速さで伝播していくわけです。したがって瞬時という言葉が使えるわけですね。

ひとつの例をいいますと、9月11日に世界貿易センタービルでテロリストのアタックがありました。私の友人、というよりも仕事の上でのクライアントですけれども、その会社からニューヨークに出張している人がいまして、ちょうどあの事件が起こった直後、ニュージャージーからニューヨークに入っていくジョージワシントンという橋で渋滞に巻き込まれたそうです。毎日渋滞をするわけですからまたいつもの渋滞だろうと思って待っていた。そしたらそこへ携帯電話がかかってきました。それは日本からだったんですね。「お前大変なことが起こったなあ」と。その人が「いやあ渋滞なんだけど。だからちょっと会議遅れるかもしれない」と答えたらですね、「何を言っているんだと。世界貿易センターに飛行機が衝突したんだぞ」と。

つまり日本にいる人が、ジョージワシントンブリッジという世界貿易センターから数kmしか離れていないところにいる人よりも早くそのことを知っていたわけですよね。これはＩＴのおかげなんです。おかげというか、この場合はいい効果だったわけですけれども。日本にいた人の方がアメリカにいる人よりも早くそのニュースを聞いていたということがあるわけであります。

それから逆にですね、情報が伝わってい

たにもかかわらず、アクションがとられなかったために非常にまずい事態を招いていたということもありますね。狂牛病の内容というのは実はもう１年以上前に分かっていて、日本にもその報道は伝わっていたわけですけれども、厚生省がそれを握りつぶしてしまった。日本ではこんなことはあり得ないと。その結果、今日の狂牛病の事件が起こっているわけですね。ですから情報というのはたくさんあるのは困りものですけれども、その中から正しい必要な情報を抽出して使わないとですね、無視をするともう本当に大変なことが起こるということなんですね。情報は正しく制御をし、正しく使わなくてはならないということだと思います。

個人で責任を持つように

その次はちょっと難しいお話になりますけれども、ＩＴという技術発達したために個人と組織との関係が変わらざるを得なくなってきた、逆に言うと、今までの個を埋没した経営から個を発揮する経営に変えることができるというふうに私は思っています。それは先ほど言った、イントラネットなんですね。誰でもが、誰に対してでも発信ができる。昔は社内電話帳というのがあってどこどこの部署の、誰々さんの電話番号が書いてあったわけです。今はメールアドレスになっていますよね。社内のメールと社外のメールと分かれている場合もありますけれども、いずれにしてもメールを使うと誰にでも送ることができる、それはその、全ての人が読むといったことが前提ですけれども、そこで自分の考え方を聞いてくれないボスがいても、その人を通過してバイパスをしてその上に持っていくことができるわけです。実際にそれをやっている会社が、少なくともアメリカにはあります。多分日本でもあると思うんですけれども。そうしますと、先ほど言いましたBad Newsが早く伝わるわけですよね。自分の上司に、課長にいつも報告しているんだけれども、どうもそこで握りつぶされているらしい。何にもアクションが見えてこないという場合には、それを通り越して部長に、あるいは事業部長に報告することが可能になってきました。

メールは発信者が分かりますから、匿名で送ることはできません。したがって、その送る情報には責任を持たなければいけないわけですけれども、自分が責任を持てる限りは誰にでもそれを伝えることができる。直接社長に言うことさえも可能なわけであります。

これは、先ほどのニュースの、３つのニュースのサイクルを非常にいい回転をさせることができるツールということがいえると思いますね。これはつまり、先ほどの知らしむべからず、由らしむべしから、知るべし、由るべからずと変えることが可能になったということだと思うんですね。みなさんは知ることができる、知らなければならない。知ればですね、頼る必要がなくなるわけです。自分の責任で自分で得た情報を使って自分で判断をすることができるようになってきたと。

これはみなさんの時代になると大変重要になってきますから、ぜひそれは考えておいていただかなくてはならないんですけれ

ども、今までは日本では退職金や年金という制度があって、全部企業がその年金になる原資を従業員から預って運用し、退職をするみなさんに返すということをしていたわけですけれども、企業にはその力はなくなってきました。アメリカではいわゆる401Kというのをもう今から20年くらい前に導入をしてですね、個人個人が選択をすればですね、個人個人がそれを自分の知恵で運用し、増やしていくということが可能なシステムにしています。日本も最近それをやり始めました。

年を取った人たちはですね、今まで頼ってきたのを自分でいきなりお前自分でやれと言われてもなかなかできませんけれども、みなさんは若いわけですから、これから自分の責任というものをですね、もう少し突きつめていく、そして自分で判断をするというくせをつけていくと、そのことが可能になってきます。自分でやるわけですからその結果は全部自分に返ってくるわけですよね。ですから、ハイリスク、ハイリターンでも結構です。あるいは、俺は銀行は信用できない、証券会社も信用できないから甕に入れて床の下に置いておくという人も、それでも構わないですよね。ただし、聖書に書いてあるように虫が喰うかもしれないし、泥棒が盗るかも分かりませんから、そこは気をつけないといけませんけれども。冗談は別として、自分の責任で自分の資産を守り、あるいはそれを運用して増やしていくということが必要になってきた時代であるというふうに私は思います。

誰にでも使えるＩＴに

そこでＩＴが社会的にどういう意味を持っているかということになるわけでありますけれども、ＩＴというのは決してそのＩＴの技術そのものをですね、理解しなくても使えるわけです。みなさんパソコンあるいは携帯電話、あるいはＰＤＡのツールをお使いになっていると思うんですけれども、使うときにその中がどうなっているかなんて考えたことないですよね。携帯電話だったら、表面にあるボタンを押すだけですよね。僕はみなさんのように早く動かせませんけれども、これを動かすだけで使いこなしているわけです。なぜそれがそういうふうに動くんだろうなんて考えたことないですよね。考える必要もないわけです。私はこれがＩＴのいいところだと思います。

ＩＴを開発したりあるいは研究したりする人たちは、特殊な人たちです。ですから私は作る人、あなたは使う人、ということでいいんですね。作る人がいてその人が作ってくれたものを使うだけの人がいても構わないわけです。あんな難しいもの使えないよというけども、実は非常に簡単ですよね。画面があって、そこにいろんな物が出てくる。その出てくるのはキーボードをたたけば出てくる、あるいはマウスを動かせばパッと出てくる。こういうことですから、コンピュータの中身がどうなっているか、なぜそういうことが起こるのか、知らなくったってコンピュータは使えるわけであります。

キーボード文化というのは今までアメリカではタイプライターというのがずーっともう何10年も前からありましたから、アメ

リカの人たちはそれに対してあまりアレルギーがないですね。みんながブラインドタッチできるわけではありませんが、打つのは速いですよね。キーボードは使えればそれなりに便利ですけれども、使えなくても大丈夫です。マウスとキーボードはもう切り離すことはできませんから、これは1セットですけれども、これからは音声入力であるとか手書き入力というものが可能になってきます。実際そういう機械が出始めていますし、ザウルスなんか手書きで入力ができますよね。ですからあれはキーボードなしで使える世界です。

音声入力も今盲人用のコンピュータなんていうものがあって、かなり識別度が上がってきました。多分これからは100％に向かってまだまだ改良が続くと思うんですね。もちろん、目が見えなくて音だけ聞こえるという人にはそれが便利ですけれども、ろうあの人には今度逆に不便ですよね。ですけれどもその人たちはキーボードを使えば目は使えるわけですから、指が動けばキーボードを使ってコンピュータを使うことができるということで、いろんなハンディキャップを持った人にも使えるような機械というものが今どんどん作られてきているわけです。

でこれから何10年かかるか分かりませんけれども、考えるとそれがコンピュータに理解されると、つまり脳波が伝わる脳波センサーというのができれば、考えるだけでコンピュータが動くようになってこれはもう手は使う必要がなくなるわけですよね。そうなったときには人間もっともっと退化しちゃって今とは全然違う形になってるかもしれませんけれども。いずれにしてもどの時代でもＩＴというのはツールであるということで、そのツールの中身を知ることなく応用だけをするということでみなさんの便利さに使うことができるものではないかと思います。

個を目覚ませるとき

そして頼る文化から頼らない文化に変わるというひとつに、情報の流れが１方向から双方向ということを先ほど申し上げましたが、今までは政府の通達を国民が守るという一方通行でした。しかし現在は選挙という形でみなさんはフィードバックをかけることができるわけですよね。その権利を私たちは今、充分に発揮してないと思うんですよね。この中で選挙権があって選挙に行かない人、たくさんいるでしょ。市長の選挙なんかだと30％だといいますから、10人のうちの７人はそれを使っていないわけです。これは大変私たちにとって重要なことを逆に何かの形で行動で、フィードバックをかけるというチャンスを失っているわけです。

これはみなさんの個が目覚めてないからですよね。個が目覚めれば自分の権利だからこれは使わなきゃもったいないということになるはずなんです。損得ではないですよね。もったいない、自分のためだけではなくて他の人にとってももったいない。同じことを考えている人がたくさん集まるとそれは力になるはずです。それにもかかわらず発揮されていない、これは民主主義ではないわけです。

ですから私はぜひＩＴとの関連で私たち

人類のことを考えるならば、多くの力をどうやって結集し、どうやってそれを社会に認めてもらうのか、それが悪いことでなければ私は団体を作り、行動することはいいことだと思うんであります。

ＩＴは温かいもの

よくＩＴがあんまり発達すると人間同士が人間の心を失ってコミュニケーションができなくなるということを心配する人がいます。私はそうではなくて、ＩＴはそれを補完するものだと思うんですね。ＩＴを使うことによって普段コミュニケーションができない人ともコミュニケーションが取れる、あるいは遠隔地に行った人にもメールを送ることによって自分の考えていることを伝えることができる。ですからそばにいる人だけではなく、そばにいる人が遠くに行ったときにも情報が交換できるということは、私は理解をより深めることに役に立つと思うんであります。

私の妻は今までそういうことをやってきませんでした。周りがみんなやってるのに１人だけメールやってなかったんですけれども、ついにこの間一念発起してパソコン教室に通うようになりました。私もじゃあうちでも必要だろうというんで中古のコンピュータを１万8,000円かなんかで買いましてね、そして今妻はそれを使って一生懸命にメールの練習をしています。

そうすると私は世界中どこへ出張していてもですね、今までは電話というめんどくさいもので相手が起きているときしかつなげませんでしたが、メールだとこっちが書いて送っておけば、向こうは起きてる時間に読んでまた返してくれて、ほとんど１日２回くらい往復できます。ですから結構緊急なことでも、それができるわけであります。私は小豆島へ来てもちゃんと小豆島のアクセスポイントにメールをアクセスしてダウンロードして世界中の人とコミュニケートしてるわけですね。

したがって私は決して非人間的なものであるというふうには思っていません。

ある会議で俵万智さんという詩人とパネルディスカッションを一緒にしたことがありました。あの人は詩をワープロで作っているんですよね。パネリストの１人が、「俵さん、コンピュータで作ると冷たい詩ができるんじゃない？」と言ったら「全然違います。コンピュータというのは温かいものです」と言っていました。私はそれは非常に重要な証言だと思うんですね。

発展しつづけるＩＴ

最後にＩＴの社会的意義の非常に具体的な例が最近あります。先ほど言いましたように80年代に日本の力がなぜそんなに強くなったのかということを世界中の人が勉強して、日本を追い越そうというふうに考えた。そしてアメリカのほとんどの企業はそこで目覚めて、日本を追い越そうということで動き始めました。そのときに使ったのがやっぱりＩＴなんですね。彼らはそれまで非常にマネジメントヘビーであった。アメリカの企業の組織というのはマネジメントがものすごく大きかったんですね。したがってマネジメントのコストがかかっていました。それをＩＴによって、いわゆるリエンジニアリング、会社を再構築して、そ

してフラットなオーガゼーションをして、マネージメントをですね、うんとフラットにして、薄くしてしまいました。数も減らしました。それで企業の経営コストが大幅に下がったという例が実際にあるわけですね。ウサギとカメでいえば日本はカメだというんですね、ところがいつの間にかウサギになっていてですね、向こうがウサギだったのが逆にカメになったということで、ウサギとカメが２回くらい入れ替わりました。これが戦後の日米の関係だと思うんですけれども、私は日米の企業競争力を変えたのはＩＴだと考えています。日本はＩＴを充分に経営の中に取り入れるのが遅れたためにその改革は遅れをとったというふうに今考えています。首相がＩＴをイットと読んだのはどこの国でしたかね。

ＩＴはまだまだこれからも発展が続くと思うんです。一昨年の初めからＩＴバブルがはじけてそら見たことかといった人がたくさんいたわけでありますけれども、私はあれはＩＴのバブルがはじけただけであって、ＩＴそのものがはじけたんではないというふうに認識をしています。情報技術というのはまだまだ発展します。その限界はまだ私たちには見えてないですね。みなさんの時代にもまだまだＩＴは発展し続けていると思います。先ほど言ったようにコンピュータでいえば脳波センサーができて、人間とコンピュータとが何もしないでもインターアクションができるというようなことになるまで、多分ＩＴは発展し続けるだろうと思います。

個人的な経験ですけれども私が1960年ころに初めて半導体でＩＣを実現したときに開発の仲間と言ったことがあります。このＩＣがどんどん世の中に使われるようになって、やかんの中にもＩＣが入るようになるまで続けようね、というのを合言葉にしました。今日そうなってるわけですよね。みなさん電子ポットを使っていると思いますけれども、あの中にはマイコンが入っています。あれはやかんですよね。やかんにＩＣが使われるようになりました。ですから私の夢はですね、実はもう実現されているんで、それで引退をしたわけですけれどもね。

自由競争から生まれる技術

それは余談として、ＩＴのメディアというのはいろんなものがあります。昨日もご質問受けたんですけれども、メディアのひとつである記録メディアがありますよね。みなさん多分フロッピーを使っておられたでしょう。あるいはハードディスクとかね、ＣＤ－ＲＯＭとかＲＷとかあるいはメモリースティックとかスマートカードとかいろんなものがあります。全部フォーマットが違います。差し込むところも違います。同じことができるものが全く違う形で使われています。ひとつは技術の進歩、フロッピーが例えばＣＤになったというのはこれは記録できる情報量が記録的に増えたわけですが、これは技術の進化です。

けれども、同じ技術を使いながらスマートカードとメモリースティックとは全然違う形をしていて全然違うフォーマットで記録されているわけですね。これは一見すると非常に不便であります。しかしその不便さは私は便利さとのバランスだと思ってい

ます。これをですね、同じ規格で作るように強制をすると、技術の進歩はものすごく遅くなります。

その例はソ連ですよね。社会主義ですから統制をしています。開発から経済に至るまで全て政府が統制をして、同じことをみんながやるようにしたわけですよね。しかしその結果、非常に経済が停滞し、技術のあるところだけものすごく伸びた。宇宙開発だけは非常に進んだけれども、それ以外のところは非常に不便を国民は強いられたという結果になっていますから、統制というのは私はいいことではないだろうと思います。

で、その対極は自由です。何でもできるんですね。企業が自分こそ一番いいものを作ろうと思って技術を磨き開発をするから、ソニーはメモリースティックを作り、シャープはメモリーカードを作ると、こういうようなことになってるんですね。シャープの他に富士通も作っているかもしれません。いずれにしても２つの会社あるいは複数の会社がしのぎを削るから、非常にいいものが短期間にできるわけです。そこは消費者、あるいはユーザーが知恵を発揮してこれがデファクト（事実上の）標準だな、と思って使います。そういう人がたくさんになるとそれがデファクトになる、デファクトスタンダードになるということなんですよね。

そのときに申し上げたんですが、逆の規格を先に作ってみんなでそれを開発するという試みも今行われています。自由ですから何をやってもいいわけですよね。ＩトリプルＥ（IEEE）という電子技術の集まりがありますけれども、そこで委員会を作って、例えばmpeg2とかmpeg4とかっていう規格を作ってですね、画像の圧縮はこの規格で世界中同時にやろうと提唱して、各メーカーがその規格で物を作ったということもあります。それは決して遅れませんでした。それは自由競争の社会の中でやるからなんですね。ですから統制だけでは駄目だということであります。

開発のリスクを下げ、あるいは開発のコストを下げるために企業同士が協力をするという形も最近では非常に増えてきています。国際的にフィリップスとソニーとかですね、あるいは日立と三菱電機とかっていう、最近の例もありますけれども、いくつかの企業が協力をして、同じことを２つの会社の資源を使って開発をしようということで開発コストも下げていますから、決して自由競争でむちゃくちゃに開発が行われているわけではありません。技術が高度になればなるほどお金がかかるわけですから、そういうこともこれから行われていくようになるでしょう。

しかしそういうものを生かすのも殺すのも人間ですから、使うのは人間ですから、みなさんの知恵でこれからの開発を導いていくということも可能なわけであります。そういう意味では消費者は非常に強い。消費者が買わなければ作る人はいなくなるわけですからね。これは悪いから買わない、雪印食品は悪いことをしたからボイコットだ、とこういうことにすれば、ああいう会社はつぶれていくわけですから、社会がちゃんとウォッチすることも可能なわけです。これは自由だからできるわけですよね。

それでだんたんとベンチャーの話になっていくわけですけれども、ベンチャー企業というのは過去のしがらみがありません。新しく作った会社ですから、未来しかないんですよね。ですから過去にとらわれずに、これからの未来を見て新しいことをすることができる、という意味ではＩＴの先端を切り開いていくのはベンチャー企業ではないかというふうに思います。ベンチャー企業が使う、あるいは作っていくＩＴというのは、主としてＩＴを使った応用分野だと思うんです。ＩＴそのものはこれはやっぱり巨大な開発費がかかりますから、大企業の分野だと思いますけれども、ＩＴの開発された結果を使ってアプリケーションを作るとか、あるいはＩＴの先端だけをやるということは、これはまあ、ベンチャーにとっても可能なわけであります。

私は今までずっと、民主主義とか個人の個の大切さということを申し上げてきましたけれども、ＩＴを有効に使うことによってそれを実現することは可能だと思います。そういう意味ではＩＴ革命というのはまだ始まったばかりで、これからどんどんＩＴというのは進んでいくと思います。

ＲＹＬＡに期待するもの

先ほど申し上げたように私はＲＹＬＡというものに初めて接したのは昨年のサンアントニオの国際大会ですけれども、それ以来今井先生と時々このＲＹＬＡについてのお話をしていまして、ある期待を持っています。

私は今の日本の教育、いわゆる文部省の教育には非常に不満を持っているんですけれども、それを補完するためにはどういうことをやらなければいけないかということを考える必要があるわけです。

残念ながら今の教育の中から優れたリーダーが出てくると期待することは大変私は難しいように思います。リーダーシップというのはＤＮＡの中に私は何かの形で組み込まれているんだと思うんですね。ですから今井鎮雄さんなんていうのは多分ＤＮＡの中にリーダーシップの部分があるんだろうと思うんです。あの人が努力をしてリーダーになったとはとても思えないんですね。（笑）そういう人は別で、どんな教育を受けてもリーダーシップを発揮できますけれども、通常のリーダーはやっぱり養成する必要があるわけですね。

そういう意味でＲＹＬＡというのは、リーダーシップを養成しようというわけでありますから、これは非常に大きな意味を持っていると思うんですね。

どういう形でいいリーダーを生み出すかということがイシューだと思うんですけれども、まず私たちは先ほど言った日本の江戸時代から引き継いでいる、非常に閉じられた文化、人を自由にさせない文化ということをどうしても対外的に開かれたものに変えていく必要があるだろうと。

ロータリーというのは国際的な組織ですし、非常に開かれていると思うんですね。残念ながらまだ社会での認知度が低いために、社会からはまだ開かれたとは思われてはいないですけれども、ロータリー自身は非常に開かれた組織であるというふうに自分を位置づけているわけですよね。ですからポリオ撲滅のために出かけていく、ある

いはどこかで災害が起こればそこに支援に行く。これは開かれているからできることで、閉じられていたら自分たちのことだけしかやらないわけですから、決して閉じた組織じゃないわけですね。で、そういうロータリーがやる活動ですから、私は対外的に開かれたものにしたい。

したがってＲＹＬＡのリーダーたちが相手にする人たちは、ロータリーの外の人であるべきだというふうに私は思います。

自分を表現する力

日本人に欠けているのは自由な自己表現と、ディベートによる相互理解だと思うんですね。先ほど言ったように腹芸だとかね、腹を探り合うとかあるいは手の内を読むとかって、これは言葉使いませんからディベートじゃないですよね。そういうことで相手を理解しようとした時代はもう過去の時代で、これからは自分を表現し、それを理解してもらって相手も理解する、ということをやっていかなくてはいけないと思うんです。

昔余島で、立て板に水、というゲームをやりました。これは２人の人が向かい合ってね、どんどんお互いしゃべりあうわけです。どっちかが止まって相手の言うことを聞いて議論に巻き込まれたら負けですから、これはディベートじゃないんですよね。けれども自分を表現する、という訓練には多分なったんだろうと思います。ちょっとこじつけですけれども。

自分を表現するということは自分が考えたことをコミュニケーションという手段に乗せて相手に理解してもらうということですから、自分を豊かに表現するということが必要ですよね。それはやっぱり小さいときから表現のノウハウというものを勉強させてあげないとなかなかできません。人間は本来は口下手なのかもしれないんですね。まあ私の孫を見てるとそうは思えないんですけれども。口下手な人というのは多分子どものときに自由に質問をし、親から答えをもらいたいと思ったのが、「あんたうるさいわよ。今仕事中よ、黙ってなさいよ」なんて言われてね、こう押さえつけられて出るくいが打たれた結果ああなったのではないかと思うんですが、世の中には口下手な人はたくさんいます。これはやはり幼児のときの体験から出ているのではないかと私は思います。ですからぜひみなさんが子ども達を指導するときには自由な自己表現をさせるように指導していただきたいと思います。

そしてそれは単に自分の言いたいことだけを言うことではないんですよね。相手の議論の弱点を見つけてそこを突いて、議論に勝つというのがディベートです。自分の言うことだけではなくて、相手の言うことも聞いてそれを瞬時に分析をして、まずいところを突くというのが討論でありディベートですから、これができないと国際的に通用する人材というのは育たないわけであります。

アメリカと日本の通商交渉、私はずっと見てきたんですが、日本側は、このくらい分かってくれてもよさそうなもんだねということをよく言っています。けれども、無理なんですよね。向こうは向こうの言うことをこちらに分からせようとしているわけ

で、こちらが向こうに分からせる努力をしない限り、向こうは積極的には理解をしてくれません。理解をさせるということもディベートの非常に重要な部分だと思います。

世界で通用する人間に

ここでしていただくリーダーシップの養成というのは、ＲＹＬＡが世界的な組織ですから、日本の社会の中だけではなくて、世界で通じるリーダーシップでなければならない、と思います。そういう意味では今外国から日本に来ておられる方というのは、そこで求められる役割が非常に大きいと思うし、またその人たちと接する機会のあるＲＹＬＡの指導者たちはその人たちから学ぶことも非常に重要だと思います。また、みなさんが積極的に世界に出て行くということも非常に大切なことではないでしょうか。

余島もそうでしたけれども、われわれが関わっているキリスト教のいろいろな施設、あるいは組織というのは学校で行われない教育を補う役割を持っていると思うんですね。昔、「英語はＹＭＣＡ」という標語があって私は非常に好きだったんですけれども、当時の英語の教育は、日本の学校では非常にまずかった。それを補完するという意味でＹＭＣＡの英語教育というのは非常に大事な役割を持っていたと思うんであります。実際そこで勉強したおかげでアメリカに留学した人はたくさんいます。

留学するだけが能ではありませんけれども、私はＲＹＬＡと同じように期待をしているのは、海外帰国子女であります。海外で教育を受けた人というのは日本の文部省の影響を受けていませんから、非常にユニークな発想もできるし、ディベートもできるという人が多いですよね。そういう人を企業が今活用し始めています。ですから私は日本というのはまだ再生のチャンスを持っていると思うんでありますけれども、学校以外でないとできない教育と、つまり文部省の教育方針に反することでもいいと思うんですが、文部省の教育以外のことをぜひＲＹＬＡでは子どもたちに教えていただきたいというふうに思います。

いびつな環境にいる子どもたち

子どもたちはＲＹＬＡ以外のところでは２つの環境を持っていると思うんですね。学校と学校以外の環境。学校以外の環境は家庭と友人との接触の環境、また２つに分けることができると思いますが、この３つくらいの環境に今子どもたちはさらされているんだと思うんです。けれども、残念ながらここもう20〜30年になりますでしょうか、学校の部分が非常に増えて、うちに帰っても塾というまた別の学校に行かされていて、家庭や友人との環境がだんだんだん隅っこに押しやられてきた感じがするんですね。そこにパソコンが入ってきました。ゲームが入ってきました。ということで、学校、塾以外のところがそれで全部とられてしまっているというのが今のいびつな子どもたちが置かれている環境だと私は思うんですね。

これは決してパソコン、ゲームが悪いんじゃなくて、それ以外のところが悪いんだと思うんです。学校で充分やってくれない

から塾に行っているのか、あるいは学校でやっていることで充分なはずなのに、何となく教育ママが人を追い越させようということで塾にやっているのかそこは私もよく分かりませんけれども、残念ながらいわゆる勉強に使う時間がちょっと多すぎるような気がいたします。ですから子どもを個性が発揮できる環境にさらすということが、今のしくみの中ではできていないんだと思うんですね。子ども同士で接している場合には個性を発揮していると思うんですけれども、それが学校の延長だといじめであるとかいろんなことが起こって、子どもたちは非常に今、いびつな環境の中に置かれていると思います。

私は余島のキャンプというのはそういういびつな環境から子どもたちを解放する、非常に重要な場だと思います。私がいたころには肢体不自由児キャンプというのがあって、ハンディキャップの子どもたちだけを集めたキャンプというのがありましたけれども、この人たちは普段は非常に閉じられた社会の中にいるのが、この余島に来てキャンプをすることによって非常に開かれる、心も開かれる。体も今まで動かなかったと思っていたところが実は動くということを発見して帰って行きました。余島は感動の場です、というのは、やはりこの肢体不自由児から感じたことであります。

子どもたちが余島に来て感動して帰るという、そういう場を作ることが私はＹＭＣＡの余島キャンプの重要な役割だと思っていますけれども、ＲＹＬＡもそれと同じ役割を私は担うことができる。昨日もどなたかおっしゃってましたけれども、感動を持って帰ってくださいというのは本当に私は心から望んでいることであります。

あなたが起業するには

さてここで、ＲＹＬＡと非常に関わりがあると思われるベンチャーというものについてお話をしたいと思うんですけれども、ベンチャーの基本はまずはベンチャーを創業する人の資質です。ここにはヒューマンリソーシズと書いてあります。

その次はその人が持っているベンチャーの種が何かということであります。これはフロッピーの中にその種が入っているということでこんな絵を出したんですけれども、ベンチャーの種がその次に重要です。

しかし、そのベンチャーの種がいくら重要でも、市場がなければこれは事業にはなりません。その市場がいつあるのか。今その市場がもうすでにあれば誰か他の人が必ずそこには参入しています。したがって後で参入をすることになりますから、後発ですよね。もし誰も競争相手がいなければ、本当に市場があるのか。市場がないから誰も競争相手がいないんだったらば、それはベンチャーの種にはやっぱりなり得ない。ですから種がいい悪いだけではなくて、市場があるかどうか、そしてその参入するためにどんな障壁があるのか、法律的な障壁がある場合もあります。規制が多いとかね。それから競争相手がすでにいて、その人たちが参入障壁を作っている場合もあります。参入障壁が高いところには、入るためのコストが非常に高くなります。

それから、事業をするためには必ず資金

が必要になります。事業資金が必要になるわけですけれども、それは1,000万円だけですむ場合もあれば100億円かかる場合もありますから、レンジが非常に広いんです。投資対象になるような種であるかどうか、あるいはその事業をしようとしているチームが投資をしたいと思うようなチームであるかどうか、ということが非常に重要であります。

投資の対象になるかどうか、ということは、投資をしてくれる人にその説明をしに行かないと駄目なんですよね。まだ株式公開をする前の話で不特定多数の人が株式を買ってくれるわけではないので、特定の人に理解をしてもらって、そして投資をしてもらう必要がありますから、投資の対象になるということを相手に説得をしなければならないわけであります。投資家はこれに投資をするからにはそれが事業として成長して、競争相手に勝って、大きくなって利益を出してほしいという思いを持っているわけですから、成長性がないとそれはできないわけであります。

成功するためにはあるパターンがあります。それを私はロードマップというふうに名づけているんですけれども、ここでは縦軸が企業の価値、これは時価総額というふうに呼ばれることもありますけれども、その企業が市場から評価される価値の大きさを縦軸にとって、横軸には時間を取ってあります。

まず最初に企業価値も全くない、これからというときにですね、企画をしたりあるいは準備をしたりするわけですけれども、この時期に充分な準備をするということが必要です。

相談をすると、とりあえず会社を作ってやってみろ、というアドバイスをする人がよくいますけれども、これが一番悪いアドバイスです。そういうアドバイスを受けたら従わないでください。そういう場合には私に一言ご相談をいただければ無料で相談には乗りますから。

なぜかというとですね、会社を作って何かを始めてしまうとお金がかかるわけです。充分な準備をしていないと無駄なお金を使うことになる場合が多いんですね。ですから私はこの企画準備の段階はできれば、親掛かりで、まあ親掛かりでなくてもいいんですけれども、奨学金で大学に行っている間とかね、あるいはどこかに勤めてサラリーをもらってそれでちゃんと食べていけるという間に自分の時間を作る。これは、管理職でない限りは会社を出れば自分の時間です。週末は自分の時間です。ですからこれを、アフターファイブ起業というんですけれども、5時を過ぎてから起業の準備をするということで準備をすればいくら時間を使っても大丈夫です。そうやって練りに練った事業を会社を作って始めれば、非常に早く成功する可能性があります。

アメリカではよくバーにですね、何人かの人が集まってお酒を飲みながら紙のコースターや紙ナプキンにボールペンで書いて、「こんな構想があるんだけれども、お前どう」とパッと相手に見せて意見を聞くというように、起業の種を練っている人がたくさんいます。

私は1964～1965年ころからいわゆるシリコンバレーといわれる世界に出入りをして

いるんですけれども、シリコンバレーの中心部のサンタクララやパロアルトのあたりの飲み屋では、アメリカですから赤提灯ではありませんけれども、テーブルを囲んで３人くらいの人で夜遅くまでそういうことをやっています。このアイデアはいいと思ったけどあいつの意見を聞くと駄目だったな、また別のアイデアにしようと言って駄目なものを落としていきますから、さっき言った1,000分の1の確率が1,000分の５になり、それがだんだんと上がっていくわけですね。その準備を充分にしていないと、いい起業はできないと思っています。

準備ができていよいよ会社を作ろうということになると創業するわけですね。創業するとチームが必要になります。もちろん自分ひとりであるところまでやれるということはありますけれども、いずれはパートナーを見つけてきて経営チームを作らなければ事業は発展しませんから、チームを作る必要があります。その段階でエンジェルの支援を受ける。これは開発の資金を出してもらう、事業計画を練る手伝いをしてもらう、いろんなところでエンジェルの支援を受けることができますけれども、この段階で少しずつ形を作っていく。物であれば試作品を作る、技術であれば特許を取れるようなものにする、といったようなことがこの時期に行われるわけですね。この時期にかかる費用はそれほど大きくはありません。

いよいよそれができるとですね、今度はそれを事業に展開していかなければならないわけで、事業を開始するわけであります。この段階では試作品をお客さんに持って行って、評価をしてもらう。お客さんを複数作って顧客開拓をする。そしてこの時期にベンチャーキャピタルと話をし始めて資金を集められる準備をするということになります。だいたいこの最初の準備段階からこの段階くらいの間はですね、できればベンチャーキャピタルの資金ではなくて、エンジェルから集めた資金でやることが望ましいですね。この段階はまだ企業価値、いわゆる時価総額が低いですから、ベンチャーキャピタルにたくさんの株式を発行して、資金を出してもらうというのはあまり得策ではないと思っています。

次は急成長をする段階で、この期間に事業が黒字転換をすることが望ましいんですね。現在の環境ですとこの段階で黒字化できないとちょっと株式公開は無理ですけれども、ここでより大きな資金を使って、大きな成長をするという戦略を練ることが必要なわけです。

ここまで２年から大型の開発の場合には多分６～７年かかると思いますけれども、この間、最初に持ったビジョンや夢を初志貫徹するということが非常に大事です。これができればこのカーブは可能です。もちろん途中で頓挫をする場合もあるわけで、必ずしもこの順調な軌跡を辿るわけではありませんけれども、途中で変えてもその変えた時点から先初志貫徹をすればいいと私は思います。これは理想的な場合ですね。これがうまくいくとここで株式公開ができて、その先無限の発展が望めるというわけであります。そうするとお山の大将になりがちでこれは危ないんですけれども、この人はまだ７合目くらいにいますからね、ま

だまだ大丈夫です。一番上まで上りつめてしまうと非常に危ないということは覚えておいてください。

これは全てうまくいった場合ですがそうではなくて、この時期に充分な準備をしない、あるいは準備をした結果が間違っていますと、そこから先成長しないんですね。この線に乗ってしまうリスクというのは例えばビジネスモデルがまずかったとか、あるいは実現性が乏しいアイデアであったとかいろんな理由があるでしょうけれども、この段階でずっと横ばいになってしまって成長がないと、いずれ資金が枯渇してしまいます。会社を作っても資金が枯渇して火の車ということになってしまうわけですね。これをどの段階でもそうですけれども、リビングデッドというふうにいうわけです。「死に体」ですよね。

次の段階に仮に入ることができた。創業して資金もできた、試作も始まった。しかしそこで成長が止まってしまうということもあり得ます。

このときのリスクはどういうことが多いかというと、この段階で作ったチームがうまく機能しなかった。チームメイトだと思って組んだ相手が実はとんでもないやつだったとか、非常に優れてるんだけれども、どうも自分よりも優れてそうでちょっとこいつとやっていくと心配だなとか、そういう仲違いが起こってしまうとやはりチームはうまく機能しなくなります。あるいは、いると思った顧客が試作品持っていってよく見てもらったらば、採用してもらえなかったとか、思っていなかった競合が出てきた、まあこれが一番大きな可能性です。見えているはずの競合が実は見えていなかったという例は非常に多いですね。

ですから私はこの一番最初の準備段階とそれから次のチーム作りをしている間に、競争相手がいるかいないかということを確かめなさいということをしつこく言うんですけれども、競争相手というのは同じことをやっている人というふうに思う場合が非常に多いんですね。実はそれは大間違いでありまして、同じ目的を達成すればそれは競争相手なんです。全然違うことをやっているけれども向こうのほうがうまく目的を達成すればこれは競争に負けるわけですから、この特許を使わなければできませんというのは非常に疑わしい場合が多いんですね。その特許を使わなくてもできることがあれば、その特許はあまり大きな力にはなりませんから、競争相手はいませんというふうに言っている人はまず疑ってかかる必要があるというのが、投資家として当然のことであります。

この段階をうまく通り抜けて、実際事業が開始できた。この段階では相当お金も入ってますし人も雇っているわけですけれども、そこまで行っても駄目な例もあります。

私が今関わっている例でひとつ、まだここまではなっていないんですけれども、こうなる可能性を秘めているのがあります。これはデジタルテレビ用のセットトップボックスというのをみなさんご存知だと思うんですけれども、普通のテレビにそのセットトップボックスを載せるとデジタルテレビが見れるようになりますよね。もちろん高精彩の画像を出すためには別のモニターを買わないと今までの普通のテレビでは駄

目ですけれども、プログラムは見ることができます。そのセットトップボックスの中に入るチップを開発した会社があります。これは非常に優れたチップを開発して、ソニーもサンヨーもシャープも三菱電機もみんな採用を決めてくれたんですね。

ところが、市場のほうが思ったよりも伸びないんですね。一昨年の12月にＮＨＫがデジタルテレビの放送を開始しました。その開始の式に私も行ったんですけれども、そこでＮＨＫの局長が、「私たちはこれから３年の間にデジタルテレビが2,000万台普及することを目指しています」とおっしゃいました。それから１年ちょっと経ちましたが、まだ300万台くらいなんですね。ですからあと１年半で2,000万台になる可能性はないなあと思っています。

これは市場が伸びなかったんですね。市場が伸びない理由はたくさんあるんですけれども、とにかく市場が伸びませんでした。その会社は2,000万台に伸びることを想定して開発したわけです。今までの状況からいくとシェアは半分以上取ってもおかしくないと思うんですけれども、デジタルテレビ300万台で150万台ですからね。2,000万台で1,000万台ですから、15%しかいかないわけですよね。ですから事業の成長が非常に遅れてしまいます。

つまり、もうあと一息で株式公開というところまで来たんですけれども、この市場のリスクで売上が伸びないと、売上が伸びないから利益が出ないということでキャッシュがポジティブじゃなくって、ネガティブに回ってしまっているという例です。こんな例は他にもたくさんありますけれども、どんなに良くて事業として成功しお客さんが見つかっても、その先の市場が思ったとおり伸びてくれなければ駄目です。この場合には競争相手にも勝ちました。全部うまくいったんですね。市場だけが伸びてくれなかったんです。いろんなことが全部うまくいかないと出口までは行けないということであります。

これは株式公開寸前まで行ったわけですけれども、他にもいろんな理由があってこの時点での黒字化、あるいは株式公開に至らずに横ばいになってしまうという例もままあります。ここを通り抜けてこの段階に行けたところが先ほど言ったように最後の勝者です。これが1,000分の1から1,000分の５というわけなんですね。ですから株式公開をするというのは実は大変なことです。今、ナスダックとかあるいはジャスタック、ジャスタックは少し大きいですけれども、ナスダックとかマザーズとかいうところに情報を公開しているところは実は私が言う今の成功のパターンとは限らないんですね。つぎ込んだ資金が、あるいはキャピタルがスウェットも含めてですね、100倍を越えていないという例はたくさんあります。ほとんどはそうなんですね。100倍を越えている例というのは極めてまれです。

ビルゲイツが作ったマイクロソフト、あるいはインテル、この２つは今世界でその業界ではNo．1を誇るベンチャーでスタートした企業ですけれども、マイクロソフトの場合には1,000倍を越えていますね。インテルの場合にはその時点ではそれほど大きくはありませんでしたけれども、それでも100倍を越えています。その後非常に大き

な成長をして、現在ではそのころの株式を持っている人は1,000倍を軽く越えています。

そういう大型の成功というのは1,000分の1もなくて、1万分の1以下だと思います。ベンチャーというのは非常に厳しい。しかし成功した場合のリウォード、果実は非常に大きいという、非常におもしろい領域です。こういうところにぜひ、ＲＹＬＡの活動に関わっている人たちが参加して、伸びる企業を作っていただくということを志していただきたいと思うわけであります。

個人の権利を行使して

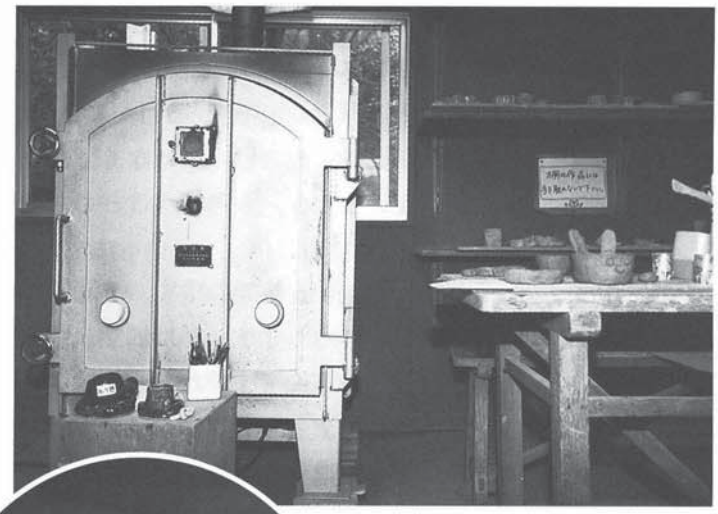
企業に就職をしても新しい会社を作る種を探すことは決して不可能なことではありません。その会社で勉強した結果でもいいです。全く別のアイデアでもいいです。これだ、と思ったらこの企画段階ですね、ここを充分に準備をしてもらってそしてベンチャーを興すという選択肢を残して、ぜひ学校を卒業していただきたいと思うんです。先ほど申し上げたように、もう終身雇用という形は崩れていますから、みなさんが１つの会社に入って一生いるという意味はほとんどありません。多くの人は途中で仕事を変えたほうがいい場合が多いと思うんですね。ですから会社に入って間違いだったと思ったら、その段階で飛び出すことを私はお勧めします。みなさんのご両親に聞かれたら目をむくかもしれませんけれども、それはもう無視して結構ですから、間違ったと思ったらすぐに正すことです。ただし、その次も間違ったと思ったら、あなた自身が間違っているかもしれないと反省してみてください。何回変えても間違ったと思ったらこれは選択が間違っているわけですから、自分には企業を見る目がないと、企業が私を見てくれないんじゃなくて、自分が企業を見てなかったということもあると思うんですね。

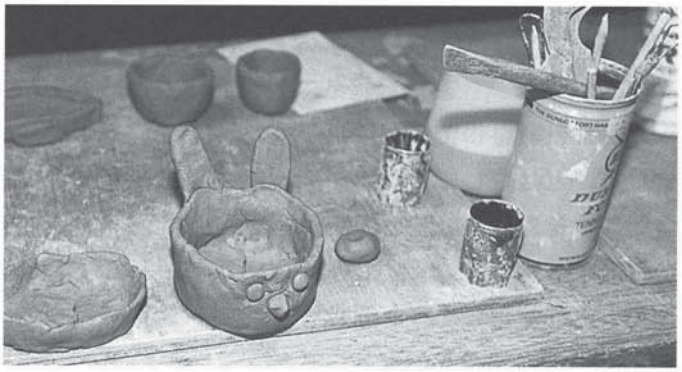
そして、私はキャリアの中で、３回転職することをお勧めします。私は偶然３回会社３つ変わってるんですけれども、今は４つめと５つめをやっていますが、３つ変わることによって違った企業文化を経験することができる。私はさっき、３人のメンターに会ったと言いましたけれども、そういうチャンスもあるわけですね。ですから自分の幅が非常に広がる、幅が広がればその先やれることはうんと違ってきます。

同じ企業にいると企業の都合のいいように動かされますから、決してみなさんの人生にとって都合のいいキャリアが生まれるわけではないんです。ラッキーな場合にはそういうこともあり得ます。けれどもたいていの場合は企業の都合のいいように使われます。企業とみなさんとは全く対等な関係です。個と組織というのは対等です。みなさんには権限も責任も権利もあるわけですから、ぜひその権利を、正しく行使をしていいキャリアを作っていただきたいと思います。先ほど申し上げたＲＹＬＡの指導者としての役割とみなさんご自身の人生、キャリアですね、これは同じ地面に基づいて作ることが可能だと思います。これが私からみなさんへのメッセージです。

ご清聴、ありがとうございました。

レクリェーションタイム





キャンプファイヤー

「子どもと自然」

〈河合　雅雄氏〉
兵庫県立人と自然の博物館館長
京都大学名誉教授

河合　雅雄 氏

みなさんおはようございます。河合でございます。今日は、子どもと自然についてお話するつもりで来ました。

こういう題にしたのは、私は子どもが大好きで、実はペンネームがあって、児童文学の作品もいくつか書いています。賞も3つくらいもらいました。なんといっても、われわれの時代を継いでくれる子どもの教育、これが一番大事なことではないかと思います。ということで、リーダーとしてのみなさんに、子どものことを一緒に考えようと思って来たんです。ところが、いろいろこう話したり伺ったりしてますと、もうどうもみなさんは、私が言おうとしていることはもう卒業しているらしく。とても困ったんですね。

紹介の通り、私の専門は人類の進化です。人類の進化には、いろいろな研究の仕方があります。化石での研究、あるいは分子生物学の方面からの研究もある。私は、サルを研究しているんです。サルというのはよくいわれますね、「人間の先祖はサルだった」あるいは「ヒトはサルから進化した」と。でも、ほんとかいな、と思ってる人が多いと思います。実際あんな毛むくじゃらのおサルたちと一緒にされたら困ると。そう思っている人もあるでしょう。しかし、科学的には間違いありません。

ヒトの誕生についてはいろんな立場がありますからね、例えば、Menていうのは神が創ったんだ、という宗教的な立場もあるでしょう。それはそういう1つの考え方ですね。私は自然科学者ですから、自然科学の立場からは、人間というのはいきなり出てきたんじゃなくて、長い時間をかけてサルから進化して出てきたんだと、こういうふうに考えます。では、どうしてあんなサルたちからこんな人間たちが出てきたのか。

私は今、人類学者を名乗っていますが、出発は動物学者ですから、動物のことはみなさんよりもよく知っています。人間は動物の中で非常な変わり者だと思いますね。そういう変わり者がどうして出てきたのか

ということになるとこれはなかなか難しくて、まだまだ問題は解けておりません。

ですから、そんな話をいきなりしてもいいんですけれども、やはり用意もしてきたし、みなさんと一緒に子どものことを考えようと思います。

大学の講義はだいたい90分ですから、90分くらいお話をして、10分休んで、あとはスライドを見ていただきます。このときはですね、もちろん子どもの自然教育に関することを言いたいのですが、ついでに熱帯雨林の話とか、いろんなことをお話ししようと思います。それから後、質疑応答、というスケジュールでいきたいと思います。

先が読めない教育の問題

今日本でいろいろなことが問題ですが、やはり、子どもの教育の問題が非常に大きな問題ですね。子どもの教育、それから子育て自身が非常に難しくなっています。いろんなことが学校でも、あるいは子どもの世界で起こっています。

もうだいぶ前に、家庭内暴力というのがありましたね。これも専門家に聞くとほんとにすさまじいですね。お母さんからカウンセラーのところに電話がかかってきて、「殺されそうだ」と言う。そういうような子どもが出てきた。ところが、学校に行くといい子なんですよね。信じられない、なんかすごい二面性を持っているということがあります。そういうものから校内暴力に発展していく、それから、いじめとかあるいは自殺が増えたり、今は学級崩壊が問題になっていますね。

私が一番怖いのは、次に何が起こってくるのか、誰も予測ができなかったことです。教育学者もあるいはいろんな子どもに関わっている人たちも、次に何が起こるのか分からない。多分、学級崩壊なんていうようなことを予測した人は、誰もいなかったと思います。いきなりそういうことが起こってくるわけでしょう？今学級崩壊が問題になっていますが、それと非常に残忍な問題も起こっている。残念ながら、神戸の須磨のいわゆるA少年の事件がありました。じゃあ次は何が起こるんだろう？誰も答えられませんね。非常に怖いことだと私は思います。

ですから、何でこういうことが起こっているのかという原因を確かめる、そしてそれに対応することを考える、ということをやらなくてはいけないんですが、やっぱり原因はとても複雑だと思います。簡単にこれだ、と言えるものではない。

というのは、今非常に高度な文明社会をわれわれは持っています。これはある意味ではとてもいいことです。本当に恵まれているわけですが、それによって、また今まで考えられもしなかった、負の面、マイナスの面がどんどん起こってきています。そういうことでまた世の中の状況がどんどん変わっていく。しくみが変わっていく。それに対して対応がうまくできていないということが大きいと思います。

何といっても物余りといいますか、異常な物質文明の栄えた中にわれわれはいます。たまに私も、スーパーに行きますけれども、もうすごいですね。衣料と食料とか、靴屋さんといい、何でこんなに物がたくさん売ってあるのか。いらないですよね。と

ころがどこにいっても物が溢れています。それから情報も大事だ、大事だといわれますけども、過剰としか言いようがない。

どうですかみなさん、ここへ来られて。テレビも新聞も何もないですよね。非常に不自由でしょうかね、そんなことないですよね。

イレギュラーに流れる時間の中で

私は新聞好きなんですよね。何がおもしろいか。世の中がもう毎日毎日すごい勢いで変わっていく。そういうのを新聞とかテレビ見ていると分かりますよね。それは楽しみで私は大変興味があるんです。

ところが、私がだいたい調査する場所はアフリカなんです。長いときは半年くらい行っています。熱帯雨林の中に入りこんで、自炊をして、まるで乞食みたいな暮らしをするんですが、そこへ行くともうほんとにテレビも新聞も何の情報もなく、世の中から切り離されるんですよね。でも、そうなっても別に何の苦痛もないんですね。人間ていうのはおもしろいものです。逆に向こうでは、なんというあわただしい世の中に俺はいるんだろう、日本に帰ったら今度はもうちょっとゆったり、優雅に暮らそう、といつもそう思うんですよ。時間の流れが違うんですよね。日本の時間の流れというのは異常に流れているとか、速く流れているのではなく、非常にイレギュラーなんですね。なんかそれに追いまわされているみたい。なんていうようなことを、アフリカの森の中で考えます。けれども、日本へ帰ってきてちょっとしたら、忙しさの歯車に巻きこまれて、追いかけられる生活に戻ってしまいます。

私なんかは、人生の経験の中である程度対処することを学んでいきますけれど、子どもたちは初めて出会う、そういうイレギュラーな時間の流れの中、非常に過剰な情報を与えられ、どれを選択していいのか分からない。そういう中で戸惑うことが非常に多いと思います。

それから、家族構造がすっかり変わって、核家族、少子になりました。また、非常に都市化が進んでいる。サラリーマン化が進みました。戦前は、農業とか自営業とかそういう人たちが圧倒的に多かったわけでしょう。戦後急速にサラリーマン化していく、そして、大変激しい競争社会にわれわれは置かれている。そういうことが子どもの発達に大きな影響を与えていきます。それでは、どうしたらいいか、ということになります。

どうしたらいいのかということですけれども、実はマニュアルもモデルも何もありません。そこが今、私たちが非常に難しい時代にいるということだと思います。生きがいや、人間どういうふうに生きていったらいいかということは、昔のえらい人がいっぱい教えてくれました。宗教家とか哲学者とかですね、あるいは思想家とか、そういう人たちがいろいろ教えてくれた。それはですね、主にこういうことだったんです。

昔は、大方のみなさんが貧しかったわけでしょう。そして権力者、支配者だけ大きく富み、一般の人はほんとに貧しかったというのが普通の世の中です。それから、何といっても大きな敵は病気です。医学ももちろん発達していない。それから、人間関

係が非常にわずらわしい。そういう中で、いかに貧乏でも病気になっても、とにかく耐え抜いて希望を持ちなさい――するといい将来が開けますよと。あるいは清貧という言葉ありますよね。物はなくったって、心はいくらでも豊かにできますよ、というような教えがいっぱいあったわけでしょう。それはそれで分かります。

ところが今はどうです。物はいっぱいあるわけですよ。情報がいっぱいあるわけでしょう。そういう異常に豊かな社会の中で、どう生きていったらいいかというのは誰も教えてくれる人がいません。自分で考えるより他にない。これが私は大きな問題だと思います。

人間は幸福を求める動物

人間と動物の違うところ、これはいろいろありますね。1つは、人間という動物は幸福を求める動物だということです。イヌやネコやネズミは、自分の幸福って何だろうなんて全然思わないですよ。イヌが寝転んで日なたぼっこして、「俺の一生は」…とかね、「俺は不幸だ」とか、そんなこと思いませんよね。たくさんえさをもらって、日なたで寝転んでいたら、幸福なんですよ。ところが人間というのは、たくさんご飯を食べて日に当たっていてもね、なんかまだ欲しいとか、心がみたされないとかいろいろ思うんです。俺の幸福って何だろうとかね、そういうことを考える動物なんです。

確かに幸福を求める動物だというのは人間の特徴ですが、その幸福をいかにして求めるかというところが大事です。自分は世界一流のコックになりたい、などと夢や希望を持つことは非常に大事なことだと思います。

夢がない子どもたち

ところが残念ながら、日本の今の子どもたちを見ていますと、夢がなくなっている。非常に怖いと思うんですね。

いつか、こういうのが載っていました。中学生に、何になりたいかと聞くと、大工さんというのが一番だったようですね。もちろんこれは非難することではありません。自分の手にしっかりした職業を持って、自活していく、それはいいことです。

でも、「夢」っていうんだったら、もうちょっとビッグなことを考えてもいいんじゃないんですかねぇ。夢っていうのは、そんなに簡単に達成されることじゃないと思う。大きな目標、なんかやってみたい、例えば、宇宙飛行士になりたい。そんなの、なかなかなれませんよ。でもそういう夢を持つことも、子どものときには大事だと思います。それが、どうもなくなっているんですよね。

それに関して、非常におもしろいことがあります。今の子どもたち、何が一番欲しいかというと、中学生は圧倒的にお金ですよね。お金ってみんな言います。ところが、おもしろい国際比較があって、大金持ちになりたいか、というアンケート採ってるんですよ。そうすると、アメリカの子どもたちは95%くらい、大金持ちになりたい、と言うわけね。中国だってフランスの子どもだってみんなだいたいお金持ちになりたいと。ところが日本の子どもだけがおもしろいんですよね。金持ちになりたいと言った

人は確かな数字を忘れたんだけれども30%切ってましたよ、ほんとに。なんかね、お金ってねダーティーだという印象が、日本の子どもにはあるみたいです。

確かに、新聞見ると汚職だとか、悪いことをする人がいっぱいおります。しかし、世界的に見れば日本はまだ少ないほうかもしれません。犯罪率は、今は高くなっていますが、国際的に比較すると日本は犯罪が少ない国ですよ。いい国だと思います。でも子どもたちは、大金持ちになりたくないと思う。大金持ちになったら悪いことをするというイメージがあるのでしょう。成金という言葉もありますし。

けど考えてごらん、僕なんかは大金持ちになりたいですよ。例えばこの余島っていう、夢みたいな島で、今井先生の夢が実って私はうらやましくてしょうがないです。大金持ちだったらこういう島をガンと買って子どもたちと楽園を作るとか、すごい研究所を作るとか、福祉のことをやるとか、そういうことがいっぱいできる。あるいは難民の救済にすごい活躍をする、そういうのはお金要りますよね。いくらでも使いようがある。自分の夢の実現に、とてもいいことだと思う。それがね、なんで20何%くらいしかお金持ちになりたくないと言うのか。一方で自分の金の入りは欲しいと言っている。自分の小さな幸福さえ満たされればいいという、そういう思想が子どもたちに広がって、私は残念であります。

子どもを育てる中で

そういう子どもたちに、私は絶望しているわけではありません。子どもたちに接してみると、とてもいい子が多いし、伸び伸びしている力を持っている。ただ、どこかちょっと、歯車が狂っていると思います。どういう子どもにしていったらいいか、ということはわれわれ大人が考えていかなくてはならない。

昔のアンケートよく採るとね、日本のお母さん方が一番よく答えたのは、人に迷惑をかけない子にしたい、というのが一番多かったですね。これは別に悪いことでも何もありません。

でも私は、あまり良くないんじゃないかと思っています。それは一方で、人に迷惑さえかけなければ何をしたって構わない、ということにもなってしまうからです。だから人に迷惑をかけない人間になるという一番大事なことは忘れて、何したっていいんじゃないかということになってしまう。その一番極端な例が、援助交際でしょう。誰にも迷惑かけてないからいいじゃないですか、ということになってしまいますね。これはあまり良くないと思います。他に、もっと大事なことがあると思います。

私は2つあると思います。当たり前のことなんだけれども、人間も動物も、生まれて、成長して大人になって歳いって死ぬ、これは避けられないことです。現実ですね。そのなかで子ども時代というのを、みんな過ごすわけでしょう。子ども時代というのは、その人にとってもう2度と来ない。大人になっちゃったら、子ども時代は来ないですよ。大人になったらもう歳がいくだけです。子ども時代は2度と来ない。そういう子ども時代を大人が奪っちゃいけないと思います。この子ども時代をとにかく大事

にしてあげる。そして、豊かで楽しい子ども時代の思い出をたくさん子どもにあげる。これが大事なことだと思います。

子どものときのいろんな楽しい思い出をいっぱい持って育つと、人生の挫折や不幸を乗り越えていく力が出てくると思うんですね。だからそれが大事なことだと思います。

ドイツの有名な児童文学者でエーリヒ・ケストナーという人が、こういうことを言っている。「大人はみんなかつて子どもだった」。当たり前のことですけどね、でも、私はこれはとっても大事なことだと思うんです。あなたたちだって、かつては子どもだったんですよ。けど考えてください、子どもの頃のことって、どれだけ思い出すでしょう。意外に少ないかも知れない。ほんとは子ども時代ってもっと楽しい、膨らんだ思い出があったってよかったなあ、とそういうふうに思う人もあるでしょう。実はそうではなくて、いやあ、私は子ども時代はほんとによかった、と思う人、その人は幸福な人だと私は思います。そういうことが一番です。

もう１つは、大人になったら独立して生きていくための自立した子どもに育てることです。つまり大人になったら１人で生きていく力を持つことです。動物たちを見ていますと、いろんな教育の仕方があります。子どもを育てることはあらゆる動物たちにとって一番大事なことですから、いろんな育て方があるんですが、原理は１つです。動物たちの教育の原理は１つ、何かというと、大きくなったら１人で生きていくんだぞ、ということです。その力を子どものときにつける、これが動物の世界の教育原理です。これは人間にとっても一番大事なことだろうと思います。

ところが、ここのところがやっぱり今ちょっと揺らいでる、ちょっとどころか、かなり揺らいでる、だから、モラトリアムなんていう言葉もあります。大きくなっても自立しない。ですからパラサイトシングルなんて言って揶揄する人もありますよね。いい青年になって、あるいは大人になって、まだ親のすねをかじっているとか、そういうような人たちが出てきている。大人になったら１人で生きる、１人で暮らす。そういう自立性を持つ。そういう子どもを育てることです。ここにおられる方は当然そういう人たちですから、こんなことみなさんに言ってるわけではなくって、そういう子どもを、育てるようにしていきましょう。

子どもに自然を

そのために何をしたらいいかということですが、私は子どもに自然を取り戻すこと、これが一番大事だろうと思います。実は自然という言葉、これは２つに分けて考えるといいかと思います。

１つは、普通自然というと、この外界ですよね。草や木があり空気があり、あるいは海があり、われわれを取り巻いている外界のもの全部を自然と言っています。それは普通言う自然です。

もう１つ私は、内なる自然ということを考えたいわけです。内なる自然、あまり聞き慣れない言葉だと思います。例えば、われわれの体。体って何でしょう。これは私は１つの自然だと思います。変な気がする

かもしれませんが、内なる自然です。みなさん指は5本でしょう、誰だって全てそうじゃないですか、だいたい同じ形してますよね。これは自分がしたんでも何でもなくて、そういうふうに生まれてきたわけでしょう。これは自分が持っている自然です。自分が変えることもできない、自分が作ったものでもない。このような自然をわれわれは持っている。内なる自然です。そういうものは、体もそうですけれども、心理についても、社会生活についても、われわれはいろんな内なる自然というものを持っています。

人間はサルから進化した

霊長類というのは、みなさんが思っているサルとわれわれ人間と、合わしたのを霊長類といいます。ですから動物学的にいうと、われわれは高等な霊長類です。みなさん高等な霊長類、高等なサルなんですね。われわれいきなり出てきたんではありません。どうしてわれわれ今いるんですか。あなたたちはここで息してるんですか。ということを考えたことがあるでしょう。ものすごく簡単なことです。親が産んでくれたからです。じゃあその親はどうしたか、その前の親、その親はその前の親、どんどんどん遡っていきます。そうでないと今の自分は存在しない。どこまで遡れるのかということになります。そうすると、さっき言ったサルに到達するんです。

ついでに、教養番組的な知識を覚えていてください。サルの幹から人間が出てきたのはいつごろか。これは難しいことですけれども、だいたい答えが出てきました。約600万年くらい前だろうと思われます。もちろん約ですね。きっちり600万年前ではありません。約600万年前。この研究は、一番分かりやすいのは化石の研究ですね。古い化石をどんどん発掘していく。ヒトが来た道が分かるわけです。今一番古い化石は、440万年前のものがエチオピアから出ています。それが一番古い化石です。もっと古い化石が出てきたという話がありますけど、まだ学問的にははっきりしていません。

それから進化の研究というのは、いろいろな研究の仕方があって、分子生物学というのをご存知でしょうか。バイオ、バイオなんてよくいわれるけれども、その分子生物学によって進化の研究ができています。

私がどういう進化の研究をやっているかというと、サルたちの行動とか、社会とか、生態とか、そういう暮らし方を研究して、進化というものを考えているわけです。いろんな学問分野の成果を総合すると、約600万年くらい前にヒトが誕生したと考えていいと思います。

そこで、どこでということになりますね。それは、アフリカです。アジアとかいろんな考え方がありますけど、まずアフリカでしょう。アフリカのでも東アフリカ、つまり、エチオピア、ケニア、タンザニア、モザンピーク、といった東アフリカで、多分誕生したんだろうと思います。そこからヒトは世界に広がっていくわけですね。

どんなサルからか。これが難しいんです。みなさんが知ってるサルで言えば、チンパンジーのようなサル、チンパンジーみたいなサルから人間が出てきた、進化してきた

と考えていいと思います。

よく聞かれるんですね、「サルのうちで一番人間に近いのは何ですか、ゴリラですか、オランウータンですか」。これも長い間なかなか決着がつかなかったんですが、今は、やっぱりチンパンジーが一番われわれ人間に近い、といっていいと思います。解剖学的には開けたお腹を見ると、お医者さんでも分からないくらい同じですよ。しかし今は、ＤＮＡの比較ができます。

ＤＮＡで比較しますと、チンパンジーと人間というのは、1.3％くらいしか違わない。１％ちょっとしか違わない、ほとんど99％くらいはチンパンジーと人間のＤＮＡって同じなんです。つまり遺伝的な構造はほとんど変わらない。まあ１％ちょっと変わってる、ということは統計的に分かっているわけです。何が違っているのか、ということはまだ分かりません。もうじき分かるでしょうけどね。

科学の進歩による問題点

ヒトゲノム計画というのを聞いたことあるでしょう。人間の遺伝子、ＤＮＡの構造を全部調べる計画です。これが予定よりずっと早く分かった。人間のＤＮＡ構造が分かった。次は今チンパンジー、猛烈な勢いで調べています。それを比較すれば、どこが違うんだということがはっきり分かりますね。

そうなると、すばらしいことはすばらしいけれども、ものすごく怖いことも起こってくるんですよ。

ヒトゲノム計画、新聞か、雑誌に載ります。いいことばっかり書いてある。なんとすばらしいことができるか。例えば、いろんな難病がこれから治せるとか、ガンを治すことができるとか、いいことばっかり書いてあるけど、実はマイナスの怖いことも山ほどありますね。そのことは全然、というよりもほとんど触れない。そこが今とても怖いことです。

ちょっと横道にふれるみたいですが、例えば臓器移植ということがあるでしょう。これはいいことしか書いていないですね、だいたい。けどね、ちょっと考えてごらん、怖いことですよ。今は人間と他の動物の臓器を移植することはできません。免疫の拒否反応がありますから。でも、それはもうじき可能になるでしょう。科学っていうのは、そういう問題を必ず解決していきます。そうすると、今豚を一番研究してます。豚の臓器を人間に移植すること、それはもう近いうちにできるでしょう。すると胃は豚で肝臓はヒヒ。心臓はこれ簡単な、ポンプですからね、これは簡単な機械に置き換える。そうやっていくと、もう人間の臓器は大方他の動物と機械に置きかえられます。

それから今、首据え換えるということもやっています。実はサルの首を換え、１ヵ月くらい生きてた。そういう実験がある。１ヵ月まで生きたら、それをずーっと生かすことということを、科学は必ず成し遂げます。そりゃ１～２年では無理ですが、将来そういうことは必ずできるでしょう。けれども、首を据え換えたら、自分っていったい何なんでしょうね。そういうわけのわからんことがどんどん起こってくるんですよ。

それから、こんな変なこともやってます

よ。発光クラゲっておるでしょう。クラゲで光るやつね。あの光る遺伝子、あれをアカネザルの遺伝子を移植しているのですね。遺伝子組み換えでやっている。そうするとサルは光るか。今のところうまくいっていないみたい。けどね、光るサルってできますよ。そういうこと考えると、われわれがもう吹きだすこともありますよね。

われわれ漫画を見ると、大きな目ん玉の女の子がいっぱい出てくるじゃないですか。目の中に星があって、ピカピカピカっていう――ああいうことができるんですよね。つまり発光クラゲの光る遺伝子を、目の細胞の中に発生のときに入れこんじゃったら、ピカピカ少女ができてくる。僕は嘘じゃなくてほんとにできると思うけど、そういう変なことがいっぱいできてきます。だから臓器移植は、人間という根元問題を抱えているのです。そういう怖いことはあんまりみなさん言わないんですよ。

これは何かと言うと、私の言葉で言えば、内なる自然を、破壊しかけているということです。人間は残念ながら外の自然を破壊しましたね。それで地球環境問題を起こしたわけでしょう。この間からものすごく暖かかったですよね。ほんとに地球温暖化が起こってるんかなあ、という心配が頭の中を横切るじゃないですか。ほんとに起こっているかもしれません。暖かいというのはいいことだ、いいことだと言っていたら実は、そんなことはない。この間も、南極の巨大な氷山が出てきたと言ってますね。南極の氷はやっぱり小さくなっているんですね。そういうような外の自然を充分破壊して、今度は内側の自然を今われわれは破壊しようとしている。それはどこかで止めなきゃいけない。そういう問題があります。今日はそんなことを話するつもりはありませんが、内なる自然をわれわれは守らなければいけないということでは、しっかり認識して下さい。

そういうように、人間とチンパンジーは非常に近いことが分かっています。チンパンジーの研究者っていうのはおもしろいですよ。チンパンジーって言わないんです。なんて言っているんだと思う？チンパン人って。あれは人間の仲間だというわけ。学会の発表でも、チンパン人が50人おって、女が30人で男が20人、こういう話をするんですよね。これは誰のことを言っているのかという感じがするくらいですが、そのくらいチンパンジーのことをずっと研究している人は、感情移入ができるんです。ときどき天才アイちゃんなんていうのが新聞に載るでしょう。京都大学に霊長類研究所というのがあります。サルの研究所ですが、私はそこに長くいたんですけれども、それは愛知県の犬山市にあります。そこでチンパンジーの言語学習の研究をやっているんです。よくできるアイちゃんというのがいるんですね。こういう研究を通じてもチンパンジーはわれわれに一番近いことがわかる。チンパンジーみたいなやつから進化してきたんだといえると思います。ところが問題は、簡単にサルから人間が進化して出てきたというけれども、そのプロセスはどうなのか、何が原因だったのかということが、実はまだまだ分かりません。私はそういうことを研究しているんですが、そのためには３つの仮説を持っています。

人間とサルとの違い

つまり、サルが人間になるためにはどんなことが大事だったか。それは3つです。

それは、1つは身体的なレベルでいうと、サルは全部4本足で動くでしょう。人間は移動はみな2本足で歩くじゃないですか。だから「体を立てて2本足で歩くこと」、これが身体、自然のレベルでサルとはっきり違うことですね。だから、それが1つですね。

それから2番目の、今度は社会というレベルで考えると、「家族という集団を持つこと」、これが人間の特徴です。

3番めが、「言葉を操ること」。実は言葉と言っていますが、言語と言ってません。さっきチンパンジーの言語学習と言いましたけれども、これはなかなか難しい問題で、言語とは何か、言葉とは何かというのはとてもめんどうなのです。動物は声出してますよね。サルでも鳥でもみんな出す。その声を使っての言語活動、これを言葉といいます。これは人間の特徴で、サルたちは言葉は持ってません。チンパンジーも言葉は持ってない。もちろん音声――声を使って、コミュニケーションはしています。言語の話はここではちょっと省略しますが、人間というのは何かというと、人間の原点は2本足で歩くこと、家族という集団を持つこと、言葉を操ること、この3つを行う高等なサル、これが人間だと私は定義したいと思います。

家族を起点にして

前置きが長かったですが、今日は家族の問題の話をしようと思うんです。家族っていうのが、何で自然なのか、変な気がするでしょう。家族が自然、などと考えたこと、みなさんないと思います。けど私の考え方の内なる自然という考え方からすれば、われわれ人間が家族という社会集団を持っているということは、これは人間の非常に大きな特徴ですね。他の動物と違う、大きな特徴です。これは人間の内なる自然である、というふうに思います。ですから、人間とは何かということを社会学的なレベルで考えると、家族という社会集団を持った高等なサル、これが人間なんです。

あのもう4年ほど前ですかね。国連が国際家族年というのをやりました。家族が大事だとは、みなさん知っているわけですが、家族というのは実は人間の存在に関わるということです。家族というのは人間の出発点だということです。だから家族というものを大事にしなければ、われわれは人間というものを、人間性を損なっていくということになります。

今いろんなこと起こってますね、確かに離婚も増えています。それからシングルの人が増えている。そういうことから、家族というのは崩壊するかも分からないなんて言う人もあります。でも、私はこれはとんでもないことだと思います。もし家族という集団を人間が壊してしまったら、どういうことになるでしょうね。人間というのは、家族を持ったということから出発するわけです。将来本当に家族という集団を潰してしまうかもわからない。人間は何するか分からないですよ、ほんとに何するか分かりません。自分自身も改造しようとしている

んですからね。もしそういうことになれば、人間は自分で人間であることを放棄したんだろう、こう思いますね。つまり、別の動物になったと、進化的に考えればそういう言い方ができます。ですからわれわれはこの家族というものをほんとに大事に守っていかなくてはならない。

家族の人工化

ところが、家族が今人工化したということが、非常に大きな問題だと思うんです。子どもに自然を取り戻そうと私が言ったわけですが、今の子どもを取り巻くいろんなことが人工化した、子どもを取り巻く環境が人工化したということが、今の子どもの教育のいろんなことを歪めている一番大きな原因だと思います。その中の大きな１つが、家族が人工化した。家族が人工化したというと、何だかピンと来ないと思いますね。こういうことなんです。

私は戦前からずっと生きています。私は６人兄弟です。今６人兄弟なんて考えられないでしょう。私は６人兄弟、で、父親５人母親６人兄弟なんですね。いとこが45人くらいおるわけですよ。考えられないでしょう。私は兵庫県の篠山生まれです。小さな町です。斜め前の家には女の子が９人おりました。そこから３軒向こうの家には子どもが10人おった。今子ども10人なんていったら、天然記念物になるかもしれない、もう大変なことですけれどもね、そのころは10人は多いけど、子どもが４～６人くらいおるっていうのは普通ですね。そして、おじいさん、おばあさんがおって、あるいは居候のおじさんがおったり、出戻りのお姉さんが子ども連れて帰って来たりして、１つの家の中というのはいろんな人がごちゃごちゃごちゃごちゃ、おったものですよ。それがいわば自然家族というものです。ところが今は核家族、少子になっているわけでしょう。もう急激に家族構成が変わった。そのために子育ての伝統的なシステムが壊れちゃったわけですね。通用しなくなってきた。そこがね、非常に大きな子育てに関する問題だと思います。

核家族ということと少子ということは分ける必要があります。実は家族とは何かということはここでは省きますけれども、いろんな家族の形があります。

今世界に民族といわれるものがだいたい5,000くらいあります。多く見る人は8,000くらい民族あるだろうと言いますし、もっと絞って見る人でも3,000くらいの民族があるといいます。だいたい5,000くらいと言っていいでしょう。エスキモー族とかね、アフリカのブッシュマンとか、日本民族とかいろんな、こんな大きいのからこんな小さいのからいっぱいあります。タイのカレン族の中で住んでいたという女性の方がここにおられますが、家族形態は、いろいろです。核家族という家族形態を持っているところもある。だから、これはそんなに怖いことでない。問題は少子です。

何で少子になったか。これは人工的にしたわけでしょう。避妊とか場合によっては中絶とか、そういうことで子どもは１人、あるいは２人に制限しちゃってるわけですね。これは人工的に作ったものです。今はせざるを得ないと思いますし、これが悪いと言っているわけではないんですよ。だか

ら、子どもは1人か2人というのを人工的に作った、で、まあこういう人工家族の中で子どもが育っていくということが非常に大きな問題だと思います。

で、「子どもが多ければほんとに楽なんだから、もっとたくさん子ども持とうやないか」それも1つの考え方です。ですがどうでしょう。みなさんも現実に自分のことを考えて、子ども4人、5人持つってちょっと無理ですよね。ということは、1人か2人の子どもをちゃんと育てると、そういうことを考えるより他ないと思います。

これはもっと大きく視野で見れば、今地球全体で抱えている、あるいは人類全体が抱えている大きな問題です。例えば、人口爆発。人口がどんどん大きくなっていく。今世界の人口、約60億でしょう。これは大変なことです。もう地球の収容力を越えちゃって、破産しているわけです。だから、どんどん人口を増やすというようなことはできない。日本はそういう点では、人口政策はモデル国といっていい。ほんとにちゃんとやっている。けれども、子育ての方法はちゃんとやっていないということです。

これは大げさに言うと、私はこうだと思うんですね。こういう核家族・少子という、そういう家族による社会が生まれた。これは人類600万年の歴史の中で、実は初めてのことです。しかも周りを取り巻くのは非常に高度な文明社会でしょう。その中で核家族・少子――、そこでどう子どもを育てたらいいか。これはマニュアルもモデルも何もありません。じゃあどうしたらいいか。各々が考えるより他ないわけですね。だから、ちょっと大げさな言い方をすると、日本の全ての家族が、子育ての実験をしている。私はそういう状況だと思います。これは非常に難しいことやっているわけです。だから今子どもの教育、子育てが難しいといわれるのは、当たり前のことだと思いますね。

子育てには父親が必要

そんなこと言ったってしょうがない。じゃあどうしたらいいかということを考えないといけません。私もいい対策を言えるはずもないんですけれども、1つ提案しようと思います。

それはですね、父親が頑張ってくれということです。

実は、家族とは何かっていうこと、これはいろんな言い方があるでしょう。社会学者とか、文化人類学者とか、教育学者とかによって、家族の定義は違います。私は進化論者ですから、人類進化に基づいた家族を考えるわけですが、家族が成立する要因の1つとして、父親がいるということが大きな柱です。父親がいなければ、子どもができないじゃないか。サルの社会だって子どもがいっぱいおるわけでしょう、チンパンジーだって子どもがいる、ゴリラだって子どもがいる。では、なぜ父親がいないのかということになります。

私はこう思います。霊長類の中で、父親がいるのは人間だけだ。他のサルの社会には父親がいない。こういうふうに私たちは考えている。ですから、父親というのは非常に不思議な存在なんですね。母親はどのサルにもいます。

そこのところが問題。人間にももちろん

母親がいますね。母親って何だといえば、これはみなさんだって答えやすいでしょう、基本的には子どもを産んでそして育てる、そういう性だと。父親って何だといったら、ここに父親たくさんおられると思いますが、非常に答えにくいでしょう。父親って何だと言われたら、非常に答えにくい。なぜかといったら、父親は全く社会的な存在であり、人間家族が生まれて、初めてできた存在なのです。ですから、こういう言い方をする人もある。「父親っていうのは人間の発明品なんだ」、そういう言い方をする人もおりますね。父親は人間が作った１つの社会的な地位ですから、社会が変わるごとに父親像もどんどん変わっていく存在だということであります。

先ほどの霊長類の社会には父親がいないといいましたが、これは不思議に思われるでしょう。

他の霊長類に父親はない

これはこういうことです。例えばニホンザルを例にとりましょう。寒霞渓とか銚子渓、この小豆島にもいっぱいニホンザルいます。実は、私が小豆島に来たのは、昭和34年くらいにサルの調査で小豆島を訪れて、山をうろうろしたことがあります。ニホンザルの社会では、オスもたくさんいる、メスもたくさんいる。オスとメスが一緒に暮している社会なんです。もちろん子どももたくさんおります。100頭とか、多くて150頭くらいの大きな群れを作ります。

その中で子どもができるためには、オスとメスの性行動が必要です。ニホンザルのメスには、みんなメンスがあります。サル類にはみんなメンストレーションがあって、ニホンザルの場合にはだいたい28日周期です。だいたい人間と一緒ですね。そのメンスとメンスの間にちょうど排卵期があります。人間もサルも同じことです。その排卵期のときに、メスは発情するわけです。つまり、オスと交わるわけです。そのときにメスはいろんなオスと交わります。10頭くらいとは交わりますね。だからニホンザルの夫婦関係はどうですかとよく聞かれますけど、別に夫婦関係はありません。ニホンザルの場合は乱婚です。もう誰でもいいわけね。

誰でもいいというけど、よくこういうことが言われています。ニホンザルには、ボスがおって、これがものすごくいばっていて、メスをみんな自分のものにしてしまう、と。そんな話がありますけど、あれを私たちはボス神話とこう言っているわけですよね。そういうことはありません。基本的にはオスとメスがもちろん交わらないと子どもはできないけれども、このカップルが成立するにはどうしたらできるか、これはメスがオスを選ぶんです。

だいたい動物たちは、性関係ではメスが非常に力を持っており、メスがオスを選ぶんです。オスは選んでもらうように、選んでもらうように一生懸命頑張らなくてはいけないわけです。それは大変なんですよ。メスがすごい実権を持ってるわけ。

そして、ニホンザルの場合は、１頭のメスが10頭くらいのオスと交わりますよね。そうすると受胎します。お腹の中に６ヵ月いて、子どもが産まれます。そのときにメスは全部自分で処理します。子どもが産ま

れるのはそんなに難しいことではないのですね。霊長類の中で、人間だけが異常に難産なんですよ。これは、人間の女性が背負った1つの宿命です。ニホンザルは簡単です。なぜ人間が難産になったかというと、2本足で歩くようになったからです。だから骨盤の構造が変わり、それで異常に難産になったわけですね。ニホンザルの場合は割に子どもは簡単に産まれます。産道がまっすぐなんです。人間の場合は産道が曲がってるんですよ。それで、難産なんだけれども、そこでね、赤んぼうを自分で取り出してきれいになめて、胎盤は全部食べてしまう、これはメスが食べてしまいます。、そしてお乳を飲ませて育てるんですね。そうするとそのメスはお母さんになるわけですよ。

ここちょっと理屈っぽいですけれども、メスっていう言葉ってね、これ何でしょう。これは生物学的な言葉ですね。オスとか、メスとかいうのは、これ生物学的な言葉です。一方、母親っていうのは、これは社会学的な言葉です。つまり、子どもを持ったから母子関係という、そういう社会関係ができるわけですね。だから「母親」っていうのは社会的な地位の一つなんです。

で、メスは母親になった。じゃあその子どもからいって、父親は誰なのか、分からないじゃないですか。オスはいっぱいおるけれども、そのどれかが種付けしたことは確かですね。それは確かですよ。でも、誰かが分からない。オスだって、あの子は俺の子だなんて分からないでしょう。メスだって分からないでしょう、子どもにも分からないでしょう。誰にも分からない。だから、父親っていうのはないんですよ。

だからニホンザルの社会では、オスはオスなんです。オスのままで、父親になることはできない。こういうふうに考えるんですね。だから、ニホンザルの社会では、メスは母親になる、母子関係ができるけれども、オスはオスのままで、父親はいないと、こういうふうに考えるわけです。そういうような理屈でサルの社会が、調べてみると、父親という社会的存在はない、こういうことがいえます。

けどね、実はサルの社会って簡単に言いますけれど、いろんな社会があるんですよ。

例えばオランウータン、これはみなさん知っているでしょう。ボルネオ島とスマトラ島におります。オランウータンっていうのは、変な奴なんですよ。あれはシングルなんです。オスもメスもほんとにシングル。群れを作りません。もちろんシングルだけれども、時々性行為をやらなければ子どもができないから、そのときは一緒になりますけれども、すぐ別れちゃう。そういうサルもいる。

あるいはテナガザルっていう種。これは東南アジアにいます。タイにもボルネオにもスマトラにもおりますが、テナガザルっていうのは、これは厳重な一夫一妻なんですよ。で、非常に厳重な一夫一妻ですから、子どもができるとメスがお母さんになるのは当然ですが、オスはお父さんと言っちゃいけないのかということになりますね。私はやはり、オスにお父さんという地位は与えられないと思う。

そこで、じゃあ父親って何なのか、そういうことを考える必要がありますね。

そこで、いったい父親って何なのかということをテナガザル社会を例にして考えたいと思います。

テナガザルは縄張りを持っています。そして、この縄張りを非常に厳重に守っています。線を引くくらいはっきり、ちゃんとお互いに境界を決めているんですよ。テナガザルというのは、朝非常に大きな声で鳴きます。“ホーッ・ホッホッホッホッ・ホッホッ”と縄張りの歌、英語でいうテリトリーソングを歌います。つまりここが俺の縄張りだぞ、よそ者は入ったらいかんぞ、ここにおるぞ、ということを示すわけですね。これはだいたい4km四方くらい聞こえるんで、すごく大きな声です。

しかしときどき、縄張り争い、けんかをすることがあります。これもおもしろいんですよ。けんかをするのはオス同士です。メスは縄張りの護衛にけんかをしない。論文読んでてほんと吹きだしたんですけどね、これほんとに激しいけんかしてね、木から2匹がどーんと落ちることもあるんですよ。で、戻ってきて疲れると、毛づくろいして慰める。そして「さあ行きなさい」とオスを追いやる。ほんとに「男はつらいよ」とはこういうことなんでしょうね。けんかをするのは、オスなんです。だから大事なことは、自分が属してる群れを、守る、護衛するというのがオスの仕事です。

父親とは何かというと、私が3つの条件が必要だと思います。1つは集団を守ること、2つ目は自分の集団を維持するための経済的な活動をするということ、それから3番目は、子どもを養育するということ、この3つを行うオスを私は父親だとこういうんであります。

では、テナガザルはどうなんだ、ということですね。1番目は今言ったようにパスです。経済的な行為をするということは、人間と違いますからね、もちろんお金使ったりはしませんが、物の交換をする、あるいは物を取って来て子どもに与えるとかメスに与えるとか、あるいは雨が降ってきて大変だから屋根を作るとか、そういうようなことは、これはオスは一切しません。

今度は子どもの養育にあたるか。子どもを遊んでやるとか、母ちゃんがちょっとつらいだろうから子どもを抱いてやるとか、もちろんおっぱいは与えられませんが、そういった子どもの養育に関係する行動をするかといえば、一切しない。オスは子育てについては、全然知らん顔なんですね。テナガザルの父親っていうのは、これは先ほど言いました、社会的な地位でしょう。だから、これには社会的な役割が要ります。父親としての社会的な役割がこの3つの中で、テナガザルは1つしかやっていない。だから、テナガザルのオスは、父親失格だといえると思いますね。こういうふうに考えていくと、父親ってものは、サル社会にはいないということになりますね。ここのところがとても大事なことです。

父親と母親が協力して

つまり、結論を言いますと、その人間家族の特徴というのは、父親と母親、この2つの違った性が、協力して子どもの育児にあたるということです。協働して養育にあたるということ、これが人間家族の特徴です。ここのところが非常に大事なことだと

思うんですね。ところで3つの条件について応用問題考えてみましょう。日本の現状はどうでしょう。日本の父親は2番目の条件はよくやってますよね。これはね、やりすぎるくらいやってるじゃないですか。経済活動すごいですよね。ところが3番目に関しては非常に弱い。

今、子育ての問題でいろんな問題ありますが、私はやはり父親がさぼっているとしか思えませんね。今、核家族・少子という新しい家族像を作るわけでしょう。それは先ほども言ったように、マニュアルもモデルも何もない。自分たちで作っていく。そのためにはやっぱり男と女、違った2つの性が協力して、新しい家族、どういう家族像を作ればいいか、核家族・少子という家族をどうすればいいか、そこのところを2人でほんとに悩みながら考えていかなくてはならないだろうと思います。

日本の父親像

また統計的なこと言いますけど、日本の父親ってどんな状況か、これは少し前総務庁が調べたのですが、ちょっと信じられない答えなんですね。父親との会話が全くないというのが小学校5年生で40%、中学校2年になって51%だというんですね。その原因は何かというと、父親、母親と話すことがないっていうのがほんとの理由なんですね。話してもつまらないとかね、あるいは機会がないっていうのがあるんですね。つまり、日本というのは忙しい国ですから、お父さんは夜遅く帰って来ると、子どもは寝てる、朝は子どもと行きちがいになる。子どもの顔を見ることがほとんどない、寝顔しか見ない、そういう状況が続くわけですね。土日になったら疲れちゃって何もしないとか、あるいは自分だけ遊んでるとか、そういうことが多いのではないかと思います。

父親のイメージについても総務庁が調べています。日本では「仕事熱心」というのが圧倒的に1番ですね。57%、がそういうふうに思っているわけです。ドイツはどうか。これはいかにもドイツらしいですね、「頼りになる」というのが1番です。60%以上。そして、アメリカがなかなかすごいんです。ただしアメリカっていう国はいろんな人種、民族がいっぱいおりますから、それはちょっと問題があって、いわゆる白人だけの統計だと思うんですが、「尊敬できる」、これが1番なんですね。これはちょっとうらやましかったですね。非常に残念なのは、「子どもが好き」。子ども好きだと子どもから父親を見て思っているのがドイツとアメリカでは上位にあるのに、日本では10位以内に入っていない。

日本では子育てはしんどいと思っている。残念なことです。子育ては楽しいと思うように、そういうように持っていきたいと思うんです。何でしんどいか。

1つはやっぱり養育費がかかりすぎるんですね。それが非常に大きい。だから、子どもをたくさん持てないということになっています。けどね、そんなに無理して養育費出すことないと思うんです。塾だとかおけいこだとか、とにかく子どもに投資を一生懸命する。ちょっとしすぎていると思う。そんなことしないで、この余島に来れば子

どものためにはずっとよい。ほんとに。家族で来ればいいんです。私も実はこんなところがあるなんて今まで知らなかった。こんな素敵なところ。聞きますと、一般の人はほとんど使っていないとおっしゃいますよね。もっと宣伝してください。こんなに素敵なところがあるんだから。家族で来てください。そうしたらさっき言ったみたいに、テレビも何もないじゃないですか。子どもの遊びといったらすぐにテレビゲームに熱中している。親指小僧みたい。そうじゃなくて、ここへ来たらそんなものいらなくなりますよね。当然木登りしたくなるでしょう。夏だったら、泳ぎたくなるでしょう。そういうことをほんとにしてほしいなと思いますね。

過保護に育ててはいけない

父親が子育てをさぼっていると、どうしても、過保護になります。過保護の悪いところというのはよく言われますけど、これには非常におもしろい例があります。

チンパンジーでも、子どもを過保護に育てるとこんなことがある。これはすごいおもしろい例です。ジェーン・グドールさんという、イギリスの女性、ご存知ですかね。この人はすごい人でしてね、今は野生のチンパンジーの研究ではもうほんとにトップの人です。野生のチンパンジーの研究というのは、1960年に始まります。タンザニアで始まるんですが、これはジェーン・グドールさんと日本の研究者とほとんど同時に始まります。ジェーン・グドールさんのすごいところは、研究を１人でやったんです。彼女が25歳のときですね。この人は高等学校を出ただけです。大学は行っていません。後でオックスフォードの学位は取りますけれども、高校を出ただけですごい研究をしました。

そのグドールさんの観察ですけれども、チンパンジーはオスが10頭おったら、10頭に順位があるんです。メスが10頭おれば、強い弱いの順位がある。順位社会なんですが、フロウというメスがいた。これは１番優位なんです。ものすごく威張っているわけです。それでファーベンとフィガンという子どもを、（これ男の子です）産んだ。それからまた次、女の子を産んだ。３頭ともお母さんがえらいから、ものすごく威張って元気なんです。そして、今度は４番目５番目が生まれて死んじゃったんです。そうすると、お母さんはものすごくがっかりした。今度は６番目、男の子が生まれた。フリントという名前ですが、そうするとお母さんは前の２頭を亡くしてるから、ものすごく甘やかして育てちゃったんですね。何でも言うことを聞く、そうするとほんとに手に負えない子どもになってしまった。

もう４歳というと、もう乳離れしないといけない。でも、ずっとフリントはおっぱいを吸いたいのですね。それで、母親が駄目、ひとり立ちしなさいと注意すると、お母さんを殴るわ、蹴るわ、ひっかくわ、もう人間家庭内暴力と同じですよ。すさまじい。しょうがないからお母さんはまたおっぱいをあげる。移動するときは、赤んぼうのときは腹にくっつきますが、大きくなった今もそうしたい。でも、大きくなっているからお母さんはできない。しょうがないから背中に乗せます。４歳になったら、お

母さんに歩いて付いて行かなきゃならないんだけど、絶対母親のお尻に乗るんですよ。

そうやってフリントはほんとに甘えて育てられた人ですが、次にまた女の子ができたんです。そうすると、今度はジェラシーですよ。人間でもときどきあるでしょう。次の子ができたら難しいですよね。そうするとその赤んぼうをいじめる。お母さんが駄目って言ったらお母さんを殴る、蹴飛ばす、おっぱいを奪おうとする。しかし、お母さんもそれだけは守るんです。おっぱいだけは次の子のものだと。ところが、移動するとき、お母さんは次の子をお腹に抱き、フリントはお尻に乗るわけです。2頭を、運ばなならん。お母さんくたくたになって、それでついにその赤ちゃん死んでしまうんです。

そして今度は、お母さんも弱り果てて、死んじゃった。そのときはもうフリントは6歳なんですけれども、6歳といったらもうほんとに思春期の、元気なころですよ。お母さんが死んだところでうずくまって、何もしなくなったんです。チンパンジーっていうのはテナガザルと違って、お母さんが死ぬと兄さん、姉さんが育てるんですよ。それで、えさを持ってきてフリントに、元気出せってやるんだけど、何にも食べない。フリントは衰弱して、お母さんが死んだところで死んでしまうんです。つまり「生きる力」が全くなくなったんですね。

だから、ほんとに過保護で甘やかすと、こんなことが起こる。だから、少子家庭で一番大きな問題は、過保護だろうと思いますね。

特に日本は、子どもだけはほんとにいい子に育てたいと思いすぎなんですよ。そのために塾行かせるとか、家庭教師をつけるとか、おけいこごとをやるとか、そういうことをしすぎて養育費がかかる。そのあげくに、子どもには大きな重圧になるでしょう。そこのところが非常に大きなギャップがある。母親が自分の子を世界で一番ええ子に育てようと思うのは、当たり前なんですよ。これは母親の本能みたいなもので当たり前です。そういうことに対して、父親がそれは駄目だというふうに切断する力、こういうものが必要だと思いますね。

今、男女共同参画ということが非常によく言われますね。私から言えば、今さらっていう感じがします。つまり人間っていうのは、サルから進化して人間になったときに、子育てについては男女共同参画なんです。動物と違うところです。だから、新しい家作りというのは、とにかく夫婦で力を合わせてほしい。そしてその過保護をやめて、子どもを独立させる。こういう教育にしてほしいなあ、と思います。

希薄になった社会性

もうひとつは、非常に子どもにとって大事な問題は、子どもの社会性が非常に希薄になっていることです。あるいはほとんど欠如している。そういう子どもが出てきていることがとても残念だと思います。

私は「子どもは群れる」っていう言葉が好きなんです。子どもたちは機会があれば寄り集まって、子どもだけの社会を作ってそして遊ぶ。年配の人はみんなそういう経験お持ちでしょう。学校から帰ったらかばんを放り投げて、みんなで遊んだ、ってい

うのがね。それがもう、ちょっと昔の子どもたちの普通の姿です。そして、外でもう遊びまわってきて日が暮れた、帰らなきゃ、というのが子どもの世界だったと思いますね。そういう子どもが群れるという状況が今、なくなった。一番大きな原因は、少子になったということでしょう。もうひとつは、勉強、勉強ということがある。それからもうひとつはテレビ、あるいは電子ゲーム、そういう遊びの世界が全部室内に移った、そこのところが非常に大きいですね。

子どもが育っていくためには、家族というものが一番大事だ、と先ほど言いました。２番目にはですね、やはり学校。これは大事ですよね。学校が子どもを健全に育てるような機能を持つこと。それからもうひとつは地域が育てるということがありますね。地域社会が子どもを育てる。今でも田舎ではできていると思うんですけれども、都会ではもう地域が育てるということが本当に失われています。

もう一度考え直す3つの縁

こういう状況の中で、私は思うんですね。今、日本の社会が変わってきた大きな原因は、伝統的な社会構造が崩れたなというふうに思います。日本の伝統的な社会構造を組み立てている、３つ柱があったと思います。１つは血縁です。縁（えにし）という言葉を使うと、２つめは地縁です。３つ目は社縁ですね。この３つが日本の社会構造を支える伝統的な、あるいは土俗的といってもいいかもしれない構造だったと思います。この３つがガラガラガラッと急激に崩れていった。新しい社会構造の枠組みを作らなくてはならない。そういうときに来てると思います。

血縁というのは先ほど言ったように、私には45人もいとこがいますが、それはちょっと前まで普通だったわけです。しかし、１人っ子と１人っ子が結婚して、もし子どもが１人という場合、この子どもにとっては、お父さんとお母さんはいるでしょうけど、おじさんもおばさんもいない、いとこもいない。血縁的に非常に孤立した子になるわけでしょう。おじさんもおばさんもいとこも何もいない、父親と祖父母だけという血縁的に非常に孤立した子どもたちが今日本にいっぱいできているわけですね。それに変わるものをどう考えていくかという問題があります。

もうひとつは地縁、これは地域社会ですね。特に田舎では非常に大きな力を持っていた。しかし、だんだん田舎も都市化していく。それから個人主義が非常に発達する。これも悪いことではないんですけれども、地域が子どもを育てるという力が非常に薄まっていますね。昔だったら、まわりはどんな子どもがおって、誰がどんなうちのどんな子だったかみんな知ってたわけですね。よそのおじさんやおばさんにも、よく怒られたものですね。あるいは、非常に優しいおばさんもいた。あるいは、怖いおじさんもいた。「このガキー」と言って子どもを叱る人、もういなくなったでしょう。今うっかり、よその子を叱ったら「うちの子をどうして叱る権利があるんですか」って、ねじこまれたりするから、よその子には触らんように触らんようになっちゃうんですね。そういうふうに地域の温かい目が

なくなっています。

今思い出しますよ、私ら悪いことしてましたよ、子どものときはね。よその柿を盗むとかえんどうを食べに行くとかね。そういうことはしょっちゅうある。今だったら、すぐ盗んでる、という話になっちゃうんだけど、子どものいたずらですよね。そうすると怖い田舎のおじさんがおって、捕まえられて「このガキ」って、すごく怖かった。でも、目が優しかったですね、ほんとに。心は優しかったんですよね。つまりいたずらはいいけれど、度を過ぎちゃいかんぞ、悪いとこの方まで足を伸ばしちゃいかんぞ、そういう限度をみんな教えてくれました。親や兄弟ではなくて地域が育ててくれました。これは大事にしたいと思うんです。

もうひとつは社縁ということですね。日本というのは企業集団との付き合いが非常に強い。だからかつては、今でも多くはそうですけど、会社っていうのは大きな家族構造を持っていた。そしてその本人だけでなく家族も全部見てくれていたわけでしょう。そのために保養所もありですね、レクリエーションもあり、というふうに会社という自分の職業を通じての帰属集団の中での縁（えにし）が非常に強かった。ところが、不況が長く続くと、リストラなどがどんどん起こってくる。だから今、社縁の力はすごく弱くなっています。その中でどういうふうに壊れていったものを再生し、子どもを育てるかということが非常に大事ですね。ここのところはもう時間がなくなったので、みなさん何を変えていったらいいか、考えてほしいと思います。

私は例えば、社縁に変わるものに、友縁というものを考えたいと思います。これは友達付き合いです。サークルを作るとか、趣味倒れの付き合いとか、あるいは福祉を通して知り合った人とかね。ＹＭＣＡの集団とか、あるいはロータリーの集団とか。その中でのいろんなこう、友情を通じたこういう縁（えにし）、絆というものを新しく作っていく。その中でまた子どもを育てていくような強い力を持っていく、こういうことが大事じゃないかと思うんですね。こういうところを崩していく新しいものが必要だということを覚えておいてほしいと思います。

この、社会性の獲得ということはとても大事なことなのですが、余計なことをしゃべりすぎてしゃべる時間がありませんから、飛ばします。

深刻な自然離れ

私は自然との、外との自然との付き合いを、子どもにどうしてもこれから学ばせたいというふうに思います。

今、理科離れといわれます。しかし私は、自然離れがひどいなと思うんですね。兵庫県立南但馬自然学校が子どもと自然についていろいろな調査をやっています。フナの絵を描かせてるんですよね。小学校４年生にフナの絵を描かせる。金魚みたいなのが描ければいいんですよ。ところが、正解がわずか６％ですよ。全くヒレのないフナを描く子どももいます。それから怖いのが、イメージも湧かないという子がなんと46％もいるんですね。これがもっと怖いのは、神戸の子と、但馬の山奥の田舎の子と、ほとんどその割合が変わらないんですよ。田

舎の子だから自然をよく知っているかというと全然違う。それくらいね、自然離れしています。

これは2つ原因ありますね。それは1つは、野外で遊ばなくなったということが1つ、もう1つはね、コブナがいなくなってるんですよね。それが大きい。私たちの子どものころは田舎に行って、溝でも、田んぼの落ち口でも網ですくうと、イモリとかミズカマキリとかタイコウチとか、今でいう絶滅危惧種がいっぱいいて、それと一緒にコブナが入りましたね。メダカなんていっぱいいました。そういうのがいなくなった。

これはどうしていなくなったか。全部大人が子どもからそういうもの奪っちゃったんです。農薬が1番大きな原因です。それからまた、電子機械が発達して、子どもが密室にこもってしまうということがあります。

一方的な物との会話

私が怖いと思うのは、今回の対話、理解、寛容というテーマに関することですが、子どもたちは誰と対話しているのか、誰と会話しているのかということになると、私は物と会話していると思うんです。

つまり日本は、子どもを、大事にするから個室を与えるでしょう。つまり、勉強してほしいからですよ。子どもが個室を持ってるのは世界で日本が1番です。次は韓国ですね。韓国も勉強熱心です。で、そういうところ入っちゃうと、オーディオセットはみんな持ってるでしょう、漫画本は、山ほどあるでしょう。それからね、電子系のおもちゃあるでしょう。ゲームもある。場合によってはテレビだとかも持ってますね。つまり、それは物と会話するということです。ということは、会話というけれども一方的ですね。向こうから情報を与えられて、自分から能動的に話しかけることはない。そういうふうに非常に無機的な機械との会話が今、子どもの世界では非常に多くなっているというのはとても残念です。

自然の中で遊んで得るもの

私が自然と遊びましょうと呼びかけるのがどういうことかというと、自然は、草も木も小鳥も花も、みんな命を持ったものでしょう。自然と親しむということは、命があるものと会話しているということに他ならないと思います。

それからもう1つは、子ども同士が遊ぶということですね。しかし、子ども同士が遊ぶというのは、今非常に難しい。それは、やっぱり今の大人がそういう機会を子どもたちにどんどんどんどん積極的に作る場を与えていかなければならないと思います。子どもを少子にしたというのは、大人の責任ですから、子どもを育てるためにそういう場を与えて、いろんな機会をどんどんどんどん作っていく。例えばこの余島というすばらしいところ。ここはＹＭＣＡの方が、子どもたちのために、キャンプをしたりいろいろやってこられた。これはとってもすばらしいことです。でも、これ日本では少数派ですね。だから、こういうところをどんどん増やしていく、そんなことをやっていかなくてはならないと思います。

自然の中で遊んでいると、命の尊厳など

ということは自然に入ってくるものです。それから自然に触れることで大事なことは、美意識を養うということです。その自然と遊ぶことの大切さというのは、これはもうみなさんいろいろご存知でしょうから言いません。私がやっていることを1つだけ、後でスライドでお見せします。ただ、自然と親しむということがどれだけ大事か、いくら言ったって分かってくれない人が多いです。

ボルネオジャングルスクール

私は実験だ、ショック療法だ、というような形で、ボルネオジャングルスクールというのをやっているんです。子どもたちを（兵庫県在住に限る）一般公募しまして、小学校5年から高等学校3年までの男女26人、これにマレーシアの子どもが8人入ります。全部で34人。ボルネオのジャングルの中で自然体験をさせるんですね。そうすると、子どもはとても変わってくる。本当に変わるんですね。飛行機の都合があって、ボルネオまで行くのにちょっと面倒なものですから、たった8日間ですが、本当は、やはり半月くらいほしいですね。

しかし、いろんな費用の問題とかいろんなことがあって8日間しかできないんですが、子どもは変わりましたか、って、後で親のアンケート取ると、みんな変わったと書いてるんですね。こんな人がありました。関空に迎えに行って、子どもを見た途端にもう前と変わったと思ったと。で、一番多いのは、たくましくなった。それから自然が非常に好きになった、子どもにすごく話しやすくなったなど。

私どもがとてもうれしかったのは、ある親がこんなことを言っていました。家ではとにかくしゃべらない子だったらしいですね。電子ゲームなんかにこっている。ところが帰ったら、ものすごい異様な体験してくるわけでしょう。島から帰ったらしゃべってしゃべって、それでお昼ご飯もろくに食べずにしゃべりまわって、それで疲れ果てて大方2日寝てしまったというんですね。お母さんはものすごく満足。あんなに子どもがしゃべってくれたなんて初めてというわけ。もともとは、人間というのはしゃべりたい動物なんですよ。しかし、何がしゃべらさないようにしているか、ということを考えてみなければいけない。

私は子どもたちを見てて、ジャングルスクールをやってみて思ったのは、どうも日本の子どもというのは、いろんな要因で、抑圧されている、非常に管理されているな、そういうことを本当に感じました。抑圧から解放してやりたいと思います。

地球温暖化と熱帯雨林の伐採

ジャングルスクールのスライドをお見せしますが、初めに、熱帯雨林に関することを少しお話しします。

今地球温暖化の問題で一番大きな問題になっているのは熱帯雨林の伐採です。これは今、毎年だいたい1,100万ha、あるいは多いときは1,500万haくらいの熱帯雨林が伐採されています。まだ止まってないんですよ。1,100万haというとピンとこないと思いますけれども、オランダとベルギーとデンマークの本土と合わしたのがだいたい1,100万haくらい。このくらいの面積の熱帯雨林が今

切られています。これが地球温暖化に非常に大きな問題を起こしています。熱帯雨林の損失というのは、今言った地球温暖化に関して非常によくいわれます。森というのは炭酸ガスをどんどん呼吸しますね。このあいだの京都の炭酸ガスの削減の問題、これはアメリカが批准しないものだからなかなか炭酸ガスの削減がスムーズにいかないですけれども、森がずいぶん炭酸ガスを吸収してくれます。

熱帯雨林の問題は地球温暖化を中心に話されるんですが、他にも非常に大事なことがいくつかあります。地球温暖化の問題が１つですね、２つめは今、生物多様性条約というのが締結されたのをご存知でしょうか。非常にたくさんの生物が今、地球上に住んでいます。これは長い進化の歴史を経て、今ここにいろんな生物が地球上に住んでるわけです。

地球が誕生したのはいつごろでしょう。何だって誕生って必要なんですよね。宇宙が誕生したのは、だいたい150億年前といわれます。ところがこれもいろいろ研究が進んで、ずっと150億年前といわれていたんけど、実はもうちょっと短いらしい。どうも130億年前くらいじゃないかという説が今強くなっています。とにかくすごい昔。その中で地球が誕生するのが46億年前ですね。そのころは火だるま地球ですよね。それがだんだん冷えてきて、そして生物が誕生する。それが36億年前です。だから、地球の生物の歴史というと、36億年くらいの歴史があるわけ。その中にはもちろんいろんなことありましたよ。氷河期なんていうのもありました。それから今の大陸――、オーストラリアとか北南米、アフリカ、ユーラシアなどは、昔は一緒にくっついていて大きな大陸を作っていた。

それが大陸移動でどんどん分かれて、今みたいになっているわけです。そういう長い地球の歴史の中で、いろんな生物が地球上に生まれてきました。そのいろんな生物の相互作用の中で、こういう安定した地球ができているわけですね。だいたい平均温度が地球全体で15度ぐらいです。それから空気の組成でも非常にうまくできているんですよ。この空気のこの成分って知っていますか。何が一番多いでしょう。窒素一番多い。それから次が、酸素です。窒素と酸素で大方地球の空気の成分が大方満杯になりますが、空気の成分が21％くらいです。たったちょっと増えたくらいと思うけれども大変ですよ。それこそ山火事がいっぱいいっぱい起こってきますよ。非常に安定した空気の組成です。そのようなところで生物も、われわれも生きている。

それから、炭酸ガスが問題になっているでしょう、炭酸ガスというのは空気の組成の中で考えると、ほんとにわずかなんですよ。どのぐらいかというと、0.034％です。炭酸ガスってね、これだけしかないんですよ。それが、今0.036％になりまして、地球温暖化が始まりかけているというわけ。これが、0.04になりましたらかなり大変です。地球のさまざまな変化の中で、生物がみんなうまく生きているように、36億年かかって生物の世界作ってきたのです。その中で非常にたくさんの生物が、どう関連しているのか。これだけ科学が発達してるのにほとんど分かってなません。

熱帯雨林は宝の山

今、地球上にどのくらい生物がいるか。今分かってるのがだいたい150万種類ですね、150万！これは、バクテリアもアメーバも昆虫も鳥もみんな入れて約150万種。しかし、未知のものいっぱいいるでしょう。だから、倍はおるだろう、多く見て3倍くらいいるんじゃないか、と生物学者は予想していた。ところがとんでもない。熱帯雨林の研究が始まりました。そうすると、熱帯雨林だけでおそらく3,000万種類くらいおるということが分かってきたんですね。ものすごい数ですよ。人によっては、熱帯雨林だけで5,000万種類の生物の種類がおるだろうと。そういうことが分かってきたんです。だから、熱帯雨林にいる生物のうちのほとんどが未知なんです。新種、新種といってすぐ喜ぶでしょう、熱帯雨林、行ったら、大方が新種なんですよ。どういうものがいるのか、もちろん分からない。だから、生物を多様性の中で、熱帯雨林は特別な世界なんですね。熱帯雨林をどんどん切っていくと、それらは全部消えていくでしょう。何が消えていくのか分からない。36億年かかってきたそういう生物の進化の歴史を、人間という動物が壊してしまう。それは断じて許されることではありません。

それからもう1つ。これは今、実は日本が1番遅れていることです。というのは、熱帯雨林というのは、これは有用ないろんな成分を持った生物の宝物だということですね。例えば、熱帯雨林の植物は、大方常緑の木ですね、そのそのうち約70%くらいはアルカロイドを持っているらしい。熱帯雨林はいわば毒物の世界なんです。そういうことが最近分かってきた。

これは実は、サルの研究から分かってきたんです。サルが何を食べているかということを丹念に調べてみる。どうしても食べないものがいっぱい出てくる。それから、サルの食べ方がおもしろいんです。ものすごく贅沢な食べ方をする。サルたちは小枝を折って食べる。枝を折ったら、葉っぱがいっぱいついてるでしょう。ちょこちょこっと食べたらもう捨てている。僕らは初め、なんてサルって贅沢なんだろうと思っていたのです。もうちょっと食べたらいいのにと思って。なぜかというと多くの葉は毒があるんです。たくさん毒を食べたら悪いがちょっと食べると大丈夫なことが多い。だから、いろんなものをちょこちょこつまみ食いするという食べ方をするわけ。

けれど、考えてごらん、毒物って何ですか。今医学が発達して薬をいっぱい作っていますが、薬というのは大方が毒物じゃないですか。使い過ぎたら、危険。薬っていうのはそういうものです。毒をもって毒を制す、というのが薬です。だから、熱帯雨林のいろんな毒を持った植物は、何に使えるか分からない。

それで今や世界中の国が、熱帯雨林の未知の成分を巡って競争です。アメリカなんかすごいですよ。アメリカは例えば同じ製薬会社でもものすごく大きいでしょう、メルクなんていうのは、例えば、中米のコスタリカとかと契約結んで、そのかわり膨大な金をボーンとやるわけですね。熱帯雨林から抽出されたいろんな有用成分はお互いに分かちあいましょう、そういうことをや

っているわけです。

今は、こういう考え方があります。途上国、途上国というけれども、これは資源を持っている。だから、資源保有国。先進国はどうでしょう、だいたい北にあります。そして、資源のかわりに高度な文明の技術を持ってます。だから、資源利用国。資源利用国と資源保有国が非常に大きな対立をしているのが現状です。途上国は、宝をいっぱい持っている。それをどうやって使っていいかがわからない。一方、先進国はそれをちゃんと分析する力はあるけれども、資源がない。そこで、資源保有国と利用国の調整が必要です。日本は今のところ駄目なほうですよ。私は実は、通産省の依頼を受けてこの問題に取り組んできたこともありますけども、難しい問題ですね。

ですから、熱帯雨林というのは、そういう未知の有用な成分をいっぱい持った宝の森なんです。それをどんどん切ってしまえば、宝の山をつぶしてしまうことになる。

それからもう１つの大事なことがある。それは、人間はサルから進化したということです。だから、われわれの一番のふるさとは、熱帯雨林なんですよ。熱帯雨林を潰すということは、われわれのふるさとを壊すことになります。それはどういうことか。自分のほんとの心のふるさとを壊すということでもあります。だから、熱帯雨林の消失ということは、いろんな重要な問題を抱えているということ、それは地球温暖化の問題だけじゃないということを考えてください。

スライドで観る熱帯雨林の生命力と子どもたち

《スライド上映》：写真を見ての説明なので、省略します。

アドバイザー深川 純一

では、今からB班の人に発表してもらいます。発表が終わって、意見の意味の分からないことがありましたら質問してください。そういうことがある場合がありますから。中身の質問については、後で全体のフォーラムでやりますからね。中身の質問については控えてください。意味不明のものがあった場合だけです。

では、よろしくどうぞ。

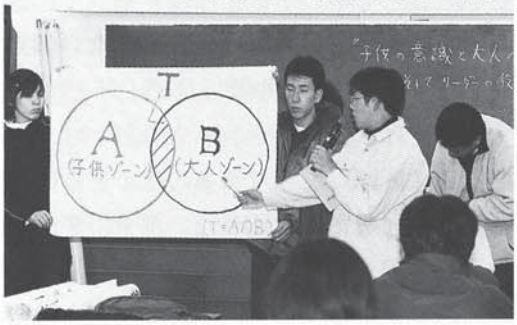
バズセッション報告

B　班

では、今からB班の発表をさせていただきます。B班ですけれども、テーマ「大人の意識と子どもの意識、そしてリーダーの役割」ということでですね、今から10分程度でB班の方ですね、考えた内容について発表させていただきたいと思いますので、どうぞご清聴ください。お願いいたします。

まず最初に、図形を示したいと思います。こちらの方ご覧ください。この図では、私たちと、子どもの意識と大人の意識というものについて考えています。そのときにどうしても出てくる面、子どもの部分、大人の部分というのと、交わる部分というのが必ず出てくると考えました。これはどういうことかというと、通常ならば年齢などで割り切れるのかもしれませんけれども、それはあくまで制度上のものであって、性質、特にこういう意識という面は割り切れないという考え方をしました。そこでAということで仮に子どもゾーンとしておきます。Bの方が仮に大人ゾーンとしておきます。そして、ここがポイントなんですけれども、AとBの接する、T＝AキャップB、このTの部分を仮にトワイライトゾーンとして、ここを今から説明していきたいと思います。

主催：R.I. 第2680地区・R.I.第2670地区・RYLA



この図にしたがって説明していきたいと思います。まずAゾーン、これが子どもの意識ということになります。子どもの意識はどんなものがあるかというと、保護された存在である、すぐに泣きわめく、大人をよく見ている、計画性がない、歯止めがきかない、理性がない、そのわりに一生懸命

である、学習能力がある、適応能力があり、上下関係が薄い、他人よりも自分の欲求を優先させて、世慣れしていない。これが子どもの意識ということでAゾーンとさせていただきます。

次にBゾーン、あちらの表、図をちょっと見ていただきたいんですけれども、Bのこの部分を示しております。Aゾーンでも今説明しましたのはこの部分です。次に説明するBゾーンというのは、仮にここの共通部分を除いた部分と考えてください。こちらの方なんですけれどもBゾーンとして、これは、大人の意識、性質です。仕事を持っている、稼ぐという意識がある、ずるい、うそつき、汚れているという側面もある、そして打算もある。これは長所でもあり短所でもあると思っております。先のことを考える、あと責任能力があるというのは大人の性質であります。自我を知っている、相手のことをとりあえず考える能力があるということです。そして加減を知っているという、加減というのはやりすぎない加減を知っている、これを仮にBゾーンとして、大人の性質ということで書いています。

そこで問題になってくるのは、どうしても人間にとって割り切れない部分、T、トワイライトという言葉を使いました。ここの部分です。これはどういうことかというと、大人にも子どもにも見られる性質という形で、割り切れないところと定義しました。それはどういう点かというと、意思表示ができる、一応これは長所とか短所ではなくて、意思表示ができるというのは、自分のやりたいことを的確に表現できるというのは、意思があり、何かやりたいと思うことを表現ができるということです。

それで、自分の未熟さを知らないというのはとかく子どもだけに考えがちなんですけれども、そうではないと思います。よく近所の方、もっと言ったら自分自身を見ていただいたら分かると思うんですけれども、いつの間にか自分ができるということを思い込んでいてですね、自分の未熟さに気づかない。これは、まあ、大人も子どもも一緒だと思いまして、Tゾーンに入れました。

そして、キレるという言葉は最近の言葉になってしまうんですけれども、これも子どもだけとすぐ思いがちですが、今話題になっている議員さんもこんな感じですぐキレたらしいですので、これもマイナスの面で一応大人も子どももということで、Tゾーンに入れておきます。

場の空気を読めない。こういう人はいますね。多分、大人になっても一緒だと思います。突拍子もないことポンと言って、こう、場がパッと冷めてしまう人、そういうのを仮定しています。

あと、しつこい。大人、子ども関係ありません。しつこい人はしつこいです。これも、Tゾーンとしておきます。

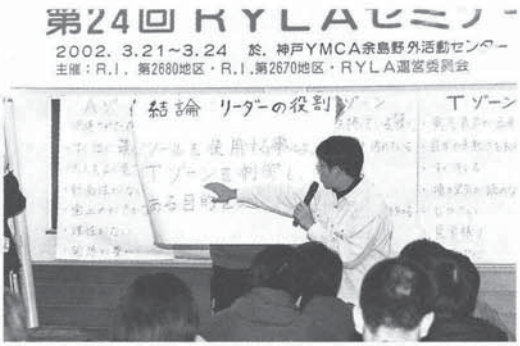
見栄っ張り。見栄っ張りっていうのもこれはもう大人にやや強いかもしれないけれども、子どももこれ見て、これ見てとか、この服いいでしょとか絶対言ってきます。

で、自己中心。これが一番厄介になってくると思うんですけれども、これはその、生物というか人間の本性ではあると思うんです。自分をどうしても保ちたい、自分を中心に考えたいという。でもこれもやっぱ

りいい面でもありつつやはり厄介な面であるということで、短所としてTゾーンにしています。

今までは何を説明したかというと大人の意識と子どもの意識というのを説明しました。そこで、大人の意識、子どもの意識の中にトワイライトゾーンという共通項の、まあどちらかというと比較的マイナス面があるという説明をしました。

そこで次に私たちが考えたのは、リーダーの役割というのは何かということです。子どもゾーンと大人ゾーン、共通するこの人類普遍ともいえる、この欲求を解消する人がリーダーじゃないんだろうかと。これを制御していく人がリーダーではないだろうかという結論になりました。



このTゾーンを克服していくためのツールとしてリーダーに必要なものというのが、頼れる信頼、寛容性、これは全てをカバーしてくれるというのは分かっていただけると思います。もっと言うとサポートする、よいところを認められる人であると。これによって、自分で未熟さを知らない人やすぐキレる人にでも、まあまあ、もうちょっと考えてみ、などと言えると思います。

あと、どの年齢の人にも対応できる。これはあの、大人、子どもと考えたときに聞いた結果です。仕事するうえでも考えられることだと思うんですけれども、どうしても仕事の関係上、年上の方とお仕事させてもらったり、どうしてもヘッドが年下の者になった場合に、それでもやっぱり歳上の人にも一応指示を与えていかなくてはならない。そのことを軋轢なくこなしていくということがリーダーに必要なツールだと思います。

3番目は、計画と安全性。責任を果たすと。このどちらかというと自己中心型になりがちな人間に対して、計画と安全性、責任を果たすことによってものを進めていく、段取りを進めていく能力が一番その、必要なツールになってくると思います。

あと、感動を与えられる。これは何かというと、これはもう全てに対してと言っていただいてもいいかと思うんですけれども、感動を与えられない人間というのは、人は付いて来ないと思います。感動を与えることによって、まずリーダーとしての、というよりもこの人に付いて行こうという気は与えられると思います。そこで、ツールとして感動を与えられる能力。

最後ですね。考えさせ、見守り、可能性を引き出す。これは非常に難しいことだと思うんですけれども、こういう例えば場の空気を読めない子は、「何で君が言ったときにしらけたか考えてみようね、」と言って考えさせるとか、いつもこう、「いや、そんなんしらけたるなよ」と言うのではなくて、君が言ったのもちょっと問題ちゃうかと何気なく気づかせる。あと、見守ることですね。見栄っ張りの子でも、すぐキレル子でも、ちょっとキレさせといて、みん

ながどういう反応をするかというのを見守る。そしてその中から人の可能性を引き出してくるというのが、リーダーだけということではないですけれども、このトワイライトゾーンを補うために必要なツール、これはどうしても必要になってくると思います。

以下の説明から結論としてB班が導き出したのは、大人の性質、子どもの性質、それに対してあの、重なってくるトワイライトゾーンという、人間普遍の弱点があり、リーダーのツールを駆使することによってTゾーン、トワイライトゾーンを制御して、ある目的、これがどういうものかは分かりません、それは仕事であり、もしくはキャンプであり、もっと言ったら国家の構築かもしれません、そういうある目的を達成すること、これがリーダーの、ある種最低限ですけれども最も必要な役割であるということです。

これでB班の説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

深川　ありがとうございました。今のご説明でちょっと確認をしておきたいところがもしあればご質問ください。もうだいたい全部分かったと思いますけれども、ありませんか。それでは結構です。ありがとうございました。

では次はA班、お願いいたします。

A　班

A班では、子どもとは何か、大人とは何かということを考えたときに具体的な話が多く出たので、重要だと思われる項目についてこのようなグラフを作りました。

グラフの項目はこの8個で、ここの個と集団については、例えばサッカーの試合があるとかいうときに気分が乗らないから今日は休みますと、今の子どもだとそういうことが有り得るかもしれないということで、今の子ども、ピンク色のここの方を(図)、優先しました。昔の子どもでは、集団を大事にするという感じで、熱があってもとりあえず行って、そのまま出ましょうというところが主だったように思います。

次に主観と客観のところで、大人の方は、主観が少なめで、主観は感情的とか、自分のことしか考えないということにしたので、子どもの目盛りが少なめなのは子どもの社会は実際の社会全体に比べて小さいから目盛りが少なくなっています。大人は自分のことを客観的に見るというか、一歩引いて自分をどのようにしているかを見るということで、目盛りを大きくしています。ただ今の大人の場合、現在20～40代くらいの大人だと、主観というか、自分のことしか考えないという面もあるかもしれないと

いうことで、目盛りは真ん中になっています。

責任感のあるなしですが、これは見たままで判断してもらえればいいと思います。自立と依存については、自律は自己を律するということで、自己管理ができるかということで、経済的自立も含めて考えるという方向で書きました。

自然と機械かは、ちょっと分かりにくいと思うんですけど、例えば遊びだと今は家の中に閉じこもってゲームとか、そういうことが多くなっていると思います。昔はそういうものもあまりなかったので、晴れた日は外に出て山に行って遊ぼうとか、川で泳ごうとか、そういうことがよくあったように思います。

マナーのあるなしですけど、これもそのまま、今の子どもはないように思うとか、その程度でいっています。

積極性なんですけど、消極的な子どもが増えたかな、と。今の大人にしても消極的、ということで少なくつけています。

情報量は昨日の講義でやったように、グローバルな情報が手に入ると。そういうことで、今の（子どもと大人）はどちらも多めに取っていて、昔の（子どもと大人）は手に入る情報量が全体的に少なかったということで、少なくしました。

昔の子どもについて説明をしてなかったんですけど、昔の子どもというのは自分らが子どもだったころ、その辺りを考えて、それから今の大人というのは自分らを含めて、ということです。

今から個と集団について詳しく説明をします。集団と個ということなんですけど、昔の大人、今の大人っていうのはここにあるように、昔の大人っていうのは集団の中で、昔の大人の子どもの時代っていうのも集団の中で育ってきている。今の大人というのはどちらかというと個に近くなってきて核家族とかいろいろあるんですけど個に近づいてきている。その個に近づいてきている大人に育てられた子どもは、さらに個に近づいてきています。それに大きく影響するのが、生活環境の変化と情報の流れというものがあると思います。

この情報の流れ、生活環境の変化には例えば少子化や、１人部屋にテレビがあったり、遊び方が家の中でファミコンしたり、外に出るということが少なくなって、自然離れといわれる現象が起こったりしていること、あとは携帯電話が普及して、昔だったら親を通して子どもに伝えるっていう話を、時間とか関係なくいつでも直接つなげられる、親も管理しきれないような状態になっていることが挙げられます。それがいいのか悪いのかは分からないですけれども、今の子どもたちは、完全に個人という、集団の中で生活していない状態になっているわけです。

そこで、どういうリーダーが必要とされるかですが、すでに個としてそのまま育っているので、個と個を線でつなぎ、そのまたグループ、今度はこの全体を作るグループを作れるリーダー、個をまとめられるリーダーというのが今から必要になってくるという結論に達しました。以上です。

深川　ありがとうございました。今ご説明いただきましたが、もし分かりにくい点がありましたらご質問ください。

――バロメーター２つありますけれども、これ必ずしも外部にいくほど優れているというニュアンスでは書かれていないわけなんですか。

A班　この、優れている、優れていないというよりも、対比というか、内部にいけばいくほど個人の生活、プライベートを重視する人であったり、外にいけばいくほど集団生活を経験した方であったり、その情報というのを、インターネットを使われる方であったり、普通の家の電話を使われる方であったり、そういう意味です。

深川　量の問題ですか。量を比較したんですね。

A班　そうですね。はい。

深川　他におられますか。はい。どうぞ。

――この２つグラフがあるんですけれども、それぞれ、目盛りがあるんですけれども、その評価は両方同時にやっているのかと。例えばマナーのところを見たら、今の子どもよりも昔の子どもの方がマナーがあるというふうに評価されているんですけれども、それは同時に評価しているのか、分けて評価をしているのか。

A班　これはあの、適当と言うと語弊があるんですけど、いろいろと話し合った結果、自分はどうであるかとかその辺を考えて決定したものです。評価したときは、例えば客観については並べて今の子どもは何点で、昔の子どもは何点でっていう感じで、そのとき一気に出しています。一緒で出したものなので、だいたいどんなものかという感じですね。

このカラーレーザーはみんなでA班の人でこの８項目、まあ、最初はもっとたくさんの項目があったんですけれども、主な意識としてこの８項目を取り上げました。例えばこの積極性とかやる気、あるかどうかということについて点数を５段階に分けて点数を１点、２点、３点、４点、５点のように分けて、そしてその消極性は1点とみて、積極性のあるほうは５点とみて、今の子どもは消極性、１点と設定して、そしてその評価のうえ、昔の子どもは積極性、やる気があるかどうか全体的に評価してから点数をつけて、その点数に基づいてこのグラフを形成したんです。いいですか。

深川　分かりましたか。今の説明で。

A班　全部私たちの意見であることは変わりはないんですが、このグラフを作成するにあたって、私たちの中でもずいぶん意見が分かれました。あと２～３付け加えさせていただくとすると、1つはその、５段階っていう形で点数評価するようになっているんですが、特に５だからいいというような評価は私たちの中ではしていません。また、話したときに、赤であるよりも青で書いている外側の方が、私たちの考える中での、大人が持っている性質っていうのにより近いものではないかと、できるだけそういう形で配置を決めました。

それぞれの評価というのが、この１つのこれとこれが同じ価値を持っているのか否かということなんですが、同じところもあれば違うところもあって、特に私たちの中でも違うねっていったのが客観性と集団性のところなんですが、特に子どもというのは、自分たちの見えるところが自分たちの世界っていう感覚があるので、やっぱり大人の捉える集団とか客観性というのと、子

どもが子どもとして能力を発揮できる客観性であったり捉えている集団っていうのはもともと枠の大きさが違うと考えました。特にこの２つに関しては子どもでいう集団とか客観性というのは、大人でいう集団とか客観性よりもより狭義の意味での定義になっているので、あくまでも昔の子どもと今の子どもとの比較っていう形でこちらの方は作られています。よろしいでしょうか。

深川　こちらから１つ質問があります。

――あの、子どもと大人の境目というのはどのように設定しているんですか。

A班　今のご質問は私たちが捉えている子どもと大人の境目、歳で言うと、というよりは子どもというのは私たちから見た子ども、昔の子どもっていうのは、私たちが子どもの時、小学校のときとか中学校のときを指しているので、昔の子どもの定義が私たちの中ではそうだったので、自然に今の子どももやっぱり小学生や中学生を設定して、自然に暗黙の了解で話していました。昔の大人というのは昔の子どもだった私たちを育ててくれた世代の大人のことを指しています。今の大人というのが結構微妙なラインで、私たちも社会の中では大人っていうような域に入って、例えば、今日「ボルネオに行きたいね」と河合先生に言っていたときに、「君たちは子どもじゃないからもう駄目だよ」というふうに言われたんですけれども、そういうところからも分かるように、私たちはやはり大人という世代に入っているので、私たちの世代から子育てをしている40代くらいまでの、比較的若い世代の人たちを今の大人というふうに定義づけをしました。

深川　このＲＹＬＡの受講生たちはどちらに入りますか。

A班　今の大人であるというふうに考えています。

深川　あの、大人と子どもの年齢は、スパッと今と昔に関係なく分けることはできないんですね。今の子どもは何歳くらい、昔の子どもは何歳くらいということですか。おそらく質問者はその辺のところを聞きたいんだと思う。

A班　子どもに関して言うと、小中学生という捉え方をしています。大人に関しては20代から40代くらい、小中学生の親という感覚で話をしていましたが、特に私たちの中では何歳から何歳までにしようという制限はしませんでした。

深川　あの、60歳以上はもう入らないんですか。

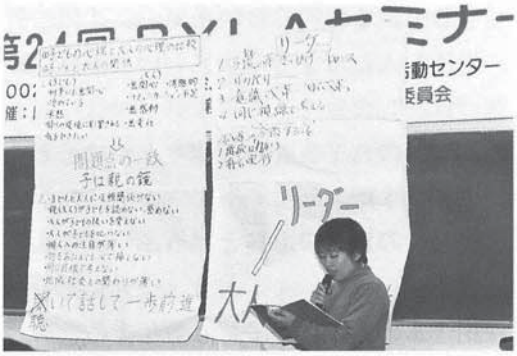
A班　成熟された大人の方はちょっと…。

深川　まあ、だいたい分かったようですから結構です。他にご質問あったらしてください。特になければ次に移ります。ありがとうございました。次はD班です。お願いいたします。

D　班

では、D班の発表を始めさせていただきます。D班ではまず、子どもの意識、大人の意識について、上の赤い枠で囲んだ２つの視点からまず考えてみました。そしてそ

こから、リーダーの役割とは何かを考えてみました。



ではまず、赤の枠の中をご覧ください。まず1つ目、子どもの心理と大人の心理の比較、2つ目子どもと大人の関係、この2つの視点から考えてみたんですけれども、まず、一番上の子どもの心理と大人の心理の比較について、話したいと思います。後ろの方は見えますでしょうか。

この、子どもの心理と大人の心理なんですけれども、問題点について考えてみました。あくまで子ども全員大人全員がそうなのではなくて、以下のように考えがちではないかという項目を挙げてみましたので、その辺を理解いただいたうえでご覧ください。

まず子どもについてですが、何事にも無関心、冷めている、未熟、周りの環境に影響されやすい、気を引きたがる。大人についてですが、無関心である、消極的である、コミュニケーション不足である、無感動である、無責任である。それぞれでこういうことが挙がりました。私たちはこの2つを見て、何かよく似ていることに気づきまして、問題点が一致しているというところから、子は親の鏡ということに気づきました。

では続いて、子どもと大人の関係について話したいと思います。子どもと大人に信頼関係がない。例えば、私もですけれども、父親や母親にも大事なことをあまり伝える機会がないというか、伝えようとしない。こちらが一方的に、話したことに対して何か怒られるんじゃないかな、と解釈している部分があるのかもしれませんが、信頼関係が薄いように思います。

次に、親（大人）が子どもを認めない、誉めない。子どもがいいことをしてもなかなかそれをいいことだと認めようとせず、またテストで頑張って80点取っても「80点、よくやったね」って誉めることがなくて、「100点じゃないの、もっと頑張らないと」というように次の期待をかけてしまう。

大人が子どもの扱いを変えない。いつまでたっても子ども扱い。小学生のときと変わらず、中学生になっても扱いを変えないで、大人になったっていうのを認めない、子どものままの扱いをいつまでも変えないということです。

大人が子どもを叱らない。私の友達もですけど、お父さんが子どもの叱り方を分からないんですよね。どうやって叱っていいかが分からなくて、子どもが完璧にお父さんのことをなめて、言うことを聞かなくなっています。親子関係だけではなくて地域関係でも、隣のおばさんに怒られることもなくなってきているように思います。

次に、個人への注目が薄い。高校生なら高校生という1つのグループでしか見てなくて1人1人の個人を尊重していない。その子その子のいいところを見ていないという気がします。

次に、物を与えても、心で接していない。

物を与えていれば子どもは満足をする。お金を与えて自分の好きなようにしなさい、と、結局は物だけで解決しようとしていて、心が通じていないように思います。

次に、同じ目線で考えない。子どもを自分よりも下の者だとして扱っていて、いつも上からの高い目線から子どもを見ていると思います。

地域社会との関わりか薄い。先ほどの大人が子どもを叱らない、にも関係してくると思いますが、地域との隣関係、何をしているかも分からないというのもあって、どこの子どもさんかも分からない。どうしていいのかも分からないというふうに、地域社会との関係が薄いように思います。

1と2を足してそこから、「聞いて話して一歩前進」っていうふうに、課題というか自分たちもそうしようと思いまして書きました。

続いて、リーダーの役割について考えたんですけれども、1番、子どもの芽。やはり子どもは、ものすごく可能性を秘めていると思います。1人1人の子どもをよく注目してあげたら、1人1人がいろんな個性を持ってて、いろんな可能性を秘めている。もちろん大人がそれをやってあげたらいいと思うんですけれども、その子どもの芽、希望、可能性の芽を大切に育ててあげるっていうことがものすごく大切かなあ、と思われて。そのきっかけ、チャンスというのを積極的にリーダーの立場としてみなさんに与えていきたいと思います。

リカバリー、英語なんですけれども、回復する。子どもがどこか悪い道にそれようとする、例えば非行に走るというのがありますよね。それを、「そっちに行ったらあかんで」と、まともに生きようやというふうに声をかけてあげられる、近い立場で考えてあげる。リーダーはそういうことができると思います。

また、今までに出たいろいろな問題点は表立って顕著に行動に表れてしまいますけれども、それをどうやって直そうかとなったときに、やはりそれは心の中の問題、意識の問題だと思います。その意識を正してもっといい方向に近づいていきましょうという形で意識改革をする。リーダー自身も自己改革し、自分の意識、考えというのを改めながら前に進んでいく前向きな姿勢をまとめて、こちらに挙げさせていただきました。

4。同じ目線で考える。世の中には上下関係がたくさんあります。学校で言えば先輩後輩、会社でもそういう形のことがあると思います。しかし、例えば小さい子に、「おう、こんにちは」と上から物を言うのではなく、ちょっとしゃがんであげて、「こんにちは」って言ってあげた方が、心が近づくと思うんですね。で、親身になって考えてあげる。いろんな形で近くに、体だけでなく心も近くに。目線、目で物を言うこともできますよね。言葉だけではなく、優しい目をすれば、向こうも分かってくれます。例えば異国の人と話すときに、目で語れるということもあると思います。近い立場で優しい気持ちで接して考えていくというのは大切ではないかということです。これだけしか短い時間で上がってないんですけれども、リーダーの役割はこういうものがあるのではないか、という形でまとめ

ました。

やはり今回ＲＹＬＡに集まって、ここでいろんな情報、いろんな人の考えというのを吸収して、前に進んでいくじゃないですか。ただＲＹＬＡでここで気持ちが改まって、よしっ、じゃあこれからも頑張っていこう、頑張って今までここで聞いている考えを継続させていこうと思っても、もしその後が続かなければ意味がありません。継続は力なり。今考えていることを継続して実行に移そうとするのは、大変難しいことだと思うんですね。何事もポジティブに、前向きに考えていかないといけないということで、結論はないんですけれども、どれからどうしていこうっていう形で、継続は力なりというのと、有言実行、今ここの場にいて発表したこと、考えたこと、思ったことというのをまた帰ってからもそれを実行し、続けていく。とても難しいことだと思いますが、前向きに考えるということで、こういう形にさせてもらいました。

リーダー、大人、子ども、この最後の表なんですけれどもリーダーが一番えらいという意味で上に書いているわけではありません。全部平等で、ここを繋ぐこの線というのはコミュニケーションです。話すことは大切ですが、話すだけではなく、聞く。聞いて話して一歩前進。聞くこともコミュニケーションの１つです。そこでまた、話して自分の考えを伝えるというのも大切なコミュニケーションの１つです。その２つがあって、コミュニケーションが成り立ちます。親子関係であったり、地域との関係であったり、人と人を繋ぐのって気持ちと言葉、コミュニケーションですね。それが全体的に、社会的に薄れていると思われます。

この、ここの３つ、大人と子どもの関係で、どちらにも割って入れる中間的な立場、子どもにも同じ目線で考えて、意見を言える。また、大人に対しても同じ目線で物を言って考えていける。子どもも大人も大きいか小さいかだけであって、ただの同じ人間です。リーダーも人間ですし、そういう区分をするのではなく、もっと本当に近くに、お互いが、１人１人が、僕ら全員みんなでくっついて、いろんな形で前に進んで行けたらという形で、お話をさせてもらいました。ありがとうございます。

深川　ありがとうございました。今のご説明で何か分からないとことか、確認しときたいご質問があったらおっしゃってください。

Ｄ班　なければこれで終わらせてもらいます。以上です。

深川　それでは最後、Ｃ班です。

Ｃ　班

Ｃ班は大人と子どもの常識の比較について考えてみました。まず、子どもの特徴について、簡単に話していきたいと思います。

まず、経験が浅いということがあります。良い面を言えば、先入観にとらわれない発想かできる、ということがあります。それから悪い面を言えば、大人に比べて工夫ができない、といったことがあります。

次に、自分の存在を周りの人に認めてもらいたい。言い換えますと興味を持ってもらいたいと思っています。それについて子どもがどういうことをするかといいますと、必ずしもそうとはいえないんですけど、いたずらをしてみたり、反抗したります。それからいたずらや反抗したりするばかりではなくて、楽しんだこと、頑張ったことを誉めてもらいたいといったことがあります。

それから、興味を持っていることはするが、持っていないことはしない。といったことがあります。

次は大人について説明していきたいと思います。大人は経験があるという意見が、さっき出ました。経験があるということには悪い面と良い面があって、悪い面は自分の経験に基づいて判断するということです。この経験に頼りすぎると、子どもに対して自分の都合の悪いことがあれば力で押さえようともすることもあるし、知らないことを知らないと言えない、つまり見栄を張るということが出てくると思います。そして、良い面ですけれども、良い面は、広い視野で物事を見ることができるということが出ました。

そこで、経験が浅い子どもに経験をさせて、どんどん大人にさせていくというのがリーダーの役割なのではないかと考えました。

そして経験をさせていくためにはまず、興味をもってもらうためのきっかけ作りが大切です。これをするためにどうすればいいかと具体的な案を考えたところ、感動を共有できる、相手を認めてあげるということがまず必要ではないかと思いました。次に自分で気づかせる、自発性を養わせるということが大事だと考えました。これには、後々のアフターケアーなども必要であると思います。

そして最後に、適切な助言を与えられること。リーダーが興味を持ってもらうきっかけ作りをして適切な助言をすることで、経験が浅い子どもにどんどん経験をしてもらう場を与えることができると思います。

次に、みんなが話せる場作り、つまりコミュニケーションの能力の発育を促すための能力です。コミュニケーション能力、コミュニケーションをする場を作る。そのためには我を通すのではなく、歩み寄ること、これが大事だと思います。そのためにリーダーは、みんなの話を聞いて、それをうまくまとめていくことが必要かと思います。そして、リーダーとしていろいろな物事に、関心を持ち続けることが大事だと思います。情報交換の場を作り、そのような場に参加していくことで、リーダーとしての能力が養われるんじゃないか。また、自分の興味の幅を広げることによって、リーダーとして理想のリーダー像みたいなものに近づいていけるのではないかと考えました。

最後に、相手の目線の高さに合わせて話せる。先ほども上から話していくのではな

く、やはり同じ高さで、同じレベルで話していくことによって、よりこういった3つのことに、より相手を認めてあげることができ、リーダーとしてどんどん経験を積ませるように、興味を持たせることができるのではないかと思いました。以上です。

深川　ありがとうございました。今の説明の中で、確認しておきたいことがあったらおっしゃってください。ありませんか。

大人と子どもを分ける基準は、先ほどの説明でいいんですか。小中学生とそれから20歳以上という形でいいんですか。

C班　子どもっていうのが経験が浅い人、つまり30〜40歳の人でも経験が浅い人は子どもの心を持っているということですね。

深川　経験が浅い、深いで子どもと大人を分けるわけですね。

他にありますか、みなさん。なければこれで結構です。ありがとうございました。

フォーラム

深川　それでは今から、ディスカッションを始めたいと思いますが、みなさん方からご意見を伺いました。いろんな意見があろうかと思います。そして、これからフォーラムに参加される、フロアのみなさん方も、今出てきた意見を見ながら、自分はこの点についてはこう思っているとか、例えばD班の意見について自分は反対だとか、A班の意見について反対だとか、例えばそういう、自分が思っている、出てきた意見と違う意見があったらまずお出しいただきたいと思います。ございますか、何か。もしなければ私の方から何か問題を提示したいと思います。

今C班とD班から出てきた問題で、同じ目線で話をする、それから同じ目線でものを考える、こういうご意見がございました。これが実はB班もですね、どんな年齢の人にも対応できる、リーダーのツールの中で、これも同じ意見だろうと思うんでありますが、この、同じ目線で、目の高さでものを考える、これはコミュニケーションの中で一番大事なところだと思うんでありますが、これについてですね、具体的な体験があればおっしゃってください。何かありますか。同じ目線で考えるというのは、なかなか難しいと思うんです。みなさん方がお気づきになってもなかなか同じ目線で考えることは難しいんで、こういうふうに、こういう同じ目線で接してもらってうれしかったとか、ああ、立派なリーダーだなと思ったとか、そういう体験があったらおっしゃってください。

——どの年齢の人でも対応するというのは、あくまでも上の年齢の人が下の年齢に人に対応するだけというニュアンスではありません。それで私の場合幸いその、リーダー活動をさせてもらってるときには子どもを相手にしていたし、仕事をやっていたときには年上の方とさせていただきました。

まずその、下の方の相手というか、子ど

もさんを相手にするときは、目線を下げてこういうふうにして話すと。こうやって目線を下げるというのは、非常にいいことだと思います。これは子どもから１度喜ばれたことがあって、目線を下げて話してくれたのはリーダーだけや、と言われました。あと、学校の先生がよくやられるのは、子どもの趣味、例えばちょっと前だとポケモンとかそういうのを収集するというのは、あれは確実に情報を収集することによって目線を合わせる、いろんな年齢の人と対応するということだと思います。

年上の人の場合はあの、これは多分後ろの方々のほうがお上手だと思うんですけれども、例えば上の方と飲みに行くとか。飲みに行くことによってコミュニケーションを図るというのは、いいことかどうか分からないですけど、必要だと思います。私も焼き鳥屋さんでだいぶ情報を教えていただきましたので、そういう形で上の人と対応するときに、「そんなとこ飲みに行くの嫌じゃ」じゃなくて、「じゃあ私ちょっと行ってみますわ」という形で飲みに行くのを、付き合うというのも、1つのツールとしての年齢対応というのになると思います。

深川　ありがとうございました。他にございますか。はい。どうぞ。

――同じ目線で話をするということは、ただ単に子どもと座って話をするとかそういう単純なものではないと思います。同じ目線で、というのは本当ははどういう意味かといいますと、ただ単に下に座って子どもをかわいがってあげるのではなくて、子どもの心理、子どもが考えていること、子どもというのはこういうことをしたがるのだな、などと子どもの立場になって、子どもの気持ちを考えて接することだと思います。

大人と接することも同じですね。自分が年齢重なっていっていろんなことを経験したことで、例えば子どもの父親と悩みを話せる場合は、父親ってこういう悩みがあるんだろう、父親というのは自分の子どもに対してこういう問題を抱える可能性があるだろうということを、意識を持って、子どもとか親と接するというのが本当の、同じ目線で見るということだと私は思います。

深川　ありがとうございました。大変いいご意見でございました。今、相手の立場に立ってというふうなお言葉もございましたし、結局言葉を変えると相手に対する思いやりということにも通ずると思います。これが実は、先ほどから話に出ております、コミュニケーションの第一歩なんであります。一番大事なことだと思います。はい、次の方どうぞ、おっしゃってください。

――僕が思っている目線を合わすというのは、心理とか考え方とかそれもあるんですけど、僕が一番考えているのは言葉遣いだと思っています。何も「赤ちゃん言葉でちゅよ」とかそういうふうにするんではなくて、例えばＲＹＬＡという言葉を子どもに伝えるときに、ただ単に今から僕はＲＹＬＡに行ってきますと小さい子どもに言っても、絶対に意味が分からないと思います。ＲＹＬＡをどれだけ分かりやすい言葉で伝えられるか。それが僕はあの、相手の視線に合わせてコミュニケーションする、と思ってるんですよ。だから本当に難しくて、逆に分かりやすい言葉で言ったつもりのそ

の言葉が分かりにくかったりすることもあるみたいですけど、僕はそういうことが視線を合わせることだと思っています。

あと物理的な視線を、こんなふうに下げることも僕は大事だと思っています。僕は身長が低いので190cmくらいの人が普通に言われても僕顔が見えやしませんからね。こんな感じになりますから、上から言われてもほんまに訳が分からない。子どもも多分一緒だと思うので、何か伝えたいときにしゃがんで目線を合わせて言うと、子どもたちも何をしたらいいかって分かりやすいみたいなので、そういうことが大事だと思います。以上です。

深川　ありがとうございました。他にございますか。何でもおっしゃってください。一応議論が出つくしたらまた次のテーマに移りますけれども、今の目線を合わすというテーマについて、思いつかれることがあったらどうぞ。

――目線を合わせるということなんですけれども、僕は今、21歳です。そして下の人達、例えば子どもたちに目線を合わせてしゃべって、同じ目線で同じ気持ちになって考える。けれども、年上の人に対して同じ目線で立ってしまうと、もしかしたら失礼なのではないかと。怖いですし、なんか。こっちがちょっとでしゃばってしまうのではないかな、と。だから微妙だと思うんです。頑張って努力して目線、視線を合わせていこうと思うんですけれども。

リーダーであるから努力してというのもあるんでしょうけれども、子どもからも大人からも、大人っていうか僕よりも年上の方であっても同じ目線に立ってもらうというのは誰しも気持ちいいことだと思うので、リーダーだからというのではなく、1人1人が同じ目線にたって考えられたら、よりよい世の中ができるのではないかと思っております。以上です。

深川　ありがとうございました。いいお話だったと思いますが、他に何かありますか。どなたでも。

――私は自分の失敗談をお話ししようと思います。私は以前、子どもと仕事をするチャンスがありました。児童養護施設といって、親と暮らせない子どもを私たち職員が24時間365日交代で子どもの面倒を見て学校に送り出すという施設で、いわゆる親業のようなことをしていたことがあります。

小学校入る前くらいから高校生上がるくらいまでの子ども15人と共同生活をしていまして、私はとても楽しくて、できるだけ相手の気持ちを分かってあげて、態度で目線を合わせようと気を配っていました。

ある男の子が施設に入ってすぐのときに誕生日だったので、職員がケーキを作ってあげようということで、「何が好きなん」って聞いたら「チーズケーキが好きや」とその子が言ったので、私は自分の家でケーキを作って持って行きました。それでその子はおいしいって言って食べてくれはったんやけど、他の男の子がいて私はすごく、ケーキを作ったから食べてほしいと思って、「なあ、食べて」というふうに言ったら、その子ともまだあまり打ち解けてなかった時期だったと思うんですけれども、一口口に入れてそのまま庭に出てペッて吐いちゃったんですね。そのときに私、なんで

こんなに私が頑張って作ったのにその子はそんなことするんやろうと思って、なんか悲しくなって泣いてしまったんです。

その後に、その日だったと思うんですけれども、「実は僕、チーズケーキ嫌いやってん」っていうふうにその子が言ってきたときに、私は多分この子にチーズケーキおいしいって、食べてほしいなという気持ちばっかりで、何が好きだったのかなっていうのをあまり考えなくて、私が一方的に傷ついてしまった。けれどもその子の気持ちを汲んであげられなかったなっていう反省をそのときしたんです。嫌いなものだからってペッて吐いてしまうのはどうかなっていうのはちょっとそのときもあったんですけれども、そのときにハッと気づいて。

ほんとに子どものコミュニケーションがまだうまく、意思疎通ができていない場合でもやっぱり相手の好き嫌いとかイエス、ノーとかっていうチョイスを充分に持って、大人やリーダーである人がその子に接するってことがとても大切やなっていうのがその日1日ですごく勉強になりました。できるだけそれが子どもでなくても、自分の友達であっても、って気をつけるようにはなったんですけれどもなかなか毎日日々精進という感じです。そういう失敗をしたことがあったので、その子にありがたい、という気持ちでちょっとお話をさせていただきました。

深川　ありがとうございます。あの、今お話いただいたように失敗談でも、みなさん方の得るところがあろうかと思いますが、そんな失敗談があったらおっしゃってください。どうぞ、どうぞ。

――私は失敗というのではないんですけれども。私は看護婦でして、常からどうしても忙しいんですよね。朝から晩まで走りっぱなしということがあって。でもいろんな情報も得たいしいろんな仕事もこなしたいし、っていうので、どうしてもゆっくり立ち止まって話す時間がありません。

経験が10年、11年となってきたときにふと思ったんですけれども、目線の高さで話すっていうのはどうしても大事なことだと。子どもが外来に来たとき、どうしても白衣だと威圧感を与えてしまうので、目線を下げてあげて話をするということは分かってたんですけれども、今度年齢が高齢になった方や寝たきりの方を特に相手するようになったときに、どうしてもその人に目線を合わせるとなるとそこにやっぱり座るということになるんです。お熱測りに行くにしても、血圧測りに行くにしても、一端行ってそこに座るということを最後まで心がけるようにしていたんです。

そうすることによって、その人のために今から私は時間を作りますよって。いすに座ったことで、目線を合わして、その人が話しやすくなるかもしれないんですけれども、それと同時に今からたった5分でも10分でもあなたのために時間を作りますよっていうのを態度で表せるかなと思って、一端座って、「どうですか」という感じで話しかけるようになったら、ほんとに（体の）悪い方が多かったのでまあいろいろ、話しやすくなったんですかね。前に比べたらいろいろ話をしてくれるようになったっていうふうに感じました。

だから、気持ちっていうか立場も考えて

あげるし、目線の高さも考えてあげるし、それと同時に時間を作ってあげますよという意思表示、座るっていうことはどうしても時間を作ることだと思ったので、私はそうしてました。これからもそれは必要だと思います。今回改めて、やはり大事だな、と思ったんで、一言話をさせていただきました。ありがとうございました。

深川　他ございますか。はい、どうぞ。

――ちょっと若い者に負けてられないので出てきました。僕はまた同じ話でちょっとしつこいようなんですけれども、子どもの目線のことで失敗したことがあります。子どもの目線に合わすって自分の中では分かっていても、気づかないときがあって。

例えば三木にホースランドっていうのがあって、そこで子どもが馬を見れないと。馬はだいたいこう、顔を出してるんですよね、ここで。例えば僕らの目の高さやったらちょうどなんです。でも、子どもにしたら、どんな馬がおるんやろうって、見えないんです。それである男の子が「見えへん、見えへん」って言っているので僕が「見えないんやったら見せたるわ」ということでその子を担いだんです。するとその子がすごい怒って、「俺を子どもとして見るな」と言って。確かにその子がどうというわけでもないんですけど、やはり自分の中でどこかで子どもとして見ていた。もうちょっと目線を合わさないといけないなということがそこでまた思い知らされて。

ちょっとずれるんですけれども、例えば障害者の方とかでも一緒になって馬鹿になる、これはすごいほんとに自分が幸せになれるし、すごく大切なことだと思いました。以上です。

深川　いろんな意見が出てまいりました。この話はこの程度にして、1つのまとめをしておきたいと思いますが、人間の社会ですからね、いろんな階級の人がいます。で、そういう全ての人たちに対してやはり同じ目線でいろんな話をし、全く平等、対等な意識で話を聞いてあげるというのは大事なことだと思います。

私の知っている耳鼻科のお医者さんが、いつも診察するときにはかがめて体を低くしてやっている。特に子どものときはしゃがんで話したりする。子どもが大変喜びます。そして実はそのお医者さんは子どもが大変好きで、また子どもも大変なついております。それなんかもやはりいつも同じ目線でっていう、普段からのその先生の習慣がやっぱりそうさせたんだろう、お人柄だろうと思っております。で、あの、全ての人たちに対して平等な、対等な心で接するということが1つ大切でありまして、私はよくそういうことを話するのに、お茶席の論理をお話いたします。

お茶席っていうのはみなさんご存知のように大名も入ってきます、武士も入ってきます。商人も入ってくるしお百姓さんも入ってくる。あらゆる階級の人がですね、お茶席に入ってくるんです。で、そのときに、お茶席に入ってくるときにお大名とか武士はですね、腰の刀を外して、丸腰で入って来いと言っています。そして一端お茶席に入ったら、完全平等、対等な立場でね、静かに茶を喫してそして静かに去る。喫茶去という言葉がありますが、それでお茶席の論理が表されていると思います。静かに

茶を喫して去る。

これと同じようにですね、私たち、いろんな人たちと地域社会で会うわけでありますが、いつもこのお茶席の、茶席の論理をもってですね、どんな人とでも平等な心、対等な心で静かにお互いに話し合う、これがコミュニケーションの基本であります。そしてその話が終わったらその場を去る、こういう心がけがひとつ大切だろうかと思うんであります。

同じ目線で話をする、ということは先ほど言っておりましたが、相手の立場に立つというのと共通な考え方であります。そのことを1つひっくり返しますとですね、相手に対する思いやり。ロータリーではいつも相手の立場に立って、とか思いやりということをよく言います。それはやはり、この茶席の論理、そういうものを基礎に置いていつも相手を思いやる、そして同じ立場で同じ目線で話をするという修練が必要だということを物語っているように思います。そのことを1つご紹介しておきまして、次の問題に移ります。

たくさん問題あって、全てにわたって網羅することできませんが、D班で、地域社会との関わりが薄い、子どもと大人に信頼関係がない、いろいろございました。大人にとっては地域社会との関わりが薄いというのは、自らを戒めるようなことであります。私実は夜中しか自宅におりませんで、ほとんど走り回っている。そういうので果たしていいのかどうか、悪いことは分かっておるんでありますが、どうしようもないんでございます。この地域との関わりが少ないということについてご意見があればと思います。まず、地域で子どもを取り巻いておる大人が変わって、そのためにまた子どもが変わったということは言われます。その1つの典型的な例は、大人が子どもを叱らなくなった。D班で出てましたですね。そういうこともございます。地域社会との関わりが薄いという問題について、みなさん方で誰かお感じになったこと、こうすればいいのになっていうことがあったらおっしゃってください。何かございませんか。

——私も今、今回の大人と子どもっていうだけでなく地域社会のことを、所属しているローターアクトクラブでも考えているんですけれども、地域内で他のボランティア活動している仲間との交流が最近全然ないんですね。地域っていうのはそこに関わっているみんなと一緒に作り上げていこうっていう、作り上げていくものだと私は思っていますけれども。

今回参加しているふーみんという人が、自然学校で子どもたちと接しているっていう話も聞いて、私も地域に帰ったときにそういう自然学校ってやっているのかな、と思いました。そういう活動をしているかと聞かれても私、分からなかったんです。だから、そういうふうにもっと地域に目を向けて、他の活動をしている子どもたちにしろ、他のボランティアにしろ、一緒に活動していきたいなあとつくづく思いました。以上です。

深川　ありがとうございました。他に何かございますか。地域社会との関わりか薄いという点について。リーダーとして。何でも結構ですが。はい、どうぞ。

——あの、地域社会との関わり合い。私

が一番思うのは、日本に来て初めて感じたのは、子どもが街中で見かけられない。子どもがいないんですね。私パキスタン出身なんで、パキスタンとかアジアの方に行きますと子どもがいつも騒がしくておじいさんに「こら、何しとんの」とか言われるくらいなんで。でもそれは嫌だから言ってるんじゃなくて、おじいさんやおばあさんにとってはそれが楽しいんですね。だからそういうふうにおじいさんやおばあさんの年代とか親とその地域、隣同士の関係というのはすごく親しくて、その子どもは他人の子どもではなく、われわれの子どもであるという思いが中にあります。

日本で、電車の中でも女の子が化粧してたりしますよね。私は着替えてるのを見たことがあります（笑）。みなさんは見ている。心の中でこれは悪いことだなあと思いながらも誰も言わないですね。誰も先に行って、これは悪いことですって、これは止めないといけないという思いはあるんですけれども、自分から進んであえて言わない。

というのはここでもう、D班であげております無関心と無責任、消極的、私そこだと思いますね。だから自分が社会に対してどういうふうに責任があるかということが、子どもとの関わりの中で一番大事じゃないかと私は思います。そういうふうに日本の大人が子どもと接する時間というか、まず自分の家から始めて町から街、街から国へと世界へと広がっていく、というふうな流れになったら一番いいんじゃないかと私は思います。どうもありがとうございました。

深川　ありがとうございました。なかなかすばらしいご意見です。他にございますか。誰でも結構です。どうぞ、どうぞ。

――ご存じない方もおられるかと思うんですけれども、兵庫県では5年生が全員、5泊6日で自然学校というものがあるんです。そこで私もまだすごく未熟なんですけれども子どもに何か伝えたいと思って、日々精進というところなんですけれども、私のそんな子どもと関わる失敗の話を。

私は大きな団地に住んでいるんですけれども、中学校があってすぐ前にある棟があります。そこで中学生がよく煙草を吸っているんですね。地域の方の誰も注意しない。私も注意したいと思いつつも、注意できなかったんですね。すごく悔やみました。悔やんだんですけれども、もう過ぎたことなんで時間は戻りませんし、これからそういう私の意識をどう変えるかというのがすごく大切なことだと思います。

この話をよその近所のおばちゃんにしたところ、みなさんやっぱり地域の方、みんなご存知なんですね。中学校のすぐ前の棟で中学生が煙草を吸っているのは。「注意しなかったんですか」って、私がおばさんに聞いたところ、「注意して何をされるかが分からないから怖い」とおっしゃいまして、それも実際の話かもしれませんね。私の深層の意識にもそういうのがあったから注意できなかったのかもしれません。

私が小学生のときは何か悪いことをしたら近所のおじさんおばさんが「こらっ」と頭をパシンとたたいてくれて、それを誰も体罰などと言わない時だったんですけれども、今は先生がちょっとたたいても体罰。地域のおばさんは注意したことによって自

分の家へ何か仕返しされるのではないかというそういう気持ち。地域社会の薄い空気がよく分かりますよね。この空気を変えたいなって私はすごく思って。思ったところで何をしたらいいかと考えたときに、注意しない私を見て中学生がそのままもし育ってしまったら、中学生が大人になったときどんな大人になるかって、怖いですよね。

私も子どものころがありましたから、尊敬できない先生や大人の人を見たら心の中でものすごく馬鹿にしてました。こんな大人にはなりたくないと。多分中学校の前で煙草を吸うっていうのは、誰かに注意してほしいという気持ちが、多分心の奥底であると思うんですね。私もその気持ちが分かります。ほんとに誰にも注意してほしくなければ、隠れて誰にも見えないところで吸えばいいことですし。この子どもを、今回のリーダーの役割っていう話の中でも考えたんですけれども、子どもが頑張ってほしいと思うならこんな私は変わらないといけないし、そんな地域も変わる必要があるのではないかと思いました。ありがとうございました。

深川　ありがとうございました。なかなか鋭い心理分析でおもしろかったと思うんですが、今の問題大変大事な問題なんです。

子どもを取り巻いておる環境が変わった。すなわち子どもを取り巻いている大人が変わった。どう変わったか。子どもを叱らない大人がたくさん増えてきたし、他人の子どもに対しては全く無関心な大人が増えてきた。これをこのまま放っておいていいのか。今のご意見はまさにそれに答えるものでありますが、みなさん方これについてどう思われますか。率直な意見を聞かせてください。はい、どうぞ。

――あの、意見といいますか、私の体験でよろしいでしょうか。あの、大人が子どもを叱らなくなったということなんですけれども。

私去年夏まで住んでおりましたアパートがありまして、それは2階建てで2棟あるんですね。2階は1つの廊下でつながっているんです。私は2階に住んでいました。そこは子どもさんをお持ちの家族が多いところですから、子どもさんが駐車場で遊ばれるわけですね。子どもさんの遊びといいますと、かけっことか、鬼ごっこが中心になってくると思うんです。すると、駐車場だけでは物足りませんからアパートの廊下を通るわけですよね。

子どもさんがそういう廊下を通るとかなり響くんですね。私子どもが1年前にできまして、そのときちょうど育児休暇中の奥さんと子どもがいたんですけれども、子どもさんが廊下を通ると、寝ていたうちの子どもが起きて、泣いてしまう。私の生活に影響が少なからず影響があったわけです。これが頻繁に起こるんで、ちょっとこれはどうしたものかなと。他の部屋の方はなかなか注意されていないようですので、私もちょっと目をつぶってきたんですけれども、どうしても許せないところがありまして、1度その子どもたちに対して指摘をしたわけですね。ちょっとうるさいと。こういう言い方ではなかったですけども、言ったわけです。

次の日、私仕事から帰ってきますと私の部屋のドアにちょっと異変があるんです

ね。覗き窓にチューイングガムがつけられていたんです。これは仕返しです。言ったことに対して、その子どもたちは自分が迷惑かけているということではなくて、私に叱られたっていうことに腹を立てて、仕返しをしに来ているわけです。私は一生懸命チューイングガムをこう、寂しい感じでのけたんですけれども。

それでまあ、しばらく経ちました。また家に帰ってきました。また異変があるんですね。シールが貼られているんです、また覗き窓に。2回目です。

そうすると何回も何回もこういう仕返しが来るのかなと。今はチューイングガムやシールです。それで済むかもしれませんが、もし私が注意を頻繁に繰り返して、今度はドアに落書きをされたりとか窓を割られたりすることになったらどうしようかという。キレた子どもに刺されたらどうしようかとか、極端そこまで思ったりもするわけですよね。うちの子どももまだ託児所に預ける時期ではなかったですから中にもおりますし、奥さんもうつになったら困るとかいろいろ考えて、結局注意ができなくなってきたんですね。走ってくるとうーん、と心の中で思うんですけれども、やっぱり注意ができない。

それからしばらく経ってここに参加させてもらってみんなにもお話を聞いてもらって、今日みなさんのバズセッションを聞いてですね、私の注意の仕方にも問題があったのではないかなというふうに考えています。あのときに、「君らうるさいよ」って言うだけじゃなくって、もう少し丁寧な言い方がなかったものかというところで、私の経験と失敗、というか反省をみなさんに聞いてもらったわけでございます。ご清聴ありがとうございました。

深川　ありがとうございました。難しい問題ですね。ああいう問題に対してどうすればいいのかという何か名案があったらおっしゃってください。それ以外にまた、ご自身の体験でも結構ですが。はい、どうぞ。

――僕も今住んでいるアパートで、屋上から物を投げて遊ぶ、あと屋上から人にめがけてつばを吐いて遊ぶという子どもたちがいたんです。で、結構やっぱり周りの人たちってそれを見てももう、私の子じゃないからという感じでもう無視してるんですよね、いらいらしながらも。やはりそういう方、よくいらっしゃったんです。ちょっと僕も見るに見かねて、1回怒鳴ったことあるんです、その子たちに。「降りて来い。お前らが落とした物全部拾って帰れ」。

そうしたら、僕の場合はその子らの仕返しはなかったんですが、次の日から会ったときの目が、僕を恐れているんです。避けるようにして僕を怖い者として扱いだした。だから、僕の場合も失敗経験だったと思うんですけれども、やっぱり言い方というのはちょっと問題あったのかなと。そのとき少し反省はしました。

僕、昔小児施設の方でリハビリの仕事をしているんですが、小児施設で働いてて、子どもって大人が思ってる以上に理解してると思うんですよね、いろんなこと。少し諭すようにしゃべれば、理解してくれるんじゃないか。それを1回じゃ無理でも何回か繰り返して諭していけば理解してくれるんじゃないかというふうには思っていたん

ですが、そのときは失敗しました。以上です。

深川　他に何かございますか。誰かいらっしゃいますか。どうぞどうぞ。

――煙草のことでもう１つ思い出したことがあります。当時何年か前に私は煙草を吸っていたんですけれども、ちょっと駅前で吸っていたときに中学生の２人が来て、「お姉ちゃん煙草１本ちょうだい」って言ってきたんです。「あんたら中学生やろ。あんまり若いころから煙草吸ってたら成長期やし、体、悪するで。」って言ったら、「えっ、そうなん」って言われたんですよ。

だからみんな、なんであかんかということを教えられていないんですよね。だから結局、「こうやからあかんねんで」、「なんで」を言ってあげたらみんな納得するんですよ。だから「あかん」だけで終わらせてしまうのではなくて、なぜ駄目なのかを説明してあげないと、知識のない子というのはこの行動自体を否定された、としか思わないんですね。自分を否定されたとしか思わないんで、やっぱりそういう「なんで」を言ってあげることが一番大事なんじゃないかなって思いました。以上です。

深川　ありがとうございました。他にございますか。はい、どうぞ、どうぞ。

――さっきの団地の（話）の方、僕はそれをやっていた方なので、それを少しお話ししたいと思います。

今だいたいグラウンドとかなくなってきてるんです。やってた方はよく分かると思うんですけれども、夏にはよくグラウンドに行って花火の投げ合いなどをしていました。でも、そういう団地が建つことによってグラウンドがなくなって、するところがなくなったので、僕とかは道路とかでやってたんです。

塾の帰りにやってたときに、ある中学生、ある、というのは僕のことなんですけれども、４人組で帰ってるときに「２人、前行って。後ろから花火ぶつけるから逃げてな」ということをやってたんです。案の定、唐突に近所迷惑になるので、その家の方が出てきますよね。コラーッて言われたんです。そうなるとびっくりして逃げるじゃないですか。やはり何で怒られたかっていうのがそのとき分からないんで、明日から復讐や、みたいな。で、まあ煙玉なり次の日から投げ込んだわけです。

今考えたら、そのときに「近所迷惑やろ」って普通に出てきて言ってくれたら、ああこんだけ人に迷惑をかけてたのかと、僕は物わかりがいい方なので（笑）思ったのではないかと思います。以上です。

深川　ありがとうございます。

――この間2日連続で温泉に行ったときがありまして、その１日目に子どもが広いお風呂でバタ足をして泳いでいたんです。他にも２人くらい入っていて、その人は迷惑そうな顔してて。僕も隣の人も言わんけどええかげん言わなあかんなと思って、言ったんです。そうすると子どもがその場で固まって、動かなくなったんですね。いきなり何でこんなこといわれなあかんのやろ、みたいに。だから妥協点出さなあかんかなと思って、「けのびにしてな」って言ったんです。その子は謝らんかったけど、とりあえず控えめにはなったんです。

その次の日はまた別の温泉に行って、そ

こでもまた泳ぐ子どもがいたんですね。そこの子には「顔にばしゃばしゃかかるからええかげんにしてな」と言ったら、その子は3～4歳くらいの子だったんですけど、パッと謝ったんですね。謝れるいうのはすごいな、思って。こんな自分でもそんなにパッと謝ったりお礼を言ったりそういうちょっとしたコミュニケーションはちょっと欠如してるかなと。素直にそこの親御さんに、というかおじいさんだったんですけど、「あなたの息子さんはすごいですね」みたいなことを言ったんですけれども、さっきそれをA班の中でしゃべってたら、「そういうことも普通はよう言わんで」っていうことを言われて、そんなものかなあと(笑)。

ところで、お礼のことなんですけれども、コンビニとかで袋入れて、「はい、どうぞ」って渡されたときに、一言、「ありがとう」とか言えた方がいいんじゃないかと思って、僕はこの間から言うようにしています。そういうのはみなさん、どうでしょうか。

深川　ありがとうございます。今の方のご意見にいろんな意見、出していただいたら結構ですが。

――あの、私の家はすぐ裏に高校があります。定時制の高校と普通の高校、昼と夜の2部制になっています。4月に学校が始まって以来、遠くから来る子は単車に乗ったらあかんことになっているけど、乗って行って近所に停めて、学校に行く。帰りはそれに乗って帰るんかと思ったら、10時ごろまで置いてあるんです、単車が。定時制が終わって定時制の子と一緒に乗って走り回ってる。始めはそれがあんまりうるさくないので大したことないかなあ、と思って耐えておりました。

しかしまもなく、エスカレートしてきました。だんだん連れもって、50ccの単車から400ccが置いてあったり、辛抱がいいんで言わなかったものだから、だんだんエスカレートしてきました。でも、それくらいはまだいいかなと思っていたんです。ただ、うちの家の周りには0歳の子ども、それから2歳とか4歳、小さい子どもが10人くらいいるんです。僕たちはそのときは1年くらい前に引っ越したばかりで、まだあまり話せない。緊張するので言いません。だけど誰も何も半年経っても言わない。

ところが夏を過ぎて、夜中の11時くらいに女の子がキャーッと言ったんですね。やめてって言うのを追いかけ回している。あまりにも限度が越えているから女房に「言うぞ」といったら「やめて。絶対やめてよ、放っておいたらええやん」と言われたんです。「なんでや。うるさいうるさい、言うて子ども寝られへんし、お前どう思うんぞ」っていう話をすると、さっきの方と同じことで「仕返しされたらどないするん。毎日毎日、そんなんされたら嫌やんか」言うて。私は「責任持つさかいに、警察に言うで」と。仕事上警察によく行くことがあって、1人で絶対注意したらあかんで、何するか分からへんでという話もよく聞いていましたので、警察に電話しました。、警察官が来て警察官が家呼びに来て一緒に出てくるんですけれども、女房は「行かんといて。顔見たら分かるやん。またやられたら困るやん」と、また同じこと言うから、「やかましいわ、お前、居れ」と言って、居させたんです。それで行って話して、いきなり

言ったらやっぱり、話も分からないと思うから、まず最初に、「この家の周りには0歳から4歳、児童、幼児の子がたくさんいるから、それはやめてね」という話をして。

それだけで話は終わりません。学校にもこういう状態いうのは分からない。先生は普段遅くとも9時半までしか学校にいませんので、次の日学校に行って、これこれこういう理由があって、警察にこういう話をしましたという話をしました。それから地域の自治会長のところにも行って来ました。こういうことがあります。実際にあって困りました。現在は解決したけれどもこういう話があるんで、ということを、地域と話をする、学校と話する。そういうことをして、それでアフターフォローで交番、もしくは警察の本署の方へ行ってこれこれこんなことがあったんで、定期的に見回りお願いします、としたところ、高校生はたまに単車で来ますけども、大きな騒ぎというのはないです。平穏無事に暮らしていることをご報告申し上げます。以上でございます。

深川　ありがとうございます。他に何かございますか。いいお話だったと思いますよ。

――あの、子どもの話をということなんですけれども、地域社会の関わりが薄いということで、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

私は福祉を学んでいる学生で、実習にも何度か行ったんですけれども、そのときの話と学校の先生から聞いた話と、違う話を2つさせていただきたいと思います。

1つは老人ホームの方に実習に行ったときにそこが不便なところで、一番近いバス停からでも10分は歩かないといけない。周りは田んぼや畑で、農家が多いので、1軒1軒のお隣がかなり離れている。で、私はそこですごく遠いな、と思っただけなんですけれども、他の人からも、バスを2回乗り継がないといけない、バス停から30分歩かないといけないという話を聞きました。

実習中は忙しかったんですけれども、帰ってきてからそういうことをふと思い出して考えてみたときに、老人ばっかり集められて、そういうすごく人と関わりが薄くなるようなところに閉じ込められてるんかなって。悲しい思いもしたし、あとどうにかできないんかなっていう思いも持ちましたが、まだそんな力もないし、全然（介護の仕事に）接したことも少ないので、どうしていったらいいかは今考えているところです。

それともう1つ、先生から聞いた話はドメスティック・バイオレンス。夫婦とか恋人とかそういう親しい関係の中で暴力が振るわれることです。

その先生のご近所のご夫婦でどうも、奥さんが殴られているらしいって。あざとかがあるのでパッと見て分かるんですけれども、そういう暴力があるのは家の中だし、奥さんの方もそれを言うのが恥みたいなところもあって、自分の親戚にさえもなかなか言えない。自分の親にも言えない。だけど下手したら命に関わるかもしれないというところまでいっているにもかかわらず、地域の人たちはそこに、どれだけ踏み込んでいいのか分からない。お隣でさえも、その現場を押さえなければ注意ができない。そういうことを聞いたときに、なんか全然

奥さん同士でさえもあまり話ができないような地域というか、時代というか、そんなんになってしまったんかなあって思って、これから何とか自分は変えていきたいなと思って、できることを探していこうと思っています。

深川　ありがとうございました。今の問題、大変難しい問題ですが、みなさん方何かご意見ございましたらおっしゃってください。

――地域がまあ、その老人の方々が集まっているとか、どういうふうにいろんなプライベートなところを割り切って入っていくかって難しいと思うんですよ。今その、地域のつながりが薄いっていうのがありますよね。でももっと昔は、すごく濃かったといいます。江戸時代、隣組、五人組というものがありました。あのころはよかったんですよ。（笑）知らないですけれども。

僕、バイトで長野のスキー場の方に住み込みで行っていたのですが、閉鎖的な地域がありました。いろんな村、地区、集落が集まっている温泉街なんですけれども、外湯しかない。外湯がたくさんあるのですが、観光客向けには作られておらず、地域の人たちのために作られている。その地域の人のためのものだから、他の人のことは考えない。みなさん都会に出て来られてると思うんですけれども、そういう地域（田舎）のつながりは濃すぎて、変なうわさもすぐに回ってしまう。例えばちょっと隣の奥さんに、「ちょっとねえ、旦那の帰りが遅いのよ。えらいことやわ。何してはるのかしら」とポンと言ったら、実はもう次の日の夕方には、「ちょっと、ちょっと。あそこのとこ、旦那さん帰るの遅いらしいよ。どないしたのかしら」と、みんな知ってる。

プライベートが、言うたらなくなる。その地域社会をもっとつながっていこうと思えば自分たちのプライベートの部分まで踏み入れられてしまうという危険性もはらんでいると思うんですね。いざそれが嫌で引っ越して、都会の方へ行ったら行ったで、今まであったご近所のつながりというのがなく、自分がマンションに住んでたら隣はどんな人が住んでいるのか全く分からない。その中で住んでいく。孤独感もあるけれども、自由もあると思うんですね。自分の自由を尊重してもらいたいために、相手の自由も放っておく。相手も自由やからもうええねん、自分も自由やしええねん、と。

一方で例えば中学生の煙草の件を考えてみると、いけないことだけれども、「その子の自由や。放っておいたらええねん。わし関係あらへんし」と注意しない。しかし、ここで自由というものを言葉を使ったら駄目だと思います。それは無責任です。自由と無責任をはき違えている、というところが強いと思うんですよ。

だから、個人で、個人の自由、プライベートを守るために地域と接さない。また、プライベートは奪われるけれども地域の繋がりがすごいあってっていう、どっちもメリット、デメリットがあると思います。今結果的に、プライベートを尊重する個人の集まりになったのは、昔の集団的な生活っていうのが嫌やから逃げてきて、個人になって、でもやっぱり昔の集団的な方が良かったわと。どっちも行ったり来たりで難しいところだと思うんですよ。もっと地域に

はたらきかけていこう、地域を濃くしようと言ってもいろんなデメリットも含んでいるんで、この2つを、どっちもいい具合にええところ取って、また違う別の地域のつながり方というのを考えていけたらいいのではないかと思います。

深川　ありがとうございました。他にございますか。はい、どうぞ。

――今の話を聞いて思ったんですけれども、自分は逆で、大学4年間まで22年間東京の港区に住んでいました。小学校、中学校、高校とずっと電車通学で、ほんとに地域との関わりが全くありませんでした。あったとしても少しで。そして就職して今、小豆島に来ています。

小豆島で一番最初に驚いたことは、部屋とか家にあまり鍵をかけないことです。あともう1つ、今工場で働いているんですけれども、おばちゃんがバイクで来て、みんなそのまま鍵がついてるんです。何でこんなことができるんだろうと思いましたね。東京だと、鍵をかけて当たり前、鍵は二重にかけるのが当たり前。自分はそう思っていました。

それで何でだろうと思ったら、1ヶ月2ヶ月経つと、毎月必ず地域の集まりがありました。今度の日曜日にみんなで草を刈りましょうとか、祭りになれば地域全体が、会社まで休みになって、みんなで盛り上げようという、地域のつながりが強いんだと思いました。

東京と何が違うかというと、相手を知らない無知さで、東京の方では相手を知らないから叱れない。隣は誰がいるか分からないという無知をなくすことによって、地域社会が強くなると感じました。だから東京でも相手を知れば、どういう仕事をしているのか、どういう考えがあるというのが分かれば、また地域が少しずつ変わっていくんじゃないかなというのが、この小豆島に来て感じたことです。

深川　ありがとうございました。コミュニティを作るという話だろうと思います。大変参考になる話でございました。他にございますか。特にございませんようでしたら話題を変えましょう。

子どもを取り巻いている大人が変わったために子どもが変わっていくわけであります。最近みなさんご存知だと思いますけれども、小学校の低学年のクラスで、この学校の始まるベルが鳴っても、子どもが勝手に歩き回って、授業にならないという話もあります。それから中学校では数人の生徒が暴力で授業を崩壊したりと、いろんな事件が起こっております。

実はもう20年くらい前に、大阪のある中学校が大変荒れておりました。中学生が大きな声で廊下を走り回ったり、授業中に花札をやったり、先生の言うことを全然聞かなかったりする。これはもう、20年前からそういう現象があったんでありますが、それが最近かなりエスカレートしてきていると思います。

またその他、例えば親に「どうして勉強しなきゃならないのか」、そういうことを聞く子どもが出てきたとか、子どもが自己決定権という権利を主張し始めたとか、いろんな形でこの5年間、あるいは10年間でずいぶん変わったという報告が出されております。みなさん方リーダーとして、子ど

もたちと接しておられて、こんな子どもがいるわというのを、これはどうしたらいいのだとびっくりしたようなもし事例があったらお聞かせください。

大人と子どもの意識の関係を出しておりますけれども、その大人は子どもに関わっている。そういう中ででも結構でありますが、最近の子どもさんは変わったなということをふと感じられたようなことがあれば、参考までに出してください。

――変わったという点ですけれども、私は1度、子どもをキャンプでオーストラリアに連れて行ったたことがあります。夏、オーストラリアキャンプに来る子はお金持ちの子が多いです。オーストラリアのキャンプ場でキャンプをやっていて、まず売店がないと騒ぎ出しました。「何で私は金持ってるのに売店あれへんねん」と。そして1日目ちょっと失敗したなと思ったんですけれども、売り物のTシャツを出したままにしていたんです。「私はこれを買うんや。金持ってる。なんで買われへんねん」。2日目、撤去しました。「売れてしまったんだよ」とごまかしました。

2日目です。その子が今度外へ行って、自動販売機を見つけました。「何で買ったらあかんねん。私の金だ、使わせてくれ」と。その子には、あの自動販売機はつぶれているんだと言いました。しぶしぶですが、納得しました。こういう言い方が駄目かもしれませんが、嘘も方便だと思います。非常にずるいやり方かもしれませんけれども、何らかの理由をつけなきゃやっぱり人は納得できないと思うんですね。

先ほど自己決定権のお話されましたけれども、私は1度、それに近いことを言われたんです。僕の権利が、という話を子どもがしたんです。「リーダー、僕の権利はどないなってんねん」と言うからこうやって目線を下げて私は言いました。「じゃあ権利とは何かを説明してもらおうか」と。「君はそこまで分かってるのか。それは法学的な意味で権利と言っているのか、それとも子ども憲章の権利なのか」と、そこから始めました。彼は子ども憲章までは知っていたらしいです。「ああそうか、よく知っているな。子ども憲章ってどういう意味なんや。ちょっと教えてくれへんか」と。そこで彼はリタイアしてくれました。(笑)やはり聞きただすことは必ず大事だと思いますのでおすすめですが、嘘も方便というのはやり方の1つとして、頻繁に使うべきじゃないと思うけれども、いい手と思います。

2つめはその、聞きただす。(言葉の意味を)本当に分かって使ってる子なんかいないです、はっきり言って。だいたい3回聞けばリタイアします。なお、そのときにこちらがそれにかぶせて知恵を授けると、この子は一生自分の言うことを聞くようになります。以上です。

深川　ありがとうございました。何かございますか。はいどうぞ。

――すごいびっくりしたことがあるんで、言いたいなと思いました。

1週間ほど前に自分の駅で降りて自転車置き場まで行く途中に、私の前を高校生の女の子が歩いていました。プリントらしきものが落ちたので、真後ろにいた私はすっと拾って、「落ちましたよ」って言ったん

です。そうしたらその子、ピタッと止まって私のほうをチラッと向いて、「それ捨てたんです」と言ったんです。私もびっくりして、でも結局どうしようもないんで私がゴミ箱に捨てに行ったんです。その後その子はもちろん考え方おかしいなと思ったんですけど、その親御さんもどうなんかなあと思って、すごく変わったなあと思いました。

深川　ありがとうございました。今のご意見、どう思われますか。何か意見あったら、出してください。捨てたと言われたら対応の仕方は放っておくよりしょうがないと思われますね。どうですか、他に何か対応の仕方があったら。はい、どうぞ。

――またちょっと固い話かもしれないけど、聞いてください。

子どもが変わったと思って、とてもショックだったことがあります。自然学校に私はいるんですけれども、神戸市、西宮市、氷上郡などいろいろなところに行っています。

どの市とは言いませんが、ある小学校に補助員として、そこの仲良し教室にボランティアで来ている女の子と２人で行きました。その学校の先生に、「補助でいいから、今あなたたち休んでくれていいから」と言われて、普段は遊ぶところなんですけれどもええんかなあ、ということで部屋に帰って、校長先生がくださった差し入れのお菓子を、そのリーダーさんと食べていたんです。

するといきなりドアが開いて、子どもが入ってきて、私が「これリーダーの部屋やからノックしてよ」と言おうとした矢先に、「あ、お菓子食べてる」って言われて。子どもに見られる可能性があるところでお菓子を食べている私の甘さに反省して、「ごめん」と言いかけた瞬間に、その女の子が「言い返せないんですか」って。えっ、と私はその時点で大パニックで、お菓子食べて一応反省してたんですけど、「言い返せないんですか。先生だからええと思ってるんですか」って言われてもう唖然としまして。時代は変わるものですけれども、私が小学生のときは先生が職員室で何かちょっとつまんでるのを見ても、先生は先生なのかなって思ったんだけど、そういうのがもう通じない年代なんだな、と思って。

でも私はその、「言い返せないんですか。先生のくせに」みたいなこと言われてもう頭に血が上りまして、「あんた人のことなめてんのか」みたいな感じのことをもうカーッとなって言ってしまったんです。これも反省なんですけど、もう頭に血が上ってたものですから、「ごめん、もう私あなたの顔も見たくないから、部屋から出て行ってくれ」と注意もしないまま、そのまま出してしまって。

でもよく落ち着いて考えたら、私にも悪いところがある。でもこの子にも悪いところがあったのに私は説明しないで、自分の未熟さゆえにそのままにしてしまってどうしようかと、私とその仲良し教室の女の子と２人で「自分らの反省やったねえ」と話していました。

でも、その後その部屋に入った女の子たちが手紙を持って来てくれました。手紙を読んだら、「先生をなめてしまってごめんなさい」と。他にも「馬鹿にしてごめんな

さい」というのも書いてありました。その辺の謝り方もウッ、と思ったんですけれどもでもその子は謝ってくれて、私の足りないところもあったので、ほんとはこっちから歩み寄るべきなのに、先にその子はさっと行動してくれた。足りないところもあるけど、私よりも足りているところもあるんだなあと思いました。以上です。

深川　ありがとうございました。己の足らざるところ他人に学ぶ、というのは一番大事なことでありますが。いいご意見でございました。他にございますか。はい、どうぞ。

――今なんか、授業の崩壊ですか、子どもたちがあの、授業中に歩くということに対してちょっと言いたいんですけれども。

僕らの年代とかはだいたいあの授業中なり騒いだりとか、ちょっと廊下走ってたら、先生がパッと見てて、「おい、北野」なんて呼ばれて僕らの先生、もみじ饅頭って言ってたんですけど、「足を出せ」って言われてたたかれちゃうんです。体罰は今問題になるんですけど、僕のときはすごく、先生分かったよ、みたいな無言の信頼みたいなものができて、すごい大切なことやな、と。例えば、授業中でも１回怒られることによって「あ、まずい」。怒られるといっても僕の場合はひどくて、すごくたたかれるんですけど、１回されることによって、やはり先生は困っているんだな、などということが理解できました。

僕らの年代より少し上の年代の方も、そういうことを受けてきたと思うんです。だから子どもたちに、同じことができないんですよね。そういうことができなくて、どうやったら分かってくれるんやろう。多分言葉では難しいところが、そういう愛のムチから出てたと思うんです。だから、今教職目指してる方はそこが問題点だと思うんですけど、どうでしょう。教職を目指している方の意見を聞きたいです。

深川　どうぞ何でも結構ですが。いいご意見が出てますから、答えてあげてください。

――授業中立ち上がったりして人の話を聞かない子どもがいるということでしたが、実際僕の場合は実習中にそれを経験しました。

黒板にこう、「じゃあ今日はこれをやるね」って書いてるときに後ろからダーッてチョークを持って落書きを始めるんです。僕か何をしとんねん、という感じでこう見ると、花の絵とか描いて。きれいに描いてるんですね、これがまた。うわーっと思いながらも、「今黒板に書いてるから席に座ってな」と言いまして、とりあえず座らせました。これはちょっと何か考えなあかんな、ということで、次の時間には黒板に書いている間に、「これをやっといて」と言って、みんなに紙を渡しました。ところが（僕が）書くのがちょっと長くなって。するとその子はすぐにやっちゃうんですね。すぐにやって、みんなの見ながら「うわー、やってない」とまたぶらぶらと歩いてしまいました。

それはそれで、困ったなっていうのはあったんですけれども、その子にもやはりいいところがありました。

実習中に、大豆でマラカスを作ろうという、マラカス作りの授業をしているときに、僕が大豆の入った大きい袋を机からすごい

勢いでこぼしてしまったことがありました。そのときの音は本当に台風のときの波の音ですね。ザッボーンというすごい音がして、教室中大豆になってしまいました。そのときに最初にほうきを持って来てくれたのはその子でして、みんなに「おい、片付けるぞ」と言って片付けだして、やっぱりすごいいいところがあるなというのを身を持って思い知ったわけです。

まあ、その立ってる、絵を描くっていうのも教師の言葉次第だと思います。どうやって座っといてもらうかみたいなことをずっと考えていて、最後にこう、いろいろ考えて、「先やったら隣の子に教えてあげてね」という感じでいろいろ考えて座ってもらってたんですけれども、今思えば、すごいいい経験になったと思っております。以上です。

深川　ありがとうございました。なかなか先生という商売は大変だと思いますが、もう1人おられたら、何かおっしゃってください。どんな体験でも結構です。おそらくいろんな体験なさっていると思います、先生ですから。で、そんな体験したときにどういうふうに対応したらいいのか、ご参考までに。

――私もこんな髪の色をしていますが、来年からまだ臨時なんですけれども、現場の方に行く予定です。私も、実習中の話をさせてもらおうかと思います。立ち歩くという話が出たんですけれども、実習に行って、すごい場面に遭遇しました。

2年生の学年に行ったんですけど、立ち歩く子が多い学級だったと思うんですね。実習中だったら途中から入るので、そのクラスの雰囲気作りは担任の先生がもうやられてある程度できあがってるんですけれども、まさに青空学級でした。机は使ってないんですよ。これは何、授業中？っていう衝撃を受けたんですけれども、机に座ってちゃんとしているのは実習生だけ、という状態で。座って立ってなんですけれども、これが授業できるんやろうかと思いました。机を前にしていすに座っているのが普通みんなが考えるいい学級、ちゃんと座って授業受けてっていう考えがちなところがあるかもしれないんですけれども、その授業を見て見事な授業やなと感じました。

行き来があるからさっき言ったコミュニケーションも子ども同士で盛んに行われていました。子ども同士盛んに行われているというのは私語ではなくて、授業にかかわる意見を言って、「そこは違うやろ」などと言い合っているんです。まだ2年生なのにディスカッションのような、そういう白熱した授業が行なわれていました。先生は立ち歩く子どもたちをうまく逆手に取って、やってるんかなあと思って。工夫次第でいろいろ授業を作っていくこと、私も勉強になったなと思って。そういう違った形でも取り入れて私も4月から頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

深川　ありがとうございました。だんだん時間も迫ってまいりましたが、何か他にございますか。はい、どうぞどうぞ。

――私は幼児教育の方なんですけど、幼稚園の実習に行ったときもそういう子がたくさんいました。一緒にクラスに入れない子とか。そういうときに私がよく使っていた手段が、「みんなでお化けになって、座

らない子を驚かせに行こうか」って言って、自分自身もお化けになるんですよ、もう。みんなでそーっと行ってちょこって座って、「じゃあ先生の話静かに聞こうか」と言ったら、子どもはやっぱり楽しいんですよ。そういうことが多分。お化けになるとか、気持ち的に自分が何かになる。単に多分一緒に行こうと言っただけでは子どもは付いて来ないと思うので、そういう何か子どもに受けることを身につけて考えて、自分も一緒に子どもと楽しんだら、多分うまくいくんじゃないかな、って思います。

深川　ありがとうございます。他に何かございますか。はい、どうぞ。

――私もあの、子ども最初からすごく好きで、パキスタンにいたときも子どもとの関わりがすごくありました。日本の獨協大学でも、国際理解を深めようというプログラムがあります。その中で私たち留学生はいろんな高校、小学校、中学校に行って、子どもたちに自分の国のこととかいろんな情報を伝えよう、自分の国のことを教えようというふうなプログラム、すごく有意義なプログラムなので、何回か参加させていただいたことがあります。

その中で私、小学校から高校までそれ以外にいろいろな企業でも発表したことがあります。そこで感じたことは、子どもは、小学生が一番明るいですね。成長していって大きくなっていくにつれて何か顔がだんだんと暗くなっていくと。そういうことをすごく私感じました。

世界中の子どもたちは始めはみんな同じだと思いますね。子どもが小さいころ、みなさんから見て誰でもかわいいと思います。その目の輝きもみんな一緒ですけれども、ただし、子どもが小さいうちはかわいいんですけれども、だんだんと成長していって大きくなっていくとなぜ暗くなっていくのかというのは、その国の大人から受けている影響、あるいはその学校教育の中で何を学んでいるかということによって、その自分がやっていることが満足しているかどうかということですね。

日本の教育制度というのは私たち非常に疑問があります。ただ教科書を教えるだけが教育だったらみんな家で教科書を読んで、学校を、大学を卒業することができると思います。ただし、それだけが教育ではないんですね。

私たちの場合は、パキスタンでずっと教育を受けてきたんですけれども、先生方というのは親以上の立場、というのが私たちの考えですね。だから、親が言ったことを聞かなくても、先生の言ったことは絶対に聞くと。それはなぜかといいますと、先生方というのは学校で教える場合はただ教科書、あるいは教育制度に決まっているルールによってただ教えるのではなくて、自分の人生の経験とか、自分の世界を、知っているいろいろな情報、子どもの成長のために全部教育という道具を使ってみんなに伝えようという気持ちがあります。その中で子どもが何か好奇心を持ってくれる。子どもは自分が学んでいることに満足するので、明るいままに高校とか大学とか行っていますね。日本の場合はそれがないんですね。すごく暗い。

先ほどのお話の中で、１人の力じゃできないと、そういう話よくするんですけれど

も、１人の力じゃできないというのは私自身すごく反省したことがあります。

私も最初はそう思ってました。自分がこうしたいと思っていても、私１人だからできないと感じていて、誰かがしてくれるって思うんですけれども、でもその「誰」が、私じゃないって。私はできないかということを考えなかったですね。しかし、このＲＹＬＡというプログラムに参加して、自分が「誰か」を始めて、そのみなさんの力を結集してそれで、その力がだんだんと大きくなっていって変化を起こす力を持ってくるというのが本当じゃないかと気づきました。

昨日のキャンプファイヤーで今井先生のお話を聞かせていただきまして、すごく感動しました。その光というのは私たちみんながそこに焚いていた光の中から少しずつもらったんではないかと思いますね。だからその光をみなさんで結集して、大きな輝きにして、世界に何かをもたらすという変化をして、何かしようじゃないかという気持ちが私の中ですごい湧いてきたんですね。だから、このＲＹＬＡというプログラム、これからも私個人的にやっていきたいというのはありますけれども、特に自分の班の仲間というのはずっと一生の付き合いだと思うんです。だから後でも、このＲＹＬＡというプログラム終わってからも、みんなでどこかで会おうかなという計画をしております。

私の考えは、日本の子どもというのは大人から影響を受ける。だから大人が変わらなかったら、子どもは変わらないんですね。ということで、まず大人の中に変化を起こすということが大事ですね。できたらみなさんと一緒に力を合わせて、何かをしたいと。後ろに座っていらっしゃるライラリアンのみなさま方も同じ大人なんですけれども、でもそういう思いを今私は感じている。大人の中に問題があるっていうことをみなさんが考えて、これじゃあかんな、と考えてこういうＲＹＬＡを始めたんじゃないかと私は思います。だから、こういうふうなＲＹＬＡというプログラム、私たちはみなさんがお金出してくださって、私たちに自分が学んだこと、自分の経験を伝えてくださっているんで、今度は私たちの責任に何があるかということをみなさんで１人１人で考えていただきたい。それと、できたらこういうプログラムに参加したことをきっかけに、何かを世界のために、あるいはまず国からですね、まず自分からですね、何かを自分の中に変化を起こして、それが今度大きくなっていって世界に輝いていったらいいんじゃないかと私は思います。以上です。

深川　ありがとうございました。大変すばらしい意見でした。ロータリアン以上にＲＹＬＡをよくご存知で、恐れ入ります。(笑) 時間が押してまいりましたが、すばらしい話の後今井先生の話をしてもらおうかと思いますが、１つだけちょっと聞いときます。Ａ班のところで聞いてなかったのがあるんですが、昔の大人と今の大人と比較しましてね、昔の大人は責任感があるけども、今の大人はあまり責任感がないという、これ具体的なもし事例があったら出していただければ。ご参考までに。Ａ班の方、何かありますか。今の大人、情報はたくさ

んあるけれども、昔の大人、情報は少ない。その代わり、昔の大人は責任感はたくさんあるんだけれども、今の大人は責任感はあんまりない、という。はい、どうぞ。具体的に感じられたこととか。

――先ほどの話ですね。大人が子どもを叱れなくなってきたというところの、そういうことです。

深川　分かりました。それでは結構です。他何か、全般的なことでもご意見あったらおっしゃってください。あと15分です。何でも結構ですが。特にございませんでしたら、今井先生、最後にお願いがあるんですが、子どもの意識と大人の意識の関わり合い、それぞれ子どもの意識も変化しましたし、大人の意識も変化しました。大人と子どもとの関わり合いで、どのようなものがいいのか、それをコミュニティとの関係で、まとめていただければと思うんですが。今日コミュニティの話もだいぶ出ております。お使い立てして申し訳ございませんが。

今井　大人が無責任だと言われたら困りますから。(笑) 先ほどからのみなさんのお話、大変おもしろく承りました。それぞれの経験の中から出ている言葉なので、それ自身はちっとも間違っていない。みんなそれぞれに、なるほどそうだなと思うこともあります。

ただ、1つか2つのことを考えてみるときに、今の地域社会との問題から目線を合わせるということですね。目線を合わせるということはおそらく、この人の身になって考える。子どもは子どもの立場のことをよく理解しながらその子と話をする。あるいは大人、おじいさんならおじいさんのことをよく理解しながら看護婦さんだったかな、話をしてくださると、そういうようなことが大事だということなんですね。

ところが、その人の身になって考えるってほど難しいことはありません。ある外国の人ですけれども、人の苦しさを知ろうと思ったらば、その人の靴を履いて月の世界まで歩かねばならないという話があるんですね。何のことか分かりませんけどですね。それほどに大変苦労しないとなかなか本当は分からないということを私たちはよく覚えておかなくてはならない。英語でエンファシーという言葉があります。感情移入、その人の立場になる。その人の立場になると、うっかりするとその子が間違っててもその子の立場になってしまって、うん、それでいいんだ、なんて言うとこれ問題ですね。だからその子の立場になるということが大変難しいということが1つ。みなさんが出したことはみんな難しいんです。

今度は子どもを叱るっていうことがあって、やばいからやめようかという人もいましたね。あるいは勇気を出してやって、それがうまく成功した。子どもはみなさん方が声をかけたら、ありがとうと思いながら聞くのかもしれない。「お兄ちゃんごめん、とかおじちゃんごめん」って言って素直に聞いてくれることが多いんだろうと思うけれども、実は必ずしもそうじゃない。子どもと私、その人がしゃべるときに、その人の間にどんな信頼関係があるかということが話の前提です。信頼関係がなかったらどんなことになるか分からん。チューイングガムを貼られるくらいでは済まないんでですね。

そういう信頼関係を作ることのためには、その地域の子どもたちが、このお兄ちゃんもおるし、あのおじちゃんもおるということをみんなが分かるような場を共有することが、コミュニティを作るっていうことですね。地域社会が混乱してしまった。今これ以上すると私、明日の話がなくなってしまう（笑）。ですけどね、地域社会というのが先ほども言ったように田舎の時にはお互い同士があったと。誰ですか、隣組というのを大昔の話みたいに、江戸時代と一緒にしたのは。ついこの前の話です。例えばそういうようなことが壊れてしまった。そういう地域社会が壊れたということ自身が、私たちの国の一番大きな問題です。

少なくとも、「あそこのお兄ちゃんだったとか、このおじさんから言われたっていうことはそうでしょう、みんな気をつけようね」っていうのは、お母さんもお互いのその人たちを信頼しているからです。それでなかったら、「何よ、私の子どもにいらんこと言わんといて」と、なりますね。だからどのようにつながって、新しい、みんなが信頼するコミュニティを作れるか作れないかということが、実は私たちの国の新しい組織を作ることの大きな課題です。

私たちは今、深川先生と一緒に考えましたが、そのことをもう少し深く考えるということが、このＲＹＬＡに来たときの１つの物語ではないかと思います。昨日歓迎してくれたといってアズミ君からいろんな話を聞いた。あれが私の結論です。みんなでこれからやろう。その理解がどこまでできるかということですね。そのことのためにはいろんな学びも必要になってくるだろうし、違った世界や違った立場をどれまで受けとれるか。寛容と対話。そしてそれを理解するっていうこのテーマというものが、私たちの全部の課題でしょう。

明日もう１度私は話す機会がありますので、いろんなことを違った角度から話させていただきますけれども、一番難しいことは、どうしたらみなさんのこれからの21世紀に、みなさんの住んでいるところで、どのようにコミュニティを作るかです。コミュニティというのは人と人とが顔を見て、お互い同士の意思が疎通するということです。

ところが今の社会はそうじゃない。団地でも隣は誰も知らなかったという話があるように、「行ってまいります」と言って出ようと思って、上からコツコツと音がしたらあわてて鍵を閉めて、じっと待ってるんですよ、上のおじさんが降りていくのを。下に行ったら「行ってまいります」と言って、こっそり出て行くというような付き合い方のほうが多いのが都市社会。

で、そういう都市社会の中にコミュニティを作るということが、私たちの課題です。私たちは田舎の、昔の農村時代のコミュニティに戻ることはできないでしょう。そういう都市の中でどうしてお互い同士の関わり合いを作るか。それにはいろんな仕掛けがいるかもしれません。お祭りも要るかもしれませんし、あるいはいろんな行事が要るかも分かりませんし。その中で群集として集まるのではなくて、人と人とが対話できるような場所がどうしてもできるでしょう。

この場所もそうでしょう。来たときにあ

なた方、みんな初めはお互いのこと知らなかった。しかし今や、2次会、3次会を将来にわたってやろうというグループもできてくるっていうのは、そこではそのような仲間ができたということですね。こういう経験を活かしていただいたらいいと思います。今日は答えにならないかもしれませんけど、また明日でもゆっくり話させてもらうということで。

それともう1つ、地域社会と、それからさっきの話のような怖いと言われることですが、今のようにラポールができてないと大変難しい。だからそのことを私たちは気をつけなきゃならないということがあると思いますね。ゆっくり理解したときには間に合わなかったなんていうことがあります。だからこそコミュニティを作ろうというのが大事な仕事になるということです。

深川　ありがとうございました。

第24回 RYLA1
2002. 3.21~3.24 於. 神戸YMCA余
主催：R.I. 第2680地区・R.I.第2670地区・RYL

第24回 RYLAセミ
002. 3.21~3.24 於. 神戸YMCA余島野外活動
催：R.I. 第2680地区・R.I.第2670地区・RYLA運営委
"子供の意識と大人の意識
そしてリーダーの役割"

「私たちは、21世紀を担えるのか」

元R.I.理事
頌栄保育学院理事長・院長
今井　鎮雄 氏

〈河合　雅雄氏〉
神戸YMCA顧問。神戸YMCA総主事を21年務め、現在顧問。1920年東京生まれ。クリスチャンホーンに育ち、幼時より福祉の心を育てられる。同志社大学法学部経済学科卒業。関西学院大学大学院で研究。国際ロータリー2000～2001年度100周年祝賀計画アドキック委員。会員増強グループコーティネーター（第3ゾーン）

私は講演というよりもまとめみたいな形でみなさんに参考書や宿題を出そうと思っています。

奉仕の精神とロータリーの発展

ロータリーは今年で97年目の誕生日を2月23日に迎えました。私はこの日、インドのムンバイへ行っていました。以前、ボンベイと呼ばれていた都市です。

そこでインドの北とかパキスタン、あるいはアフガニスタンの子どもたちへのポリオの投与がまだうまくいってないので、それをどう解決したらいいのかという問題と同時にどれだけの費用がかかるか、どれだけの人間が動員できるかということが話し合われました。２月23日になりましたら、ムンバイのロータリアンの人たちが大きなバースデイケーキを作ってね、こんなに大きいんですよ。どんなふうに切るのかと思ったら、のこぎりみたいなので切る真似をしたらパッと外れて、ロータリー97歳と書かれていてみんなで拍手しました。そういう長い時間をロータリーは積み上げてきました。

深川先生がいろいろロータリーついて話してくださったときに触れられましたけれども、最初は友好のグループ、みんなが仲良しになるグループでした。ちょうど今日ここでみんなが集まって、今日の報告を聞いていたら、みなさんの中で、「心を割って話し合える友達が見つかった。これは私にとって大きな収穫だった」と言った人がいるそうです。実は私たちは、社会の中では心に鎧をまとって生きているところがあって、本心で話し合える友人は少ない。これが今の時代の１つの大きな欠点ですが、いい友人を見つけられた、喜びを感じた、とおっしゃる方がおられたと聞きました。

ロータリーの生まれた当時は資本主義社会が爛熟して闘争が非常に激しくなって、同業者が互いに足を引っ張り合っているような社会でしたから、一歩離れたところで、

自分の心を打ち明けられるような友人はいないだろうかと始められたのがロータリーだったのです。

しかしロータリーも時代が経つにつれて変わってまいりました。今はそのような親睦だけではなくて、友人の輪を広げていくという働きがロータリーにも課されるようになりました。初めは自分の仲間、それからコミュニティ、少し広がって、地域社会を人と人とが顔を合わせるコミュニティにしていく。やがて世界のどこにいる人も今日ここにいるパキスタンから来た友人、中国から来た友人、讃岐から、あるいは日本海に面した但馬から来た友人、いろんなところから来た人たちも、やっぱり私と同じ地球というコミュニティに住んでいるんだ、そういう精神で世界を作っていこうじゃないかというふうにロータリーは発展してきたのです。

ロータリーがこのような形で発展するにしたがって、私たちはいくつかの大きな役割を担わなければならなくなりました。

私昨日まで着ていたジャンパーには“Mankind is Our Business”という言葉が入っています。今年度のＲＩのテーマです。

八幡先生が言いましたね、“Mankind is Our Business”を「人類は私たちの仕事」と訳すだけでは意味が分からない。けれど人間そのものに対して私たちは何らかの形で奉仕をする。その人たちと一緒に生きるということ、その人たちのために何かできないかどうかと考えることは、実は人間にとっては一番大切なことなんだということです。

この“Mankind is Our Business”というのは、ディケンズが書いた『クリスマス・キャロル』に出てくる言葉です。読んだことのある人もいらっしゃるでしょう。古典で小さい本ですから、また何かのときに読んでみて下さい。金持ちのおじいさんのスクルージーのところに自分の相棒のマーレイという、先に死んだ人の幽霊が出てくるわけです。その幽霊は金縛りみたいなのにあって、重い鎖を引いてる。スクルージーは「どうしたんだ」と言ったらマーレイは、「私は大変後悔をしてる」と話し始める。スクルージーが「お前は生きてるときは、立派な金貸しだったじゃないか。そして立派な仕事をしたじゃないか。」というと、マーレイが、「いやいや、私がやったことは、ほんとは大事な仕事ではないんだ。何が大事かというと、人を思いやること。これが人間にとっては大切なんだ。私たちの仲間をどんなに大事にするか。それによって私たちは死んでから後、みんなに喜ばれる、あるいは社会のために役に立ったと認められるんだ」。そのときの言葉に、“Mankind is Our Business”という言葉が入っているんですね。この言葉がどこに出てくるかと思って探したのですが、幽霊がしゃべってるところで見つけました。ああ、これが今年のテーマだな、と思いました。今年度はそういうテーマを掲げているということは、私たちはロータリーの役割を、そこに焦点を合わせているということです。

そこでは、国益を越えた人類益をみんなが追求していこう。１人１人の幸せを考えることが実は平和の概念なんです。

つい最近まではソ連とアメリカがそれぞ

れの陣営に核爆弾を保有していました。どっちかが多くなればもう一方も増産するというような核の力の均衡が平和のもとなんだと考えられていました。しかしそうではなくて、人間１人１人が互いに支え合ったり、理解し合ったり、愛し合ったり、励まし合ったりすることでできる、人間そのものを中心とした平和を考えようというふうに社会も変わってきました。

ロータリーは毎年国際会長がターゲットを出しますけれど、そのターゲットを見ますといろんなことがわかります。20年前に日本から出た会長の、向笠さんは“Mankind is One”人類はひとつというテーマを掲げられました。「あなたのお父さん、お母さんにはそれぞれにお母さんとお父さんがいる。お母さんとお父さんにもそれぞれお父さん、お母さんがいてそのお父さん、お母さんにも２人ずつお父さんとお母さんがいる。50代遡ったら今の世界の人類と同じだけの数になってくる。そう考えたら人類はみんな親戚なんだ。われわれの仲間なんだ、家族なんだ」という考え方を出しました。

ある会長は、“Show Rotary Cares”、ロータリーが他の人のために親切にしようとする考え方、ロータリーの心をみんなに見せようじゃないか、というテーマを掲げた人もあります。

ロータリーが今まさに変わろうとする。そのためにはみんなでお金を出そう、とロータリーの中に、始めは小さな基金を作りました。それがやがて、ポール・ハリスというロータリーの創立者が死んだときに、ポール・ハリスは、「私のために記念碑なんか造ってくれなくていいよ。みんなで私たちの心を世界中に広めてほしい」と言ったことを思い出して、じゃあ基金を作って若い人たちやいろんな地域にいる人たちのための奉仕をもっとしようじゃないか。こうしてロータリー財団という組織ができました。

今している、一番大きな仕事は、世界から小児マヒをはじめとして、強固な伝染病を無くしてしまおうという運動です。これで、20年近くかかりました。そして今、世界の99％の地域ではポリオ・フリーを宣言することができたのに、インドの北とパキスタンの北と、アフガニスタン、これらの地域がひとつ残っています。もうひとつはアフリカの西のところに、これは内戦のためにポリオのワクチンを運んでいくことができない。この２つの地域から無くしてしまって、世界中の子どもがそのような病気にならないようにと、一生懸命やっています。面積的に言いますと99％はポリオ・フリー。あと１％、これをこの２～３年の間にやってしまいたいというのがロータリーの大事な目標になってます。

安平先生にお願いしたいんですけれど、来年の１月くらいにインドの北で、そのナショナル・イミュナイジング・デイという、政府もロータリーに協力をして、ワクチンを子どもたちに投与するプログラムをします。できればそれに参加しようじゃないですか。

2650地区の京都の人たちは毎年いろんなところに行ってます。あそこはローターアクトの人たちが行くんです。あるとき地区の人が、旅費を半分補助しようかと言った

ら、「旅費の半分を出してもらったら観光旅行になります。私たちは奉仕に行くんですから、旅費はいりません」ローターアクター達、かっこいいですね。そういう気持ちを持った青年たちが、少しずつ増えてるんです。

ロータリーのスタンダードも、かつての基準から変わってきたのです。奉仕の仕事というものを、そして体で働くという本当の意味で問題にし始めたということが、100年の間に大きく変ってきた問題です。

インドの人たちはずいぶんたくさんの地区にロータリーを作っています。それは、ポリオを無くすために、ここの村落にロータリーを作ってそのロータリーの人たちにその村落を見てもらおう。今ロータリーは、仲間を集めようと努力しているんですけれど、インドでは1人で300いくつのクラブを作ったパストガバナーがいます。ポリオをなくすためにこの地域で1つクラブを作ってくださいと呼びかけて、みんなが喜んで集まってきてクラブができていくというような地区もたくさんありました。

私の言いたいことはたった1つです。時代が変わったのです。ロータリーもいつまでも立派な会場で食事をするだけでは済まなくなってきた。世界のどこかで災害が起きるとお金を出して――パキスタンにもお金が行ってると思います――。いるんだけれどもあんまり感謝されない。なぜかというと、顔が見えないから。そうではなくて、僕らも一度行こうじゃないか、一緒にやろうと言ったら喜んでくれますよね。そういう奉仕の仕方を今しなくちゃならなくなってきました。そのためには私も行くんですよ。けれど歩くんだったら、荷物を担ぐんだったら若い君たちの方がやっぱり担げるんでね。そういう意味でロータリーに若い人もたくさん入ってもらいたい。アフリカでは食事を済ませたあとでみなで集まって会合を開くというプログラムを組んでいると聞きました。例会のもち方も変わってまいりました。それではロータリーだけが変ったかといえば、実はそうではないんです。

同じ目線で見ること

昨日の話を聞いていて、みなさん達は子どもの目線に合わせることの大切さを学びましたね。もう1つの大事なことは、コミュニティについていろんな話が出てまいりました。たとえば子どもが何か悪いことをしたときに、その子を叱っていいのか、叱っていけないのかっていう話は深刻でした。下手に叱るとチューインガムを貼られるとか。子どもがもしもそのおじちゃんが自分のことを思って叱ってくれているということが分かれば、そういう報復はしなかったでしょう、多分。何のために叱られたのかも分からない。昨日の話で、よし、報復だと出かけていったという人もいましたね。そういうときは、両者の信頼関係とか理解とかいうものが充分でなかったという話でした。社会の価値観が変わるときによく起こる。だから昨日みなさんが出したコミュニティの問題というものは、実は基本的に大事なフレームなんですね。今のように同じ目線で見るということは、時代の変化の中で子どもたちと大人の間の価値観が違ってきているということと関係がある。みなさんが今の年寄りはあかん、と言うと

きは、年寄りが持っている価値の体系と、皆さんが持っている価値の体系にズレがあるということです。時代が激しく変化しているためにほとんど断層的に、10年位ごとにその変化があり、価値の体系が大きく変わってきた。そして価値の体系は、これからもっと違った形になるでしょう。これについては話し始めると1時間では済まないので、いくつか本を紹介します。後でみなさんに勉強してもらいたいと思います。

百年後の地球

21世紀は激動の時代とよく言われます。

イギリスの、車椅子の物理学者、ホーキンス博士という人がいますね。退筋脳性マヒで、話すことができない、手も動かせない。車椅子に乗っている方ですけれども、実に頭のいい先生で、将来を見通して、いろんなことについて発言をしてくださっている。この先生が、「1000年後には、人間は他の惑星に移動せねばならない。オゾン層が破壊されて、だんだん温暖化が進んで地球に人は住めなくなるから惑星に移住しなければならなくなるだろう」と言っています。

おととし、私たちはミレニアムということで大変騒ぎました。センチュリーは100年の単位ですね。ミレニアムは1000年が単位で、ちょうど2000年の節目で、お祝いをしました。しかし、なぜそんなにお祝いをするようになったかというと、西暦3000年にはもう地球は無いんじゃないか、人類は滅びるんじゃないかということをかすかに予感しながら、せめて2000年は人類の年として祝おうじゃないかという気持ちがどこかにあったと思います。

先日2680地区の地区大会がありました。赤木ガバナーが環境の問題を中心にしようと企画され、環境問題のキースピーカーとして何人か来ていただいてお話を伺いました。その中で、種子島と筑波の宇宙センターの所長をしておられた菊山先生が来られて、宇宙の話をされました。宇宙食の話とか、宇宙船に乗って行ったらどんなになるのか、無重力になるとどんなことが起きるのかなど、おもしろい話を聞きました。

「例えば、地上で髪の毛を梳いても髪の毛は重いからサーッと下に落ちていって何ともない。宇宙で髪の毛を梳いたら髪の毛の切れたものがふわーっと浮いてきて鼻に入って、のどに引っかかる。だから、髪を梳く時は片一方でその抜けた毛を吸い込む装置を使いながら、髪の毛を梳くんです」という話など、いろいろうかがいました。そのときに「宇宙にシェルターを作って、3人の人が住んでいるんです。だんだん長く住めるようになって、交代でやっているんです。食料はこちらからロケットを打ち上げて運ぶ。帰りは何を積むかというと、みんなのうんちを積んで戻ってくる。地球に再突入するときに燃えてしまって何もなくなる」。これは水洗便所じゃなくて宇宙便所とでも言うのでしょうか。そういうことをしながら、3人の人が住んでいるそうです。その菊山さんが「100年後には、人間がみんなそこに住める」と言うんですよ。みんな、うそーっていうような顔をしていました。すると菊山さんが「ロータリーができたのは、1905年でしょう。もうすぐ100年でしょう。その1～2年前に、ライ

ト兄弟が初めて飛行機を飛ばしました。(確か1903年か1904年だったと思います。)ライト兄弟が初めて飛行機を飛ばしたときに100mほど浮いて、うわーっ、飛行機が飛んだと言ったのが100年前です。」

そのライト兄弟が飛ばせた飛行機は、君達にとっては歴史上の話ですが、私には現実のものなんですね。戦争中私は航空隊で飛行機に乗っていたんですが、プロペラ機です。視界飛行ですから雲が出ると見えない。地図の上で出発地から目的地までまっすぐ線を引く。方角を測ってその方向にまっすぐ飛行機を向けて飛ばす。30分飛んだら300km飛んだといって、コンパスを回して直線と交差したところが今の地点。そこから何分飛んだら目的地に着きそうだ。そういう飛行機でした。強い風が吹くと飛行機はひとりでに流されて、まっすぐ飛んでいるつもりでも、だんだんずれてきます。

今はそんなことはありませんね。昨日鳴門からここに来るとき車にナビゲーターが付いてました。「もう300m行ったら右に曲がってください、この道をまっすぐ900m走ってください」、って音声で教えるんです。「目的地までまっすぐ直線で300mです」。着いたら「お疲れさまでした」って。僕が飛行機に乗っていたときにあれが付いてたらどんなに便利だったか。今の飛行機は私たちが乗っていた飛行機とは全く違う乗りものです。

ご存知のように、1969年ですか、初めての宇宙衛星で人間が月に達した。世界中の人がテレビで月世界を歩いている人間を見た。あんな遠い月の世界に間違いなく行けたのは、コンピュータのお蔭です。それがなければ人間は月に行けなかった。言い換えたら高度技術が、私たちの生活を全く変えてきたわけですね。だから菊山さんは、「そのスピードで進歩するならば、心配いりません。飛行機が月に着陸できるようになるまでに100年もかかってないんですから。宇宙ステーションへみんなが遊びに行けるようになるのにもう100年もかかりませんよ」と。それでホーキンス博士が、1000年経ったときに、人間が地球に住めなくなったら、人間は知恵で宇宙に脱出して生きていくんだということを言っているのでしょう。

文明の衝突

そういうふうに技術はどんどん進んでいきますし、私たちはその技術を使っていろんなことを考えていますけれども、実はそれがいくつかの問題を引きおこしています。世界の枠組みが変わっているということを考えなくちゃならない。サミュエル・ハンチントンが、『文明の衝突』という本を書きました。

文明の衝突という、これはおもしろいんですけれども、世界は基本的にいくつかの文明社会の枠組みに分かれている。そこで1つの共通の価値観を持っているというんですね。ハンチントンは、世界を8つくらいの文明の枠組みで考えた。

1つは、西欧諸国で西ヨーロッパ並びにアメリカ。これはその思想的背景をキリスト教文明と考えることができます。ロシアは、ロシア正教会の文明に属している。それからパキスタンとかアフガニスタン、あるいはアラブ諸国はイスラムという宗教に

よる１つの文明圏を持つ。インドはヒンズー教という文明の中で育てられてきただろうと。そして、アフリカは、アフリカ文明圏というものがあり、南アメリカは南アメリカの１つの文明圏があるだろう。こうしていくつかの文明圏に分けたときに日本は中国文明から分かれたんだけれども、1000年の間に全く違った文明を育ててきた。それは小さな島の中で1000年の間に、中国からオリジナルを持ってきたものが少しずつ変化をして、日本の独特の文明を作り上げてきた。だから日本の文明は１つの文明と考えることができる。ハンチントンはそう言うんです。さらに彼はこう言うんです。「この文明を対話をさせていこうとするとき、自分たちに一番近いグループと話し合うことはできるだろう。たとえばアメリカはイギリスあるいは西欧諸国がキリスト教文明というものを中心にしてつながっていくことができるだろう。韓国は中国と連なって中国文明の中に入るだろう。イスラムはイスラムの世界の中にいるだろう」と。

こう分けたときに、最後にひとりぼっちになるのはどこかっていったら、日本だということが分かる。日本文化はユニークだ、というのは立派だけれども、異文化が協力して世界を作らなければならないときには、日本は今は経済的な力を持ち、いろんなところと連動してるし、アメリカもいろんな力関係で日本と仲良くしているけれど、本質的に仲良くするということは文明の中の同類、同じような価値観を持ったところの文明同士なので、日本はやがて、孤立化するだろう。日本はもっと世界のいろんな違った文明と交わって、互いに価値の体系を理解し合わなければならないというのがハンチントンの１つのサゼスションです。『文明の衝突か』という題で、1993年に『フォーリン・アフェアーズ』という雑誌に載りました。世界中の人たちがこの論文にびっくりして様々な論争が起こり、その結果、もう一度ハンチントンが『文明の衝突』という一冊の本に書きあらためました。これには粗雑な論理も入ってるものですから、全ての人が承認してるわけではありません。

でも日本はいつの間にか孤立化してしまう危険性があるんだという大きな警告を私たちは深く受けとめなくてはならないと思います。21世紀にどういう格好で日本が世界と交わるかということについては、いろんな人が書いています。

日本文明の特徴とは

例えば梅棹忠夫さんは『文明の生態史観』という本の中で、日本は独特の文明を持っている。中国とも違う。中国は山の中で、あるいは草原の中で育った文明だけれども、日本は海洋を中心として育った海洋文明であって、基本的に大陸文明と違うんだ。しかし不思議なことに日本の海洋文明が発達したときと、西洋の文明が発達したときは、時期を同じくしている。真ん中にユーラシア大陸を置いて、東と西では違った文明の形をしているけれども、非常に似かよった文明の発達をしていると言っています。日本が持っている良さというのを梅棹さんは書いています。確かにそれを見るとおもしろいんですね。昨日は元禄の時代とか江戸時代とお年寄りと隣組とが一緒にな

っていましたけれども、みなさんの中でヨーロッパに遊びに行ったことがある方はいらっしゃいますか。

私は、ロマンチック街道へグループで行ったんです。ローテンブルグというきれいなおとぎ話のような小さな町があります。観光の町なんですが、そこでは靴屋さんには靴の格好をした看板がぶら下がっている。帽子屋さんの看板は帽子を切り抜いたような作り方がされている。荒物屋さんの看板はやかんかなにかがぶら下がっている。そうしたら日本のおばさんたちが、「やっぱりいいねえ、ほら、靴屋さんの看板ってすぐ見たら分かるじゃないの、やっぱり知恵があるわね」って感心してるんです。ところが、梅棹さんの本にはこう書いてある。「日本では江戸時代に寺子屋ができて、武士の階級は藩校ができて、そこで読み書きそろばんを習っていた。だから、江戸時代には町民でも寺子屋で勉強をして、もう30%くらいの人たちは読み書きの地ができたんだ。それに反してそのころのヨーロッパの人たちはほとんどまだ字が読めなかった。だから、看板に靴屋と書いたのでは誰も分からないから、靴の看板をぶら下げ、荒物屋さんと書いても分からないからやかんの形の看板をぶら下げた。日本ではもう、江戸時代にすでに“売り家と唐様で書く三代目”とか何とかいうですけれども。そういう字を書いて、それが看板として通用したので、あんな形のものがぶら下がってないんだ。見方によってそういう解釈ができるんです。真実というものはいろんな角度で考えることができるんですね。

もう1つ梅棹さんの直接のお弟子さんではありませんけれども、梅棹さんと共鳴しながら今活躍している方で、川勝平太さんという人が『文明の海洋史観』という本を、1997年頃に書いておられます。

彼は太平洋の中における日本の文明というものを、大事に考えている。日本には中国や朝鮮半島を経由して来る文明も多いんですけれども同時に、太平洋諸島から上がってくる海洋民族の知恵がたくさん入っていて、そこに大陸とは違った文明が発展しているということを書いています。「インドの木綿が東の方へ渡ってきて日本、西の方へ渡ってヨーロッパへ伝わる、木綿の伝播の速度によって、文明が２つに分かれている」というようなおもしろい比較をしながら、「日本は西洋文明とそのルーツを異にしながら同じように発展をしてきた大事な場所なんだ」と書いています。

１つは、ハンチントンが言うように日本の文明は特殊であって、それがすばらしければすばらしいほどよその文明とは衝突するということであります。日本文明は、長い歴史の中で幸か不幸か、海に囲まれていたために独自の文明が発達して、それがすばらしい文明として発達してきた。世界の中においては特殊なものだということです。新しい時代にはこの特殊なものが世界という１つの大きな価値の体系を作るときにどういう役割を果たすことができるかというのが、大きな課題になっているのです。

グローバリゼーションの中で

私も国際ロータリーの理事をしている間はアメリカをはじめ海外へ行きました。今

もボンベイに2月に行ったり、1月にはアメリカに行っていました。この6月にはバルセロナに、8月にはブリスベンに、オーストラリアに行く予定です。会議は何語でするかって言ったら、英語なんですよ。八幡先生みたいにね、日本語も英語も同じくらい流暢な人はそれでいいんですけれど、私は苦労しながら、私たちのやっていることや問題を、何とかして向こうに伝えなきゃならない。そして私たちにはこんな考えがありますよ、こんな協力ができますよ、ということを話さなければならない。この努力を日本の人たちは怠ってはいけない。文明が特殊でしかも世界の中で大事な役割をとればとるほど、そのことを他者に伝えていく責任がある。私らは私らだけでやるからいいよという時代は過ぎているんです。グローバリゼーションとは、実はそういうことなんです。一方においては日本を見つめながら片一方においては世界を見つめるということを、私たちはしっかり考えなくちゃならない。これはみなさん方しかできないっていうことですね。これがもう1つであります。

核家族化と産業化

さて、皆さんに読んでいただきたい本を紹介します。『社会変動の中の福祉国家』という文庫本です。著者は富永健一っていう社会学者で、東大の名誉教授ですが、中公新書で去年の8月に出た本です。

富永健一さんはこんなことを書いているんです。

「私たちの国の家族の構成が変わった。」これは昨日の話が関係してきます。今までは時代が変わるぞという話、これからは昨日みんなが指摘したように私たちの周りが、変わってくるぞという話です。

農耕の文明を持っているところでは、農耕のためには大勢の人手が必要ですから、大家族になります。日本でも農耕を中心とした社会を作っていたときには大家族でした。白川郷の大家族みたいな生活をみんながしていた。1つ屋根の下でおじいちゃんもおばあちゃんもいとこも皆一緒に住んでという家族です。そういう大家族制度を持っているのは農耕文明社会の特徴です。拡張家族といいますね。

それに対して、次第に産業化が進み、資本主義の社会ができ、工場ができて、その回りに都市ができる。イギリスなんか見ますとね、田舎の方ですけれども川が流れて、滝があるところに水車を作って、その水車の力を使って工場を作って、その工場の周りに人が集まって町ができたというところはたくさんあります。家族全部を連れて移り住むことはできませんから、おじいちゃん、おばちゃんを農村において、工場の働き手となる人たちはその工場の近くに集まってきます。これが都市化という現象なんですね。産業社会へと社会構造が変わるにしたがってそのような現象が起こります。その現象にしたがって家族も大家族から核家族化し、自分の奥さんと子どもだけを連れて都市に集まってきて、アパートのようなところに住む。

あちこちから知らない人たちが集まってそこに住んで、工場で働くということになります。都市化という現象が起こってきます。

機能を失った家族

そうすると核家族というものができてまいります。富永さんは、それが今またいろんな形で変わってきたと言うんですね。「核家族というものが、家族の機能を失ってしまいました」と言うんですね。

まず、専業主婦の数が少なくなった。場所によって違います。農村にはまだたくさんおられますけれども、都市では専業主婦が少なくなった。

それからもう1つは、家族が解体した。単身者所帯が急増した。この2つの現象によって、家族としての機能を消失してしまった。家族の機能というのはいろいろあります。昨日の河合先生の話では家族の機能の中で、防衛とか子どもたちの教育ということがありましたね。実は、今の日本の場合には防御をするっていうのは警察です。昨日の報告に、暴走族のような人たちが集まったから注意しに行こうと思ったら奥さんに止められた。いや、それでも俺は行くって勇気を出した人はどうしたか。自分一人だけで何かあるといけないので、警察に通報しました。警察というのは、市民の安全を守るという防衛機能なんですね。もう家庭だけでは防衛することができなくて、警察という防衛機能を使うことができるんです。

昔、私が子どものとき、私の父親は刀を持っていたんです。何でかというと、泥棒が来たらそれを握って私たちを守る。私は、「すごいなあ、うちの親父、僕らを守るために刀を持ってる」。たまに庭でおじいちゃんがそれを持ってね、エイエイエヤーなんて言いながら素振りをする。幸い泥棒が来なかったから使うことはありませんでした。昔の家では誰か賊が入ってきたら父親が家族を守るというように、父親は防衛の機能を果たしていました。このごろは警察がそれを果たします。

本来家庭は教育の機能を持っていていろんな社会的役割や伝統や、私たちは社会に何をしなければならないか、どうすれば人様に迷惑をかけず、どうすれば人様から喜ばれるかということを教わる場でした。今、教育の機能は学校に預けられてしまっています。「先生、もう少しお行儀を教えてください」なんてお母さんが言いに来るという話も聞きました。

病気になった子どもを抱えた若いお母さんがお医者さんのところに飛びこんできて、「先生、うちの子病気です。熱があります」「そう、何度あるの」「知りません。測ってください」。とにかく何かあったら、病院に担ぎ込めば親の役割は済んだと思っているみたいです。昔は子どもが熱を出せば一晩中頭を冷たい水で一生懸命冷やして、まだ熱があるとか言って、ほのぼのと夜の明けるころ子どもの様態が少し安定してきたらほっとしたというような父親と母親がいましたね。

富永さんは家族の機能がすっかり変わってしまった、変わったというよりも壊れてしまったと言っている。そこから昨日出たようないろいろな問題が出てくるんです。この壊れてしまったというのは何だろうか。

富永さんは「近代産業社会の構造」を取り上げています。近代、約150年ほど前、

言い換えたらば資本主義の経済が確立して、新しい社会が生まれてきたときです。その近代がだんだん進んできました。100年以上かかって、私たちはすばらしい都市をつくり、すばらしい機械を作り、すばらしい経済構造を作り、そして私たちの回りで物は豊かになってきた。これがまさに近代産業社会です。

今は近代産業社会

ところが、ポストモダンという言葉をこのごろ使いますけれども、近代社会が新しい段階に入ったとみんな言うようになったけれども、1980年代の後半からよく言われるようになったポストモダンというのは何かというと、これもまた、近代である。産業社会である。資本主義社会である。じゃあどこが変わったか。私たちが今まで仕事をしてきた力、水車を動かしていた力、動力が全く違ったものに変ると同時に、新しく現れたコンピューターが社会を全く変えてしまったということです。

先ほども言ったようにみなさん方の歳に私は飛行機に乗っていました。それを動かすのはプロペラでした。だから今のように地図の上でこう、書かなきゃならない。

今やコンピュータです。コンピュータが発明されたことによって、私たちは全く違った世界にいます。スピードだけでも考えてみてください。昨日河合先生は、600万年前くらいに人類が生まれただろうとおっしゃいました。おそらくヒトという動物はそのころ生まれました。しかし人が文化を持つ、要するに人間になってきたのはだいたい6000年前から、もしもこれからいろんな遺跡が見つかったとしても10000年くらい前に遡るだろうということです。

中国で今まで一番古いといわれていたのは黄河文明と言われ、その源流はヤンシャオ文化といわれています。仰韶という町で物が発見された。それがほぼ5000年前くらいですね。それに対して最近、長江の文明は7000年前にはもう稲作文化として成長していたといわれるようになり、中国でもどこが一番古いのか問題になっているということです。けれども、少なくともそのくらいから発展してきたんだ。農耕文明社会では、移動するときには歩いて移動する。せいぜい1時間に4kmしか移動できない。ところが馬やらくだに乗るようになりますと、1時間8kmくらいで移動する。馬なら20km/時くらいのスピードで走らせることができるんです。アメリカの西部劇で、列車襲撃の場面では馬が20km/時くらいしか走らないのに、汽車に追いつくんですよ。今馬が「ひかり」に追いつくか。そのようにスピードの点からみても違う。それが今、宇宙ロケットを打ち上げるときに、あれ1分くらい飛ぶのかな、秒速11kmで地球の重力を離れる1時間に4km歩いてるのとスピードが全く違う。そういうスピードを作るエネルギーが中心となって、世界を全く違ったものに変えてしまったといえるでしょうね。

富永さんは、近代産業社会は、脱工業化社会ではあるかもしれないけれどもやっぱり産業社会なんだ、しかしそれは、ツールが違うということですね。高度技術というものが、新しい社会を作っております。だから私たちはその意味では産業社会が抱え

ている大きな問題をしっかり見なくてはならないし、ツールとして使う高度技術というものが何かということを考えなきゃならないんだと。最初に八幡先生にその話をしていただいた理由はそこにあるんです。私たちの時代がどんなに変わるかということと同時に、その中でやはり、高度技術は道具であって、使うのは人間なんだと。そして人間がそれを使うことによって、今までとは違う新しい企業とか新しい産業が開かれなければ、新しい時代にはならないということを、具体的にそれをやっておられる八幡先生に来ていただいて、みなさんにサンプルを見せていただきたいと思ったんです。

彼はこんなことをいいました。「しかしその近代社会が今のように情報を中心とする情報社会になったときに、技術が進んできたためにもう1つ起こってくるできごとがある。それは、私たちが大量生産がよいと思って生産したことが、実は逆に私たち自身の生活を飢饉に陥れるような状況になってきた」。昨日河合さんは熱帯雨林が今、どんなに速いスピードでなくなってきてるかという話をしておられました。そして木を切って、外国に売る。もう2度とそこに木は生えないし、砂漠化していく危険がありますよという話でした。

こうしたことを、ウルリヒ・ベックというドイツの人が、「今の社会はそのような意味においては同じ近代社会、同じ産業社会であるけれども、同時にこれは危険社会だ。良いと思って生産したものが、逆に私たち人間の生活を圧迫するような時代になってきた。」と。もう1つ、ウルリヒ・ベックはギデンズ等と一緒に「反省的近代化」ということを言っています。この本は1994年に出ています。

要するに今の時代は、自分たちがこれまでいいことだと思っていろんな道具を使ってやってきたことを、慢性的に続けていくことができない。例えば核の力というものは大きいが、それをどう使うかということについて、はたしてこれが人間のためになるのかどうかということをあらためて考えなければならない。私たちの社会は決して、そのような道具ができたからといって豊かになるとは限らないとい。その意味で、現代は反省的近代化の時代だと言っているということを覚えておいていただきたい。

質の違う成長を

富永さんは、こうして壊れていくときに誰が支えるのかということについてある提案をしております。「もし家族が壊れてしまったとき、その家族の機能を代わって支えるものは何かと言ったら、それは国家だ」というのが彼の考えです。ここは、あまり賛成していない箇所ですが、そういうことを言っております。でも、私たちの誰かがどうにかしてその欠けている場所を補わなければならない。

今みなさんの問われているのはね、今までの延長上でものごとを考えるなら、日本の社会は成長していけないのではないか、ということを私は言っているんです。みなさん方は、私たちが育った社会と全く違う社会の中で、しかも全く違うツール、例えばコンピュータだったり、携帯を持っている。

私も携帯を持ちはじめましたが、かけ方だけ覚えました。その意味では八幡先生から言わせると、メディア・リテラシーなんですね。けれども、新しい時代は20世紀とは全く質が違った時代になり、経済は、決して今までと同じような成長にはならない。それをどうするかはみなさんの課題です。

だからこそ私はＲＹＬＡのみなさん方ライラリアン（ＲＹＬＡの経験をしてる人ですという意味です。）がロータリアンになって私たちの未来を担ってほしいんです。

私たちは今これまでとは全く違った社会を迎えようとするときに、「危険社会」と言われたり、あるいはそのことを抑制しながら私たちの社会の発展を考えなければならない時代になってきた。出会い系サイトなんて技術自体は何も悪くなくても、使い道が悪いわけです。そういうことを考えるときに、どういう抑制をするかというのは人間の側の問題です。生活の側の問題ですね。

人間社会の構築

これについて、人間の生活とはどういうことかという側から問題を提起した学者もいます。

例えば、カナダのバニア家族研究所の所長でウィリアム・ダイソンという人がいます。1980年ころに香港で世界会議をしたときに、これは社会福祉の陣営において、人間の生産の側ではなくて人間の生活の側に立って人間社会をもう一度考えようという集まりでした。そのときの問題点は何だったかというと、私たちの時代は、方向性を見失った。今までは追いつき追い越せで、アメリカのような豊かな国が1つのモデルでした。したがって日本は戦争に負けたときに、アメリカをモデルとして描けばよかった。そしてアメリカに追いつくように一生懸命やった。アメリカの鉄鋼に追いつくように鉄鋼業を育てていこう、アメリカの自動車に追いつくように自動車を造っていこう。こうしてやっとアメリカに追いつきました。アメリカが前を走っているうちはその後ろを走っていけばいいんだ、というのは楽です。ところがいよいよアメリカより前に出た。今までは見てまねをしながら走っていて、少しスピードさえ上げていれば大丈夫であった。一番前に出たら、どっちに行ったらいいか分からない。実はそういう状況が日本だけではなくて、世界のあちこちで、さあここまで来たぞ、次はどっちへ行こう。道に迷ったようなもので、ここまでは間違いないなと走ってきたけれども、ある分岐点に来たときに、たくさん枝分かれしている道の、どの道を行ったらいいのかということが分からなくなって、時代の方向性が喪失した。僕らは戦争から帰ってきたときに、ひどい目にあって残念だ、しかし何とか私たちの日本を世界の一員として加えたいと、必死になって努力をしてきました。

ところで第二次世界大戦の特徴は何かというと、民主主義と帝国主義の戦いでした。

カール・ラビッツという、第２高等学校の哲学の先生をしていた人が、「日本の不幸は、世界の近代化がようやく自分たちの近代化における問題を感じ始めたころから出発したことだ」と言っています。イギリ

スがインドとかあるいはマレーシアを植民地にして大きくなってきた。ドイツはアフリカで植民地を作り、フランスは、仏領インドシナといわれた今のベトナムだとかラオスやカンボジアを自分たちの植民地にした。こういう帝国主義的な経済構造、植民地から資源を奪って加工して元に戻していく、こういう形で大きくなってくる資本主義の帝国主義的な考え方で成長した国に並ぼうとして、日本は戦争を始めることになった。そして戦争を始めるときに、他の国はこのような帝国主義的な考え方は、他の人たちを道具として扱うことだと深く反省をしていました。

その反省に気がつかずに、帝国主義というもの、近代化というのはこういうものだ、としゃにむに走ったところに、日本の不幸があると言ったのが、カール・ラビッツです。

これはおもしろい指摘です。やがて日本は戦争に負けました。だから第2次世界大戦は民主主義と帝国主義の戦争で、帝国主義が負けた、と言われるのです。その証拠に、帝国主義的な戦争であるならば、戦争に負けた国は国土を失い、そこの国の人たちは奴隷に売られたかもしれません。しかし日本が戦争に負けたときに連合国は日本の国を取らなかったし、そして日本の人たちを奴隷にもしなかった。ただ日本が帝国主義的な考え方の中で取り上げた、よその国の土地は返しなさい。台湾を中国に返し、樺太はロシアに返し、満州は中国に返しなさい、ということですね。それは、民主主義は他の国を侵さないということだったからです。日本は初めてそのときに帝国主義の間の戦争と民主主義の間の戦争との質的な違いを見い出した。そのときに戦争に勝った側、イギリスとか、フランスなどの国々は自分が持っていた植民地をそれぞれの民族に返しました。だからインドでも、第二次世界大戦後の1947年に初めて独立をしたんです。長い間独立運動はあったけれども、ほんとにイギリスに返してもらえたのは1947年、この前の戦争が終わってからです。帝国主義と民主主義の戦いが終わり、新しい時代を築く民主主義的な考え方によって世界のみんなが仲良くなろうとしたためにそうなったんです。アフリカの国々の多くは、ヨーロッパの国々の植民地でした。インドネシアはオランダの植民地でした。それが民族自決の考えのもとに次々と独立しました。

さて、戦後新しい時代の世界をどうするかということについては、まず経済が発展してまいりました、それは産業社会、技術革新が進んでいったからと話しましたけれども、ダイソンという人たちがやった会議の中で１つの大きなことはどういうことかというと、産業の効率化、単純に言えば大事なことは一生懸命金をもうけるための効率化を考えてきたときから産業経済は社会を豊かにすることよりも、結果としては経済成長を追求することになりました。その考え方の行き過ぎが、今問題になってきたのだから、これからは社会、人間の生活ということを中心として、経済がどうあるべきかを考えるべきではないかと提案したのです。

ダイソンは３つのタイプのリアリティーというものを考えました。

3つのリアリティー

1つは、数量的なものを追求した結果が物質リアリティーの支配する世界を作ることになるんだということです。これが1つのタイプです。もう1つは、ヒューマンイシシック、人間的ではあるけれども高度の個人主義的な社会、これは自分たちだけが豊かになればいいんだという高度な個人主義的な世界が考えられるだろう。3番目は、人間の相互関係と全人的な関係の有機的世界。こういう3つのタイプのリアリティーがあるだろう。しかしこれからは、私たちは「人間的ではあっても個人主義的」というのではいけない。むしろ人間と人間が相互に対話をしていく社会の中で、全人的、要するに、人間全体の関係を築かなければいけないんじゃないかと提案をしています。まだそうなってませんよ。この考え方は、あらゆる人と「ともに生きる」ということです。「ともに生きる」とは具体的には何かというと、他の人、例えばよその国の人とどう生きるのか。

「障害者」という言葉は差別用語だとして使われなくなって、障害を持っているというのはその人の1つの特徴なんだと考えるようになりました。しかし、ホームレスの人を私たちの地域社会に受け入れているか。あるいは外国の人を私たちの地域社会のメンバーとしているか。選挙権はありませんよ、何はありませんよという形になってはいないだろうか。福祉の社会では人間の相互関係を全人的な、すべての人間を人間として受け入れあうことによって、新しい世界を作ろうではないかと提案してるということです。これも1つの大きな問題になっております。

ですからこれからは人間本位の新しい社会開発のタイプを考えなくてはならない。私が八幡先生に講演をお願いしたときのポイントは、高度技術社会が人間性を疎外するのかどうかということでした。高度技術社会だからこそ、私たちはより豊かな人間の関係をどこかで結ばなければならない。携帯電話ができて誰とでもいつでも話ができる。娘が出かけるときに友人へ電話をかけて、「大阪で会いましょう。何時？3時に大阪でね」と言って電話を切るものですから、「大阪って広いんだぞ。東口か西口だとか、どこの前だとか約束をしないと出会えないんじゃないか」「ううん、大丈夫。大阪まで行って、あなたどこ、私はここって、携帯で確認するから」。

なるほど、そんな世界かと思いました。

ツールとしての携帯電話はいろいろ便利になってきた。でも、それはあくまでもツールですから、何に使うのかというと、それは、人間本位の社会開発に役に立つのかどうか。八幡先生、高度技術って、人間性を崩壊させようとしているんですか。あるいはそれによって人間社会ってどう変わっていくんでしょう。そして人間は豊かになりますか。これが私の、八幡先生に対する問いでした。

自然というものを私たちは道具に使っているけれども、自然の中に生かされている人間として謙虚に生きることから人間の命の大切さが見えてくる、社会生活を発見するということについては、河合先生に、おサルさんはどうするか、そして人間は、今

自然との交わりの中で何が抜けているのかということを話してくださいとお願いをしました。

例えば自然のことを考えるときに、自然というものを与えられたら普通にそこにあるもので予見ではないんです。この自然を通してどうして私たちが生きられるか、人間もまた自然の中で生かされている動物の１つにすぎない。何万種類ある動物の1つにすぎない。それが自然の中でどのようにしてお互いが共生しあっていくかということについての学びが必要なんです。

先生は、内なる自然ということを言われました。機械文明が進み医学が進んでくると、死んだ人の生きた心臓を、生きてる人の壊れた心臓と入れ替えて、部品を交換して一丁上がりって、健康な人間にして、しまいにこの人誰？っていうような人間ができるという話もありました。いったい自然とは何なんだろう、人間とは何なんだろうこれは本当に大きな問題ですけれど、今まではそのことをあまり考えませんでした。高度技術社会の弊害ことも考えなくてよかったんです。ああ、いろんな物を売ってるな、じゃあテレビ買おうかって買えばよかったんです。これからを生きるあなた方はそうじゃないんです。それに加えて、私の社会をどう作るかということを考えなきゃならないんです。だから、いい加減な生き方をされると困るんです。社会への責任を持って生きてもらわなきゃ困るんです。そして１つ１つの考えを組み立てて、何が新しい社会のためになるのかということを考えてもらわないと困るんです。

そういうことを言っている学者はすでにたくさんいるわけです。

経済学に人間性を取り入れて

シューマッハーという学者が『Small is Beautiful』という、経済学の本を書いたんです。この人はイギリスの議会の、特別経済顧問のような仕事をしている人ですが、この前なくなりました。『Small is Beautiful』

日本語に訳されたときのサブタイトルは『人間中心の経済学』です。経済学は経済学という学問としてそのまま先に行くんでなくて、それを人間の生き方の中にどう利用していくのか、その点が、同じ科学でも多少違うところがありますね。こうして彼は、『Small is Beautiful』の中で、人間に必要な資源はどれだけか、それを私たちはどのようにお互いにシェアし合えるかということを考えようと書いています。

もう１つ、最近注目を集めている１人の学者がいます。インドのベンガルで生まれ、イギリスで勉強されて、1998年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センです。

彼はアジア人としては初めてのノーベル経済学賞をもらった。おそらくアジアの中では、経済は日本が一番進んでいるだろう。その進んでいる日本の経済を分析したり、あるいは考えたりする経済学者は日本の中にたくさんいるはずです。でも、ノーベル経済学賞を受賞した人はまだいません。

国のステータスは何で決まるかというと、その国が世界にどれだけの貢献をしたかということです。その際、どの分野で何人の、例えばノーベル賞をもらった人がいるかということが１つの指標になるんで

す。

インド独立の父といわれるマハトマ・ガンジーの「マハトマ」っていう名前は、「偉大なる魂」という意味なんですって。「アルマティア」っていう名前は「永遠に生きるもの」っていう意味だそうです。

誰が付けたかっていうとラビンドラナート・タゴールという有名な詩人で、1913年にアジアで初めてノーベル文学賞をもらった人です。

インド系の人が２人も、アジアで初めて、経済学賞をもらったり文学賞をもらったりしているということですね。

このアマルティア・センっていう人はね、タゴールが作った学校で子どものときに教育を受けたんです。タゴールはさっき言ったように詩人なんですけれども、インドの子どもたちに理想とする教育をしようと学校を作りました。社会改革と教育の理想を実現するために学校を作ったと、タゴールは言っています。言い換えたら新しい時代をどう作っていくか、みんなで考えよう。そのために学校では、芸術というものについては実際に彫刻をみんなに作ってもらう、絵も描いてもらう、歌も作ってもらう。しかし同時に経済の勉強をしてもらう、技術も学ばせる。こういうような教育を受けた人たちがいて、あるところでは非常に数学で優秀な人がいる。ご存知のように森さんが首相のときに、コンピュータのソフトを作る技術者を、インドから採りたいといって、バンガローという大きな産業都市で、インドのシリコンバレーと言われるほどに有名になり、ソフトの開発などに熟練した大勢の技師がいるというので、日本にぜひインドのそういう優秀な人たちに来てもらいたいと、お願いに行ったことがあります。

タゴールは、文化の多様性を越えて、そして1つのものに導く、互いの偏見をなくすためには相手を理解するということが必要なんだと考えました。私たち日本人にとって今一番大事なことは、多様性、自分と違ったものをどこまで認めるかということです。

多様性の中で他の人の持っている価値を見い出しながら、その人たちと一緒に何かをやっていく、対話を交わし、そしてそれを受け入れる寛容性があるということが、私たちにとっては大事なんだということをタゴールは教えてくれました。

そこで育ったアマルティア・センが経済学を勉強するようになったのはなぜかというと、彼が９つのときにベンガルで大飢饉があり、300万人の人が餓死したんです。そのときにその何人かの人たちがアマルティアが行っていた学校にさまよっていて、そのあまりのみじめさにびっくりした。９歳の子どもの衝撃を、大人になってなぜインドは貧しいのか、なぜ世界にはそういう飢饉があるのかということを一生懸命勉強したんです。そして経済学を学んだと彼は言っていますね。

このアマルティア・センは、たくさん本を書いていますが、これは『貧困の克服』という本です。今年の１月に出た集英社の文庫版です。ここでは、アマルティア・センの３つの講演録が収録されています。

その中で、アマルティア・センは、ケインズ経済学や古典主義の経済学、ときには

マルキシズムの経済学を勉強したが、しかしなぜ人間は貧しいのか、なぜインドは貧しいのかということに対する答え見つからなかった。なぜか。そういう経済学は生産の経済学であって、生活の経済学ではない。経済というものは人間に仕えるための学問であるにもかかわらず、いつの間にか学問だけが先行してしまって、そのために経済学そのものは効率だけを図るような構造になってしまった。彼はそのことを考え直そうと人間経済学というふうなものを考えました。彼は古典主義者たちがやっていることを何と批判したかというとね、「それは精神的に貧しい、利己的人間だ」と。ひどい言葉ですけれども、古典主義の経済学者は合理的な愚か者なんだという言い方をした。そうしたら経済学者の中にもそれはそうだと言った人があるものですから、論争にあまりならなかったんですけれども、彼の名前は一躍有名になりました。

彼は「人間的発展」ということを一番中心に考える。人間の潜在能力は平等である、インドの人も中国の人も日本の人もパキスタンの人もみんな、人間としての潜在能力は平等である。その平等なものをどのように発展させていくのかということが経済学の中では大事なんだということを言いました。

『自由と経済開発』、『福祉の経済学』、『貧困と飢饉』というような本も出しておりますね。こういう一連の本の中で、今までと全く違った形で経済学を問い直しているときに、21世紀における経済学はこの方向を考えなくちゃいけないんじゃないかということがみんなの中で指摘されて、ノーベル経済学賞を彼がもらうことになった。経済の目標は人間の自由、人間の権利、そういうことに定められるんだと言っているのは、経済学の本としては大変ユニークですけれども、私たちは大きな示唆が与えられたと思います。

21世紀、新しいものを築く力

私は今までお話したのは、21世紀という世紀のこの境目、2002年のＲＹＬＡに来ているみなさん達に新しい時代における新しい動きに、鈍感であってもらいたくないということです。

私たち自身が語るときには、どうしても私たちの経験に即して語ります。しかし経験以外に語ることができないために私たちは、今方向性を見失っている。こういうことが問題ですよということは提起されるけれど、こうしたらどうかということを提起することは非常に難しい。

昨日八幡先生が、ベンチャーということをたびたび言われました。ベンチャーっていうものは自分がそのことを考えたときに、新しい時代にどの方向で自分が、その道を切り開くかということを考えて、そのための充分な準備をして、落ち着いて、少しずつステップアップしていくという、そういうチャレンジャーなことをいうんだという話でありました。企業の中のベンチャーでなくても、私は人生の中の中のベンチャー精神なくしてはこれから21世紀は生きられないと思います。20世紀を生きてきた形の中で、私たちは21世紀を生きられない。あなた方が今まで勉強してきたことはあまり役に立たないかもしれない。それはベー

シックな理解ですから、そのことも大事です。しかし、だから、新しい動きはその積み上げからできあがるかといったら、そうじゃない。全く違ったものを今から考えていかなきゃいけない。

取り残される日本の教育

今、日本の教育は駄目ねと誰か言っていましたけれども、日本の教育が駄目な理由もそこにあります。あまりにも日本は今まで立派な教育とか立派な成果を上げてきたために、今でもこれまでと同じ路線に沿って学校の教育をしています。かつては、東大とか京大、あるいはそういう国立大学は世界の大学のナンバー10の中に１つや２つは必ず入っていました。今日本の大学は東大、京大を含めて、世界の大学のナンバー100までの間にいませんよ。アエラに何て書いてあったか。東大、慶応で勉強したことはナッシングだと。そしてアメリカのある大学、これはＯＫって書いてあるんですよ。

何でですか。もう1つ、これは去年も言ったことですが大学の学生に数学の試験をしてみた。経済学というのは実は数学なんです。だから経済学の専攻の学生たちに高校２年生の数学の試験をしました。同じ問題を北京大学の経済学部の学生は98点取れたんです。高校２年生の数学ですから誰でも解けるはずです。

ところが、同じ問題を東京大学で試験しましたら、52点です。京都大学に持って行ったら48点です。慶応では45点です。早稲田は22点。受験の時に皆さんいいませんでしたか。どこどこの経済受けるんだ。あそこ数学勉強しなくてもいい。歴史、ないわ。勉強しなくていい。大学の受験のための、道具としてしか勉強してない。

基本的な人間の問題を考えたり、基本的な社会の問題を考えたり、基本的な世界のこれからの問題を考えるということがほとんどないんです。ああそんなこと考えたことなかったっていう人が大半なんです。私も大学で教えていましたから、そんなことをよく話していました。何のために勉強するのか。何を自分のものにするのかと考える機会が足りなくなってしまった。だからそういう成績です。ですから「日本恐れるに足らず」なんです。

今大学の危機が2つの点から叫ばれています。

１つは少子化で、大学に来る人がいないから経済的につぶれるっていうんです。私立の大学の中では、定員に足りないと言って、何でもいいから学生来てくれないかと、新潟かどこかでは、留学生をたくさん集めたが、授業は受けずにみんなアルバイトしてたなんていう学校が出てくるようになる。そんなのは学校じゃないですよね。堕落です。そんな学校の危機が一方にある。

もう１つの大学の本当の危機は、21世紀に役に立つ人材が育成できるかということです。今のカリキュラムや今の教授の方法でできるかということです。これを変えることができるか。

大学はいろんな本質的な問題を今問われている。じゃあ何を補ったらいいんだろうか。もちろん、それだけの教育を受けて知識を持つことは大事です。だけどそれがすぐ、新しい時代を切り開くために役に立つ

ような、そういうつなぎを、私たちはしていなかった。そのためにはどうしたらいいんだろうか。私たちはそう考えたときに、なぜそれを学ぶのかということを問うことから始めなきゃいけない。

昨日河合先生が、子どもをジャングルに連れて行って、子どもが見つけた虫を、この虫は何ていう名前なんだろうか、このダンゴムシというのはどこにいるんだろうか、普段は何を食べているんだろうか、そしてどうしたんだということをみんなで研究をしてレポートを書いたと言ってましたね。河合先生はおっしゃい言いました。「私がダンゴムシを見つけて、この虫を調べて来いと言ったのでは、皆あまり勉強しなかっただろう。しかしみんなが見つけた、えっ、この変なムシ。これ名前何？となったときに君らで考えてごらん、君らで調べてごらん。みんなが一生懸命考えてやったことが、彼らを成長させた。」

そうです。知識とか技術とかいうものは私たちの将来を築くツールにすぎません。今までみなさんが受けた教育は、道具としてそれ自体は大事です。しかし扱い方を教えてもらってなかったために、役に立たなくなってしまった。

じゃあどのように扱っていけばいいのかを考えるときに、私たちの世界における一番大きな問題を考えてみたいと思います。

これから30年後に、私たちの世の中はどんなに変わっているだろうか。国連は2015年までに世界の貧困人口を半減します、と言っています。

昨年、アジア開発銀行の総会がホノルルで開かれ、新聞によると「アジアには世界の貧困人口の３分の２が住んでいる。１日１ドル以下で生活する人が９億人あまりいる。

日本は今回、アジア開発銀行の貧困削減日本基金に79億円追加拠出し、12億7,000万円を出して情報通信技術の基金を設立した」とある。その、９億人あまりいる貧困の人たちを2015年までに半分にする。４億人にする。というのがこの計画です。現実に私たちの世界を変えていくというのは大変スピードが遅い。今世界の人口は約60億と昨日言いました。もう60億越えてます。そのうちで13億が中国であります。7億がインドであります。ロシアも人口が多く貧困の度合いも激しいですね。それからアフリカでは民族の争いがあって飢餓で苦しんでいる人たちがたくさんいるという状況がありますね。

将来像を描いてみると

これは去年も言った話ですが、青年が集まってね、いろんな話をしたときに、これからいったい私たちの世界はどうなるだろうという話をしたんだそうです。そうしたら３つモデルが出てきました。

1つのモデルは、今から30年後、世界には食べることができない人がやっぱりたくさんいるだろうと。アフリカではそれぞれの民族が互いに自分の国益とか自分の利益主張して、相手を殺し合うような、状況で、アフリカの悲劇はまだ続くだろう。そういう意味で30年後にも今とほとんど変わらない世界がおそらく続いているだろうというのが１つのモデル。

次のモデルは今言ったように中国もど

んどん経済発展していく。もう上海に行ってごらんなさい、上海は日本よりもすばらしい近代都市です。あらゆる物が近代化されています。ただ、奥地に行くとそうではない。今のところは非常に貧富の差が激しい。けれども、中国でも少しずつ経済的な豊かさが奥地のほうにも進んで行って、そして大きなマーケットになっていくだろうと。実際は、世界の人たちが中国の13億の人口を目当てに、マーケティングとしてそこを開発していこうとしています。ロシアも貧しい国だけれども、これからは少しずつ豊かになって、購買力も進んで、そして他の国から輸入もするだろう。それから、インドはどうだろうか。インドも7億の人口がありますけれども、インドが一番人口が多くなると思います。中国は一人っ子政策をとっていますから、伸びる率が少なくなってきましたけど、インドはまだ人口増加率が伸びてますから、数年後にはインドの人口が世界で一番多くなるかもしれないといわれています。しかも先ほど言ったように、すでに立派な知識を持ってる人も多いため、だんだんよくなる。マーケットが広いといわれる。いわゆるグローバリゼーションの中で、資本主義の経済社会は、より豊かに大きく規模として成長していくだろう、だから私たちはより豊かになっていくだろう、これが2番目のモデルです。

3番目のモデルは何か。そうじゃない、人口がこれ以上増えたら、それに見合うような食料を人間に供給することができない。究局的にはオゾン層が破壊されて、そして地球は焼けてしまう。そういうことを考えて、私たちはもう1度価値観を変え、認識を変えてみんなが謙虚に生きなければならない。そして地球に住んでいる人たちがみんな一緒に、豊かに幸福に生きるような平和な生活をする。そのために私たちは認識を変え、価値観を変えてそういう世界が生まれているだろう。

この3つのモデルを考えたときに、いったいどう思うか、という問いです。若い人たちはいろいろディスカッションした後で、30年後の世界は、1番は今までとたいして変わりない世界が続くのか、2番、それとも人口の多い国が少しずつ経済的に豊かになって、購買力を高め、グローバリゼーションが進んで、そしてもっと世界は飛躍的に経済的な発展をして、みんながより物が豊かになるか。3番、今のままでは世界は駄目になってしまうと認識を変えて価値観を変えて、そしてもっと謙虚に生きることを覚えて、生存可能な発展をするというふうに切り替えていくのか。この3つ。30年後どうなると思うか。

で、みんなに聞いたんです。あなたは現実にはどうなると思うか。みなさんはどう思う？そのときにね、世界から集まった青年たちはこんな答えを出しました。今とあんまり変わった世界は30年後には来ないだろうと言った人は80%です。みんなの中でそう思った人がいたら、その80%に入ります。それじゃあどれが21世紀の理想か。1番なのか2番なのか3番なのか。これも考えてみてください。青年たちの答えは3番です。みんなが価値観を変えて、みんなが謙虚になって、世界中の人が手をとりあって、自分たちが生きられる範囲で生活をする、そして地球を、地球の資源を壊さな

いようにしていく。そういうことができたときに、はじめて世界の平和が来るんだと、それが理想的だと言った。

私はみなさん方に手を挙げて答えてもらおうとは思いません。でも考えてください。私たちは21世紀はそこまで追いつめられているんです。そして私たちは今しなければならない仕事がたくさんあります。そうした中でどうするのか。

新しい時代を担う一員として

ロータリーがこの100年の間に変わったのは、そういう事情があったからです。ロータリーは昔競争の激しい経済社会の中で心を許し合える友達がほしいということろから始まりましたけれども、100年の間に変わった世界の状況の中で、他の人も助けようとし始めた。それで３Ｈプログラムを始めました。Health、Hunger、Humanity Program、これに関わる仕事をみんなで助け合うというプログラムを始めました。それから今はポリオ・プラス。

もう1つは世界の７つ国の大学に、将来世界のことを考え、国際的に貢献できる人間を育成するために「国際問題研究のためのロータリーセンター」を作りました。奨学金を出して大学で２年間学んでその後国際機関とかＮＧＯ、あるいは国の国際的なことを考えるポジションに就いてもらう人を育てようというわけです。年間１つの学校に10人ですから、年間70人にすぎません。でもその人たちが２年間勉強することを今から重ねて70人ずつが出て、10年経てば700人の人が出て、それが世界の人たちと一緒にロータリーの精神をもって平和のことを考える人が出てきたらすばらしいなと思いながら、私たちはそのことを今、計画しています。しかしそれはほんの一握りの人でしかありません。みなさんにお願いをしたい。ＲＹＬＡで、みなさんの参加費は各クラブから出してもらいました。そこで、ここにおられる参加者の１人１人の方にお願いをしたい。どうぞ私達の話を聞いてくださいね、みんなで一生懸命ディスカッションしてくださいね、と言った理由はこれなんです。皆さんの１人１人がこれからの時代、これからの世界について考えていただきたい。みなさん方の中で、そのことに応えようという人はいますか。

実は、ライラリアンが集まって世界大会を、来年の６月の初めにブリスベンでやります。再来年、大阪でやります。そのときは世界中のライラリアンが集まって、世界のレベルでこの問題を考えたい、と思っています。国際大会のときに参加したい人は、今から考えて申し込んでください。人数は少ないです。200人くらいに限られています。日本からせめて10人くらいは出てほしいなと思っています。言葉なんか問題じゃありません。顔を見て互いに笑って、私もライラリアンよということでお互いが考えを合わせることができるかもしれない。

ロータリーは、もうロータリアンだけでは、未来を切り開いていくことができない。若い人に加わってもらおうっていうときに、ローターアクトの人も、ＲＹＬＡに行った人にも、私たちと一緒に新しい世界を築くために努力をしてほしい、というのが私の願いです。

今日は講演ではなくて、考える材料をみ

なさんに出しただけですけれども、2人の先生のお話をもう一度考えていただきたい。今がチャンスなんです。学校を出て、会社に就職して、毎月月給をもらって、仕事をしながら疲れたといっては、毎日をただ過ごすのではなく、今からそのことに理想を合わせて、そして互いに理想の世界を、新しい時代を担う人として１人１人頑張っていただきたいと思います。

閉講式

あいさつ

国際ロータリー第2680地区
ガバナー　赤木　文生

今井先生のすばらしいお話をいただきまして、その後でごあいさつをするというのはなかなかつらいんですけれども、みなさんいかがでしたか。八幡先生、河合先生、今井先生、いろいろな有益なお話、感動的なお話がありました。それからあなた方がキャビンでお互いを見つめ合い、互いの本音でお話をされたということを聞いております。私たちも伺いたかったんですけれども、やはり、われわれがいると本音がしゃべれないといけないので、どちらかというと遠慮していました。私は今井先生がお話をされました中で、１つだけみなさんにお伝えしたいメッセージを考えております。

それは、人類は他の動物にとって、まことに迷惑な存在であるということをまず考えないかんということです。先ほども地球温暖化の問題をお話されました。私は１つだけですね、非常に印象を受けたお話をしたいと思うんです。

今井先生も少しお触れになりましたけれども、ＰＨＤ協会という協会があります。PeaceとHealthとHuman Development　の頭文字を取ったものです。日本の若い人たちが発展途上国の人たちのところに行って、そこから日本で農業や漁業、あるいはいろんな文化の研修をしたい人たちを毎年４人選んでいるんですね。そのうち３人の方を、ロータリークラブでお世話しています。現地にもカウンセラーがいるので間違いない人を選んで、旅費等負担して、実行しているわけです。

その中にパプアニューギニア出身の女性の方がいました。日本語も何も分からないんですよ、留学生と違いますから。ですから日本に来てから６週間ほど日本語を勉強して、その後農村や漁村で研修をしたわけですが、彼女が行った篠山のカウンセラーの方から聞いた話があります。

そのパプアニューギニアの女性の方が、日本語を話すようになったときに、「日本には木があるね」と言ったそうです。その人は何で、「木がある」と言ったのかなと思ったら、「日本はパプアニューギニアのどんどん木を切っている」と。だから日本という国は、木がないんだと思って来たところが、木があるじゃないかということだったそうです。カウンセラーの方は、「日本は木があるね」と言われて初めは何のことか分からなかったけども、われわれが知らないうちにあの人たちの生活を侵害していることを悟った、とおっしゃいました。

私たちは知らないうちにそういう他人の生活を侵害したり、文化を破壊してるんじゃないかと。それからあの、今日カウンセラーの方で、熊守協会のお話をされた方、D班かな、熊が生活するような森でなきゃいかんと。だからそれで住めるような森にしましょうとい

うお話でございました。先ほど今井先生がおっしゃったように、地球環境が破壊されている。それを何とか守らなければ、地球は崩壊するであろうと。

では、何をしたらいいか。私たちロータリアンは、地道に、ずっと浸透するようなことをやろうと実践しております。ですからロータリアンの人たちは、蛍の住めるようなきれいな川にしましょう、ゴミを分別して出しましょう、という活動などをしています。私たちはみなさんに、日常生活において環境ということを充分に頭に入れて生活をしていただきたい。ここで得られた感動もいろいろあると思います。しかし私自身は、熱帯雨林から炭酸ガスを吸収したり、いろいろしてくれる木を何とか守らないかんなと。しかし、日常生活でそういう意識を持っていても、何したらいいんですかという人もいると思うんですが、やはりそれぞれがその環境を破壊しないように、あるいは現在の地球環境を保全するようなことをやりましょうと。また、みなさんで話し合って広げていこうということが大事かと思います。

もう１つ非常に印象を受けたのは、私、地球の空気はずいぶん厚みのあるものだと思っていたんです。ですから少々汚染されてオゾン層が広がっても、そう広がっていかないんじゃないかと思ったら、先ほどの菊山先生という宇宙開発事業団の方が「地球に空気の層はどれくらいあると思いますか」とおっしゃった。私は空を見たらずいぶん高く感じますから、ずいぶん空気の層は厚いと思ったら、わずか16kmだというんですね。「地上16km上に越えたらもう空気はありませんよ。サッカーボールを水につけてバッと上げるときに、水滴の薄い膜ができる。あれぐらいしか空気はないんですよ」ということを聞かされて、それもまた、大変だなと思いました。ですから私は、地球環境を守るということは一番大事だと思います。平和を守り、美しい言葉を話すというのも私はテーマにしてるんですけれども、それはそれとして、一番大事なことは環境保全だと。だからそれを充分に認識していただいて、みなさんまた帰りましたらその輪を広げていただきたいというのが、私の最終的なごあいさつにさせていただきたいと思います。

環境のよいこの余島を見つけて、このすばらしいところで今井先生は50年前にキャンプ場を作られ、24年前からＲＹＬＡを始められました。ただ、今井先生１人ではこれはできなかった。やはりみなさん、ここを支えてこられたロータリアンの方々がＲＹＬＡを盛り上げて維持してこられたんだということは、お忘れないようにお願いしたいと思います。

ここでですね、カウンセラーの方、ロータリアンの方々にみなさんと感謝の拍手をしたいと思いますので、どうぞロータリアンの方、お立ちいただけませんでしょうか。どうもありがとうございました。(拍手)

それで、みなさん方に期待しておりますのは、私たちの後を継いでロータリアンになってこられる方がたくさん出ていただくことです。

それではこれで、私のごあいさつを終わらせていただきます。どうぞみなさん、また帰られましたら今回の感動を胸に秘めて再び日常生活に頑張ってください。

どうもありがとうございました。

国際ロータリー第2670地区
ガバナー　掛水　俊彦

３泊４日ということで21日から始まりましたライラセミナーに私は、21日の11時からの昼食会から参加させていただきましたが、今70時間をたったところです。70時間、ラジオもテレビもなし、新聞もなし、こういう隔絶されたような社会の中で、マスコミの出身の私は、非常に不安を覚えました。しかし今は、よかったなあと考えております。私はみなさんに、ここでいい出会いを持ってくださいと言いましたが、いい出会いがあったということをさきほど手を挙げていただきましたので、よかったと思ってます。同時に、私が初日にロータリーが青少年の育成に力を入れているということを理解してくださいということを申し上げましたが、理解していただけたかどうか。分かっていただけたでしょうか。分かっていただけたら私はこの３日間の会は成功であったと考えております。

この３日間の印象をみなさんに話させていただきたいと思います。まずセミナーの内容でございますけれども、これは大変やはりすばらしい内容であったと思います。一番最初に八幡先生の方からお話ございました。新しい時代の経営の、大変参考になるお話でございました。レジメなど貴重な資料もいただきまして、私持って帰って勉強させていただこうと考えております。

また河合先生の講義は、自然のことについて私もＮＨＫの自然の番組などをよく見てるんですけれども、それと同じような気持ちで感動しながら聴いておりました。そのお話の中でチンパンジーの過保護のお話が出ましたね。子どもたちの過保護が一番悪いというお話がございました。

私たちが子どものときには、獅子はわが子を強く育てるために千仞の谷に落とす、というような教育を受けました。そして、かわいい子には旅をさせよということなども教えられましたが、今の若い人たちは違った解釈をしているということを聞いております。かわいい子は、よそに出して苦労させて勉強させたいというような気持ちで言うんですけれども、今は反対に、かわいい子どもだから旅行させてやろう、楽しませてやろうという意味で取っていると聞きました。それはどうか、年寄りの方の考え方をみなさん持っていただきたい。かわいい子には旅をさせるということは苦労させるんだということですから、この３日間は、その旅の１つであるというように私は考えております。

それから今井先生には、キャンプファイヤーの大変厳粛な中で、すばらしいお話をいただいたと考えております。非常に考えさせられることが多くありました。また、深川先生につきましては、ロータリアンの夕べというのを２回もちまして、奥行きのある話をされました。お２人とも日本ロータリーにとってはミスターロータリアンというように言って

もいいんじゃなかろうかと思うほど、私は尊敬しております。

それからまた、昨夜のフォーラムでは、2時間3時間ももつだろうかと心配していましたが、前座のお話終わりまして、後の質問になりましたらどんどん意見が出てきた。これはほんとに感動しました。私は自分の若いときにおそらくこういうことはできなかった。人前であんなに表現力豊かで、ユーモアに富んだような話を、大勢の人の前で話ができるかといったら、私はできなかったと思う。今の若い人はすばらしいと思います。自信を持ってください。第2第3の今井さん、深川さんの出てくる可能性は充分あると私は理解しております。

その他に、時間を守るということ。5分前というのを、私は守れるかなあというのを心配しておりました。ところがやっぱりすばらしかった。ほとんど1分前には始まりました。みなさん約50人いるんです。50人の人が10分遅れますと500分、ということは8時間半のロスが出てくるということになりますね、遅れたりしますと。そう考えると、時間を守ることがいかに大事かということをひとつ知っていただきたい。

それから、最初のときに深川先生から、ここには鍵がないということを聞きまして私は感動いたしました。今どきこんなところが日本の中にあるだろうかと思って。私の田舎の高知でも、昔は鍵をかけることがほとんどありませんでした。しかし今はほとんど鍵をかけている。この鍵のない信頼の世界ということについて、私は非常に感動いたしました。若い人には分からないかもしれないけれども、昔は鍵はかけなかったんだということを知っていただきたい。

それからもう1つ、みなさん共同生活を経験なさったということ。私も戦争中、中学時代を寮で過しまして、上級生からしごかれました。指導もされました。しかし今になってみると、こういう気を使う必要があるんだということなど、非常に強く感じました。みなさん今日、ここで初めて会った友達と同じ部屋で、お互いに気を使い合うことや、お互いを思いやるというようなことなどについて学んだと思います。これも将来は必ず役に立つだろうと思います。

すべてよかった、よかったと言うと何か提灯持ちみたいな感じになってもいけませんので1つ2つあえて無理に探しますとですね、若人のエネルギーを発散する場がなかったんじゃないかな、という気持ちがあります。私は表面的にしか見てないものですから分かりません。間違ってたらごめんなさい。例えばみんな若いので、海岸でわっと騒ぐような、そういうところがあってもよかったんじゃないかと。けれどもこれは新参者の私の言うことで、大変的外れなことを話してるかもしれません。

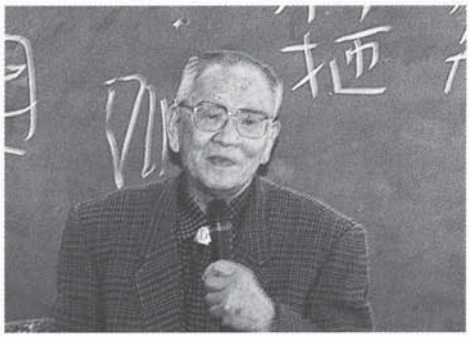
それから、「講演中、発表中はこの会場に出たり入ったりしないでください」というのは確かにいいことなんですが、私先ほど、生理的現象に襲われまして、実はトイレへ行きました。しかし、こういうときはそこまで言いますと、私はトイレ行きましたけれども、気の弱い人はあそこで失神するかもしれませんので、もしそういうことがあるんだったら

「生理的現象の場合には除外」ということもひとつ考えていただきたいと思いますね。

それから、みなさんの堂々とした意見というものはほんとに感心したということは先ほども申し上げましたけれども、いい出会いがありましたか。知己を得ましたか。将来をともにする友を得ましたか。八幡先生は生涯の友人どころか伴侶を得られました。すばらしいことだと思うんですね。どうか余島の友を大切にしていただきたい。来年は、第25回ということで四半世紀を迎えるということになります。さらにいっそうみなさんの努力で、内容のあるものにしていただきたいというように考えております。

みなさん、お世話になった方々に、お礼を申し上げたいと思うんですが、実は私の隣におりますこの、篠原さんは、愛媛第２分区のガバナー補佐をやっております。ここへ来るまではこんなことをやっているとは、私知らなかったですね。尊敬しました。水を得た魚のように、ガバナー補佐よりもこっちの方が似合っているなというような感じでございました。ほんとにありがとうございました。これからはそういうことを隠さずに、どんどんおっしゃっていただきたい。

みなさん、大変ありがとうございました。



国際ロータリー第2680地区
パストガバナー　森　滋郎

こんにちは。おそらく僕が最年長者になるということになろうかと思うんですね。今86歳です。このＲＹＬＡの短い時間でみなさん方、立派になりました。

こんな字知っていますか（ボードに字を書く）。誰か知ってる？誰も知らん。あら？じゃあ話できひん。（笑）「箍」（タガ）、みなさん方は、箍になったんです。これだけの勉強をして、箍になったと僕は思います。箍というものは、１個１個が小さな木切れですね。これをある目的のために並べて、そこで竹で作ったものでコンコンコンと上と下で締めたら、それがお水入れになったり味噌樽になったり、いろんな物になるでしょう。ある目的を持って集まった人がたくさんおるけれども、その１人１人はバラバラなんですね。そこでみなさん方が箍になってぎゅっと集めたら１つの目的を作る道具になるわけですね。みなさん方は箍です。だから箍の心得というのを今まで勉強されてきたんですね。

例えばこのくらいの味噌樽にね、こんな大きな箍持ってきたって駄目でしょう。また、こんな小さな箍持ってきたって使えないでしょう。その、人々の集まりが、何人かの板切

れが、これだけあったらどれだけの大きさの箍になるか、その箍に合った箍にならんといかんわけですね。それが難しいんです。ごっつい力のあるみなさん方が、力のあることでみんな集めようとしてもそれは駄目なんです。その集まった人の木切れと、これから使うしょうゆ入れにするか、味噌入れにするか、そういうものに対して全部合わしたんにちょうどいいようにみなさん方がキュッと締めるような箍にならんといかんですね。

このＲＹＬＡでみなさんは、力のことも、いろんな人とのコミュニケーションのことも覚えました。しかし、自分のことだけ考えて、相手を見ないのは駄目だということです。みなさんは今、箍の免許、リーダーの資格をもらったから、ぜひ、相手によって小さな箍、大きな箍、力強い箍、いろんな箍になってよいリーダーになってください。

神戸YMCA余島野外活動センター
所長　近江岸　建助

「今井さん、もう100周年には来られるんですか」。彼、何て言ったと思います？「もちろん来る」って。そのときに私は生きることをあきらめました。（笑）私たち何もサービスできません。だけど、チャンスがあったらまた来てください。私たち何もサービスできませんけれども、木々の緑や海や静けさや小鳥の声が、たくさんあなたたちにサービスしてくれる、そんな島でありたいなと思っています。この間言ったようにＹＭＣＡはYoung Men's Christian Associationといわれますけれども、もう１つの言い方があります。You Must Come Again、You Must Come Againです。ぜひまたお越しください。

どうもありがとうございました。

参加者感想文

A 班

朝來　政康

今回ライラセミナーに参加して驚いた事があります。それは学生のみなさんの発想が、自由で大きいという事です。講義を聴いて、内容について考える時、私は自分の職業・職場・家族等自分の環境・自分のわくに当てはめながら考えていました。しかし学生のみなさんの意見は違っていました。話が日本、他民族、最後には世界平和にまで広がるのです。これは私にとって本当に驚きでした。昔の自分を思い出してみれば、たしかにそのような会話をしていた覚えがあります。しかし社会に出て、理想ではなく現実を見るようになってからはそのような自由な発想ができなくなったように思います。もちろん社会人として現実を見るという事は必要な事です。しかし時には自分のわくの外にでて、違った視点から考えてみる事も必要ではないか、そして得た今までの自分にない新しい発想を持ちながら、自分の置かれている環境を見つめなおす事も必要ではないかと考えました。そうする事で自分の周りの環境をより大きく、より豊かにする事ができると思います。今後は広い視野を持ち、このセミナーで学んだ事を生かしながら、自分の生活、自分の仕事をより豊かな物にしていきたいと思います。

植木　聡

「自分を見つめ直した４日間」

何をするのだろう？どんな人が来るのだろう。４日間って長いな！と思いながら余島に立った。しかし、そんな心配はすぐに消えた。年齢、性別、身分の差などここでは必要なかった。誰もが自分をさらけ出し、そして他人を受け入れる。リーダーという共通の思いを持っている人間の集まりはとても熱いものであった。

自分の思いを話し、他人の思いをじっくり聞く。そんな時間はここ数年無かった気がした。また、１人で海岸を散歩しながら色々な事を考えたなんて事もそうである。テレビも新聞もない４日間。しかしそこには会話があり、対話があった。議論があった。

現実に追われる生活から出て、聞いて、語った４日間、確実に何かが変わり、何かを変えた。

４日間を共にした班のすばらしい友達、カウンセラーの方々、運営をしてくださった皆様、ありがとうございました。

尾上　大介

今回ＲＹＬＡに参加して、最初は下調べを全くしてこなかったことで非常に不安で体調をくずしたこともありましたが、話ができるようになってからは非常に楽しく有意義であったように思いま

した。部屋の鍵が無いということも不安のひとつとなり全ての貴重品を最初は持ち歩いていましたが、同室の人と話をするうちに、そういった警戒心も解けました。

周囲の人の自己紹介や話を聞いていると、ボランティアなどをしている人も多く、そういった体験をしていない僕がいかに視野が狭かったかということを思い知りました。このセミナーで初めて常に周囲の人を尊敬し、その話を素直に聴くということを試み、普段の感情的で頑固な僕がかなりの損をしていたということにも気付きました。

また、いつも事なかれ主義でスポーツをやってみることも無かったのですが２日目のレクリエーションで雨の中サッカーをやってみて、こういうものもいいなと感じました。２日目のキャビンタイムで皆の話を聞いて、色々と実践するということが無かった今までの時間に対して恥ずかしく思いました。

思索の時間では、将来就く仕事に対して、生きがいややりがいを見つけられるかなというようなことを考えていました。時間か終わった後、杉本さんにどんな時にやりがいを感じるかということを聞き、患者さんがお礼を言いにきてくれることだと教えてもらいました。とりあえず学生の立場では患者の立場や施設の利用者としての立場が多いことから、感謝するということだけではなく、具体的に口に出して述べることの重要性について考えられました。

バズセッションではテーマに合わせた意見を出すことができず、単語の羅列や少し関係がある、というレベルのことしか言えず、また、班としての意見をまとめている時に、なぜそのような方法をとったのかという疑問があったにも関わらず、その疑問を口に出さなかったため、フォーラムでの質問にきちんと答えられなかったことを残念に思います。

フォーラムではA班のサブリーダーとして発表しましたが、多勢の前で話す機会が少なかったことと説明すべき事項に対してよく知らなかったことから非常に分かりにくくなってしまったと思っています。その後のキャビンタイムで一生懸命にやっていたと言ってもらったことがとても嬉しかったです。

キャビンタイムでは、他班の人とそれまで全くといっていいほど交流がなかったので、思い切って他の班の人の意見も聴き、非常にためになりました。同じ年くらいでも経験の差がかなりあることも痛感しました。

ただ、講義については聞く姿勢にかなり問題があったように思います。ＲＹＬＡには２回まで出席できるようなので、実地での経験を積んでからまた出席させていただきたいと思います。今回のＲＹＬＡでは、自分の意見を相手の反応をみながら相手の立場も考えて話すということが大切だと思いました。まだまだ、その領域に達するまでは時間がかかりそうですが、研鑽していきたいと思います。

糟谷　弘樹

「ＲＹＬＡ？対話・理解・寛容？」

今、ドキドキしてます。それは、ＲＹＬＡの意味を体で感じ、体験して初めてその意味の大きさに、考案された今井鎮雄先生とその考えに共感しプログラムを支えてくださった数々のロータリアンの方々に触れ合うことを体験した私の体が勝手に「ドキドキ」しています。

初日、今年のテーマは「対話・理解・寛容」と知らされ、あっ、「コミュニケーション」のことかな？ただ漠然と思いました。そして難しそう。それと、こんな自然環境の中で私は、生活をしていけるのだろうか？と正直思いました。６人部屋に８人で共同生活、テレビもパソコンもない孤島、ただただ不安でしかたなかったです。

１日、２日と日が経つにつれ、班の中に仲間意識が生まれ始め、順調に問題もなく少し変わったスタイルの修行程度と思ってました。

しかし、３日目のバズセッションの時のリーダーが私に決まったことから、大変色々学ぶことが出来たと今では、思います。

その中でも特に、リーダーの役割と言うのが全体の和を乱さないことだと初め思っていました。

しかし、ここでリーダーの役割とは、個人と個人を結び、１人１人の個性を輪にしていくことだと言うこと、その難しさに気づき、もう１つ、これは全体を通じて思ったことなのですが、セミナーが効果的であるか否かは自分が積極的に行動できるか、積極的に参加できるかによると思いました。

最後に、このチャンスを与えて頂いた「加古川平成ロータリークラブ」の方々と、カウンセラー福島秀孝さんにとても感謝しています。

周　葵

「ＲＹＬＡと出会う」

今年もまた春。

また、櫻の季節だなと思った。

しかし、今年は櫻だけではない。

満開の櫻と出会う以上の喜びが胸に溢れ満ちてきたのは、この春のＲＹＬＡとの出会いだ。

卒業・進学の準備、これからいろいろな学会参加のための論文書きでこの何ヶ月も睡眠不足がつづいてきた私は、今回の連休で一杯休もうと思ったところ、えっ、まって、ＲＹＬＡセミナーがあるのじゃない？朝一番の特急に乗り損なう心配があったために、一晩よく眠れなかった。やっと旅に出て、大車、船、車・・・本当にこのように苦労する価値があるのでしょうか？と船の中で揺られながら疑問をもっていた。

しかし、余島に向かう渡船に乗って、周辺に迫ってきた海の息、そして、勢いよく吹いてくる海の風が、私の心配を一瞬に吹きとばした。未知の世界へ向う、未知の人々と出会う、未知の思想と話しあう・・・自分の心の動きがその一瞬で感じとった。

そして、感動の連続が子の小さな島で私をまっているように、私の心に喜びを注ぎつづけた。

静かに海の波の動きを感じ、風が林を通りゆく音を聞き、こんなに自然が私のそばに、私の心にいるのと幸せの気持ちで、胸が一杯になりつづけた。

もちろん、今回の出会いはこの余島のすばらしい自然との出会いだけではなく、人との出会いはむしろ私の心にいつまでも残っていきたい思い出となったのであろう。

一つ一つの言葉、ここの自然の音と共に、私の頭の中で響き、一つ一つの笑顔、ここの青い海の波との輝きと共に、私の目の前に、いつまでも消えてゆくことがない。

余島、さようなら、ＲＹＬＡ、See　You・・・

杉本　徹

「第24回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

今回のセミナーに参加するにあたり、はじめはものすごく不安でした。見知らぬ12人が、キャビンに集合した時、不安は更に増しました。

しかし、１日１日を終了していくにつれ、不安は消え、仲間意識が芽生え、和を大事にするようになりました。そうなったのも、色々なテーマに皆が自分の考えを述べ、また互いに意見を尊重する過程の中に、相手の本質を見出そうとする姿勢が生まれたからだと思います。

相手を知る時、同じ目線で向き合わなければならない・・・まさにコミュニケーションの第一歩だと思います。色々な年代、色々な職種の仲間から色々な考え色々な経験を聴く事ができ、私は班の仲間をより知る事ができました。信頼も生まれました。

このセミナーが終了し、普段の生活に戻った時、相手の本質を見て聴いて付き合っていきたいです。

この４日間の貴重な出逢い、体験は私の一生の宝になるでしょう。そして、その機会を与えて下さったロータリアンの皆様、本当にありがとうございました。

セミナーを一緒に過ごしたさときさん、やすさん、つっつさん、みう、ぜんき、だいちゃん、しゅうさん、さかえちゃん、あっこ、ゆきちゃん、なかのっち、そしてたかさん、のぶさん、皆に出逢えて良かったです。ありがとう！

筒泉　和久

「第24回ＲＹＬＡセミナーに参加して」

初日に、余島に着いた時正直４日間もこんな所で過ごすのかと思い不安でした。初めて会った仲間とキャビンで何を話したらいいのか、最初は会話も少なくトランプぐらいでしかコミュニケーションをとれなかったのが、今日最終日を迎え大きく変わったと思います。講義を聴きそれについていろいろな考え方で討論したり、雨の中ぬれながら、１つのボールを追いかけまわしたサッカー、夜を徹して何気ない話をしたり、共同で生活することにより普段の日常生活では得ることのできない貴重な体験と友情と知識を得ることができました。いろんな職種、年齢、考え方を持つ人が１つの課題を話すことで、今まで自分が気づいていなかった事や、こういう考え方があるのかという事を知るとともに、相手のことを考え、時には自分の意見をまげることにより、集団生活でしかえることのできない１つにまとまるということの難しさ、大切さを得ることができました。

今までの何気ない生活で忘れていた、心から話のできる友との出会いや、コミュニケーションをとることで、表面的な感情ではなく心の底から本心で接することが本当にすばらしい事だと、３泊４日と短い間でしたが、今後の人生の中にとってはとても貴重な時間になったと思います。

いろいろな地方から集まった仲間ですが、これからも何らかの形で関係を保っていきたいです。本当にすばらしい体験が出来た事を感謝して、これからの生活の中で役立てるようがんばっていきます。本当にありがとうございました。

都築　晶子

豊かな自然に抱かれて、仲間と共にじっくりと語り・考え・気づき理解しあう喜び、昨年と同様、いやそれ以上にこの喜びを味わうことができました。そして改めて「いかに人々に支えられ、生かされていること」への感謝の念が沸きおこるのを感じています。

「対話・理解・寛容」、私にとっては非常に把握がしにくいテーマでありました。それは、頭の中では、様々な状況を想定して考えを巡らすことはできるのですが、日々の生活の中での私自身の思いや行いとのギャップに懐疑的になることすらあるからです。しかし、与えられた、またグループでの自発的な話題を語り（論じ）合う中で（対話）、仲間のひとりひとりを理解し、互いに優しい気持ちになり（寛容）、皆で楽しくスケジュールをこなすようになっていることに気がつきました。そして今、このテーマは私達にとり目的ではなく、手段として提示されたものであるのではないかと感じています。人、あらゆる人が生活する社会では、人と人との信頼関係が何よりも大切であると私達は感じています。その信頼関係を如何に築くか、それは対話・理解・寛容の上にしっかりと、そして自然に生まれてくるものではないでしょうか。とても単純なことですが、大変重要なことを、この４日間で体得することができました。

どんな社会を私達が造ってゆきたいのか、すなわちこの世において変えてはならないもの、変わるもの、変えてゆかねばならぬものを見極めて、変わるのを待つのではなく変えてゆくことを仲間と真剣に考える、そのすばらしさと楽しさを味わうことができました。２回ＲＹＬＡに参加させていただいたのですが、学んだこと、感じたことをこれからの私の人生の新たなスターティングポイントとしてゆきたいです。

素敵な４日間を共にすごした仲間、支えて下さったカウンセラーのお２人、そして私達と共にいて下さったロータリアンの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

寺田　栄

たった３泊４日という短い時間でしたが、久しぶりに満足できる時間でした。一つは環境のおかげです。今回は３度目の余島でしたが、前２回と変わらず緑がいっぱい、海がいっぱい、風もいっぱいでした。人工物に囲まれた生活と違って周りも「生きている」と感じました。そしてこの「生

きている」という感覚がとても心地良かったです。夜の寒いぐらいの空気でさえも気もち良く感じました。満足できた理由の二つめは、たくさんの人との出会いです。普段の生活ではなかなかできない真剣な話し合いの時間は貴重なものだと思います。相手の話を聴いて、その人がどういう人かを知ろうとする、このことを意識的に行ったのは、おもしろく又、うれしい体験でした。日常生活の中では、第一印象やささいな不快な思いのせいで、その相手との関わりを断ったり、私の方から制限したりしていた、と思います。相手のことを知れば知るほど好きか嫌いか、というような一つの感情では表せない状態になると思います。自分と同じだと思える部分、好きな部分、嫌いな部分などが分かってくるでしょうが、最終的には全てをひっくるめて「やっぱり好き」と言いたいと思います。

今井先生のキャンプファイヤーでの話（捕虜の話）と三晩目のキャビンタイムでの安行さんの話（人は誰かに覚えていてもらうために行動する）、他の先生方の話を聞いて、今までモヤモヤしていた心の中の霧が随分晴れました。私にできることをすればいいだけ。そして徐々にできることが増えていけば、それでいいのだ、と思えるようになりました。また、同じ班になった他の11人とカウンセラーのお2人とも、笑いながらも真剣に話ができて「人間っておもしろい。心底人間をなりたい」と思いました。関わった全ての方に心から感謝します。

仲野　瞳美

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

ＲＹＬＡセミナーとして初めて参加して、色々な所から学生や社会人の方々が来られていたので何から話そうかと悩んでいたのですが、みんな気さくな方で話がしやすかったです。安心して、スケジュールをこなしていく上で一番私が学んだのは責任ということでした。ふだん何げに過ごしすぎていましたが、ここにきてふだん考えもしなかったこと、気に止めもしなかったことをライラリアンの方々と話をすることができたり、スケジュールのひとつひとつからも学ぶことができたと思いました。講義では今まで目を向けなかったところに目を向けられたり、改めて考えさせられたりして私はすごく講義のありがたみがわかりました。河合先生のサルとの話が一番印象的です。キャンプファイヤーでは、自分のことだけではなく、誰かのために何か１つでも助けられる（ありがたいと思われる）行動を何気にできるようになろうと１つの目標をつくるきっかけとなったのが私のうれしかったことの１つです。バズセッション、フォーラムを通してＡ班以外のライラリアンとのコミュニケーションをすることで、人間関係や社会のことも考えられたし、体験談も交えた意見交換は、楽しみながら感情表現の仕方などを気付かされたとてもいい時間になりました。インターアクトクラブでの体験が少しあるのですが、高校生、短大生の方ばかりとの話し合いしかなかったので、社会人としての今回のセミナーは、社会人（職業の違う方々）や学生の方等々幅広いジャンルの方、少し年齢のちがう方々の意見、体験談をたくさん聞いて少しでも自分に吸収することがすごく自分の中での喜びになりました。教えてもらう一方向なセミナーとなってしまいましたが、この３泊４日で相手を批判せずに意見を言い合える、良いところ、良いところを素直に言い合える本当にいいセミナーに私は参加しているんだと思った今現在です。私を一番世話してくれたＡ班のみなさんをはじめ、ロータリアンの方々、他班のライラリアンの方々、感動のセミナーに参加してくれて本当にありがとうございました！（涙）☆

三浦　崇寛

今の社会、高度技術の発達で様々な情報がいろんな手段で会話できる（コミュニケーション）反面、感情、気持ちをとらえることができなくなっている。

また自然（環境）破壊によって今の子供達が外で遊ぶ事もなくなり家に閉じこもった生活をしている事から社会に慣れない、人と人と接する事が

できなくなっているようにも見える。

私はライラセミナーで多くの事を学びました。みんなと語ったり、考えたり、またスポーツや自然とふれあう事によって交流のしかた等を考えさせられました。

私はコミュニケーションをはかり相手を理解する事によって同じ共通点や価値観をみいだし相手との距離を近づける事ができると思います。今回のセミナーの体験を生かし、また地域社会の１リーダーとして貢献していきたいです。

三谷　友紀

「ＲＹＬＡに参加して」

今回ＲＹＬＡに参加させてもらうことにより、私はたくさんのことを知ることができたと思います。

河合先生のお話では、チンパンジーの話を例に、子どもが自律しなければいけない時、過保護にするとどうなるかということを実際あった話として聞くことにより、私はこれから大人や母親になる身としてどのようにすればいいのかを知りました。

また、フォーラムの時、問題をなげかけられ、みんなの前で失敗談を語ってくれる人がいました。成功した話はきっとみんなできるのでしょう。でも失敗談が語れる人はなかなかいないと思います。自分が傷つくのが怖くて言えない私は、その時、失敗を恐れず、恥じず、自分の悪い所を素直に認めて、そしてその失敗が自分のためにも、他の人の今後の参考にもなる行動がとりたいと思いました。

このＲＹＬＡに参加する前、私は自分の意見を言うことくらいはできると思っていました。けれど、その発言は経験と一般論から学んで出た結果みたいなもので、本当に自分の心を開いて心から誰かに伝えたいという言葉だったのかと問うてみるとそうじゃなかったような気がします。相手の目線で相手のことを考えて話すことはとても重要なことだと思います。けれど、相手のことをもっと深く知りたければ、先に私から心を開かないと思いやる気持ちというのは本当に理解できないのだということが分かりました。このＲＹＬＡに参加されてる方は、目が輝いていて、私や他のみんなのことをよく理解しようとしてくれ、私は多くのやさしさに触れることができました。このようなすばらしい人たちに出会う場を設けてくださったロータリーのみなさまに深く感謝をしております。本当にありがとうございました。

A班カウンセラー　福島　秀孝

「第24回ＲＹＬＡセミナー」

前回（第23回）私が関わった役割は、見学ロータリアンでした。そして今回カウンセラーをさせていただき、ＲＹＬＡのすばらしいとこや、普段話すことの少なかった若者と、４日間生活を共に出来たことは、今の私にとってすばらしい経験になりました。あまり話すことのなかった若い人と交わってみて、若い人の考えもよく話していくうちに、我々と通じるものや同じ考えも数多くあることが分かりました。また、若い人同士でもいろいろな考えがあり、そしてその考えをまとめる作業では、ずいぶん過激な討論や、自分の考えを相手にわかってもらえるよう工夫している姿に感動しました。これからも若者に考えるチャンスや討論の場をＲＹＬＡにかぎらず、ロータリー活動を通して考えていこうと思います。

A班カウンセラー　福武　信子

最近の十数年間、立ち止まったり、後ろを向いてしまって前向きに生きようとしない若者たちの方にばかり、かかわるようになってしまっていた私のＰＴＡ活動の日々がやっと終わり、ほっとしていた中で、このＲＹＬＡは、神様からいただいた、ごほうびのように思えました。今井先生が「どうですか」とおたずねになられた時「すごく楽しいです」とお答えしたら「カウンセラーがそんなに楽しんでもらっちゃこまるなあ」と笑っておられましたが、いつも会合のたびに「この子は、どうしたら・・・」というような事ばかり、気に

していた日々に比べた時、ほんとうに、この余島で出会った若者たちが、私に、与えてくれた安心感、幸福感、喜びは、まさに、天からの、ごほうびとしか思えません。世の中、本当に「すてたものではない」と思いました。若者の１人と話したのですが、これほどの善意にあふれた雰囲気の中に身を置ける幸せを経験出来る事はそうあることではないと思います。これが余島ＲＹＬＡマジックでしょうか。

これだけの企画を成功させる努力は、並たいていのものではないと思いますけれど、これからの未来に、ほんとうに、賢い、質のいいリーダーを育てる事の大切さを思う時、その努力は、かならずむくわれると思います。

人生の折り返しをとっくに過ぎた私に、日々新しく学ぶ事が多すぎて、本気で頑張らねばと思います。若い人達の上気した笑顔は、我々に本当の元気を贈ってくれました。ありがとうございました。

Ｂ　班

小野山　栄太郎

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

このＲ・Ｉ第2680地区、Ｒ・Ｉ第2670地区、ＲＹＬＡ運営委員会による、第24回ＲＹＬＡセミナーに参加させて頂き、大変良い経験をさせて頂き、本当に有りがとう御座いました。

このセミナーに参加するにあたって、何の予備知識もなくどんな事をするのかも、全く分からない、そんな状況でこの余島にきました。ただ１つ、自分の心構えとして、これからの自分の生涯における友人をできるだけ多く、１人でも多く、つくろう！そんな思いを胸にしていました。幸いこのセミナーの目的の１つとして、心から話しの出来る友人をつくる事。そんな事があり、初日からとても、ワクワクしていました。皆なと対話し一緒にテーマにしていて考え、親睦を深める時間を与えてくれ、自分自身とても、多くの友人にめぐり逢う縁を頂きました。このすばらしい縁を無駄にしないよう、この感動を自分の中にうもれさせないよう、大切にしていきたいと思っています。そして、これからがある意味での本当の親睦を深めていく原点であると自覚しています。

午前に行われる講義でも、八幡惠介先生、河合雅雄先生、そして今井鎮雄先生によるそれぞれの角度からの、これから自分達が築き上げる社会を、理解しやすく、又やさしく話しをして頂き、自分にとってもまた１つ思索していく素晴らしいテーマを与えてくれました。よくよく理解を深めまた自分の私生活の場に少しでも活かしていけるよう日々、小さな事でも少しずつ良い方向へむかい、もっと多くの仲間をつくり、ともに考えていきたいと思っています。重複するようではありますが、最後に、自然と人々に生かされる自分に感謝しそ

れを地域社会に対し、実の行動として貢献できる自分をつくっていくことが、本当の意味での感謝の証であると思います。

神高　康弘

「余島への再訪」

余島を最後に訪れたのは、５年前の８月。他のキャンプ団体の卒業式のために来て以来だった。実の話、来る１週間前まで、ＲＹＬＡはおろかロータリーすらどういう団体であるか知らず、留学奨学金の応募要綱をもらいに行った際に、たまたまお話を受けた。

何事も経験と思い踏み切ったもののとにかく姫路港に着いた後も、１人で来た心細さから不安もあり失敗であったかと感じた。だが案外と１人の人が多く、また班をきっちりと振り分けて下さっていたため、非常に気持ちが軽くなった。

驚いたのは層の多様さ。まずＢ班の構成は、後にそれが班のまとまる要因になったと思うのだが、21歳から29歳までと幅広い年代が集まっていた。その結果、会話に厚みが出て、かつ分かち合える時間を楽しめた。キャンプでも大抵は年の差４歳までの同僚と小学生対象としたもの、など限定された年齢との交流しかなかったので、ある程度の分別ある「大人」の集まりは本当に素晴らしい空間であった。次にその職種の色々。理容師から会計事務、学生、営業と日常生活ではなかなか交流する事のない分野の、同年代とのセッションは、そうそうない経験である。特に、発表のためのディスカッションでは、各人かが自分の経験にのっとり、自分の意見をはっきりと述べて、それに対して的確な反論がなされた。

奇しくも河合先生が生物多様性のお話をなさっていたが、少し大袈裟ながら、小さな居心地のよい森林であった。互いに厳しさを持ちつつ助けあえる空間であった。残念ながら、他のグループでは若すぎる林の感があり、相入ることができなかった。しかし、それは本当に的確なグループに導いて下さった結果だと思う。全くの部外者を、このような環境に案内してくださった事に、心から感謝しています。

北野　剛正

「ＲＹＬＡ　ＳＥＭＩＮＡＲに参加して」

自分の今までの生き方・考え方・プライド等全て否定されたかのような４日間でした。

このセミナーに参加し、今まで自分が考えても想像がつかないような島、余島に来て今からどのような人間関係ができていくのか、どこまでメンバーを信頼し、信頼されるのか、何もかも初心に戻ることで自分でも驚く程心が晴れること・新しい自分を見つけ出すことができました。

というのは、Ｂ班・・・これが強ものぞろいと言うか皆、各々行き方に自信が満ちあふれているように見えました。社会人と学生という大きな壁、もちろんそれは自分の中での勝手な思い込みでもあり自分が今不安で悩んでいる先のあこがれの人達でもありました。

僕はこの人達と根本的に違うんだなと思い込んでいて自分は経験あさいからあまり首をつっこまないでおこうという気持ちが心のどこかで根付いてしまっていたのかと思います。

しかし、今まで何げなく生きてきた自分にＢ班のメンバーの話を聞いていると、皆が場をつくろうとしている、今まで自分が見てきたことのない雰囲気をつくりだす人達で、感心させられ、自分をみつめなおす機会になりました。

今までノリ、さわぐ、等がどこかであたり前だと思っていた自分に「こういう場もあるのだよ」と言わんばかりの雰囲気をつくりだす人達を見ていると、今までの自分が持っていたプライド・生き方等がとてもちっぽけなものに見えました。

このセミナーに参加してよかったことは、人間関係の難しさ・すばらしさを自分の想像もできない視野からみることができたことです。

桑形　さおり

「ライラセミナーに参加して」

私はこのセミナーに参加して本当によかったと思います。普段の生活の中の他の土地の人や、異

年齢の人と出会う機会はなかなかないので、このセミナーでたくさんの人と出会うことができたことが一番よかったです。B班は初め、まとまりがあるのかと心配するところもあったのですが、最後にはそれぞれの個性を生かしたり、キャビンタイムでは、とても深い話などをして盛り上がることができました。また、同じ部屋の人とも、夜いろいろなことを語り合うことができよかったです。このキャンプは自由がとても生かされていたキャンプだと思いました。キャンプのイメージは、一日中せかせか動いていることが多いので体力的にも疲れることが多いのですが、時間が充分あることにより、自己を見直す時間をたくさんとることができもう1度、自分自身をふり返ることができたと思います。島の景色や鳥の声、森の緑などいつもの生活の中で忘れがちな、自然の美しさや、表情、すばらしさをもう1度味わうこともできました。キャンプファイヤーでは、神聖な気持ちを持つきっかけになり、奉仕の意味などもう1度考え直したり、自分が今後何ができるのかを考えるきっかけになりました。また、講演では、普段めったに聴くことのできない先生方のお話を聴くことができ、今まで知らなかったことなどいろいろなことに興味・関心を持つことができました。

この4日間をふり返った時、集団の中で個々がそれぞれ今までの体験を生かした活動をすることができたし、今まで見たことがない大人（社会人）の世界（考え方など）を感じとることができるとても貴重な体験をすることができました。ここで出会った人たちとも今後ずっとお付き合いのある友でいたいです。この様な機会を与えて下さったRotaryの皆さんありがとうございました。

竹内　菜穂子

今回ライラセミナーに参加し、今まで職場だけの狭い視野でしか見る事や聞くことのできなかった事について、様々な職業や年齢の方と話が出来とてもよかったと思う。

普段はこうして県外の方としゃべる機会も少ないので、本当に貴重な時間が過ごせた。

日常生活の中で、忙しくて忘れがちな事や後まわしにしていた事についてもじっくり自分を見つめ直す事ができた。特に、出発する前までは、島だと聞いていたので、不安でたまらなかったけど、実際来てみて島を探索し、季節の木々や花々も久しぶりにゆっくり見れたので落ち着きながら自分の将来の事や今回のテーマなどについて考えることができたと思う。

今回のテーマ「対話・理解・寛容」について、皆、本当に様々な意見を持っていて、自分が、まだまだだなあ・・・と思う場面がたくさんあった。自分と違う意見を持っている人に対し、その人の話なり、意見などを聞く事により、こんな風な方向から考えるのか・・・等、新しい発見が色々あった。

バズセッションやその後のフォーラムでも、違う班の考えを聞く事が出来たので、とても楽しかった。その中でも、あの意見には賛成できるけど、こちらの意見には納得できない等、対話することにより、より自分自身を深められたと思った。

この4日間で学んだものを持って帰り、これからの自分の生き方や、社会に役立てて、今後、自分が、どのような道に進むか分からないけど、いつもこのセミナーで学んだ事を思い出して活かしていきたいと思う。

竹内　久高

「ＲＹＬＡセミナー感想」

このＲＹＬＡセミナーに参加するまでは、ＲＹＬＡの読み方も分からず、一体何をするのだろうと不安でいっぱいでした。

でも、４日間が過ぎ、今一番思った事は、このセミナーに参加させて頂き、本当に良かったと思います。それは何故かと言うと会社では知り合えない、色々な業種の人に知り合え、ミーティング等を通し、色々な人の考え方など、リーダーとしての有り方を沢山教わりました。又、もう１つ良かった事が友達が出来たと言う事です。僕自身社会人になってからは、こう言うセミナーに参加するのは初めてで、会社での友達しかいませんでし

たが、姫路、神戸、四国等色々な地域の友達が出来たと言う事は、とても良かったと思います。

又、講義内容も、数々難しい事も有りましたが、自分達に分かりやすく、ていねいに、教えてくれました。今すぐ自分に何か出来るか、まだ分かりませんが、今回のセミナーで教わった事を、絶対にどこかで役立たせたいと思っています。

又、この余島は、本当にすばらしい所だと思います。現代の世の中どこに行っても、ＴＶ、ラジオなど文明の力が有りますが、最初はどうやって時間をつぶそうと考えていましたが、友達と話すだけで、あっと言う間に時間が過ぎてしまうと言うことにも驚きました。だから、今後ＲＹＬＡセミナーに参加する人にも同じ感動をしてもらう為にも、この豊かな自然を守ってもらいたい、いや自分で守って行きたいと感じました。

４日間あっと言う間で、本当に自分が成長したのか少し不安は有りますが、本当に良い体験をさせて頂いたと思います。又、参加する機会が有れば、是非参加したいと思います。

田中　久美子

ロータリーの会員は１業種に１会員のみということでしたが、このライラに参加し、日本海から瀬戸内海、太平洋までと、広範囲から、様々な社会的立場の参加者と出会うことが出来たのが、最大の喜びのように感じます。平常の日々では、学生時代は常に学生と共に、社会人になってからは同業種の方々との接点しかない中で、このようなセミナーに参加し、普段では味わえない他の思考、感性、意識にふれ、驚きの中に喜びと、少しの失望を感じながら、４日間を過ごしました。

ここで、あらためて、今までの自分を見つめ直し、最善と思いながら行動していた事が他の観点から見ればどうであったのか、反省すべき点がなかったのか、謙虚に考える時間を持つ事が出来ました。

また、バズセッションにおいても、通常なら講義等をただきいた場合では、その内容を受け入れるのみで、特に疑問、質問が頭の中にわいてくる事はないのですが、今回は、自らが真剣に考え、仲間と語った内容ということもあり、次々と皆に伝えたいと自発的に発表することが出来た事が誇らしく感じました。

正直なところ参加するまでは、期待をはずした時の失望感をやわらげる為に「あまり期待しないでおこう」と自分に言いきかせていました。しかし、今、このライラセミナーを終えてみると、自分でも驚く程に、もう１度参加してみようかな、と思ったりもしています。今回は、たまたまＢ班に入り、他の班の方々とはあまり係ることもなかったので漠然と感じたのみではありますが、Ｂ班に入ることが出来て、非常にラッキーだったと思います。

今後も、様々な方との交流を深め、自分を高める事により、社会に貢献できる人間になりたいと素直に感じました。

西川　直毅

「ＲＹＬＡセミナー」

今回、ライラセミナーに出席してみて人との出会い、自然、時間などの大切さがよくわかったと思う。余島に来た時は本当に３泊４日が出来るか心配や不安があったが、班のメンバーも良く楽しい日々でした。午前中にある講義は眠かったけど為になり、雨の中でのレクリエーション、みんな色々な意見や考え方を知ることが出来た。バズセッションなど、本当に楽しく終わってしまった。セッション・フォーラム人それぞれ、リーダーに対しての意見を聞き、改めて自分がアクトの会長としての行動や発言など考えさせられた。皆が思うリーダーと自分がやっていることのギャップもあり、これからは少しでも、みんな、１人の人に対しても気配りの出来る指導者になりたいです。余島の自然も良く、外界からの情報もなく、自由、時間の大切さも再確認出来た。毎日仕事やアクト活動など時間に追われ、自分のことなど、ゆっくり考えられた「思索の時間」は良かったと思う。ＲＹＬＡについてはロータリアンや前回の受講者から色々と話を聞いていたけど、自分が体験して

みて、本当に自分のため、人のためにもなる講義や討論が出来て良かったです。又、受講出来ればしてみたいと思いました。これからは色々な人達にも言い受講してもらい、自分と同じ感動していければいいと思った。

堀井　美奈子

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私は、このＲＹＬＡセミナーに参加してとてもよかったし、とてもよい経験ができました。最初このセミナーに参加することが決まった時、私はＲＹＬＡの意味もこのセミナーのことも何１つ知らない状態で参加しました。また１人での参加であったためとても不安でいっぱいでした。

木曜日の昼にここに着き、同じ班の人に初めて会って話した時、緊張の糸がほどけました。１日目からのキャビンタイム、最初はあまり会話も弾まなかったけれど、何時間か後にはもう初対面じゃないようでした。四国と兵庫県という違う土地から集まった人たち、そしていろんな経験や考え方を持った人たちが集まっていたのでいろんな話を聞くことができました。午前中の講義でも、普通は聞く事の出来ないできないお話も聞くことができました。一番楽しかったのは、バズセッションでのグループの話合い。私としてはすごくよくまとまっていてよかったと思いました。

私もアメリカ留学という違った経験を持っていて、その事についても意見交換できたのも大変うれしかったです。このセミナーで得たことを生かし、人の役に立つ活動ができればいいなあと考えています。最初はどうしようかと不安でいっぱいだったのが、この４日間があまりにも早く過ぎてしまったので、今では、淋しい気持ちでいっぱいです。11人の新しい友達もでき、４日間いろんな事について語り合い、共に過ごしてきたこの大切な体験は、私にとってとても大切な経験になりました。このセミナーはとても良いものなのでこれからもいろんな人に参加してもらいたいと思います。こういう風に話合ったり、考えたりする機会はあまりないので、このセミナーに参加させていただいて本当に嬉しく思いました。本当にありがとうございました。

丸山　りえ

ＲＹＬＡセミナーに参加して、すばらしい友に巡り合えた。と言いたいのだが・・・それは今後の私の行動次第？！

何も分からずにこの余島に来て、初対面の人達と３泊４日の集合生活。１人で参加している私にとって不安は大きかった。しかしそこは目的を同じにする者同志、打ち解けるのに長い時間はいらなかった。

予想していたよりはゆったりしたスケジュールに、非日常を満喫でき、心のゆとりも持てた。自由と規律の特色が色濃く出ていて、時間に追われることなく、自分を見つめながら、１日１日を過ごすことができた。

講義については、高レベルのものもあったが、普段ではお出会いすることのできない先生方の話を聴けたことはありがたかった。個人的に一番理解できたのは河合先生の講義。２時間半があっという間に過ぎていた。また閉講式の森さんの言葉。『箍（タガ）』短いが心に残る一言になった。

受講生について、班単位の活動が中心であったこともあり、Ｂ班の中でしか交流を深めることができなかった。しかし私はそれで満足している。何かの縁で一緒になった11人年齢も異なり、職業や性格も様々、言いたい放題のところもあったがそれがＢ班らしさだと感じた。社会人が多かったからか、他の班を寄せつけないような部分も少しあったが、私はそれでもＢ班で良かったと言える。自分が社会人だからということもあり、異なる地域の同世代の人と交流がしたかったし、実際話をすると、考えさせられることがたくさんあった。そしてまた、そんな私たちを客観的に見ている学生の意見も聞くことが出来、充実した４日間だった。最後に少し？！いろいろあったけど、楽しく過ごせたのは、おいしい３度の食事と余島の自然、そして理解し合おうとする仲間がいたからだと思う。本当にありがとう。

最後に・・・近江岸さんの講座？！が一番良かった。2時間では全然足りなかったので、今度は2泊3日の講習会に参加したい。

柳原　尚之

「ＲＹＬＡに参加して」

今回私はこのセミナーに参加して、本当に自分の幼さと無知さを思い知らされた様に思います。

自分の思い描いていたリーダー像、又はリーダーの資質は、とりあえず先頭に立ってみんなを引っ張って行くものがリーダーであるのではないかと考えていました。しかし、本当のリーダーは、引っ張るイメージではなくリーダー以下の人達の弱点や間違っているところをさりげなくサポートをして、特にはその人自身で気付かせる事によって人をつつむ様にして目的に向かって行かせる事が出来る人であると考えが変わりました。その事に気付かせてもらったのは、他ではなく我班Ｂ班でありました。Ｂ班にも、色々な人達が集まって来ました。そして、今回のセミナーはリーダーになるためのもので、リーダー同士が集まれば、自己主張が互い強すぎてぶつかるものなのかと考えていました。しかし、実際にはそうではなく、自己主張をするポイントをおさえ、場の雰囲気を読んでいる様でした。つまり、相手の話を聞いてその上から自分の意見をはっきりと理論的に説明してくれるのです。その事は、はっきり言って自分にとってショックな出来事でありました。今の自分にはそれが出来ないのです。

年齢的には、それほど変わりません。にもかかわらず、自分に持っていないものを見せつけられました。だから今回のこの経験をもとにして自分の幼稚さと無知をできるかぎり克服出来る様に、明日いや今日から努力したいと思います。

又、その他にも、色々な先生達の講義を聞いて考え、意見を言い合えたのはこれからの自分の考え方のヒントになると思います。自分が変わらなければ周りは何も変わりません。これから頑張ります。

最後になりましたが、この機会を与えて下さった小豆島ロータリークラブの皆様に感謝いたします。

Ｂ班カウンセラー　植松　慶太

奈音、お父さんはロータリークラブのお仕事で、小豆島（余島）へ行ったよ。ＲＹＬＡセミナーと言うんだけど、20歳以上の若い人達の指導者養成の為の３泊４日の研修なんだよ。お父さんはカウンセラーと言って、受講生のお兄さんやお姉さんの相談にのってあげる仕事だったんだよ。２段ベッドがいくつかある部屋で、寝泊りして、皆でいろんなことを話したり、偉い講師の先生から、為になる話を聞いたり、島をお散歩したりしたんだよ。お父さんの班のお兄さんやお姉さんはね、奈音や卓っくんも、きっと好きになると思うけど、やさしくて、人のお世話がよくできる、とってもいい人ばかりだったよ。お父さんは、奈音や卓っくんも、いつかはこんな人達のようになってくれるといいなと思っていたよ。今回のテーマは「対話・理解・寛容」ということだったけど、若い人といろいろ話していて、お父さんの考えてもなかったことや、同じ価値観なんだと思うところが出てきて、とても勉強になったよ。

奈音、卓っくん、自分と自分以外の人がわかり合うことというのは、むずかしいんだよ。その人が何をして欲しいと思っているのか考えて、その人の立場になってみて、そして自分を見る事が大切だと思うんだ。世の中は、自分独りじゃ生きて行けないんだよ。必ず、自分以外の誰かと関っていかなければならないんだよ。相手の気持を考えてあげて、相手の痛みが自分のものとして感じられるのはむずかしい事だけど、いつも努力して、わかってあげようとする事が大切なんだよ。奈音も卓っくんも、大きくなったら、お父さんが余島へ連れて来てあげるから、ＲＹＬＡセミナーを受けようね。そして、いっぱい勉強して、人に幸福（しあわせ）を与えられる事が、自分の喜びと思えるような、人の為に何かしてあげられる事ができるような、そんな大人になって欲しいと、お父さんは願っています。

B班カウンセラー　由良　澄子

昨年に引き続きやらせて頂きましたが、昨年とはまったく違っていました。昨年の反省を含めて私なりに今年のやり方を考えて来たのですが、（受講生の自主性、主体性を尊重し、自由にやらせよう）と思っていましたが、ある事を批判されて思わず、私の個人的な意見を押しつける様に言ってしまい、カウンセラーとすれば失格かなと迷いが生じてしまいました。そうなると次の事も、別の事もどこまで私が介入し、意見を言ったらいいのか判らなくなり、少し距離をおいて接する様になりました。同じ班の植松さんは初めての経験でもあり、熱心に取り組んでおられ、受講生と一緒に同じ行動をし、同じ様に考え、意見を言われている様に見え、よりいっそうとまどいを感じました。でも他の先輩のカウンセラーの方に話を聞いてもらったり助言を得る事で私自身は落ち着いて来ました。その後、フォーラムに向けての班の行動を見るにつけ、まとまりもよく段取りよく仕事をかたづけているメンバーを見ると（班の）年齢的な面も含め、なる程と感心させられました。平均年齢27歳位で割と落ちついたしっかりした班だったのでそれ以後は安心しておれました。その後話を聞いておれば批判的な事をいった子は全て判っていて（経験上）こちらの反応を見ていた様です。でもグループにそういう子がいる事でＲＹＬＡに対し別の角度から見る様になり皆がすべての事に批判的に（いい意味でも悪い意味でも）観察している様にとれました。でも班の中では仲もよく楽しく過ごしている様に思いました。男性に２人、女性に１人リーダーを取れる子がいて自然発生的にその子達を中心によくまとまっていたという感じがします。

今回の経験では、自分の未熟さと応用力のなさ、経験の浅さを自覚できたという点で非常に勉強になりましたが、他の方に心配をかけたという点で申し訳なかったと反省しております。役員の方々の苦労は大変だったのではないかと感謝をして筆をおきます。ありがとうございました。

Ｃ　班

池田　貴之

私がこのＲＹＬＡセミナーに参加したのは、自発的なものではなく、会社の社員研修の１つとして参加しました。それも、ＲＹＬＡに決して何の知識もありませんでした。初めは普段からRotary Clubに関わるような活動をしている他の受講生とのギャップに戸惑い、自分は場違いなんじゃないかと思い、「面白うない、早く帰りたい」と思っていました。

ところが、余島の大自然の中で普段の忙しい時を忘れ、多くの仲間と親睦を深めていく事で、自分にも出来るんじゃないかと思うようになりました。

今までの自分の人生で、1つのテーマについて、皆んなで語り合い、討論した事は一度もありませんでした。特にフォーラムで1つのテーマについて皆んなで真剣に考え、自分の意見を言い、人の意見を聞いた事が、このセミナーに来て一番良い経験になりました。特に相手の目線で物事を考え発言する事が大切なんだというような事まで教えてもらいました。

又、多くの仲間や講師の先生、カウンセラーの方のいろんな経験や考えを聞く事で、自分の視野が広がりました。

セミナーが終わり帰る今となっては、このＲＹＬＡセミナーで人生において大変貴重な体験をさせてもらったと思っています。来年とは思わないが、数年後に機会があれば、またＲＹＬＡセミナーに参加したいと思います。

将来はこのＲＹＬＡセミナーで学んだ事や経験した事を生かし、良き社会のリーダーになれればと思います。

楠瀬　恭子

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私の理解しない摂理によって導かれ過ごしたこの4日間は、長かったようで短かったようで、私の時間の速度がその場の条件で、数学の変数のように変化した不可思議な時間でした。プラスでもなくマイナスでもなく全くゼロの状態（不安はありましたが）で、このセミナーに臨みましたので、知らないこと例えば言葉ではまずライラから始まり、ガバナー・ディーン等数多くありましたし、今までの自分の小さな世界では聴く可能性の少なかった講義等自分の知らない事を教わる楽しさを久し振りに味わいました。

全く未知の他人との出発は、闇路を進む様な手探りの状態で、かけらをひとつひとつ集めてゆっくりと一緒に歩んで行ったように思います。同じ思いや考えでいることは少なかったかもしれませんが、一緒にすごしていたことがとても大切だったと思います。自分だけではなく他も同時に存在する時、その場の皆が心地良い状態であるためには、他を思いやる心が一番必要です。私の師がいつも「相客に心せよ」と言っていましたが、私は今回その心を打ち寄せる波のように確かに受取りました。対話する時、討論する時、私を理解してもらいたい時、他を理解したいと望む時、私を見て気づかってくれるその気持がとてもうれしく温かったです。

私にはもったいない時間でした。私より若い人達に体験してもらいたい、ぜひ来てほしいと強く感じました。

私をこの場に導いてくださったすべての方々、この地、4日間見守ってくださった方々に心より感謝致します。ありがとうございました。

小林　清史

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私は今回初めてＲＹＬＡセミナーに参加しましたが、実は昨年、一昨年と2回も参加しないかと声をかけてもらっていました。しかし2年前は当時19歳だったので無理ということでした。昨年は都合が悪く、今回3度目の正直ということで参加するのがとても楽しみでした。

私は現在中学生を対象にリーダー活動をしているため、何か自分がリーダーとして足りないもの、あるいは役に立つものを学んで帰ろうと思っていました。非常に興味深い先生方の講義の中からも多くのものを得ることができました。又多くの人とディスカッションすることで、相手の意見を聞き、そして自分も意見を述べることによって普段あまり深く掘り下げて考えていなかったことを考えなおすことができました。

フォーラムの中で一番意見の出ていた話題である『相手の目線に合わせて話をする』というものがありました。私もリーダーをやっているので、それは当然必要であり、できる限りやってきたと思っていました。しかしいろいろな意見を聞くうちに、相手に合わせるといっても様々なやり方があるのだとわかりました。今回はカウンセラーの方がずっと私たちと一緒に生活をしていましたが、これもその1つの方法であると思いました。

自分の両親と同世代の方々と一緒に生活するといった経験はなかなかできないものです。最初に私たちと一緒に寝ると聞いた時何か制約されそうな気がして少し嫌だと思いましたが、カウンセラーの方が私たちの視線に合わせてくれたため、すぐにうちとけることができました。今思えばその時嫌だと思った自分に後悔しています。

3泊4日あっという間でしたが、多くのことを学び、そして良き友ができとても楽しかったです。

柴田　こころ

この余島での4日間を通して、対話というものの大切さを改めて実感をしました。

たわいもない話をするのも、とても楽しいことなのですが、深く何かについて誰かと話すことで、その人の考え方や環境を理解することができます。そしてその上に信頼関係というものが確立されるのだと、心に強く響きました。

また、深く対話することで、相手を理解できるだけではなく、自分自身も見えてくるように思いました。ふだん、何気なく会話する際には、あまり考えないのですが、深く対話し、何か自分の意志を伝えたい時、自分の意思を相手にわかりやすく伝えられるように「まとめる」と言うことを考えます。私は非常に漠然とした意志を普段持っているだけで、その意志を具体的に言葉にまとめていく過程は、自分という人間の考え方を確認でき、改めて自分自身を見れる場だと気づくことができました。

私のこれまでの22年間の人生の中で、こんなに1日1日が充実し、何かを考える4日間はありませんでした。このセミナーで得たもの・・・語り出すと言い尽くせませんが、私のこれからの人生を大きく変えてくれる存在になると思います。私は大きな影響を今回与えて下さったC班のメンバー、講師の方々、そしてロータリークラブの皆様に大変感謝しています。どうもありがとうございました。

仙場　玉美

近くて遠い島、小豆島・余島。日常の生活を離れ、自然いっぱいの余島での3泊4日で、多くの友人達と出会い、語り合ったこの時を忘れることはできないでしょう。四国・兵庫の各地から集まった受講者は46名。年齢も職業も日々の活動も違う仲間達と、同じテーマのもとに集まり、夜中まで語り合ったことで多くの気づき、共感、感動を得ることができました。今回このライラで感じたこと、思ったことを実践につなげる為には、何度もここでの生活をふりかえり、「自分のできることから少しずつでもしよう」と思った今の気持ちを継続させなければなりません。思っているだけでは、何も変わらないと思います。思ったことを身近な誰かに伝える、ロータアクト活動の場で実践する、何かいきづまったら原点にかえってみる、多くの志を同じくする人達と対話する・・・ことで何かが変わっていくと考えます。

今回3人の方の講演を聴きました。どのお話も難しいようでいて、心に残る、考えさせられるお話でした。カウンシルファイヤー、初めて体験しましたが、心が静かに穏やかになる、いい時間でした。寒さも忘れる程、心が暖かになりました。隣の人の手の暖かさも十分に感じることができ、ライラに参加して良かったなと思えた（心で感じた）ひとときでした。バズセッション＆フォーラムでは、少人数で対話することで、多くの意見が出てまとめるのにずいぶんと時間がかかりましたが、同じ班のメンバーの中では納得いくまで話合いができました。フォーラムでも、経験を交えた話や意見が多く聴けて、内容の濃い、熱い時間を過ごすことができました。どの内容も十分に満足できるプログラムであり、カウンセラーシステムをとることで、先輩方の意見も聴けて、一味違った良い経験ができました。（バズセッションの場に、パストガバナーが参加してくださいましたが、的を得た貴重なお話を聞けたり、その後も声をかけてくださったりしました。）

早くから参加を楽しみにしていたライラセミナーで、多くの、お金では変えない財産を得ること

ができました。この感動は、心で感じたものが多く、言葉でうまく表現することは難しいかもしれませんが、私なりの言葉で次に参加する人達等に伝えていけたらと思っています。あっという間の４日間でしたが、この機会に参加させて頂き、本当にありがとうございました。

高橋　和芳

「ＲＹＬＡセミナー」

受講生の多くの人がそうであったように私も「ＲＹＬＡセミナー」とは何か理解せずに参加し、孤島余島に足を踏み入れました。

初日のキャビンタイムでは、初めて会う者どうしカウンセラーの誘導により、それなりの時間を過ごして終わり、ＲＹＬＡの意義の見い出せぬまま次の朝の講義に備え早いうちに床につきました。

２日目、八幡氏の講義を聴き、昼からのレクリエーションによってお互いの親睦を深め夕食後のキャンプファイヤーでの話の中でロータリアンとして、人としてのあり方について再確認することとなり、その後のキャビンタイムでは、八幡氏の講義に対する討論を行い成功するための方法等を学びました。

３日目のバズセッション～フォーラムでは、それぞれが自分の意見を出し、相手の考えを聴き、お互いの意見をまとめあげることで、リーダーとしての役割・あり方を深く理解することができ、自分が社会の一員として、どんな行動をすれば、自分の所属する社会での人財の受け継ぎの方法そしてその重要さを考えさせられる時間であったと感じ、最終日の今井氏の話の中で「文明が他の文明と交わらなければ孤立してしまう」という言葉を自分に置き換えて考えると、自分の中にこもらず他人と対話し、他人を理解し、他人を受け入れろことが、人として、リーダーとして最も必要であるが、最も難しいものであり、これを継続さすことがこれからの目標であると考えます。

太期　聡一郎

余島の素晴らしい自然の中で行われた３泊４日のライラセミナーに参加して、本当にたくさんの経験を得ることができました。

私は余島に着くまで、受講生は全員学生と思っていましたが、部屋に入り自己紹介の場で、私が最年少だと知り、動揺を隠すことができませんでした。しかし、様々な職業で、様々な経験をしているわけですから、共に話しをする中で、とても良い勉強をすることができました。更にもっと多くの経験をされている先生方の講義は、知らないことばかりで人が生きて行く世界の難しさを学べました。

私は、Good News is No Newsから始まる言葉がとても印象に残りました。八幡先生は、ベンチャーと関連づけて講義をされましたが、私は右に挙げた言葉は、どのような分野でも用いることができると思いました。人が接する上でしなければならないこと、考えなくてはならないことが全て含まれている言葉だと思います。

このように、心に刻まれるような知識を得ることができた私は、幸せを感じます。日常の生活では、まず経験のできない環境が、余島のライラセミナーでありました。受講生の皆さんや、ロータリアンの方々と飲むお酒の味は、二度と味わえないでしょう。１人になり自然の中で思いを馳せることも二度とできないかもしれません。この３泊４日は楽しいことばかりでした。何十年とある人生の中で、４日という期間は、ごくわずかなものですが、ライラセミナーの４日間は、最高の４日間でしたと、胸を張って言うことができます。本当に参加できて、よかったです。ありがとうございました。

畑中　智仁

「余島ですごす」

参加するにあたって、セミナーのスケジュールを見ただけでは、いったい何をするのか少し不安をかかえながらやってまいりました。人との出会

い、対話を重んじているのを、実感したのは、やはり２日目の夜になります。酒を飲みながら語りあう、一見ごく普通のようですが、全く何も知らない相手と、酒を飲み語る、けっこう難しいことです。まず相手の許容範囲をしらべなければなりません。どこまでツッコミを入れたらいいのか、どついていいのかなど。

一応大人である私達が、これだけの数の初めてあう人間と出会えるというのは、なかなかない機会です。それは今の子ども達にもいえることだと私は思います。学校や塾、おけいこごとなど、そういった場所でしか出会いの場がない。かなり深刻な問題です。出会いの場、遊び場がどんどんなくなってきています。遊び場であり、出会いの場をもっとたくさん作っていくことが大切だと考えられます。現在都心部では、公園でたき火もできず、水遊びすらできなくなっております。子どもたちにとって、やりたいことが、大人の勝手な都合でやりにくくなっております。こういったことが実感といますか、再確認することができ、よかったです。講義で河合雅雄先生の「子どもと自然」についてのお話を聴くことができたのも、こういった意味で大変勉強になりました。私は篠山チルドレンズミュージアムで、子どもと実際かかわる仕事をしております。職場の人間にも聴かせようと考えております。私と同じような職種の人と出会うことにより、お互いの考えを語り合うことができたことは大変うれしく思います。そしてもっと密な仲間になっていこうと私は考えています。人との出会い、そして仲間になる、こういった「出会いの場」を私に与えてくださった人達に感謝しています。本当にありがとうございました。今回のセミナーでは、たくさんの得るものがありました。自分以外の人の事や、自然に対して考えられる、そんな「カッコいい大人」を目指して人生を歩んでいきたいです。ありがとうございました。

松山　純子

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私は、ＲＹＬＡセミナーに参加して、たくさんのことを学び得ることができました。

素晴らしい自然の中で、たくさんの物に触れてきました。自分自身の体で触れることにより、砂の温かさや水の冷たさを感じ取ることができました。また、耳を澄ませば、風の音や小鳥の声が聴こえてきました。とても心地良くて穏やかな気分になれました。桜の花を見て、純粋に美しいと思えたり、夜空一面に輝く星を見て、素直にキレイだと思えました。少し目線を下げて、足元を見てみると、小さな、かわいらしい花や一生懸命に働く虫の姿が目につきました。逆に、少し目線を上げてみると、大空を優雅に飛ぶ鳥たちの姿を見ることができました。忙しい日々の中で、忘れかけていた気持ちを、このセミナーに参加することにより、取り戻すことができました。

バズセッションでは、「子どもの意識と大人の意識そしてリーダーの役割」というテーマの中で、様々な事を考えさせられました。明快に、自分自身の意見を伝えることの難しさに、少し戸惑ってみたりもしました。その中で、自分自身の意見を相手に伝えることの重要性を学ぶこともできました。また、素直に相手の意見を聞くことの大切さも学びました。たくさんの人に出会い、色々な意見を聞くことができ、少し視野が広がったように思えました。フォーラムでは、積極的に発言することの素晴らしさを感じることができました。

私は、このＲＹＬＡセミナーに参加して、わすれかけていた気持ちや自分自身に足りないものを見つけだすことができました。たくさんの人に出会い、たくさんの事を吸収することができ、本当に良かったです。ありがとうございました。

三宅　淳一

加古川市の教育委員会の先輩に声をかけて頂き参加したＲＹＬＡセミナー。当初は、日常の様々なことを忘れられるかな、程度の心構えで来ましたが、様々なことを考え直すきっかけとなりました。

プログラム全体が、詰め込みではなく時間的に

余裕があったので、日頃じっくりと自分について見つめ直す機会をなかなか持てずにいた自分に会うものでした。ともすれば多量の情報に押し流されがちな生活について、改めて考えることができました。

講義については、共感した点が多数ありました。

八幡先生には、起業する際のチャレンジ精神と周到な準備の必要さを教わりました。ベンチャーに限らず日常生活全般にあてはまることだったと思います。また、日本社会の欠点は公務員社会にそのままあてはまるものが多く、考えさせられました。

子育てになぜ父親が必要なのか、ということを生物学的に解説した河合先生の講義は新鮮でした。未来の父親予備軍として・・・。

人間は１人では生きられないという当り前のことを思い出させたのが今井先生の講義でした。全てに対して謙虚である。自分には無理かもしれません。が、心掛けていくつもりです。

フォーラムで各班から出ていた「同じ目線」については、様々な体験を聞けました。そして、やり方は１つではないと思いました。大人はつい自分の尺度で周囲をしばりがちですが、対話・理解で一番合った方法をその都度考えるべきと感じました。

また、参加者の大半を占めるリーダー達と交流できたのは貴重な体験です。青少年教育等の企画立案担当者として、生きたノウハウを数多く吸収でき、今後の糧となりました。

最後に、スタッフ、ロータリアンの方々、C班はじめ参加者のみんな、そしてこの機会を与えて下さった方々に深く感謝します。

脇長　敬

今回、このＲＹＬＡセミナーに参加し、通常の生活では得ることのできないであろう集中できる環境と仲間との対話ができ、有意義でした。特に私は一般企業からの参加であり、各団体でリーダー活動を行っている方達との対話は新鮮で非常に感動を与えて頂きました。私の班ではリーダーをされている方が私よりも年下が多かったのですが、その考え方や行動を知れば知るほど、感心させられ教えられました。

フォーラムにおいてテーマについての話し合いを行った際、「子供とは」「大人とは」との自分達の思いを互いにぶつけることで、各自が持っている人間に対する前向きな意見を共有することができました。

互いに意見を出し合い、良く聞き良く語ることにより相手に対する認識を深めていくことができるという確信と共に、今井先生が言われていましたが、地域社会においてもこのことが実践される事が必要だと思い知らされました。現在の日本社会は無知であるがゆえの無視を行っている人々が多いと思われます。これを解決するために積極的なコミュニティの創造が必要なのだと思いました。

今回のＲＹＬＡでの経験を基に今後ＲＹＬＡの精神を周りに伝えていきたいと考えております。

最後に、このＲＹＬＡの関係者全ての方、共に語り合ったC班の仲間、そして余島の自然に感謝致します。

C班カウンセラー　赤穂　哲

何年かぶりにカウンセラーをやらせていただきました。体力的に又気力の面で、３日間持つかなと心配でした。今感想文を書くところまでこぎつけてほっとしています。

振り返ると、今回は過去何回かやったカウンセラーとは異なったカウンセラーであったと思われます。それは今までは、自分が受講生をある程度コントロールし、方向づけをしてじょうずにカウンセラーしようとしていたので、今回はコントロールせずに、受講生の自主自立の精神を大切にしてやっていこうと取りかかった事です。しかし現実は、なかなか自分の思ったとおりにはゆかず、カウンセラーのむつかしさを再認識しました。

一方で新しい感動もありました。１度もあった事もない受講生との出会い、キャビンタイムはふだんの仕事をすっかり忘れさせてくれたすばらし

いものでした。

講義も予想していたとおり、すばらしい講義で、大事に聞かせていただきました。

女性カウンセラーの角田さん、受講生のみんな、ライラスタッフのみなさん、私に貴重な体験をさせていただき、ほんとうにありがとうございました。

C班カウンセラー　角田　麗子

1年を過ぎる早さにとまどいながら、再び余島に。昨年のライラでの数日がオーバーラップしながら、今年はどんなライラにと期待しつつ初日を迎えた。昨年の無我夢中ではありながら受講生のように楽しんだ23回ライラセミナー。

2年目ということもあり、つくづく思うのはカウンセラーとしての役目の重大さ。余島で過ごす4日間は、カウンセラーにとってもそれ以上に受講生にとっても大切な出会いである。パートナーとなる男性カウンセラーとともに、受講生にとって有意義な24回ライラセミナーとなることを願う。

八幡先生と河合先生の、「高度技術社会と人間社会」に対し、「子どもと自然」といった180度違った講義。夜のキャビンタイムでの雑談に、自分とはまた違ったとらえ方にうなづく。心配した雨もあがり、心に残るキャンプファイヤーもおごそかに終わった。

いよいよフォーラムの日。C班では21～40才までの異年齢異業種の受講生達が1つになって時間を過ごす。他の班との熱心なフォーラムも無事終了。何かを成しとげた後の心地よいキャビンタイム。

受講生の生き生きとした表情をながめながら、思った。ずっとライラに参加され世話をされる多くのロータリアン、そしてライラ関係者の方々。紙に書けば数枚のスケジュールとなるライラセミナー。でもこの実際に参加してみないと分からない、ギュッと詰まった4日間の感動に出会うため、余島にやってくるのでしょうね。

『こよいうれし星あかりに　わがふるすへかえらなん、　ああ　余島の森へ　我らがふるすへ・・・』

出会った受講生が、このライラセミナーで何かを感じこれからの人生に何らかの形でプラスになってくれるものとカウンセラーとして願います。そしていつか“我らが古巣”を再び訪れて下さい。

D　班

アズミ　ナヴィート　ムハマド

私がライラに参加させていただいたのは全く偶然のことでありました。最初はライラの内容も知らなくて、一体どんなものなのか分からなかったのです。仕事を休んで、4日間ライラに参加する

ことは経済的にそんであると思ってましたが、参加して得たものはそれより何倍も貴重なものです。ライラに参加して色々なことを勉強しました。人との出会いの大切さ、互いに理解しあって、お互いのことをが分かって相手を信頼すること、誰かを信用して自分の心の中を話し自分の本心を伝えることが出来る人間関係の重要性をはだで生で感じることが出来て非常に良い経験をさせてもらいました。高度な講義を聴くことによって自分が今まで与えてきた世界観を確かめることが出来、正すことが出来ました。世界に対して自分の責任、自分の役割を理解し仲間の一緒にそれを果していく決意と心の準備が出来ました。余島の豊かな自然の中で自分をみつめないし、感動をもらい、良い仲間とめぐりあえたことは自分の人生に大きな変化をもたらすだろうと信じています。D班のカウンセラーのお2人と友人達と一生のおつきあいが出来たことは一番大きな恵みであろうと思っています。3泊4日の短時間であったが、最初に全く知らない人々とこんなに親しくなれるのだ、こんなに信頼関係が出来るのだ、自分の腹の中のことを皆の前で話せるのだ、と感動することばかりでした。皆がそれぞれ頼れる人間関係が出来て、新しい自分を発見したのではないかと思っています。この余島の中、新しい世界の中から得たもの、その光を皆で力を合わせて、世界をかえるような輝きになって表れたらいいなあと思います。私は日本の若者がきらいでした。しかし、今は違います。今の若者は自分の中に大きな輝きをもっています。ただし、皆が暗いのは日本の大人が使った環境のせいです。大人が自分を変えることが出来たら日本の若者、子どもが、前よりももっともっと輝いていくのではないかと思います。大人の責任は積極的に前に出て、1人だから出来ないと思うのではなく、私がするんだからこそ変化が起こるという姿勢で始めることではないかと思います。大人が変らないと子どもも変らないといいましたが、全くその通りではないでしょうか。私自身も先ず自分を変えて、それ次は家町市国そして世界へと続いていくように努力したいと思っています。もう私は1人ではない。私には信頼できる仲間がいると自信をもっていえます。私にこのような貴重な体験をさせて下さった、ロータリーの皆さまと、最もD班の仲間達に心から感謝の気持ちを申し上げたいと思います。これからも皆と力を合わせて、世界に役立てるように頑張っていきたいと思いますので、これからもよろしくお願い致します。3泊4日お世話になりました。どうもありがとうございました。また余島に来たい・・・。

河西　麗子

この3泊4日がこれほど私にとって大きいものになろうとは、全く予想ができなかった。これほど素晴らしいものになったのは、何よりD班の仲間に出会えたことである。

今まで出会ってきた人は計り知れないほどいるが、出会いについて深く考えたことはなかった。いや、深くは考えていないのかもしれないが、深く感じたのである。

人と初めて会うとき、いつもとても緊張する。自分というものが出せるか不安だからである。ここでは、私は自分で驚くほど、心の底から笑い、話しをすることができた。そして、みんなもそうであろうと感じることができた。素晴らしいという言葉を何回も何回も使いたくなった。

常に、何事にも真剣に立ち向かう人と出会った。話をすると、一番聞いてくれていると感じた。こんなに嬉しいと感じたことはないくらい、心も態度も面と向かって話をし合った。私に自信をくれた人だ。

そして、D班の中で、全員が一生の友だと感じ合い、絆を確信し合えた。本当の仲間である。不思議な感覚にとらわれるほどの親ぼくを築きあげることができた。

たった3泊4日の中で、どれほど笑っただろう・・・（ほお骨痛くなったな）どれほど、語り合っただろう・・・（乾杯しまくったな）私は、この4日間を一生忘れない。出会った素晴らしさを語り、一緒に涙を流せる仲間が出来た。どんなことでも、素直に話せる仲間が出来た。誰かのた

めに、みんなが真剣に考えれる仲間が出来た。

てる、じゃいこ、たかし、おぶちゃん、ナヴィちゃん、ふうみん、けいちゃん、せんせい、やっさん、ひろ、みんなに会えて本当によかった。これからもよろしくね！

小林　功士

「ＲＹＬＡをきっかけに」

３泊４日ってすぐに去ってしまうものだと素直に感じました。人に出会うというパワーなのかな？様々な人の考え、生き方等、心に触れることができたのは大変いい経験になったと思います。その経験には、感動、反発、反省といった純粋な精神活動を普段とはちがった環境で自分でもおどろくほど素直に感じれて知らなかった自分自身にも出会いたのしかったです。

余島という異空間で今回体験したことを普段の生活に戻って同じように周りの人ともやっていこうということは大変困難だと思います。しかし少しずつなんらかの影響をこれからも出会っていく人たちに伝えていきたいと思います。『継続は力なり』続けていくことＲＹＬＡで知ったよろこび感動、知識をもって信念をもって自らが手本となるように生きていきたいです。

社会には様々な問題があり多くの悩みがあります。それらを消すことは無理でしょうが少なくしていく。また、多くの人々と共有することで軽減していく努力が必要であり、その努力を続けていきたいと思います。人間には大人、子どもと成長の分類、人種、性別など区別があるようですが、みんな心を持った同じ人間で語り合えば心が通じると思います。ＲＹＬＡでも初対面の人ともまるで竹馬の友であったかのように通じれて生涯共に生きることを約束しました。ほんまに、気持ちええこと！！この感動を世界中に伝道していきましょう。すばらしいことをすばらしいと言える勇気を持って進んでいきましょう。あぁおもしろかった。ありがとう。これからもよろしくな！

小袋　早苗

「ＲＹＬＡセミナーに参加して」

私が、ＲＹＬＡセミナーに参加した理由は、自分が変わりたかったからです。自分自身に自信がなく、思っていても一歩が踏み出せずくやしい思いをしていました。

でも、今回参加して、心のもやがはれました。初めてあった班のメンバーと話し合っているうちに、みんな私の意見に耳を傾けてくれるんです。私を理解しようとしてくれているんです。私もみんなの意見を聴き入れる事ができました。人の意見を聴く事が、今までできてなかったんです。だから、近江岸さんが話して下さった、「聴くとは、14の心を聴く事です」というお話すごく心に突きささりました。自分が、相手を理解しようと聴いていれば、相手も聴いてくれるんですね。そんな素敵な仲間と出会えて本当によかったです。

ここで学んだ、コミュニケーションのとり方はすべての関係で生かせて行けそうです。ここでの経験を、自信に変えて、地域社会でも、生かして行きたいです。同時に、コミュニケーションがはかれる機会を増やして行きたいです。

また、キャンプファイヤーの時にいただいた光を大切にします。今はまだ小さく、誰かを照らすなんてできないかもしれないけど、誰かのために照らしたいです。私の心に灯った火、心を暖かく変えていけそうです。足踏みしていた気持ちも、前向きにかんばれます。私には、Ｄ班の仲間もいてくれます。ここで終わりじゃなく、ここからスタートです。ここでの経験を、多くの人に伝え、理解してもらえるようにがんばります。

Ｄ班のみんなありがとう。

桜井　敬介

この余島での４日間、色々なことがあったが、結論から言うと、「素晴らしかった」の一言に尽きる。なぜなら、４日前までは名前も何も知らなかった人達と今では「親友」と胸を張っていえる存在になっているのである。この仲間に出会えた

というだけでも、余島に来た価値がある。そして、それだけではなく、素晴らしい講義や余島の自然など、どれをとっても感動に値するものばかりであった。

しかし何よりも自分の中での一番の財産は、余島で出会ったD班の仲間である。毎夜くりひろげられた、ディスカッションの中で徐々に仲間達の性格や個性を知っていき、それを皆、誰一人拒絶することもなく、個人を認め、それを受け入れていき。最後の夜には、全員が「みんなと出会えてよかった」と言えるまでの人間関係を築いたのである。最近、人間関係に疲れていた私には、感動的な光景であり、経験であった。

この余島で学んだ沢山のことを、自分の胸の中だけにおいておくのではなく、沢山の人達に伝えていかなければ、ライラセミナーに参加した意味がないと思う。

そして、D班のみんなとは、日常生活に戻っても、これからずっと、つきあっていかなければと思う。大切な仲間だから。余島で見つけた最高の宝物である。

塩田　晃代

D班最高―！！一番簡けつに言うとその一言でいえる。初めどんな班か不安があり、自分と合わなかったらどないしよーとか自分を出せるのだろうかと様々な事を考えていた。でもみんなうちとけていき、自分の居場所を見つけた。D班にいると自分本来の姿、無理せず、気をつかうこともない楽な自分でいれた。もしかしたらこの班なら自分自身をうけいれてくれるのではないか？受けとめてくれるのではないかと思い始めた。そう考えた時、これが一生の友達というものなんだと思った。この世に一生の友達なんてないと思っていた。

でも、ここ余島にはあった。これからもD班の人達とは付き合っていきたい。D班の人達といると自分は独りなんかじゃない。絶対に裏切らない心から信じれる仲間が12人もいる。きっと力になってくれる仲間がこんなにいるんだ、と心の支えになる。前進していこうという力を与えてくれる大切な仲間達だ。

本当はまだまだこのままでいたい。D班という大切な仲間と別れるのは嫌だと思う。けどこれは別れじゃなくて出発なんだ。有言実行通り、バズセッションの時のリーダーの役割を私達は、はたしに行かないといけない。仲間がいるから旅立てる。人と人との関係もすてたもんじゃないなと思える。

3泊4日いろんな行事があった。その中でも思索の時間、キャンプファイヤーの時間は自分を見つめなおすいい機会になった。自分とはどういう人間なのか、ここに何を求めに来たのかほんの少しずつわかってきた。自分はちっぽけなのかもしれない。けどその存在は大きく誰かから必要とされ自分というものがある。それはなくてはならないものである。また自らが勇気をだして心の窓をあけると見てくれる仲間がいる。何も恐がることはない。

私はもう1人ではない。大切な仲間がいる。一生付き合えるD班の仲間達が。

杉本　貴史

「ＲＹＬＡセミナーを受講して」

このライラセミナーのことは、知り合いの人から少しどんなものかは聞いていましたが、あまり深く考えずに遊びに行く感覚で、気軽に参加することにしました。そして、初日に余島に到着して、各班ごとのキャビンに別れた後、今では信じられないくらいに静かで、誰も話をせず、これで4日間過ごすのかと思いライラに来たことを後悔しました。ですが、本当に不思議なもので、夜になるとすっかり打ち解けることができていました。今回のライラのテーマは「対話・理解・寛容」で、コミュニケーションについて色々と講義で勉強するのだろうと思っていたのですが、講義よりもD班の仲間内でのコミュニケーションの取り方で、ものすごくいい勉強になったと思います。それは、日頃普通に暮らしていく中ではコミュニケーションについて深く話をしたり、考えたりする機会がなく、自分の中で1つ答えが見つかったからです。

僕は人と話をするのが苦手な方で、なかなか自分の考えに自信が持てず口に出せなかったのですが、その考えが間違っていても別に恥ずかしいことではなく、むしろ色々な人の考え方を吸収して自分の考えに磨きをかけることが大切であるということに気付くことができました。そうした上で、たった4日間の短い期間で本当に腹を割って話をすることができる友達ができました。今回のライラで僕がリーダーとしてしなくてはいけないなと感じたのは、ただグループの指揮を取るだけではなく、自分が感じたことや身につけたことを他の人にも話し、リーダーとしての意識を後押しすることだと思いました。

最後に、このライラで本当に自分自身の考え方や生き方が変わり、今までよりずっといい生き方ができると確信しています。

長坂　泰成

「ライラ研修を受講して」

縁があって受講できましたＲＹＬＡセミナー。地域の方々の御支援、そして余島にて御尽力賜わった大勢のスタッフ。そして新たに出会ったＲＹＬＡリアン。まず、皆様に感謝申し上げたい。

受講するにあたり、不安や自信が入りまじっていたが、初日から自らのエネルギーをフル回転し、余島でのこと全てを吸収しようと積極的に取りくんでまいりました。

今井先生のキャンプファイヤーの「あかり」の話、これは、私が行っている「半ば自己の幸福を半ば他人の幸福を」の確信であった。

人間生きているのは、自分の為だけではなく、人の為、社会そして、地球の為に自分が何をできるかであると思われるが、当然1人でできることは、小さく少ないが、信頼で結ばれた仲間と、協力し、計画を立て、大きな目標に向け、できることから、無理をせず、まず成功をとげる。次は、また1つ、また1つと小さな成功の積重ねを繰り返す。そして大きな目標を達成したい。

一方、子どもの意識と大人の意識そしてリーダーの役割では、2児の父親として参加したが、家族での父親の重要性を考えさせられ、また女房に対し改めて感謝したい。

そしてリーダーとして、子供の芽をのばすきっかけを作るチャンスを与える、リカバリー、同じ目線で考えるなどにポイントをおき、今後ＲＹＬＡリアンとして、出会う人々とコミュニケーションをとりながら、地域に「カンゲン」したい。

つまづいたとき、負けそうになった時、この4日間で出会ったすばらしい仲間がいます。これは大変力強い。本当に余島に来て良かった。感謝します。ありがとうございました。

中村　芙美

セミナーでのねらいも分からず参加の機会をいただき余島に来た私ですが、今回のセミナーは私にとって実に意味の深いものだったと最終日の今、思っています。日頃なかなか年齢の近い者と接する機会が多いので、経験豊かな先生方、ロータリアンの多くの方とお話することができて良かったです。

私にとって一番おもしろかったのはフォーラムでの意見発表の場でした。常日頃、人はそれぞれ考えて生きているものですが、そのおもいを話すチャンスはあまりないので、率直な意見などが聴くことができおもしろかったです。ただ、全員が発表しなかった様に、このフォーラムに対して熱いおもいを抱いて来たのが全員ではなかったのかな、と。キャビンタイムの中で私はもっと実のある話がしたかったというのが正直な気持ちです。基本的に班でのキャビンタイムに大幅に時間を取ってあったので、みんな全員とまではいかなくとも同じ様な意識を持っていないと話は脱線がちになります。1日2日のキャビンタイムを話したい議題に分かれて話せる形にしても良かったかなと思います。

「対話・理解・寛容」がテーマであるのに、午前中の話の中に私が自分で考えていた様なテーマとは少々ずれを感じました。話の中に近いものを感じれなかったけれど、それはキャビンタイムにみんなで考えることもできたけれど、それを提案

する雰囲気でなかったので言わなかったけれど少々悔やんでいます。ただ楽しい会話だけでは一生の仲間には難しいものです。その辺りをカウンセラーの方が上手くコントロールしてくれたらと思いました。

ここまでの話は全て私の思い込み思い違いからだと思いますが、キャビンタイム、カウンセラーの役割が何であったか、誰かに事前に尋ねておけばよかったなぁと思います。

しかしセミナーに参加して多くのことを得ることができ本当に良かったと思い、参加費を出していただけたことも含め、感謝しています。

増田　能幸

3泊4日のライラを終えて、数多くの仲間に出会えた事に非常に喜びを感じています。D班の13人に出会えて、多くの事を話し、体験し、互いを理解していく中で、非常に強い絆が生まれ、これからの自分の人生にとって最高の仲間ができたと思っています。

私は、人見知りで、恥ずかしがりやの面が強く、最初は、うまくやっていけるかどうか心配でしたが、そんな心配はすぐに吹き飛んでしまいました。全員が、みんなをうまく理解しようと努力し、みんなが非常に明るくいつの間にかD班の輪の中にとけ込んでいました。私のこれからの人生の中で、こんなに早くとけ込めたのは初めてだし、やはり、自分から積極的にコミュニケーションを図る事の大切さを身をもって感じました。それからは、自分の過去や悩みを打ち明けたり、希望やこのライラで得た事、感じた事、学んだ事などを言い合って、全員が相互理解を深め、より一層絆を強めて、これまで自分自身が出会ってきた親友よりも深い関係になったのではないかと思います。これからもお互いがいろんな事を相談したり、打ち明けられる関係でありたいです。

私自身、これまでの自分というものを見つめ直す機会があって、そこで、これまでの自分を反省し、新しい自分に変える努力をしようと思いました。人生とは自分探しの旅であると思います。これから様々な経験をしていく中で、ライラで得た経験を生かし、常に自分自身に問いかけていきたい。そうする事でよりよい自分を見つける事ができるはずだと思います。

最後に、これから教壇に立つ時に。子どもの目線に立って物事を考え、接していきたい。そして、子ども達の人生にとってよい影響を与える事ができる教師でありたいと思います。

梁瀬　浩永

今回3泊4日と遠いようで今となっては、あっという間だったＲＹＬＡセミナーに参加してとてもよかったと思ってます。初日は、何をやるのかよく分からなく不安でしょうがなかったのですが、最も勉強になったことは、やはり、人と人との接し方つまり、コミュニケーションのとり方がすごく勉強になりました。ふだん働いていて、人と接する機会があまり多くはないのですが、働いていると人と人との接し方や、相手のことになって、物事を考えるということが今までありませんでした。これから、将来働いていく上で、このセミナーで得た、知識や友人を大切にし、将来役立てていきたいと考えています。

また、午前の部では、ここ余島に来てなかったら聞くことができない、おもしろくてためになる話が聞けてよかったと思いました。特に、心に残ったことは、アフリカの森林の話でした。今、アマゾン地帯の砂漠化がどのようになって作られるかなど勉強になりました。

また、3日目のバズセッションは、とてもいい経験ができました。今まで私は、会議などで自分から進んで意見を述べたりせずどちらかと言うと無言で座っているだけということが多かったのですが、このバズセッションで5人で2時間11人で2時間という長いようで短かかった話し合いで、こんなに自分の意見や考えを述べたのは初めてだと思います。テーマがすごくむずかしくて、考えがなかなか出てこなかったのですが、みんなで意見交換することによって、自分自身すごく相手の考えを受け入れ、理解しようとするようになりま

した。

これで、ＲＹＬＡは終わりますが、ここで得たものを利用し、リーダーシップのとれる自分に成長していきたいと思います。

D班カウンセラー　田隈　泰三

余島に来る前は、はたしてカウンセラーを務めることができるのか大変心配でした。まず受講生のみなさんのコミュニケーションの手助けができるのか、また若い人の中で体力がもつのかどうかということでした。

しかし１つ目の不安はすぐに解消しました。余島の島めぐりからはじまり、オープニングパーティーですでに打ち解けはじめた姿に接し、確信になりました。

２日目にはもうすでにずっと以前からの仲間のように振る舞っているD班。

そして３日目のバズセッションで真剣に討議しまとめて行く様子、そしてフォーラムでの発表の時には、我が息子、娘の発表会を見るようで心配しながら聞いていました。

すばらしい内容の発表、そして自分から手を挙げての積極的な姿に、大変誇らしくたくましく感じました。

フォーラムを終えてのキャビンタイムは、感動の極地に達し涙をおさえるのに必死でした。

すばらしい出会いを与えてくださったライラのみなさん。

ありがとう。この感動を与えてくれたD班のみなさん、みさちゃん。

再会。

D班カウンセラー　石川　美佐子

「第24回ライラセミナー感想文」

１年前からカウンセラーを引き受ける事となっておりましたが、こればかりは準備の為何かをする事も出来ず、只々体力勝負と身体には充分気を付け万全の体制にて当日を迎え、あっと云う間に最終日を迎えてしまいました。３回目のカウンセラーなので不安などないと思っていたのに、回を重ねるごとに、不安で一杯になり、そのしわ寄せが、睡眠不足となり、最後の最後まで、これで良かったのか？と反省する事ばかりです。でも、とっても充実感があり、この心地よさは、良きパートナー（カウンセラー）に恵まれ、良き受講生に恵まれ、良きスタッフに恵まれた中での達成感であるのだと、つくづく感じています。今時の若い人、今時の大人の問題点を越えて一心同体となり、まるで受講生の様に、良き出会いが出来、それぞれが、日常の生活の場に散って行くのが、事の外淋しさで、一杯になり、いつまでもいつまでも、一緒に居たい気持ちになります。でもこの新しい友人達に、社会での活躍を期待すると共に、是非、このセミナーの出会いを大切に、年令を越えた同志にエールを送りたいと思います。受講生の人達に感謝し、私も、地域社会の中で、何かの役に立ちたいと、心新たに余島を後にします。いつか、どこかでの再会を夢に見て・・・・・・私の子供達よ。

<第24回ＲＹＬＡセミナー運営委員会>

ガバナー	赤木文生	(神戸東RC)
	掛水俊彦	(高知北RC)
ガバナーエレクト	安平和彦	(第2680地区 姫路RC)
顧問	今井鎮雄	(第2680地区 神戸西RC)
	深川純一	(第2680地区 伊丹RC)
アドバイザー	三宅洋三	(第2670地区 高松RC)
	米谷　収	(第2680地区 神戸南RC)
運営委員会委員	三木　明	(第2680地区 姫路RC)
	井奥寛泰	(第2680地区 姫路南RC)
	山口　徹	(第2680地区 神戸RC)
ディーン	篠原成行	(第2670地区 北条RC)
副ディーン	秦　紳一郎	(第2680地区 洲本RC)

■R.I.第2680地区

新世代活動委員長

秦　紳一郎 (洲本RC)

ライラ委員長

空地顕一 (姫路RC)

ライラ委員

三木且視 (龍野RC)
赤穂　哲 (姫路南RC)
永松潔和 (神戸RC)
加藤　拓 (伊丹RC)
小池弘三 (神戸ハーバーRC)
奥村泰彦 (洲本RC)

■R.I.第2670地区

新世代活動委員長

伊与木潤二 (高知中央RC)

ライラ委員長

白石正明 (高松グリーンRC)

ライラ委員

高岡政次 (松山南RC)
中島萬里 (徳島西RC)
松崎和博 (高松グリーンRC)
猪野恵一郎 (松山南RC)
鎌田久司 (小豆島RC)

カウンセラー

第2680地区

赤穂　哲 (姫路南RC)
田隈泰三 (姫路RC)
由良澄子 (神戸垂水RC会員夫人)
福武信子 (伊丹RC会員夫人)

第2670地区

植松慶太 (高松中央RC)
福島秀孝 (高松グリーンRC)
石川美佐子 (高松グリーンRC会員夫人)
角田麗子 (高松グリーンRC会員夫人)

主催
ＲＩ第2680地区
ＲＩ第2670地区
ＲＹＬＡ運営委員会

ＲＹＬＡ運営事務局

第2680地区　ガバナー事務所
〒670-0042　神戸市中央区波止場町2-1
ホテルオークラ神戸706号室
TEL　078-332-2680
FAX　078-334-2681

第2670地区　ガバナー事務所
〒780-0870　高知市本町3-3-39
高知放送南館8F
TEL　088-871-2200
FAX　088-826-0230